伊江村文化財調査報告書第 14 集

カヤ原遺跡Ａ地点
ナガラ原東貝塚
ナガラ原第三貝塚

― 県営農地保全整備事業（川平第２地区）に係る埋蔵文化財発掘調査 ―

2017(平成 29)年

伊江村教育委員会

カヤ原遺跡 A 地点　貝塚上面検出状況

カヤ原遺跡 A 地点　貝符出土状況

ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構２

ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構３　ゴホウラ腕輪着装状況

ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構３　人骨検出状況

ナガラ原第三貝塚　第Ⅵ層遺構検出状況

ナガラ原第三貝塚　竪穴住居跡 1

ナガラ原第三貝塚　竪穴住居跡２

ナガラ原第三貝塚　炉跡４

埋葬遺構 2、3 内出土遺物

大型焼成遺構内出土遺物

竪穴住居跡 1、2 内出土遺物

序　文

本報告書は、県営農地保全整備事業（川平第２地区）の浸透池建設に先立ち行った埋蔵文化財「カヤ原遺跡Ａ地点」「ナガラ原東貝塚」「ナガラ原第三貝塚」の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

上記の３遺跡は本村の南海岸の砂丘地に立地しており、一帯は畑地や防潮林帯として利用されています。

今回行われた調査において、カヤ原遺跡Ａ地点の発掘調査では、約 1,500 年前の古墳時代並行期の貝塚、貝溜り、土器、貝製品などの遺物が確認され、ナガラ第三貝塚からは約 2,000 年前の弥生時代並行期のイモガイ集積遺構、約 3,000 年前の縄文時代相当期の炉跡 17 基、竪穴住居跡２基など、そして、約 2,500 年前のゴホウラ製貝輪着装人骨が葬られた石棺墓などといった貴重な遺構が発見され、調査成果が新聞等で広く報道、紹介されました。また、遺物に関しても土器や石器はもちろんのこと、貝や骨製の装飾品など、当時の人びとの生活の一端が窺える資料が見つかっています。

本報告書が本村や沖縄県の歴史・文化研究の一助として活用いただければ幸いです。

末尾になりますが、発掘調査と資料整理、遺構の保存に多大な御指導、御協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成 29（2017）年３月

伊江村教育委員会

教育長　宮里　徳成

例　言

1. 本書は伊江村教育委員会が県営農地保全整備事業（川平第 2 地区）に伴い、2013（平成 25）年度に実施したカヤ原遺跡 A 地点、ナガラ原東貝塚、ナガラ原第三貝塚の緊急発掘調査の成果を収録したものである。

2. 発掘調査は、沖縄県北部農林水産振興センターからの委託を受け、伊江村教育委員会生涯学習課が実施した。

3. 現地調査は、平成 25 年 5 月 30 日から同年 11 月 7 日の期間実施した。また、資料整理作業の一部は発掘調査と平行して行い、平成 29 年 3 月に本書の刊行をもって調査を完了した。

4. 本書の作成は平成 26 年度～ 28 年度に行い、執筆は牛ノ濱修、玉榮飛道が行い、第 3 章 4 節 1 は株式会社イーエーシー、2 は株式会社文化財サービス、3 はパリノ・サーヴェイ株式会社が作成した分析報告書を掲載した。編集は牛ノ濱修、玉榮飛道が行った。

5. 出土遺物及び作成した図面、写真等は伊江村教育委員会で保管している。

6. 本文中で使用した引用文献及び参考文献は、各章の末に記した。

凡　例

1. 本書に表示している北は座標北を示す。

2. 基準高は全て海抜高を用い、メートル単位で表した。

遺構実測図は適宜縮尺を変えて掲載し、図ごとにスケールを表示した。

遺物実測図は原則として縮尺を1 /2（土器）、1/3（石器、貝製品、骨牙製品）としたが、遺物の大きさによって縮尺を変更しなければならない場合はその旨をスケールで表示した。

各遺跡の層序番号はローマ数字、分層を行った際の層序番号はアラビア数字、遺構において分層を行った際はアルファベットの小文字で表現を行った。

引用文献、参考文献は各章、各節の末尾に記載した。

目　次

巻頭図版
序文
例言
凡例

第１章　調査の経緯・経過
第１節　調査にいたる経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1
第３節　調査体制 …… 2
第２章　調査地の位置と環境
第１節　伊江村の地理的環境 …… 3
第２節　調査地の自然的・地理的環境 …… 5
第３節　調査地の歴史的環境 …… 5
第３章　調査の成果
第１節　カヤ原遺跡Ａ地 …… 9
1. 層序 …… 10
2. 遺構 …… 10
貝塚・貝溜り …… 15
遺構内出土遺物 …… 17
3. 遺物 …… 17
土器 …… 17
石器・石製品 …… 22
貝製品 …… 33
自然遺物 …… 41
4. 小結 …… 46
第２節　ナガラ原東貝塚 …… 47
1. 層序 …… 47
2. 遺物 …… 47
土器 …… 47
石器 …… 47
貝製品 …… 47
自然遺物 …… 47
3. 小結 …… 47

第３節　ナガラ原第三貝塚 …… 50
1. 層序 …… 50
2. 遺構 …… 54
Ⅳ層の遺構…… 54
貝塚…… 54
イモガイ集積遺構…… 54
Ⅵ層直上の遺構…… 58
埋葬遺構１…… 60
埋葬遺構２…… 60
遺構内出土遺物…… 60
埋葬遺構３…… 65
遺構内出土遺物…… 65
Ⅵ層の遺構…… 67
竪穴住居址…… 67
竪穴住居址１…… 67
竪穴住居址２…… 68
竪穴住居跡内出土遺物…… 73
炉跡…… 73
炉跡１…… 73
炉跡２…… 73
炉跡３…… 73
炉跡４…… 73
炉跡５…… 76
炉跡６…… 77
炉跡７…… 77
炉跡８…… 77
炉跡９…… 77
炉跡 10 …… 77
炉跡 11 …… 77
炉跡 12 …… 79
炉跡 13 …… 79
炉跡 14 …… 79
炉跡 15 …… 79
炉跡 16 …… 79
炉跡 17 …… 79
炉跡内出土遺物…… 79
大型焼成遺構…… 80

遺構内出土遺物……80
3. 遺物 ……91
土器・土製品……91
石器・石製品…… 111
貝製品…… 130
骨牙製品…… 152
その他の製品…… 153
石材…… 153
自然遺物…… 153
4. 小結 …… 159

第 4 節　自然科学、理化学的分析 …… 161
1. フローテーション分析報告 …… 161
2. 出土人骨分析報告 …… 171
3. 理化学的分析（年代測定、出土金属成分分析）報告 …… 174
4. 自然科学的分析報告 …… 182
第 4 章　総括 …… 188

挿図目次

第 1 図　県営農地保全整備事業（川平第 2 地区）計画図（一部）と調査範囲…… 4
第 2 図　伊江村（伊江島）の位置図 …… 7
第 3 図　伊江村遺跡分布図 …… 8
第 4 図　カヤ原遺跡 A 地点調査区配置図 …… 9
第 5 図　カヤ原遺跡 A 地点　層序図 ……11
第 6 図　カヤ原遺跡 A 地点　遺構配置図 ……12
第 7 図　カヤ原遺跡 A 地点　貝塚・貝溜り平面図（1）……13
第 8 図　カヤ原遺跡 A 地点　貝塚・貝溜り平面図（2）……14
第 9 図　カヤ原遺跡 A 地点出土遺物分布図 ……18
第 10 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（有文口縁部）（1）……22
第 11 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（有文口縁部）（2）……23
第 12 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（有文口縁部）（3）……24
第 13 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文口縁部）（1）……25
第 14 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文口縁部）（2）……26
第 15 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文口縁部（3）、底部資料）……27
第 16 図　カヤ原遺跡 A 地点出土石器・石製品（1）
　　軽石製品・石斧・凹石・敲石……29
第 17 図　カヤ原遺跡 A 地点出土石器・石製品（2
　　敲石・クガニイシ・研磨器・砥石・石皿　……30
第 18 図　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品（1）　貝札……32
第 19 図　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品（2）
　　貝玉・螺塔部・小型貝製容器・タカラガイ製品……33
第 20 図　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品（3）　ヤコウガイ製品……34
第 21 図　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品（4）　貝刃・貝皿……37
第 22 図　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品（5）
　　ゴホウラ・サラサバティ・螺蓋製敲打器……38
第 23 図　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品（6）　貝錘……48
第 24 図　ナガラ原第東貝塚　調査区配置図 ……48
第 25 図　ナガラ原東貝塚　層序図 ……49
第 26 図　ナガラ原第三貝塚　調査区配置図 ……52
第 27 図　ナガラ原第三貝塚　層序図 ……53
第 28 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅳ層　遺構平面図 ……55
第 29 図　ナガラ原第三貝塚　貝塚 1 平面図・断面図 ……56
第 30 図　ナガラ原第三貝塚　貝塚 2 平面図 ……57
第 31 図　ナガラ原第三貝塚　イモガイ集積遺構平面図 ……58
第 32 図　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構配置図 ……59

第 33 図　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 1（上部）人骨検出状況平面図 ……61
第 34 図　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 1（下部）人骨検出状況平面図 ……62
第 35 図　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 1（上部・下部）平面図 …… 63
第 36 図　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 2　平面図 ……64
第 37 図　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 3（石棺墓）平面図・側面図 ……65
第 38 図　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構　遺構内出土遺物 ……66
第 39 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅵ層遺構配置図 ……69
第 40 図　ナガラ原第三貝塚　竪穴住居跡 1　平面図・断面図 ……70
第 41 図　ナガラ原第三貝塚　竪穴住居跡 2　平面図・断面図 ……71
第 42 図　ナガラ原第三貝塚　竪穴住居跡 1・2 内出土遺物 ……72
第 43 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 1、2、3　平面図・断面図 ……75
第 44 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 4　平面図・断面図 ……78
第 45 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 4　出土遺物 ……81
第 46 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 5、10　平面図・断面図 ……82
第 47 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 5、炉跡 17、大型焼成遺構　出土遺物 ……83
第 48 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 6、7　平面図・断面図 ……84
第 49 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 8、9　平面図・断面図 ……85
第 50 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 11　平面図・断面図 ……86
第 51 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 12、13　平面図・断面図 ……87
第 52 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 14　平面図・断面図 ……88
第 53 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 15、16、17　平面図・断面図 ……89
第 54 図　ナガラ原第三貝塚　大型焼成遺構　遺構図 ……90
第 55 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅳ層出土遺物分布図 ……92
第 56 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅵ層直上出土遺物分布図 ……93
第 57 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅵ層出土遺物分布図 ……94
第 58 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土土器（1）……97
第 59 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土土器（2）……98
第 60 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅵ層出土有文土器土器（1）……99
第 61 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅵ層出土有文土器土器（2）…… 100
第 62 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅵ層出土有文土器土器（3）…… 101
第 63 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅵ層出土有文土器土器（4）…… 102
第 64 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅵ層出土有文土器土器（5）…… 103
第 65 図　ナガラ原第三貝塚　第Ⅵ層出土有文土器土器（6）…… 104
第 66 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（無文土器）（1）…… 105
第 67 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（無文土器）（2）…… 106
第 68 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器 …… 107
第 69 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土石器・石製品（1）　石斧・凹石・敲石 …… 112

第 70 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土石器・石製品（2）　敲石・磨石・砥石 …… 114
第 71 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土石器・石製品（3）　礫器・砥石 …… 115
第 72 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品（1）　石斧（1）…… 117
第 73 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品（2）　石斧（2）…… 118
第 74 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品（3）　凹石・敲石 …… 120
第 75 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品（4）　敲石・磨石 …… 121
第 76 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品（5）
扁平磨製石器・剥片（チャート）…… 124
第 77 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品（6）
双角状石器・楔形石器・礫器…… 126
第 78 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品（7）
礫器・砥石・礫石錘・穿孔具・石皿（1）…… 127
第 79 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品（8）　石皿（2）…… 128
第 80 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品（9）　石皿（3）…… 129
第 81 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土貝製品（1）…… 131
第 82 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土貝製品（2）…… 132
第 83 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土貝製品（3）…… 133
第 84 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土貝製品（4）…… 134
第 85 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品（1）…… 137
第 86 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品（2）…… 138
第 87 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品（3）…… 139
第 88 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品（4）…… 140
第 89 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品（5）…… 141
第 90 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品（6）…… 143
第 91 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品（7）…… 144
第 92 図　貝器分類様式図 …… 149
第 93 図　貝器（A）タイプ …… 150
第 94 図　貝器（B）タイプ …… 151
第 95 図　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土骨牙製品 …… 153

図版目次

図版 1　調査地遠景 …… 195
図版 2　カヤ原遺跡 A 地点近景 …… 195
図版 3　ナガラ原東貝塚近景 …… 196
図版 4　ナガラ原第三貝塚近景 …… 196
図版 5　カヤ原遺跡 A 地点　壁面写真（東壁） …… 197
図版 6　カヤ原遺跡 A 地点　壁面写真（南壁） …… 197
図版 7　カヤ原遺跡 A 地点　貝溜り検出状況 …… 198
図版 8　カヤ原遺跡 A 地点　貝溜り検出状況 …… 198
図版 9　カヤ原遺跡 A 地点　貝札出土状況 1 …… 199
図版 10　カヤ原遺跡 A 地点　貝札出土状況 2 …… 199
図版 11　カヤ原遺跡 A 地点　出土土器（有文）1 …… 200
図版 12　カヤ原遺跡 A 地点　出土土器（有文）2 …… 201
図版 13　カヤ原遺跡 A 地点　出土土器（有文）3 …… 202
図版 14　カヤ原遺跡 A 地点　出土土器（無文）1 …… 203
図版 15　カヤ原遺跡 A 地点　出土土器（無文）2 …… 204
図版 16　カヤ原遺跡 A 地点　出土土器（無文、底部） …… 205
図版 17　カヤ原遺跡 A 地点　出土石器 1 …… 206
図版 18　カヤ原遺跡 A 地点　出土石器 2 …… 207
図版 19　カヤ原遺跡 A 地点　出土貝製品 1 …… 208
図版 20　カヤ原遺跡 A 地点　出土貝製品 2 …… 209
図版 21　カヤ原遺跡 A 地点　出土貝製品 3 …… 210
図版 22　カヤ原遺跡 A 地点　出土貝製品 4 …… 211
図版 23　カヤ原遺跡 A 地点　出土貝製品 5 …… 212
図版 24　カヤ原遺跡 A 地点　出土貝製品 6 …… 213
図版 25　ナガラ原東貝塚　壁面写真（東側試掘坑　東壁） …… 214
図版 26　ナガラ原東貝塚　壁面写真（西側試掘坑　東壁） …… 214
図版 27　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層壁面写真（北壁） …… 215
図版 28　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層ベルト壁面写真 …… 215
図版 29　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層壁面写真（南壁） …… 216
図版 30　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層壁面写真（西壁） …… 216
図版 31　ナガラ原第三貝塚　6 層壁面写真（北壁） …… 217
図版 32　ナガラ原第三貝塚　貝塚検出状況 …… 217
図版 33　ナガラ原第三貝塚　イモガイ集積遺構 ……
図版 34　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 1（上面） …… 218
図版 35　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 1（下面） …… 219
図版 36　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 2 …… 219

図版 37　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 3（石棺墓）…… 220
図版 38　埋葬遺構 3　貝輪着装状況 …… 220
図版 39　ナガラ原第三貝塚　竪穴住居跡 1…… 221
図版 40　ナガラ原第三貝塚　竪穴住居跡 2 …… 221
図版 41　ナガラ原第三貝塚　炉跡 1 …… 222
図版 42　ナガラ原第三貝塚　炉跡 2 …… 222
図版 43　ナガラ原第三貝塚　炉跡 3 …… 223
図版 44　ナガラ原第三貝塚　炉跡 4 …… 223
図版 45　ナガラ原第三貝塚　炉跡 5 …… 224
図版 46　ナガラ原第三貝塚　炉跡 6 …… 224
図版 47　ナガラ原第三貝塚　炉跡 7 …… 225
図版 48　ナガラ原第三貝塚　炉跡 8 …… 225
図版 49　ナガラ原第三貝塚　炉跡 9 …… 226
図版 50　ナガラ原第三貝塚　炉跡 10…… 226
図版 51　ナガラ原第三貝塚　炉跡 11…… 227
図版 52　ナガラ原第三貝塚　炉跡 12…… 227
図版 53　ナガラ原第三貝塚　炉跡 13…… 228
図版 54　ナガラ原第三貝塚　炉跡 14…… 228
図版 55　ナガラ原第三貝塚　炉跡 15…… 229
図版 56　ナガラ原第三貝塚　炉跡 16…… 229
図版 57　ナガラ原第三貝塚　炉跡 17…… 230
図版 58　ナガラ原第三貝塚　大型焼成遺構 …… 230
図版 59　埋葬遺構 2、3　内出土遺物…… 231
図版 60　竪穴住居跡 1、2　内出土遺物…… 232
図版 61　炉跡 4　出土土器…… 233
図版 62　炉跡 5、炉跡 17、大型焼成遺構内出土遺物 …… 234
図版 63　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土土器 1 …… 235
図版 64　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土土器 2 …… 236
図版 65　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（有文）1 …… 237
図版 66　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（有文）2 …… 239
図版 67　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（有文）3 …… 240
図版 68　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（有文）4 …… 241
図版 69　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（有文）5 …… 242
図版 70　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（有文）6 …… 243
図版 71　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（有文）7 …… 244
図版 72　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（無文）1 …… 244
図版 73　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（無文）2 …… 245
図版 74　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土土器（無文 3、底部）…… 246

図版 75　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土石器・石製品 1 …… 247
図版 76　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土石器・石製品 2 …… 248
図版 77　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土石器・石製品 3 …… 249
図版 78　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品 4 …… 250
図版 79　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品 5 …… 251
図版 80　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品 7 …… 252
図版 81　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品 8 …… 253
図版 82　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品 9 …… 254
図版 83　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品 10 …… 255
図版 84　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品 11 …… 256
図版 85　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品 12 …… 257
図版 86　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品 13 …… 258
図版 87　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土石器・石製品 14 …… 259
図版 89　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 1 …… 260
図版 90　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 2 …… 261
図版 91　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 3 …… 262
図版 92　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 4 …… 263
図版 93　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 5 …… 264
図版 94　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 6 …… 265
図版 95　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 7 …… 266
図版 96　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 8 …… 267
図版 97　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 9 …… 268
図版 98　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 10 …… 269
図版 99　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土貝製品 11 …… 270
図版 100　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土骨牙製品・その他の製品 …… 271

表目次

第 1 表　伊江村の遺跡一覧 …… 006
第 2 表　カヤ原遺跡 A 地点基本層序表 …… 010
第 3 表　カヤ原遺跡 A 地点出土土器観察表 …… 020
第 4 表　カヤ原遺跡 A 地点出土石器観察表 …… 032
第 5 表　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品 …… 039
第 6 表　カヤ原遺跡 A 地点出土貝類一覧表 …… 041
第 7 表　カヤ原遺跡 A 地点出土貝類集計グラフ …… 045
第 8 表　ナガラ原第三貝塚基本層序表 …… 051
第 9 表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層炉跡観察表 …… 074
第 10 表　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土土器観察表 …… 096
第 11 表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器観察表 …… 110
第 12 表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層石器一覧表 …… 116
第 13 表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品観察表（1）　石斧 …… 118
第 14 表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品観察表（2）　凹石・敲石・磨石 …… 122
第 15 表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品観察表（3）　磨石 …… 123
第 16 表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品観察表（4）　特殊石器 …… 130
第 17 表　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土貝製品一覧表 …… 135
第 18 表　ナガラ原第三貝塚出土貝製品・骨牙製品一覧表 …… 147
第 19 表　ナガラ原第三貝塚サザエ製品分類表 …… 152
第 20 表　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土貝類一覧表 …… 154
第 21 表　ナガラ原第三貝塚出土貝類集計グラフ …… 155
第 22 表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土貝類一覧表 …… 156
第 23 表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土貝類集計グラフ …… 158
第 24 表　村内遺跡捌出土貝類集計表 …… 191

第１章　調査の経緯・経過

第１節　調査に至る経緯

本調査は県営農地保全整備事業（川平第２地区）に伴う緊急発掘調査である。

平成 21 年８月 10 日付文書「埋蔵文化財試掘調査に関する照会書」によって、沖縄県農林水産部北部農林水産振興センター（以下、県北部農林水産振興センター）より文化財の有無及び試掘調査の必要性の有無に関する照会が行われ、同年９月７日付文書にて「埋蔵文化財包蔵地に影響を及ぼすと考えられるため、試掘調査の必要がある」という旨の回答を行った。平成 22 年 12 月 20 日、伊江村教育委員会（以下、村教育委員会）、沖縄県教育庁文化課（当時　以下、県文化課、県文化財課）、文化財の取り扱いに関して協議が行われた。その際、発掘調査は浸透池設置箇所３地点とし、農道部分に関しては簡易舗装による工事が行われる予定であり、遺物包含層への影響は軽微となることから調査対象外とする調整が行われた。

平成 23 年、10 月 24 日から 28 日まで県文化課の指導及び伊江村農林水産課（以下、村農林水産課）、県北部農林水産振興センターの立ち合いの下、試掘調査が行われ、浸透池３カ所の試掘坑において、遺物包含層及び遺物が確認された。その後、試掘調査結果をもって協議が行われ、平成 24 年８月 31 年北振第 2817 号文書「埋蔵文化財の本発掘調査について【依頼】」にて、浸透池設置箇所の発掘調査の依頼が県北部農林水産振興センターから伊江村教育委員会に対して依頼があり、平成 24 年 12 月 17 日、発掘調査の範囲、期間、費用等に関する協定書を村教育委員会と県北部農林水産振興センターとの間で締結した。

第２節　調査の経過

前述の協議及び協定を踏まえて平成 25 年３月 27 日付で村教育委員会と県北部農林水産振興センターとの間で発掘調査の実施に係る委託契約が締結された。県北部農林水産振興センターとの契約締結後、村教育委員会による発掘調査経費の見積もり及び発掘調査実施計画を基に平成 25 年５月７日付で株式会社琉球サーベイと発掘調査支援業務委託契約を締結した。

発掘調査は平成 25 年５月９日から７月 10 日までの間に発掘調査を行う３遺跡の基準点測量、調査区設定を行い、カヤ原遺跡Ａ地点の発掘調査を５月９日から７月 11 日の期間に行った。６月 28 日から７月 11 日までナガラ原東貝塚、７月９日からナガラ原第三貝塚の発掘調査を行った。発掘調査期間中、７月 17 日、９月５日、９月 12 日には村内小学校児童を対象とした現場見学、９月６日、７日、８日には一般村民、県民を対象とした現場説明会を実施した。発掘調査は平成 25 年 11 月７日をもって終了した。調査終了後の平成 26 年１月 21 日には一般村民を対象とした発掘調査報告会を開催した。

ナガラ原第三貝塚の発掘調査中、調査区内において重要遺構等（石棺墓及びゴホウラ貝製貝輪着装人骨等）を検出した。その後、平成 25 年 10 月１日付け文書にて沖縄考古学会による遺跡の保存に関する要請、平成 25 年 10 月２日付北振 13101 号にて沖縄県知事より重要な遺構等の保存に関する協議依頼があり、10 月 18 日に村教育委員会、村農林水産課、県文化財課、県北部農林水産振興センターの４者で遺構保存に関する協議が行われた。協議の結果、ナガラ原第三貝塚の調査区西側の遺構群（石棺墓、竪穴住居跡 1、イモガイ集積遺構等）を現地保存することとなった。沖縄考古学会からの遺跡保存に関する要請への回答は、平成 25 年 12 月６日付伊江

教委第 1745 号文書にて回答を行っている。

遺物資料整理及び報告書刊行業務は平成 26 年度、平成 27 年度、平成 28 年度に行い、平成 29 年 3 月 24 日、本報告書を刊行した。なお、遺物資料整理については、平成 26 年 11 月、平成 27 年 10 月、平成 28 年 6 月に県北部農林水産振興センターに業務委託契約を年度ごとに締結し、平成 26 年度は出土人骨整理・分析業務委託を株式会社文化財サービスと、フローテーション分析等業務委託を株式会社イーエーシーと業務委託契約を締結した。平成 27 年度は自然科学分析業務委託契約をパリノ・サーヴェイ株式会社と締結、平成 28 年度は遺物実測・写真撮影等業務委託契約を三興コンサルタント株式会社と締結し、業務を行った。

第 3 節　調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査主体　伊江村教育委員会

事業責任	伊江村教育委員会	教育長	名城政英（～平成 25 年度）
		〃	宮里徳成（平成 25 年度～）
事業所管	〃　教育行政課	課　長	大城　強（～平成 27 年度）
		〃	東江民雄（平成 28 年度）
事業統括	〃	課　長	大城　強（～平成 27 年度）
		〃	東江民雄（平成 28 年度）
事業事務	〃　生涯学習課	課長補佐	山城直也（～平成 26 年度）
		〃	新城米広（平成 27 年度～）
主　事			金城幸人（平成 23 ～平成 25 年度）
主　事			玉榮飛道（平成 24 年度～）
調査指導	沖縄県教育庁文化財課		盛本　勲（平成 25 年度）
	〃		山本正昭（平成 25 年度）
	琉球大学医学部	非常勤講師	土肥直美
	沖縄県立博物館・美術館	学芸員	藤田祐樹
		〃	山崎真治
調査員	伊江村教育委員会	主　事	玉榮飛道（平成 24 年度～）
		臨時職員	牛ノ濱修（平成 26 ～平成 27 年度）

資料整理員

平成 26 年度　大城五月、下門勝子、千場陽子、名城郁枝

発掘調査支援業務委託：株式会社琉球サーベイ

フローテーション等分析業務委託：株式会社イーエーシー

出土人骨分析業務委託：株式会社文化財サービス

自然科学分析業務委託：パリノ・サーヴェイ株式会社

出土遺物実測・写真撮影等業務委託：三興コンサルタント株式会社

なお、以下の方々に調査・資料整理に関する御指導、御助言、ご協力をいただいた。記して感謝を申し上げる。

上原静、江上幹幸（沖縄国際大学）、盛本勲、山本正昭、仲座久宜、亀島慎吾、徳嶺理恵、波木基真（沖縄県立埋蔵文化財センター）、土肥直美（琉球大学非常勤講師、株式会社文化財サービス）、木下尚子（熊本大学）、篠田謙一、河野礼子（国立科学博物館）、片桐千亜紀、藤田祐樹、山崎真治（沖縄県立博物館・美術館）、宮城弘樹（名護市教育委員会（当時）　現沖縄国際大学）、安座間充（金武町教育委員会）、西銘章（球陽高校）、新里亮人（鹿児島県伊仙町教育委員会）、新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）、島袋春美（北谷町教育委員会）、仲宗根求（読谷村教育委員会）、與那嶺俊（今帰仁村教育委員会）、清水康二（奈良県立橿原考古学研究所）、知念勇（沖縄考古学会前会長）、山野ケン陽次郎（熊本大学埋蔵文化財調査センター）、中東洋行（奈良県吉野町教育委員会社会教育課）、黒住耐二（千葉県立中央博物館）（敬称略）

第２章　調査地域の位置と環境

第１節　伊江村の地理的環境

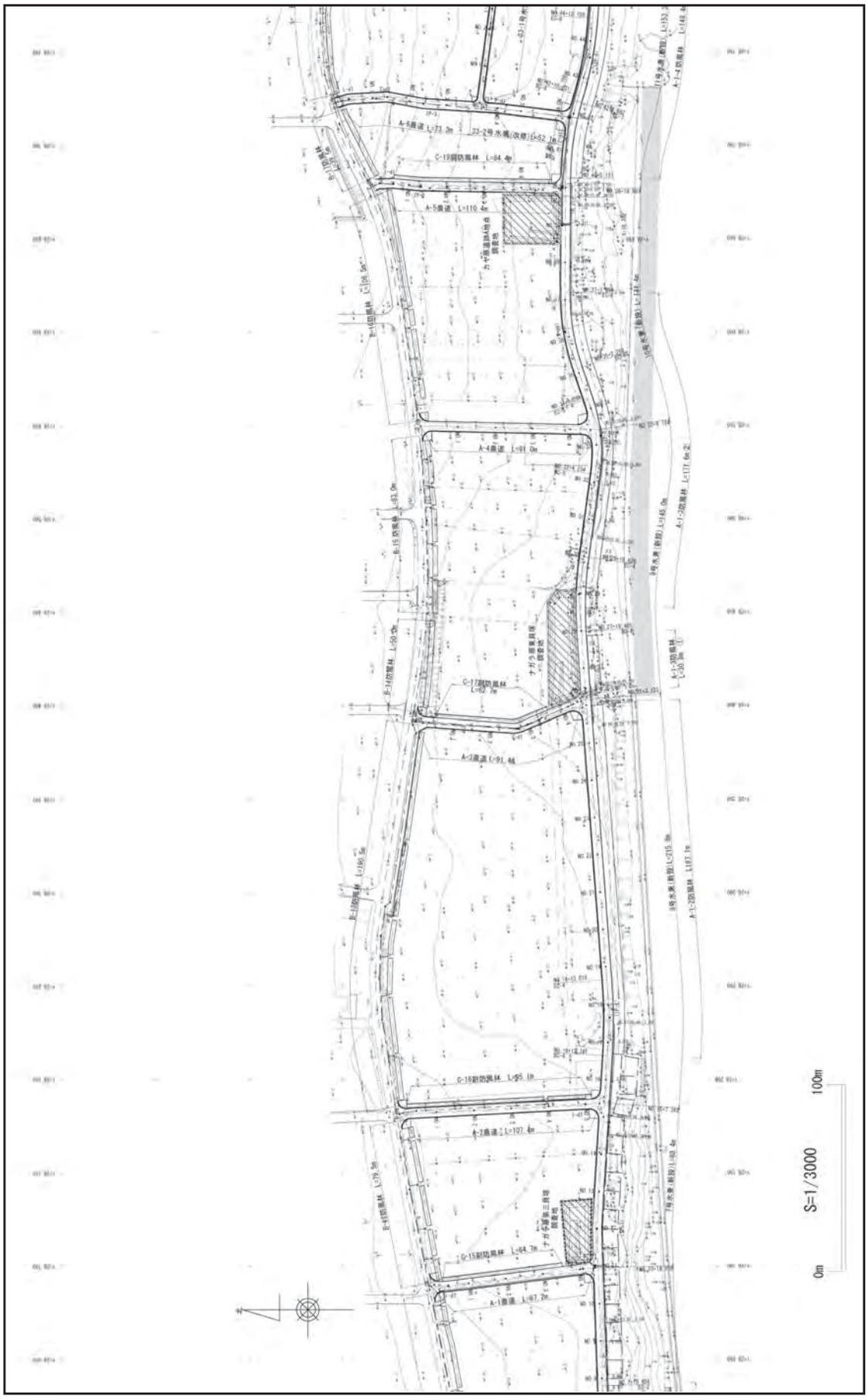
伊江村が所在している伊江島は、沖縄本島の本部半島備瀬崎の西方約 4㎞、本部港から約 9㎞の洋上に位置している。略楕円形の島で、面積が 22.88㎢、東西約 8.4㎞、南北約 3㎞の島である。島の中央よりやや東側には、島のシンボルである城山（標高 172m）がそびえ立つ。島の南側にはリーフが広がり、北側は断崖となる。地質は城山に古生代のチャート等（伊江層）が分布、ゴヘズ山周辺にチャート層（伊江層）、古生代石灰岩、その他の地域は新生代第四紀琉球石灰岩を基盤層に島尻マージが分布している。島北海岸の湧出付近では、礫岩、砂岩、石灰質砂岩の層も確認されている。地形としては、島の北海岸は断崖となっており、南岸は砂丘地もしく石灰岩丘陵となっている。海浜堆積物は、主として石灰質砂及び礫となり、一部では円礫や軽石が含まれている。伊江島には河川は見られないが、湧出やマーガなどといった湧水が数カ所存在している。先史時代の人びともこのような湧水を利用した可能性がある。

島の植生としては、島の大半が耕作地と化し、自然林が残っている箇所としては城山、ゴヘズ山、ユナハ森、ニャーティア森、照太寺が挙げられる。城山やゴヘズ山などは古生代チャートを基盤としており、植生としてタブノキ、イスノキ、リュウキュウマツなどが見られる。その他の拝所林などにおいては、ヤブニッケイ、ツゲモドキ、クハノハエノキ、フトウカズラなどの植生が見られる。

村の人口は 4,644 名（2017 年 1 月現在）となっており、タバコ、花卉、サトウキビ、ラッキョウ、肉用牛の畜産といった農畜産業、観光業などの産業が盛んである。

参考文献

・沖縄県（編）『土地分類基本調査　沖縄本島北部及びその周辺離島「伊平屋島」「伊是名島」「伊江島」「仲宗根」』　沖縄県　1988 年
・仲田邦彦　『沖縄県の地理』　東洋企画　2009 年
・伊江村教育委員会（編）『伊江島の遺跡』　伊江村教育委員会　1999 年
・伊江村役場（編）『村政要覧』　伊江村役場　2014 年



第１図　県営農地保全整備事業（川平第２地区）計画図（一部）と調査範囲

・伊江村教育委員会（編）『伊江島の植物図鑑』 伊江村教育委員会　2002 年

第２節　調査地の自然的・地理的環境

発掘調査を行った３遺跡、カヤ原遺跡Ａ地点、ナガラ原東貝塚、ナガラ原第三貝塚はいずれも標高10m以下の海岸砂丘地上に立地している。島の南岸に接しており、砂丘地の眼前にはリーフ（方言名：イノー）が広がる。

調査地の現況としては、畑地（タバコ畑）として利用されており、畑地南側の海岸沿いは防潮林として利用されている。

現在の植生としては、海浜近くにアダンなどの植生、モクマオウの植栽が見られる。

参考文献

仲田邦彦 『沖縄県の地理』 東洋企画　2009 年
『伊江島の植物図鑑』 伊江村教育委員会　2002 年

第３節　調査地の歴史的環境

伊江島には 3941 箇所の遺跡が確認されており、伊江島の南岸にはそのうち 26 箇所の遺跡が確認されている。島南岸に所在している遺跡で現在確認されている最古の遺跡は具志原貝塚であり、縄文時代前Ⅱ期の条痕文土器が出土している。具志原貝塚の他、縄文時代の遺跡は浜崎貝塚、西崎遺跡、渡り地原遺跡などで前Ⅳ期から前Ⅴ期の遺構、遺物が確認されている。

弥生～平安時代並行期（貝塚時代後期）の遺跡は 13 遺跡あり、そのほとんどが伊江島の南海岸に立地している。グスク時代から近世の遺跡は９遺跡所在し、城山とその周辺に集中しており、南海岸一帯ではニャーフガ洞遺跡の１遺跡のみが確認されている。

今回発掘調査を行った地点の近隣では、熊本大学考古学研究室によるナガラ原東貝塚の調査が行われており、弥生並行期の住居跡、浜屋原式、大当原式、アカジャンガー式土器、貝製品などの成果が得られている（木下編　2013 年）。

また、1978（昭和 55）年に伊江村教育委員会によって行われたナガラ原西貝塚の発掘調査では、掘立柱建物跡、イモガイ集積遺構といった遺構、大堂原式土器、骨針、貝錘、貝札などの遺物が出土している。

参考文献

・『伊江島の遺跡』伊江村文化財調査報告書第 13 集　伊江村教育委員会　1999 年
・『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第 61 集　沖縄県教育委員会　1985 年
・『ナガラ原東貝塚の研究』熊本大学文学部考古学研究室　2013 年
・『ナガラ原西遺跡』伊江村文化財調査報告書第８集　伊江村教育委員会　1979 年

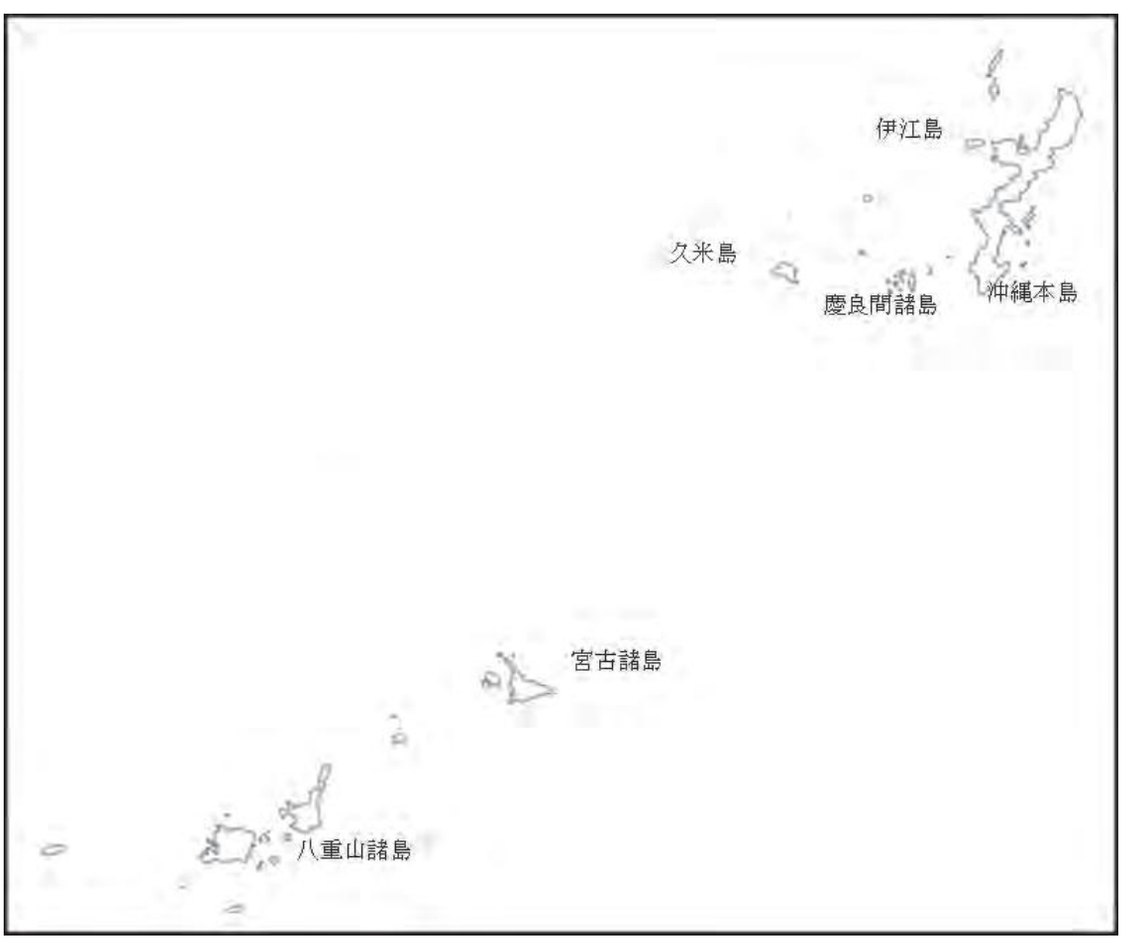
第１表　伊江村の遺跡一覧

№.	遺跡名	所在地	立地	時期	遺構	出土遺物
1	カダ原洞穴遺跡	東江上カダ原	石灰岩台地中腹	更新世		鹿化石、石器
2	イヌガ洞穴遺跡	東江上イヌガ原	石灰岩台地	更新世		鹿化石
3	ウカバ鹿化石出土地	東江前ウカバ原	海岸岩礁帯	更新世		鹿化石
4	親竹鹿化石出土地	西江上親竹原	石灰岩台地	更新世		鹿化石
5	親竹岩礁鹿化石出土地	西江上親竹原	海岸岩礁帯	更新世		鹿化石
6	馬ノ鼻石器出土地	西江上ヤ―原	石灰岩台地	不明		石器
7	湧出海岸陶磁器散布地	東江上イヌガ原	海岸岩礁帯	グスク時代		陶磁器
8	伊江グスク	東江上グスク原	丘陵地	グスク時代		土器、陶磁器、鉄滓等
9	西江上遺跡	西江上	石灰岩台地	中世～近世		陶磁器、石器等
10	東江上遺跡	東江上	石灰岩台地	中世～近世		陶磁器、石器
11	ゴヘズ洞穴遺跡	西江上ゴヘズ原	石灰岩台地	更新世、後期		鹿化石、土器、人骨
12	浜崎貝塚	東江前浜崎原	砂丘地・低台地	前Ⅳ期～後期		土器、石器、貝製品等
13	浜地原遺物散布地	東江前浜地原	砂丘地	近世		陶磁器
14	ガデナ原遺跡	東江前ガデナ原	石灰岩低台地	前Ⅴ期		土器等
15	ガデナ原第二遺跡	東江前ガデナ原	石灰岩低台地	前Ⅴ期		土器、石材等
16	阿良東貝塚	東江前阿良原	砂丘地・低台地	前Ⅳ期		土器、貝類
17	阿良貝塚	東江前阿良原	砂丘地	後期	貝集積遺構	土器等
18	阿良第二貝塚	東江前阿良原	石灰岩低台地	前Ⅳ期、後期	埋葬遺構	土器、石器、貝類
19	具志原第二貝塚	川平グシ原	砂丘地	後期		土器
20	具志原貝塚	川平下原	砂丘地	前Ⅱ期～後期	土坑、柱穴、貝集積遺構等	土器、石器、貝製品等
21	アッチ浜貝塚	川平下原	砂丘地	後期		土器、貝類
22	アニサギ貝塚	川平カヤ原	石灰岩低台地	前Ⅴ期		土器、石材等
23	カヤ原遺跡Ａ地点	川平カヤ原	石灰岩低台地	前Ⅳ期、後期	貝塚	土器、石器、貝製品等
24	カヤ原遺跡Ｂ地点	川平カヤ原	石灰岩低台地	前Ⅴ期		土器
25	ナガラ原東貝塚	川平ナガラ原	砂丘地	前Ⅴ期・後期	柱穴	土器、石器、貝製品等
26	ナガラ原西貝塚	川平ナガラ原	砂丘地	後期	住居跡、柱穴	土器、石器、貝製品等
27	ナガラ原第三貝塚	川平ナガラ原	砂丘地	前Ⅳ期～後期	貝集積、埋葬遺構、住居址等	土器、石器、貝製品等
28	ナガラ原第四貝塚	川平ナガラ原	砂丘地	後期		土器、貝類
29	フナズ遺跡	川平フナズ原	砂丘地・低台地	前Ⅴ期		土器、石器等
30	フナズ西遺跡	川平フナズ原	低台地	前Ⅴ期		土器等

No.	遺跡名	所在地	立地	時期	遺構	出土遺物
31	ナナチサンバシル	西江前シキミズ	石灰岩崖下	近世	古墓	人骨
32	寺コシ遺跡	西江前寺コシ	石灰岩台地	前Ⅴ期		土器、石器等
33	ニャーフガ洞遺跡	川平アキナ原	洞穴・低台地	中世		カムィヤキ等
34	アキナ原遺跡	川平アキナ原	石灰岩低台地	前Ⅴ期		石器、石材
35	西崎遺跡	川平渡り地原	砂丘地	前Ⅳ期	竪穴住居跡	土器、石材、貝類等
36	ハシラ遺跡	西江前ハシラ原	石灰岩丘陵	前Ⅴ期		土器等
37	渡り地原遺跡	川平渡り地原	砂丘地	前Ⅳ期	竪穴住居跡、炉跡	土器、石器、貝類等
38	ユナギシ古墓	西江前マミカ原	石灰岩丘陵岩陰	近世	古墓	人骨
39	小浜原遺跡	川平小浜原	石灰岩低台地	近世		陶磁器、石器
40	真謝カヤ毛原遺跡 A 地点（仮）		石灰岩台地	不明		土器
41	真謝カヤ毛原遺跡 B 地点（仮）		石灰岩台地	後期	柱穴、焼成遺構	土器

※　網掛け箇所は今回の調査遺跡。

註：岸本編『伊江島の遺跡』伊江村教育委員会　1999 年を基に作成。



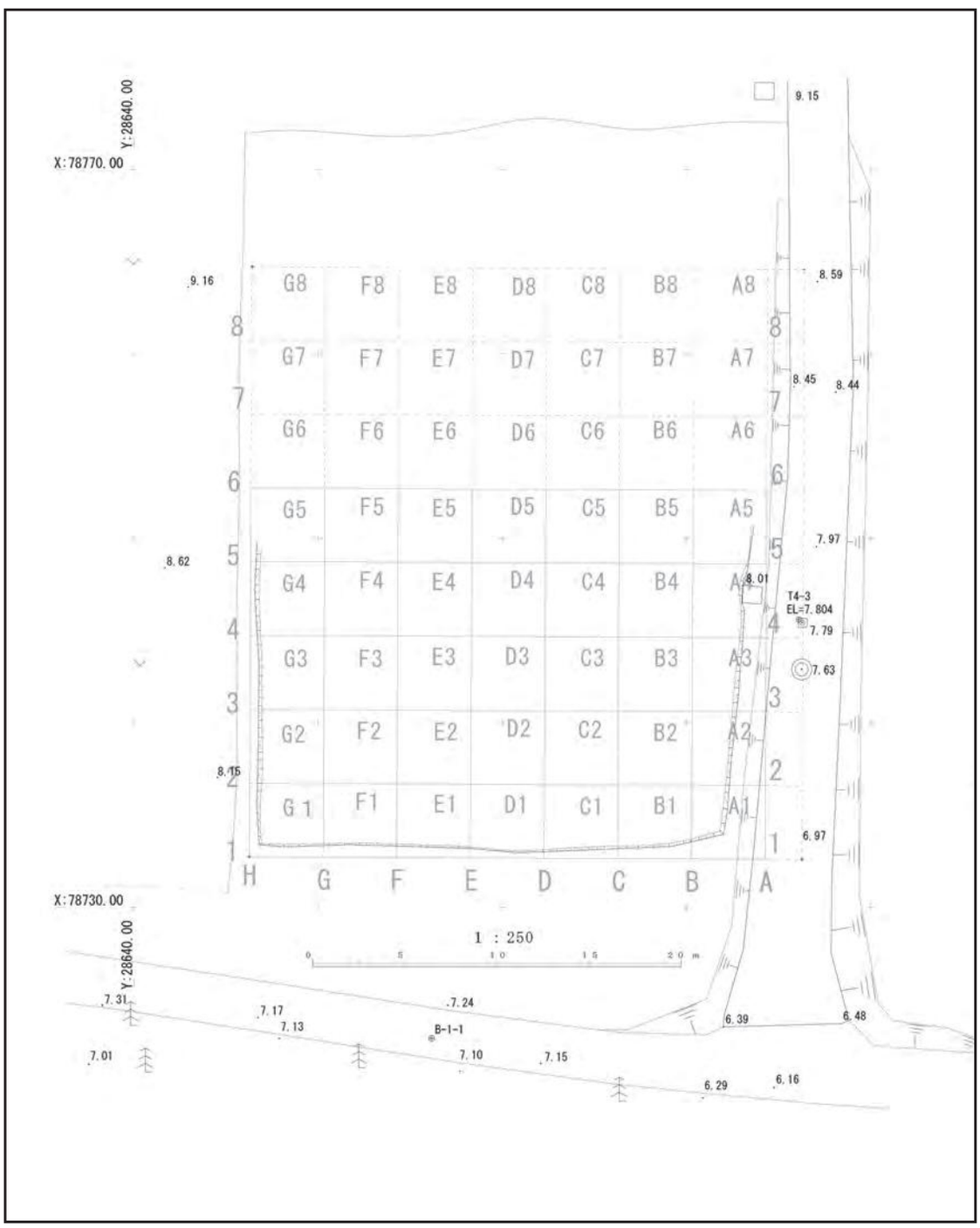
第２図　伊江村（伊江島）の位置図

第３図　伊江村の遺跡分布図

第３章　調査の成果

第１節　カヤ原遺跡Ａ地点

カヤ原遺跡Ａ地点は伊江村字川平小字カヤ原に所在する遺跡で、標高は 8.09 ～ 7.5m の海岸砂丘地に位置している。隣接する遺跡として、東にカヤ原遺跡Ｂ地点貝塚、西にナガラ原東貝塚が所在している。平成９（1997）年～平成 10（1998）年に行われた遺跡詳細分布調査では沖縄編年前Ⅳ期（縄文時代後期、貝塚時代前期）の遺物散布が確認されている。今回の調査においては、浸透池設置部分 981.211㎡の調査を行った。



第４図　カヤ原遺跡Ａ地点調査区配置図

1-1 層序

本遺跡での遺物包含層は海岸に向って堆積しており、調査区南側において見られ、調査区北側では確認することができなかった。本調査区の層序は 4 層に大別することができた（図 4、図版 5、6）。第Ⅰ層は耕作土の表土層。第Ⅱ層は攪乱層であり、層中から土器片やカムィヤキ、針金などの現代遺物が見られた。第Ⅲ層は遺物包含層。第Ⅳ層はマージの地山層となっている。第Ⅱ層よりカムィヤキが出土していることから、かつてはグスク時代の遺物包含層が存在していた可能性がある。

各層の厚さ、主な遺構・遺物、時期に関しては第 2 表に記載したので、併せて参照いただきたい。

第Ⅰ層：表土層。耕作土で、混砂土層となる。土色は淡褐色を呈する。

第Ⅱ層：攪乱層。砂が混入する土層で、層中からは土器片やカムィヤキ片が少数確認することができた他、針金などの現代遺物が確認された。土色は暗褐色を呈する。

第Ⅲ層：遺物包含層。砂層で、土色は黒褐色を呈する。自然堆積により、調査区北側から南側に向かって層厚が厚くなる。調査区 A-5 ～ G-5 区以北では、耕作の影響を受け、本層を確認することは出来ない箇所も見られた。

第Ⅳ層：遺物包含層。砂層で、土色は茶褐色を呈する。Ⅲ層同様、自然堆積により、調査区 A-5 ～ G-5 区側から南側に向かって層厚が厚くなる。層の上部に耕作による影響が見られたが、下部に関しては良好な状態で見られた。

第Ⅴ層：地山層。マージ層で赤褐色を呈する。

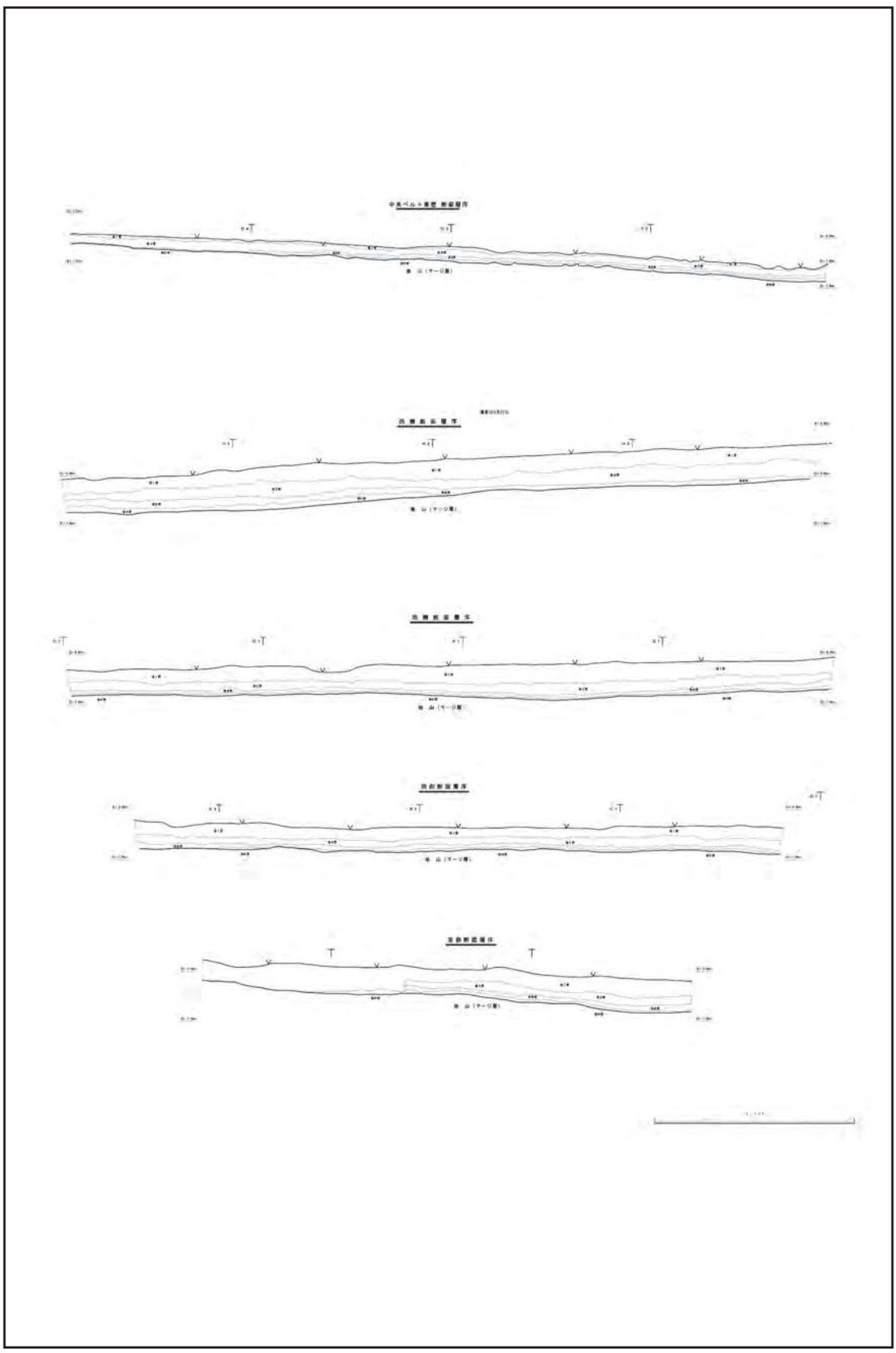
第 2 表　カヤ原遺跡 A 地点基本層序表

層序区分	層厚（cm）	主な遺構・遺物	時　期
第Ⅰ層	56.1 ～ 18.1	現代遺物	近現代
第Ⅱ層	21.5 ～ 9.2	カムィヤキ、現代遺物	近現代
第Ⅲ層	13.8 ～ 3.4	土器、石器、貝製品、貝類	沖縄編年後期
第Ⅳ層	10.3 ～ 0.4	土器、石器、貝製品、貝類貝類	沖縄編年後期

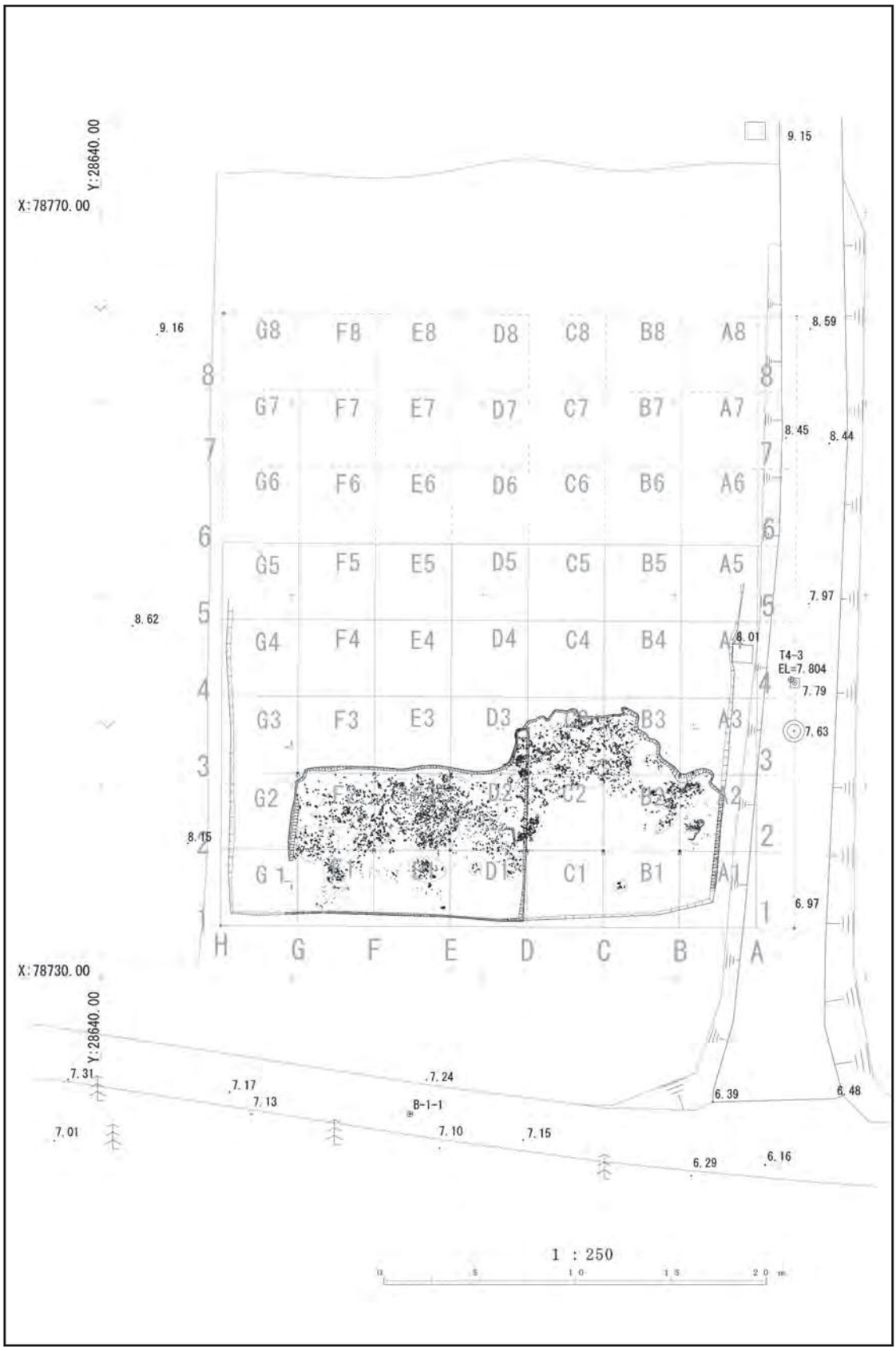
1-2 遺構

1-2-1　貝塚・貝溜り

本遺跡からは貝塚、貝溜りが検出され、大小 20 個のブロックに分割することができた。比較的大きい規模のブロックを貝塚、規模が小さなブロックを貝溜りとした。但し、貝塚に関して元来は貝溜りだったものが廃棄を重ねるうちに形成された可能性がある。貝塚は 2 基、貝溜りは 18 基となっている。以下、各遺構について概略する。



第５図　カヤ原遺跡Ａ地点　層序図



第６図　カヤ原遺跡Ａ地点　遺構分布図

第７図　カヤ原遺跡Ａ地点　貝塚・貝溜まり（1）

第８図　カヤ原遺跡Ａ地点　貝塚・貝溜まり（2）

貝塚 1（SM1）

D-3 区～ F-3 区にかけて検出された貝塚で、人工遺物として土器底部（丸底資料）、貝錘などが出土し、貝類として、サラサバティ、シャゴウ、ヒレジャコ、シラナミ、ギンタカハマなど比較的大型の貝が出土している。法量は長径 974.0cm、短径 218.6cm、深さ約 20cm を測る。

貝塚 2（SM2）

B-2 区～ D-2 区、B-3 区～ D-3 区において検出された貝塚で、貝類として、サラサバティ、ギンタカハマ、シャゴウ、ヒレジャコ、シラナミなど比較的大型の貝が出土している。法量は長径 647.4cm、短径 376.2cm を測る。

貝溜り 1

D-1 区Ⅲ層に検出された貝溜りでヒメジャコを主体とする。法量は長径 111.5cm、短径 89.9cm、深さ約 10cm を測る。

貝溜り 2

D-1 区Ⅲ層に検出された貝溜りでヒメジャコ、小型のサラサバティを主体に形成されている。長径 67.2cm、短径 65cm、深さ約 10cm を測る。

貝溜り 3

E-1 区Ⅲ層に検出された貝溜りでヒメジャコ、サラサバティ、ギンタカハマを主体に形成されている。長径 192.1cm、短径 132.7cm、深さ約 10cm を測る。

貝溜り 4

F-1 区Ⅲ層で検出された貝溜りで、ヒメジャコ、サラサバティ、アラスジケマンガイを主体としている。本遺構は後述する貝溜り 10 と重複関係があり、貝溜り 10 の上面に形成されている。遺構中よりくびれ平底土器底部片が出土している。長軸 144.2cm、短軸 88.7cm、深さ約 10cm を測る。

貝溜り 5

D-2 区で検出された貝溜りで、ヒメジャコ、サラサバティなどの貝類を含む。長軸 171.9cm、短軸 113.6cm、深さ 10cm を測る。

貝溜り 6

D-2 区、E-2 区に検出された貝溜りで、ヒメジャコ、シャゴウ、ヒレジャコ、サラサバティなどが含まれていた。長軸 132.3cm、短軸 87.6cm、深さ約 10cm を測る。

貝溜り 7

E-2 区に検出された貝溜りでヒメジャコ、ヒレジャコ、シャゴウ、サラサバティを主体に形成されている。長軸 142.3cm、短軸 105.7cm、深さ 15cm を測る。

貝溜り 8

E・F-1、E・F-2 に検出された貝溜りでシャゴウ、ヒレジャコ、サラサバティなど比較的大型の貝類が多く見られた。人工遺物としてくびれ平底底部片などが出土した。長軸 202.7cm、短軸 106.3cm、深さ約 15cm を測る。

貝溜り 9

F・G-1、F・G-2 に検出された貝溜りで、シラナミ、サラサバティ、ギンタカハマなどが目立つ。長軸 231.1cm、短軸 176.7cm、深さ 15cm を測る。

貝溜り 10

F-1 区で検出された貝溜りで、ハナビラダカラ、リュウキュウヒバリガイ、クロチョウガイの幼貝など比較的小型の貝で形成されていた。本遺構の下層より貝符 1 点が出土している。長軸 167.9cm、短軸 149.8cm を測る。

貝溜り 11

B-1 区で検出された貝溜りで、サラサバティ、シャゴウといった比較的大型の貝を主体とするが、規模は他の貝溜りと比べると小さい。長軸 71cm、短軸 62.4cm、深さ約 20cm を測る。

貝溜り 12

B-2 区で検出された貝溜りで、マガキガイを主体としている。長軸 161cm、短軸 55.3cm を測る。

貝溜り 13

A-2 区、B-2 区において検出された貝溜りで、ヒメジャコ、サラサバティ、ギンタカハマなど比較的大型の貝が主体となっている。長軸 103.1cm、短軸 58.9cm を測る。

貝溜り 14

A-2 区、B-2 区において検出された貝溜りで、シャコガイ類の合弁資料が多く見られた。長軸 174.2cm、短軸 72.1cm、深さ約 15cm を測る。

貝溜り 15

B-2 区において検出された貝溜りで、サラサバティ、ヒレジャコ、シラナミ等の貝を主体としている。長軸 182.3cm、短軸 79.2cm、深さ 15cm を測る。

貝溜り 16

B-3 区において検出された貝溜りで、サラサバティ、ヒレジャコ、シラナミなど比較的大型の貝類が多く見られた。長軸 110.2cm、短軸 69.2cm、深さ 15cm を測る。

貝溜り 17

A-2 区において検出された貝溜りで、貝溜り 14 の下部に形成されている。リュウキュウヒバリガイ、クロチョウガイの幼貝、ハナビダカラガイなど比較的小型の貝類で形成されている。長軸 51.2cm、短軸 46.2cm、深さ 10cm を測る。

貝溜り 18

C-2 区、D-2 区において検出された貝溜りで、貝塚 2 の下部に形成されている。貝溜り 17 同様、リュウキュウヒバリガイ、クロチョウガイの幼貝、ハナビダカラガイなど比較的小型の貝類で形成されている。長軸 101.3cm、短軸 97.7cm 深さ 10cm を測る。

1-3　遺物

今回の調査区のおける遺物は、土器、カムィヤキ、石器、貝製品、自然遺物（貝類、獣魚骨類等）が出土した。第 9 図は遺物の分布を示したものである。上記の遺構内での出土以外にも遺物が集中する箇所が見られた。

土器

本調査における出土土器は全て破片資料であり、完形が分かる資料は見られなかった。口縁部資料に関しては有文、無文の資料が見られた。底部形態は、ほとんどがくびれ平底となっており、尖底土器はわずかであった。

口縁部資料

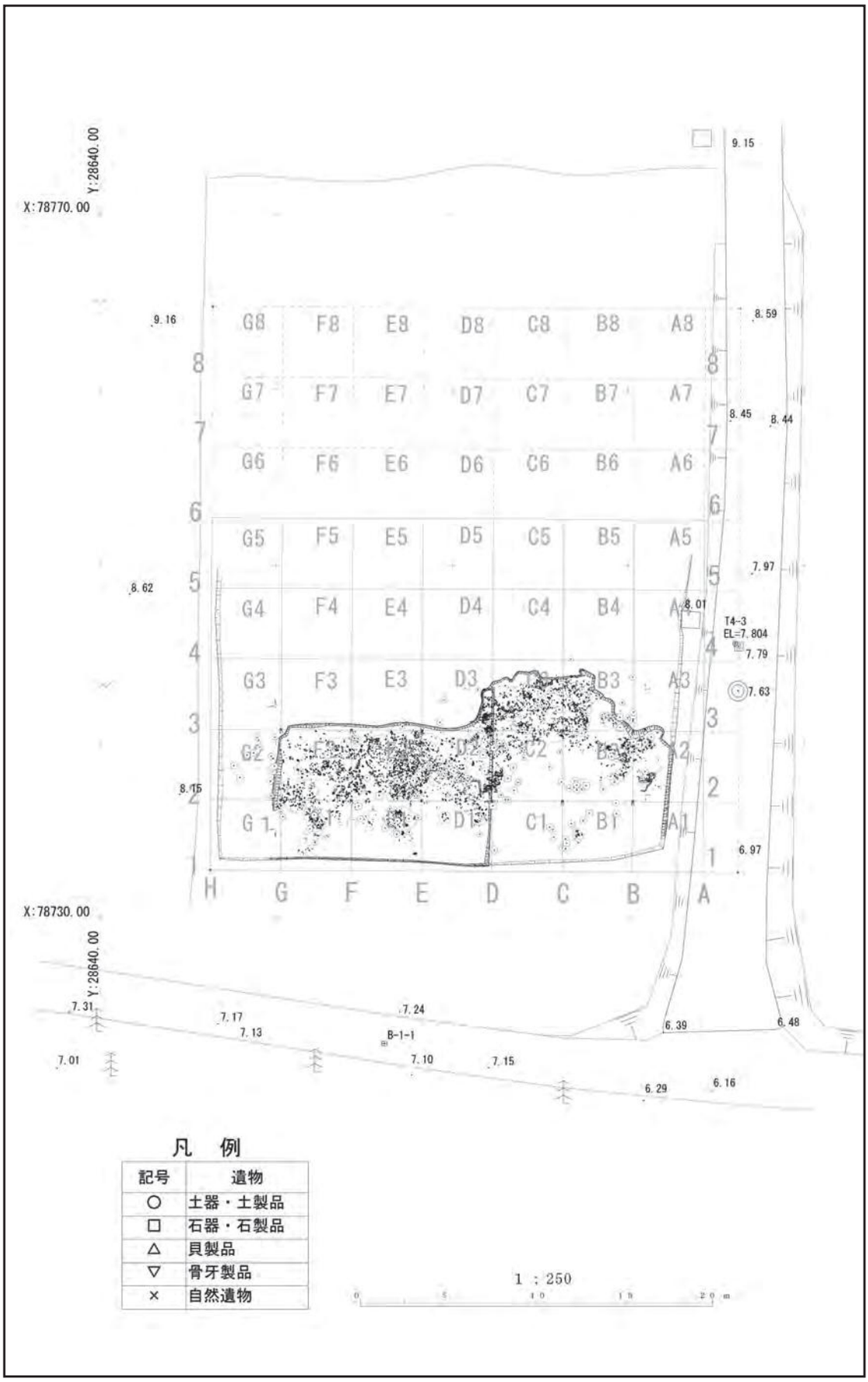
口縁部資料は有文資料と無文資料に分けられ、無文資料が多く占めている。

有文資料

有文資料においては、刻目突帯文資料、曲線文資料などが見られた。文様は以下の 5 種に分類を行った。なお、有孔土器も有文土器の項に含めた。

Ⅰ類：押捺刻文
Ⅱ類：刻目突帯文
Ⅲ類：曲線文
Ⅳ類：連点文
Ⅴ類：口唇部のみ刻目文

第 10 図 1 ～ 3 は口縁部に横捺刻文、口唇部に刻目文が施される破片資料である。2 に関しては横捺刻文の下部に沈線が一条施される。1 は器厚 0.6cm、2 は器厚 0.6cm、3 は器厚 0.6cm を測る。同図 4 ～ 7 は横捺刻文が施文される資料であるが、口唇部への施文は認められない。4 は器厚 0.6cm、5 は器厚 0.9cm、6 は器厚 0.5cm、7 は器厚 0.6cm を測る。



第９図　カヤ原遺跡Ａ地点　出土遺物分布図

8 ～ 13 は刻目突帯文が施される資料である。8 に関しては刻目突帯の上部に沈線が見られ、10 に関しては口唇部にも刻目が見られる。8 は器厚 0.6cm、9 は器厚 0.9cm、10 は器厚 0.7cm、11 は器厚 0.7cm、12 は器厚 0.5cm、13 は器厚 0.8cm を測る。14 ～ 27 は口縁部に沈線等による曲線文が施される資料である。曲線文を有するほとんどの資料には口唇部に刻目が施されている。第 12 図 28 ～ 34 は口唇部に刻目文が施される資料である。同図 33、34 は有孔土器、同図 37 は連点文が施される資料である。

同図 36 は突帯を曲線文状に貼り付ける資料、35 は曲線文が施される資料だが、口縁形態が緩やかな山形口縁となる資料である。

無文資料

本遺跡では無文資料として、平口縁資料と山形口縁資料が出土した。

平口縁

平口縁資料は、外反資料、直口資料、くの字口縁資料に分けられる。第 13 図 38 ～ 49、第 14 図 53 は外反口縁資料、同図 50 ～ 52、54 ～ 56 は直口口縁資料、第 15 図 57 は口縁部形状がくの字状になる資料である。いずれの土器も内外面に指圧痕を残している。調整痕は指ナデ、ヘラ削りなどが見られる。

山形口縁

第 15 図 2 ～ 4 は山形口縁となる資料である。2、4 は山形頂部の屈曲が強い資料、3 は山形頂部が緩やかに丸みを帯びる資料となる。2、3 に関しては外反、4 は直口気味となる。

底部資料

先述した通り、今回の調査で見られて底部資料のほとんどはくびれ平底であり、尖底の資料はわずかであった。

尖底資料

くびれ平底の資料と比べて少数ではあるが、尖底の資料も見られた。

第 15 図 5 は乳房状尖底となる資料である。6 から 8 は尖底資料となる。尖底資料の器面調整には外面にナデ調整が見られる。

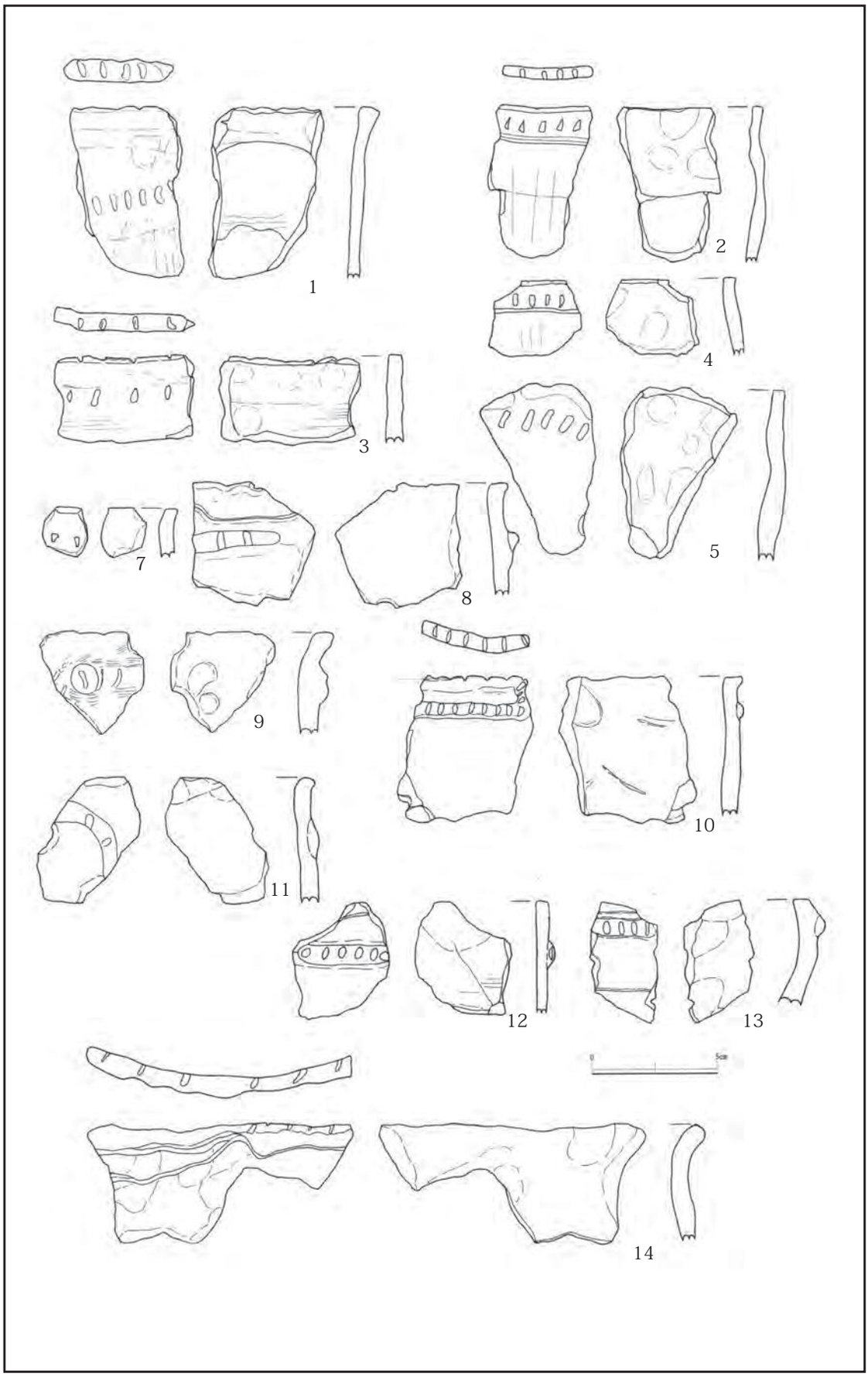
くびれ平底資料

くびれ平底資料は本遺跡出土の底部資料の多数を占めている。明確なくびれを持つものが多いが、中にはくびれが微弱な資料も見られる。66、67、68、70、71 に関しては微弱ながら底面がくぼみ、上げ底状となる。くびれ平底資料の器面調整は指ナデ、指圧による調整などが見られる。図 76 は底径 3.3cm と他のくびれ平底資料と比べて著しく、底径が小さい資料も見られた。

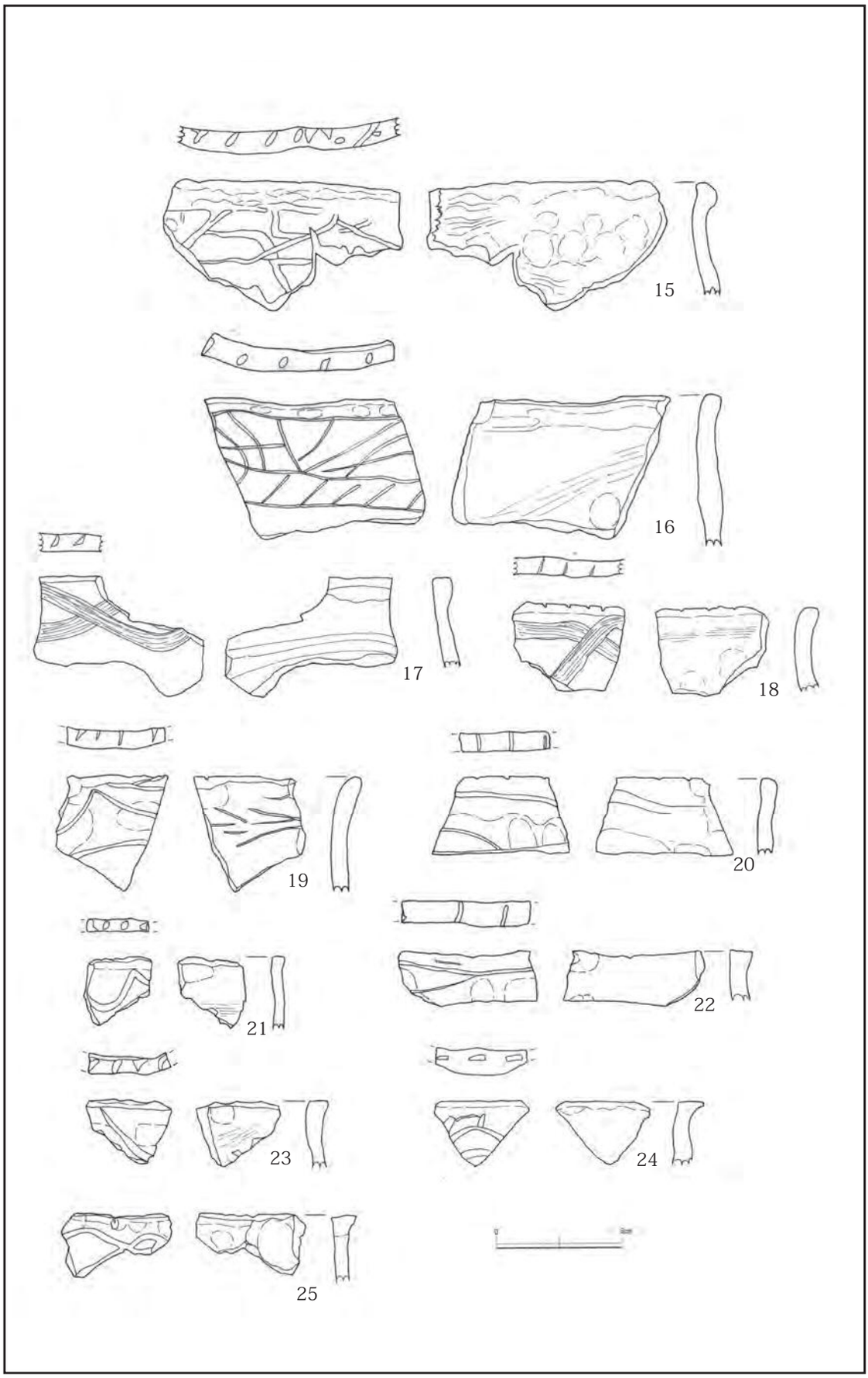
第３表　カヤ原遺跡Ａ地点出土土器観察表

図	図版	出土地区	出土層	器種	器高	口径	底径	器厚	特記事項
1		B-3	Ⅲ層下 貝塚２	甕	-	-	-	0.6	口縁部に横捺刻文、口唇部に刻目。
2		G-3	Ⅳ層上 貝塚２	甕	-	-	-	0.6	口縁部に横捺刻文、口唇部に刻目。
3		C-3	Ⅲ層下	甕	-	-	-	0.6	口縁部に横捺刻文、口唇部に刻目。
4		D-2	Ⅲ層下 貝塚１	甕	-	-	-	0.6	口縁部に横捺刻文
5		D-2	Ⅲ層下 貝溜り７	甕	-	-	-	0.9	口縁部に横捺刻文
6		E-2	Ⅲ層下 貝溜り７	甕	-	-	-	0.5	口縁部に横捺刻文
7		C-2	Ⅲ層下 貝溜り５	甕	-	-	-	0.6	口縁部に横捺刻文
8		E-1	Ⅲ層下	甕	-	-	-	0.6	口縁部に突帯文、曲線文、口唇部に刻目。
9		E-1	Ⅳ層上	甕	-	-	-	0.9	口縁部に突帯文
10		B-2	Ⅲ層下	甕	-	-	-	0.7	口縁部に突帯文、曲線文、口唇部に刻目。
11		C-2	Ⅲ層下	甕	-	-	-	0.7	口縁部に突帯文
12		B-2	Ⅳ層上	甕	-	-	-	0.5	口縁部に突帯文
13		G-2	Ⅳ層	甕	-	-	-	0.8	口縁部に突帯文
14		F-1	Ⅳ層直上	甕	-	-	-	0.7	口縁部に曲線文、口唇部に刻目。
15		E-1	Ⅲ層下 貝溜り３	甕	-	11.5	-	0.5	口唇部に刻目文、口縁部に沈線による 曲線文。外面、内面共にナデ調整。
16		E-1	Ⅲ層下	甕	-	-	-	1.0	
17		G-2	Ⅳ層上	甕	-	-	-	0.6	口縁部に曲線文、口唇部に刻目。
18		G-1	Ⅳ層上	甕	-	-	-	0.7	口縁部に曲線文、口唇部に刻目。
19		G-2	Ⅳ層上	甕	-	-	-	0.7	口縁部に曲線文、口唇部に刻目。
20		F-2	Ⅲ層下 貝溜り９	甕	-	-	-	0.7	口縁部に曲線文、口唇部に刻目。
21		B-3	Ⅲ層下 貝溜り16	甕	-	-	-	0.5	口縁部に曲線文、口唇部に刻目。
22		F-2	Ⅲ層下 貝溜り９	甕	-	-	-	0.6	口縁部に曲線文、口唇部に刻目。
23		B-3	Ⅲ層下 貝溜り16	甕	-	-	-	0.6	口縁部に曲線文、口唇部に刻目。
24		F-2	Ⅳ層上	甕	-	-	-	0.7	口縁、口唇部に施文。
25		B-3	Ⅲ層下	甕	-	-	-	0.5	口唇部に曲線文
26		D-2		甕	-	-	-	0.8	口縁、口唇部に施文。
27		D-2	Ⅲ層下 貝溜り７	甕	-	-	-	0.5	口縁部に曲線文
28		E-2	Ⅲ層下 貝溜り７	甕	-	-	-	0.7	口唇部に刻目
29		C-3	Ⅲ層下	甕	-	-	-	0.5	口唇部に刻目文
30		D-2	Ⅲ層下 貝溜り６	甕	-	-	-	0.7	口唇部に刻目
31		E-2	Ⅲ層下 貝塚１	甕	-	-	-	0.7	口唇部に刻目
32		D-1	Ⅲ層下 貝溜り２	甕	-	-	-	0.6	口唇部に刻目
33		D-2	Ⅲ層下 貝溜り６	甕	-	-	-	0.8	有孔
34		D-2	Ⅲ層下 貝溜り６	甕	-	-	-	0.5	有孔
35		E-2	Ⅲ層下 貝塚２	甕	-	-	-	0.6	口縁部に曲線文
36		D-1	Ⅲ層下	甕	-	-	-	0.6	
37		E-2	貝塚１	甕	-	-	-	0.7	連点文
38		E-1	貝溜り３	甕	-	-	-	0.6	
39		B-3	貝塚２	甕	-	-	-	1.1	

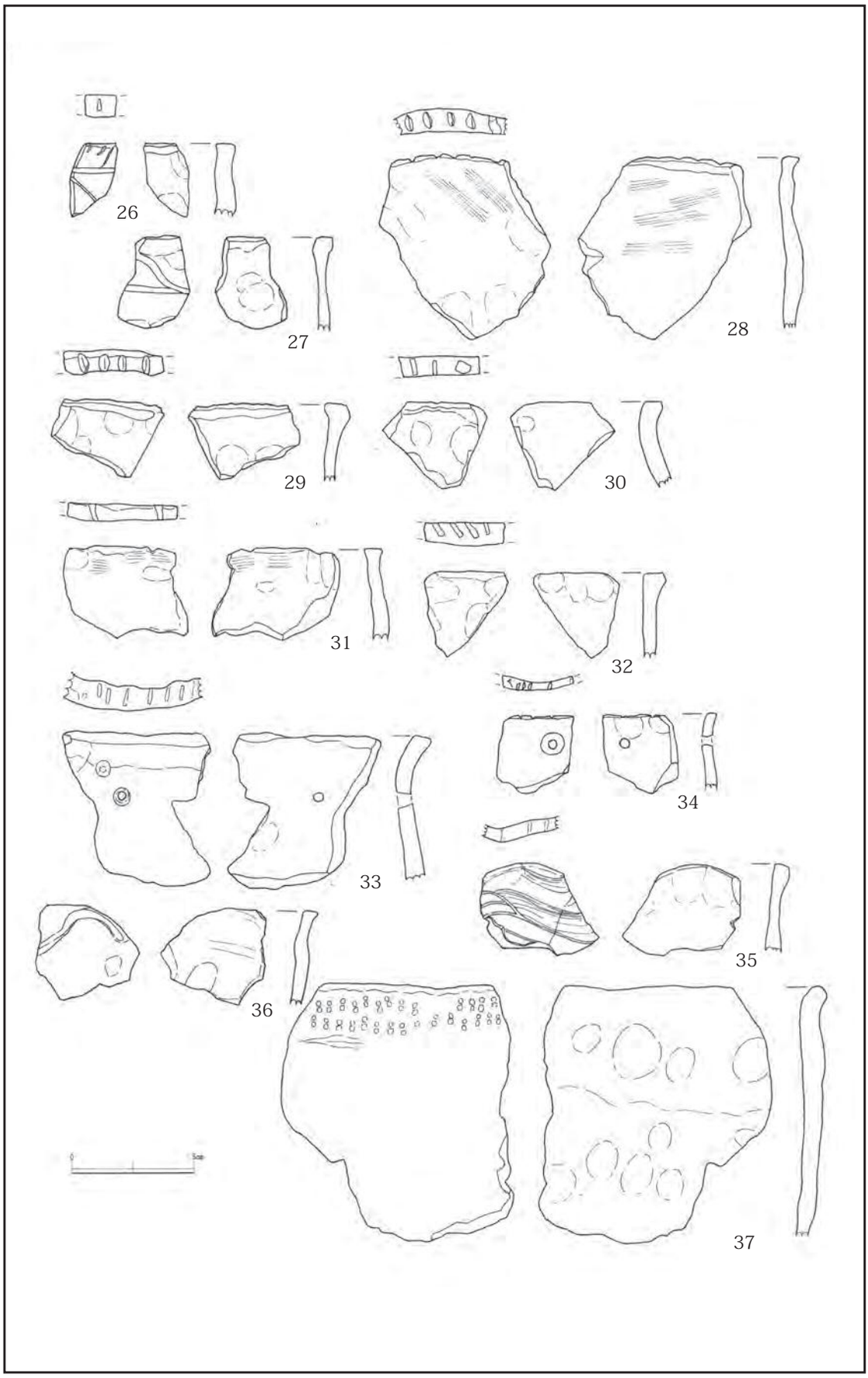
図	図版	出土地区	出土層	器種	器高	口径	底径	器厚	特記事項
40		B-3	貝塚２	甕	-	-	-	0.7	
41		C-3	Ⅲ層下貝塚２	甕	-	-	-	0.6	
42		B-3	Ⅲ層下貝塚２	甕	-	-	-	0.7	
43		C-3	Ⅲ層下貝塚２	甕	-	-	-	0.7	
44		B-2	Ⅲ層下貝塚 14	甕	-	-	-	0.7	
45		C-2	Ⅳ層上面	甕	-	29.0	-	0.7	内外面に縦位の条痕が見られる。
46		D-2	貝塚１	甕	-	-	-	0.4	
47		B-3	Ⅲ層下貝塚２	甕	-	-	-	0.6	
48		B-2	Ⅲ層下貝溜り 15	甕	-	-	-	0.6	
49		I-3	Ⅳ層上	甕	-	-	-	0.6	
50		C-3	Ⅲ層下貝塚２	-	-	-	-	0.6	
51		D-2	Ⅲ層下貝塚１	甕	-	-	-	0.7	
52		D-2	Ⅲ層下貝溜り５	甕	-	-	-	1.0	
53		D-2	Ⅲ層下貝塚２	甕	-	-	-	0.5	
54		D-2	貝溜り６	甕	-	-	-	0.7	
55		E-2	Ⅲ層下貝塚１	甕	-	-	-	0.7	口唇部に刻目
56		C-3	Ⅲ層下貝塚２	-	-	-	-	0.8	
57		C-2	Ⅲ層下貝溜り５	甕	-	-	-	0.7	
58		E-2	Ⅲ層下	甕	-	-	-	0.5	
59		D-2、E-2	Ⅲ層下貝溜り６	甕	-	-	-	0.8	山形口縁
60		D-2	Ⅲ層下貝溜り６	甕	-	-	-	0.6	山形口縁
61		B-3	Ⅲ層下貝塚２	-	-	-	-	1.0	乳房状尖底を呈する。
62		A-2	Ⅲ層下貝溜り 14	-	-	-	-	0.6	尖底
63		E-2	Ⅲ層下貝溜り７	-	-	-	-	0.8	尖底
64		D-2	Ⅲ層下貝溜り６	-	-	-	-	0.4	尖底
65		E-2	Ⅲ層下貝溜り７	甕	-	-	5.6	0.8	くびれ平底
66		D-2	Ⅲ層下貝溜り６	甕	-	-	7.2	0.6	くびれ平底
67		F-1	Ⅲ層下貝溜り４	甕	-	-	8.0	0.7	くびれ平底
68		E-1	Ⅲ層下	甕	-	-	6.0	0.6	くびれ平底
69		F-2	Ⅲ層下貝溜り８	甕	-	-	6.1	0.5	くびれ平底
70		E-2	Ⅲ層下貝溜り７	甕	-	-	5.2	0.6	くびれ平底
71		E-3	Ⅲ層下貝溜り９	甕	-	-	5.6	0.6	くびれ平底
72		D-2	Ⅲ層下貝溜り６	甕	-	-	5.6	0.6	くびれ平底
73		D-2	Ⅲ層下貝塚１	甕	-	-	5.4	0.7	くびれ平底
74		C-3	Ⅲ層下	甕	-	-	6.2	-	くびれ平底
75		B-2	Ⅲ層下	甕	-	-	7.1	-	くびれ平底
76		C-3	Ⅲ層下貝塚２	甕	-	-	3.3	0.4	くびれ平底



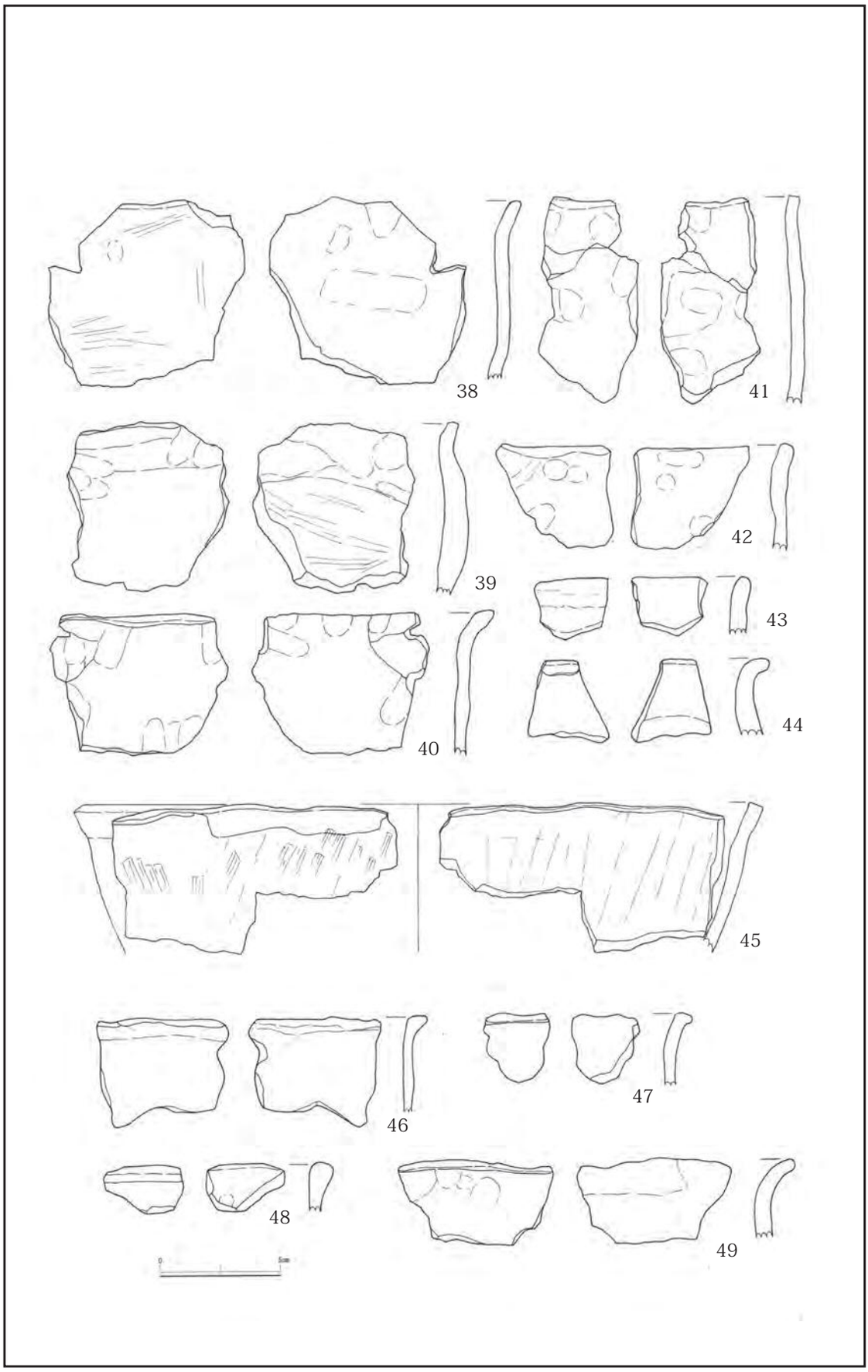
第 10 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（有文口縁部）



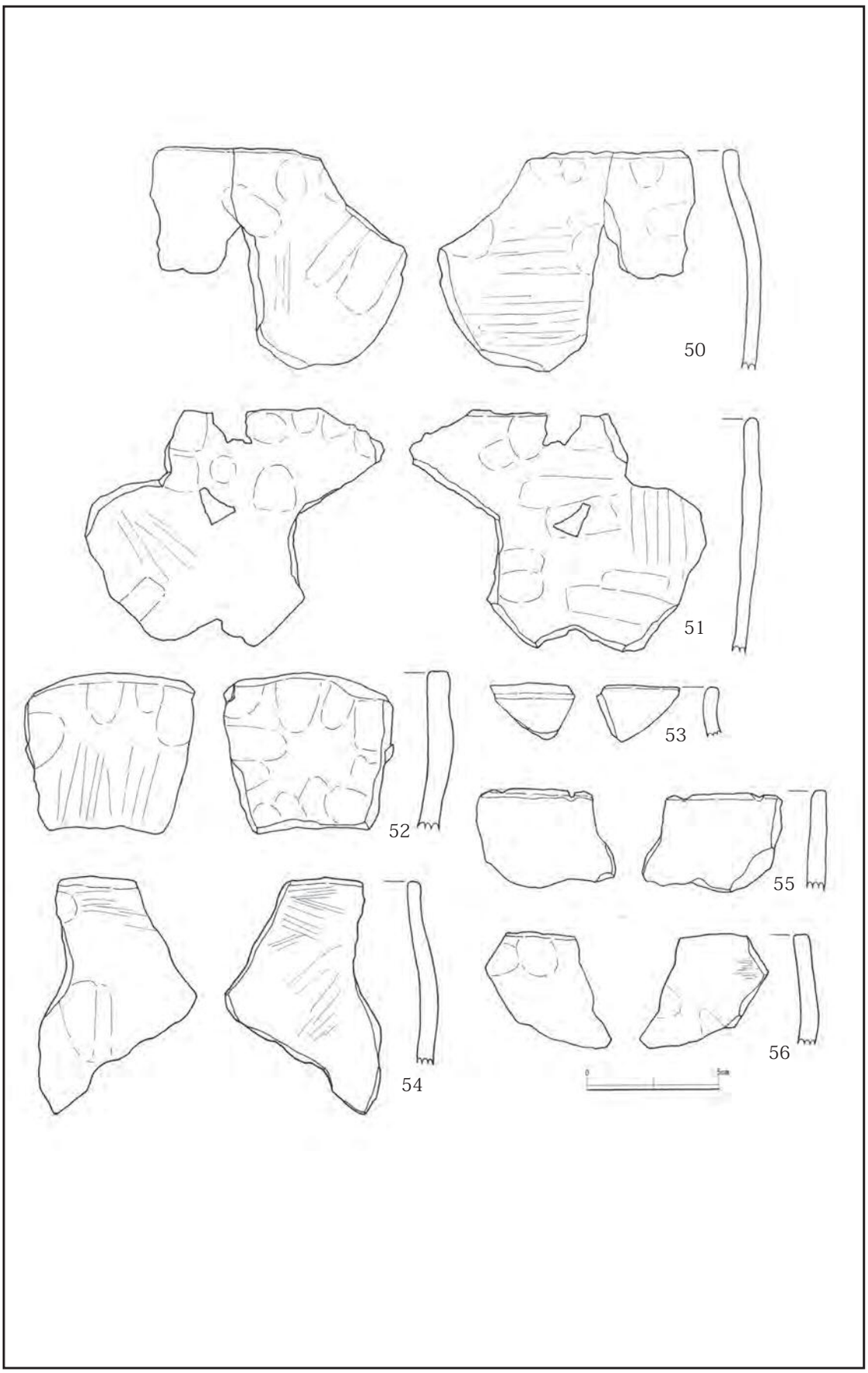
第 11 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文口縁部）1



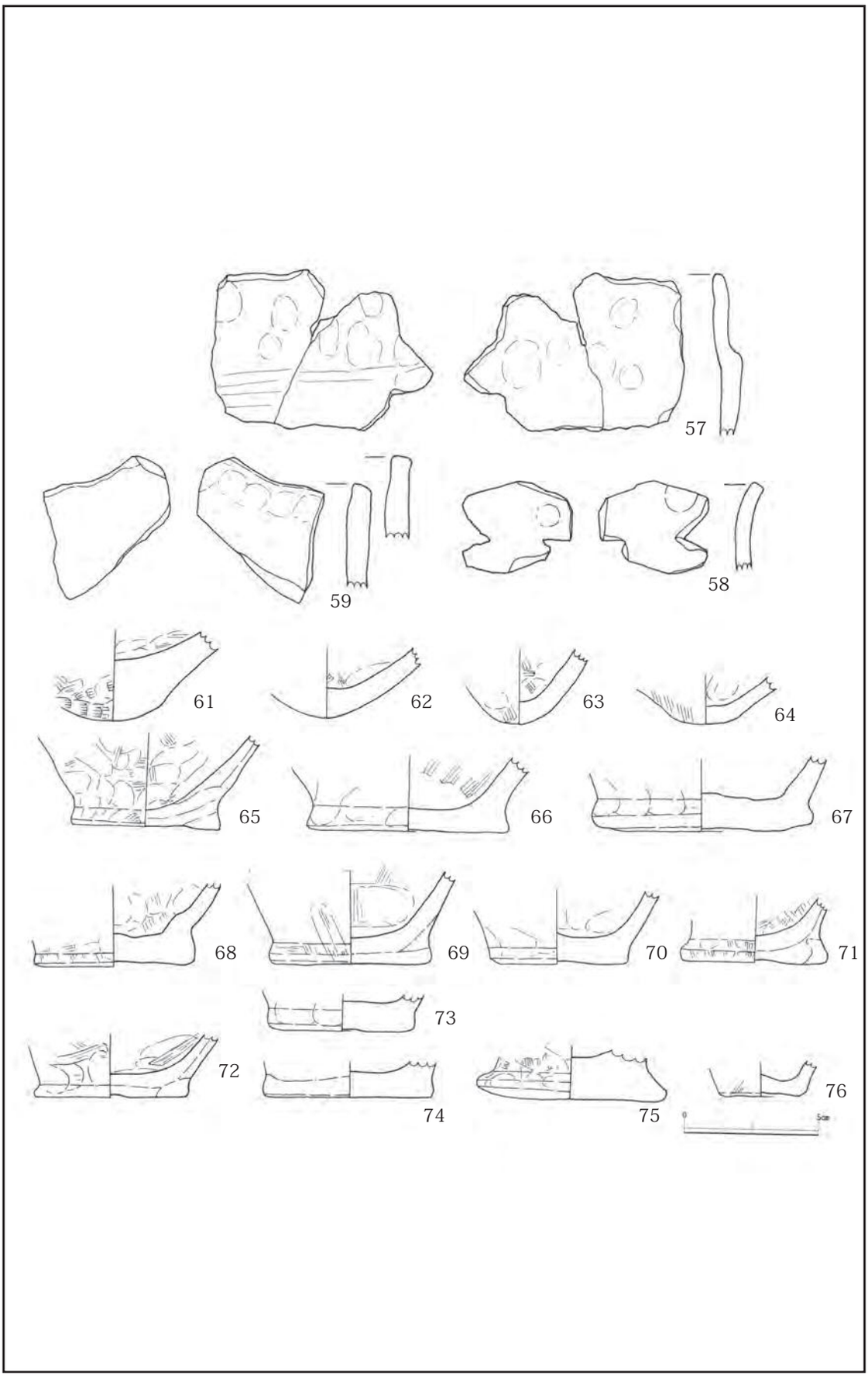
第 12 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文口縁部）2



第 13 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文口縁部）3、底部資料



第 14 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文口縁部）2



第 15 図　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文口縁部）3、底部資料

石器

カヤ原遺跡Ａ地点の石器は，軽石製品１点・磨製石斧１点・凹石２点・敲石 16 点・磨石７点・チャート剥片１点・チャート原石２点・クガニイシ３点・研磨器１点・砥石１点・台石１点・石皿１点が出土した。

石材は，軽石・緑色岩・サンゴ塊・チャート・砂岩・珪岩・安山岩・凝灰岩等がみられた。

軽石製品（1）

１は，穿孔のある軽石製品である。一部欠損しているが，円形を呈している。両面とも平らに磨かれ，ほぼ中央部に両面からの穿孔が施されている。

磨製石斧（2）

２は，磨製石斧に分類したが，刃部は鋭利でなく，敲打・研磨痕があることから石斧状の敲石の可能性もある。

凹石（3）

凹石は，２点出土したが１点のみ図示した。３は，大型の円礫を用いた敲打痕のみられる凹石である。片面の中央部に約 0.3㎝の凹みがあり，側縁部・裏面に敲打痕がみられる。

敲石・磨石（4～7）

敲石・磨石は，23 点出土したが敲石４点のみ図示した。４は，半壊しているが舟底状の形状を呈し，敲打および研磨により整形されている。５は，上・下端部および側縁部に敲打がなされ，表裏面には丁寧な磨り痕が施されている。６・７は，敲打整形により三角錐状の形態を施し，下面の磨り面は平坦で，長軸方向に平行な研磨を行っている。７は，側面部に浅い凹みがみられる。

クガニイシ（8～10）

８～ 10 は，稜をもち，敲打痕・磨り面のあることからクガニイシに分類したものである。クガニイシとは，上辺に帯状平坦面をもつことを特徴とし，ここを押さえてシーソーのように前後運動を行うことで木の実等の植物を潰したとみられる，粉砕用石器である。

研磨器（11）

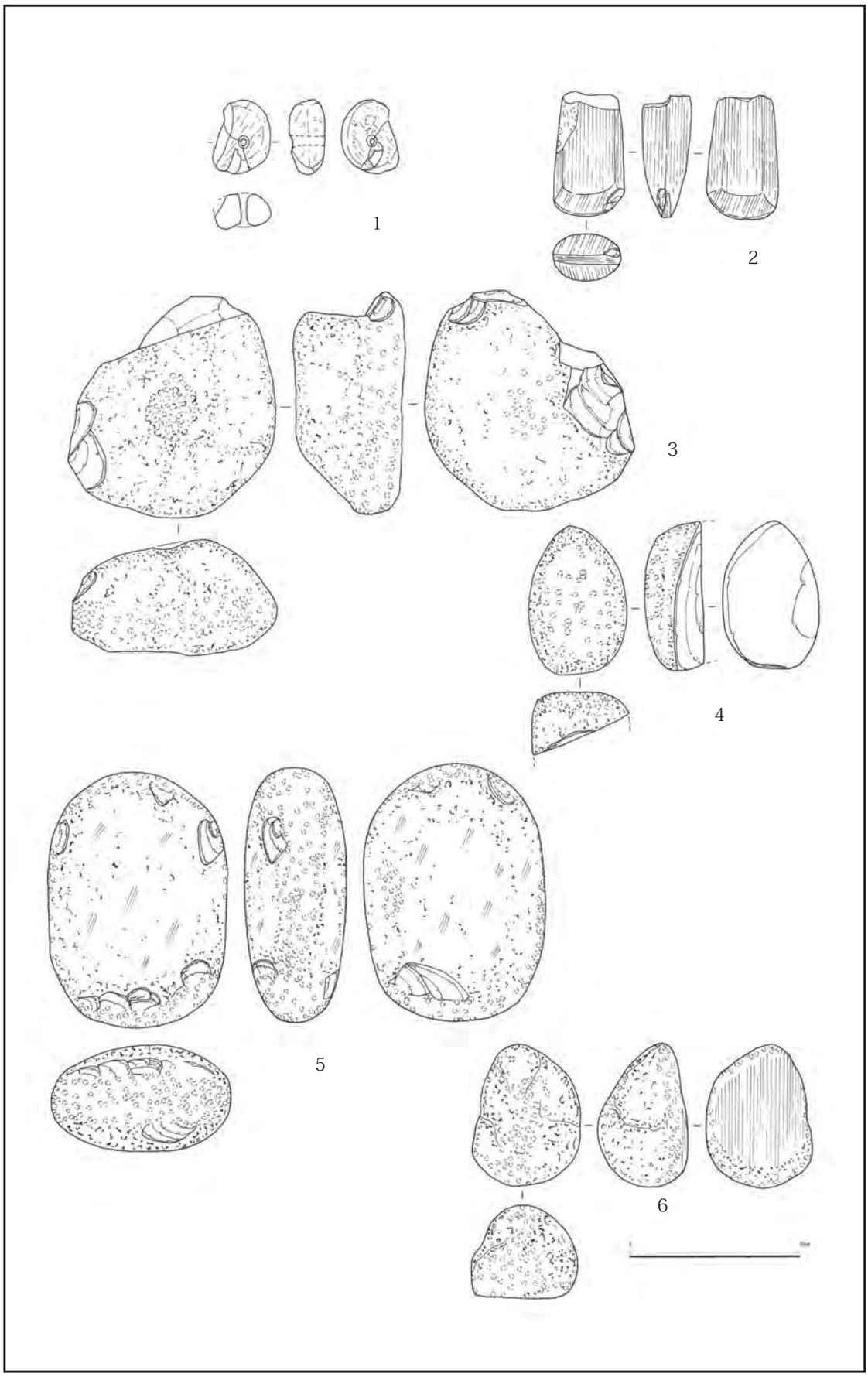
11 は，棒状の砂岩礫を用いた研磨器である。片面に若干の研磨痕がみられ，片側辺部に丁寧な磨り面がみられる。

砥石（12）

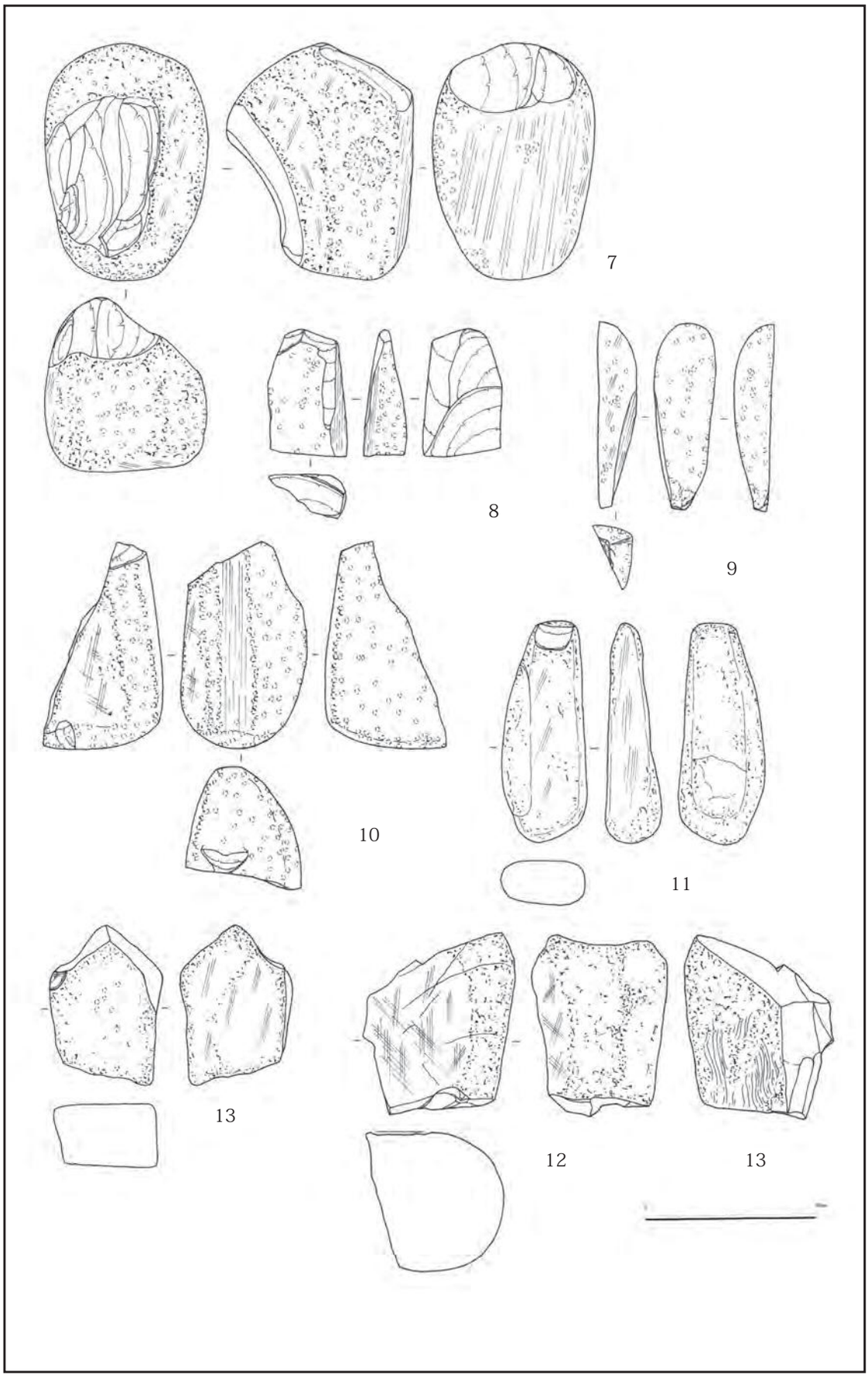
12 は，砂岩の角礫を石材に用い，表裏面二面に研磨痕がみられる砥石である。

石皿（13）

13 は，欠損しているが，珪岩の自然礫を利用した石皿で，楕円の平面形を呈したものと思われる。縁を残し，中央部が弓状に凹むものである。凹みは浅く 0.1㎝を測る。



第 16 図　出土品(1)　軽石製品・石斧・凹石・敲石



第 17 図　出土石器（2）敲石・クガニイシ・研磨器・砥石・石皿

第４表 出土石器一覧表

挿図	番号	器 種	石 材	区	層	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺物番号	備考
16	1	穿孔軽製品	軽石	E1	Ⅲ下	4.3	(3.5)	2.2	6	6	
	2	磨製石斧	班レイ岩	A2	Ⅲ下	(7.2)	3.8	2.9	146	45	
	3	凹石	砂岩	E2	Ⅲ下	(12.7)	12.5	6.8	1272		
	4	敲石	砂岩	D2	Ⅲ下	8.6	5.9	(3.6)	195		
	5	敲石	砂岩	B3	Ⅲ下	14.9	10.6	6.1	1601	111	
	6	敲石	砂岩	C3	Ⅲ下	8.3	6.9	5.3	331		
17	7	敲石	砂岩	E1	Ⅲ下	13.6	9.6	11.0	1706		
	8	クガニ石	砂岩	F2	Ⅲ下	(7.2)	(4.3)	(2.4)	104	67	
	9	クガニ石	砂岩	E1	Ⅲ下	10.8	(2.2)	(3.6)	118	18	
	10	クガニ石	砂岩	B2	Ⅲ下	12	(7.1)	7.3	650	167	
	11	研磨器	砂岩	G2	Ⅳ上	12.8	5.1	3.3	287	185	
	12	砥石	砂岩	E1	Ⅲ下	9.3	6.3	3.7	387		
	13	石皿	硅岩	B3	表層下40cm	(10.5)	(8.9)	8.0	789		
	14	凹石	サンゴ塊	D2	Ⅲ下	7.5	5.5	2.9	109	23	
	15	敲石	砂岩	F2	Ⅲ下	(3.8)	(3.1)	(2.0)	31	67	
	16	敲石	安山岩	D2	Ⅲ下	9.1	5.5	4.7	233	108	
	17	敲石	チャート	B1	Ⅲ下	6.6	4.5	(2.0)	83	158	
	18	敲石	サンゴ塊	D2	Ⅲ下	9.4	7.1	3.9	312	140	
	19	敲石	硅岩	B2	Ⅲ下	4.6	3.2	2.2	44	164	
	20	敲石	安山岩	B2	Ⅳ上	14.4	9.9	7.3	969	194	
	21	敲石	砂岩	C2	表層下40cm	10.3	8.3	7.6	873		
	22	敲石	砂岩	C2	Ⅲ下	6.4	4.8	(2.2)	110		
	23	敲石	砂岩	B2	Ⅳ上	7.1	3.6	2.0	79	193	
	24	敲石	砂岩	A1	表採	7.2	5.3	3.5	184		
	25	敲石	サンゴ塊	D2	Ⅲ下	7.0	4.6	3.1	112	24	
	26	敲石	砂岩	G2	Ⅳ上	(6.1)	(4.1)	(1.8)	49	212	
	27	磨石	砂岩	B3	Ⅲ下	14.1	(9.9)	7.0	1311	157	
	28	磨石	砂岩	E2	Ⅳ上	6.8	5.4	3.5	138	177	
	29	磨石	砂岩	C2	表層下40cm	5.2	7.7	4.5	316		
	30	磨石	硅岩	E2	Ⅲ下	8.4	5.8	3.2	235		
	31	磨石	凝灰岩	C1	Ⅳ上	(4.1)	(4.9)	3.7	73	201	
	32	磨石	サンゴ塊	D2	Ⅲ下	6.7	6.3	3.1	113	25	
	33	磨石	砂岩	F2	Ⅲ下	7.4	6.6	2.4	185	129	
	34	台石	砂岩	C2	Ⅲ下	10.8	7.4	6.3	800	39	
	35	原石	チャート	D2	Ⅲ下	8.7	6.8	2.3	199	109	
	36	原石	チャート	F2	Ⅲ下	6.2	4.7	2.6	98		
	37	剝片	チャート	D2	Ⅲ下	8.8	11.1	2.6	341	99	
	38	研磨サンゴ	サンゴ塊	F2	Ⅲ下	19.0	13.8	8.4	1788	69	
	39	研磨サンゴ	サンゴ塊	C3	Ⅲ下	21.5	17.5	8.6	2048	118	
	40	礫	硅岩	B1	Ⅳ上	12.5	9.5	5.3	821	196	
	41	礫	安山岩	C2	Ⅲ上	6.0	4.2	2.6	73	26	
	42	礫	粘板岩	D2	Ⅲ下	11.4	4.5	2.1	149	136	

貝製品

カヤ原遺跡Ａ地点の貝製品は，貝匙２点・貝玉１点・螺塔部２点・貝刃３点・螺蓋製敲打器５点・小型貝容器４点・小型貝匙１点・ヤコウガイ製貝匙８点・スイジガイ製利器１点・貝錘41点・貝皿８点が出土した。

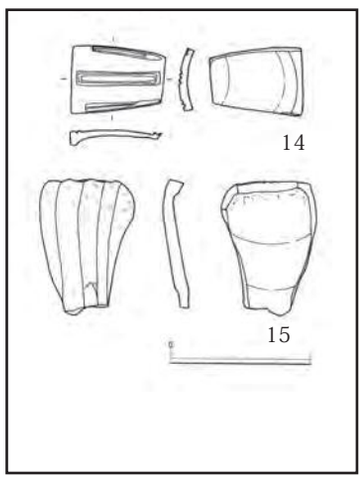
貝札（14～16）

14・15はイモガイ科の貝を素材とする貝札で，Ｆ１区のⅢ層下部・Ⅳ層上部から出土した。

イモガイ類の体層部を扁平な板状に加工・整形し，研磨した長方形の画面に彫画を施したものである。イモガイの体層部を縦に切り取ったもので，長方形を呈し，裏面に螺塔の一部を残している。螺塔を残す一辺が対応する辺よりも長い傾向を示す。

これらの文様は，広田上層タイプで，双眼タイプの中心部を抽出・アレンジしたものである。

14は双眼の特徴を残しながら，表現をやや簡略化したものである。掘り込みが画面外にはみ出すことなく，ひとつの画面内に収まっている。15はさらに表現を簡略化・象徴化したもので，双眼を作り出す中央のくびれ部分がなくなり，上下に一条の線刻を施している。



第18図 出土貝製品（1）

16はミカドミナシの体層部を縦に切り取ったもので，貝札の素材と考えられるものである。

タカラガイ製品（17・18）

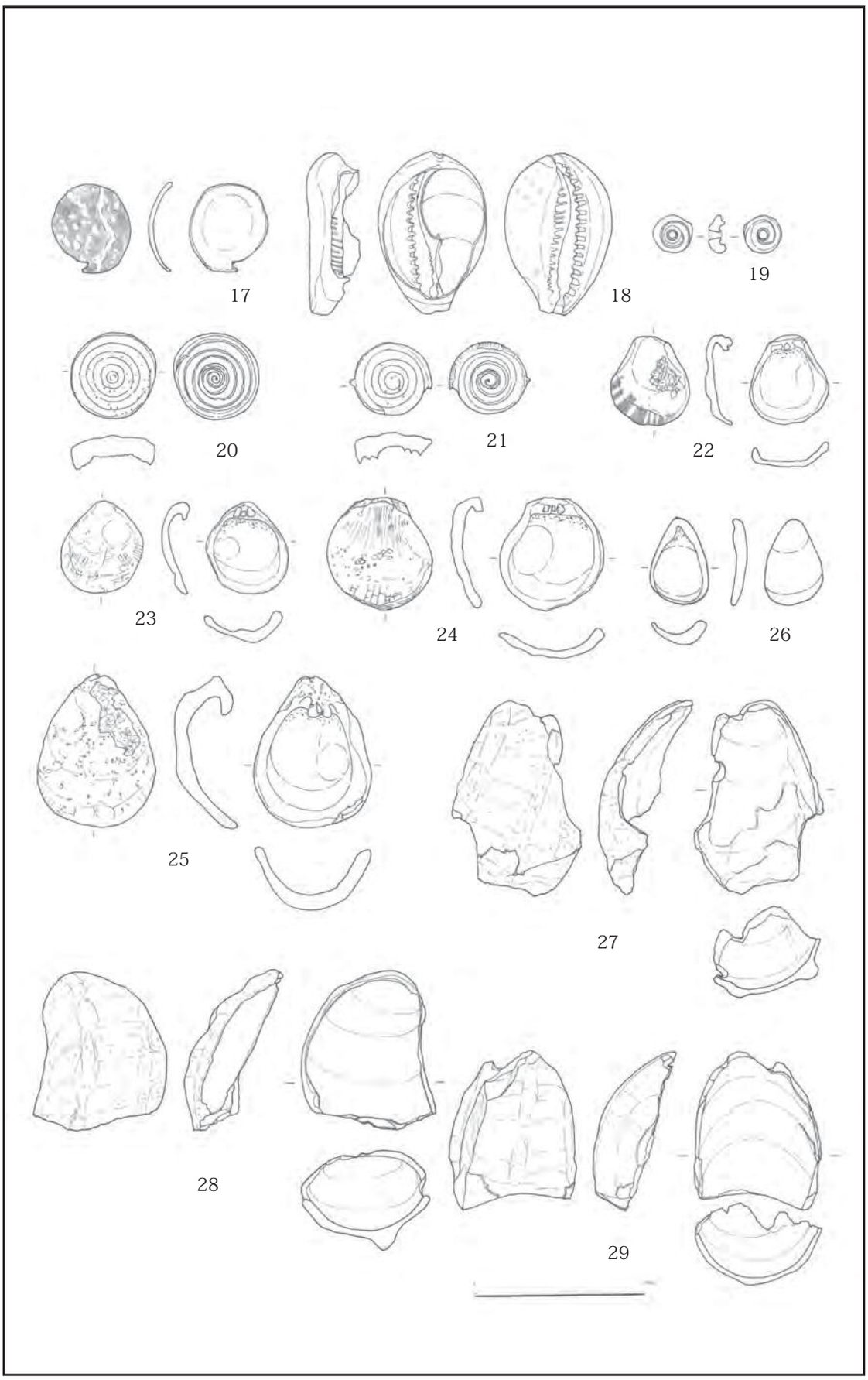
17はハチジョウタカラガイの背面で，研磨が施されており装飾品の素材とした。18はホシダカラガイの背面を除去したもので，食料残滓とも考えられるが，研磨が施されていることから装飾品の素材とした。

貝玉（19）

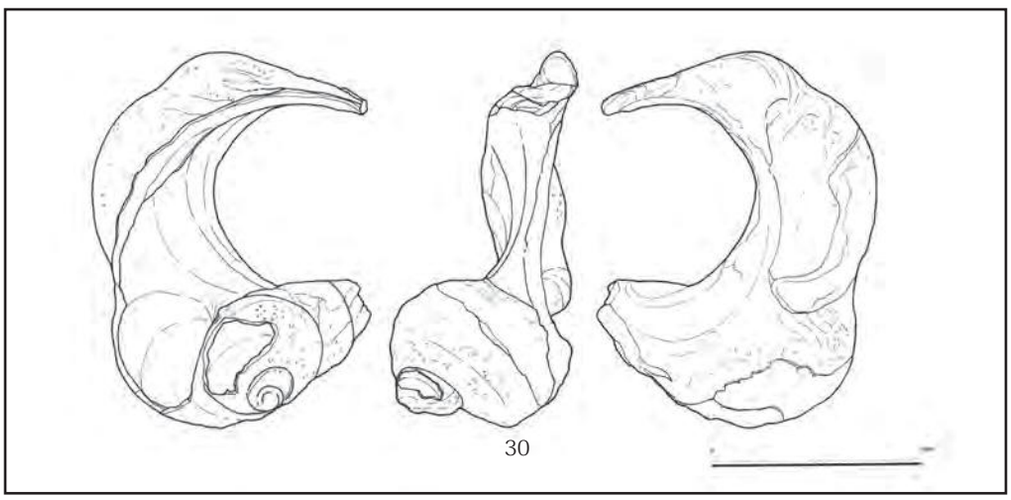
19はマガキガイの螺塔部を素材にして，明瞭な研磨痕が認められるもので，外径は2.2×2.3㎝，孔径（外径0.7×0.7㎝・内径0.5×0.6㎝）を測るものである。敲打により螺塔部を体層部の中軸部分で除去し，粗孔を穿ったものである。穿孔部上面の研磨が顕著である。

螺塔部（20・21）

大型イモガイの螺塔を切り取り，無孔のもの２点が出土した。20はクロフモドキの螺塔を切り取り，研磨により円盤状に仕上げたもので，内・外殻面とも研磨が顕著である。螺塔の外殻面は縁に若干自然面を残しているが，研磨が顕著である。21はアンボンクロザメの螺塔を打ち割ったもので，研磨等は見られないが円盤状貝製品の素材と思われるものである。



第 19 図 出土貝製品（2）



第 20 図 出土貝製品（3）

小型貝容器（22 ～ 25）

22 ～ 25 はメンガイを利用した小型の貝容器である。貝殻のもつ自然の曲面（凹み）を利用して液体物を入れる小型の貝製品である。容器の深さは 1 ～ 3 ㎝を測る。いずれも周縁部は研磨が施されている。

小型貝匙（26）

貝殻のもつ自然曲面を利用して，これをスプーン状にした小型の貝製品である。26 はイモガイの滑層先端部、前溝部をつくる部分の突起を柄として，殻内の凹みをスプーンとしたものである。

貝匙（27 ～ 29）

ヤコウガイの自然曲面を利用して，螺旋の方向に沿って切り取り，匙状に加工したものであり 3 点出土した。外殻の表層を研磨するもので，中には真珠層が露出するものもみられる。外殻は研磨し，表層が残っている。周縁は打割を行い一部研磨痕もみられる。27 は胴部分であり先端部の縁に研磨がみられるが，螺背面の結節には研磨がみられない。28 も胴部分であるが周縁には研磨痕がみられ，螺背面の二本の結節の一本は研磨により平坦となっている。29 は周縁の片縁に研磨がみられ，螺背面の結節は丁寧な研磨により平坦となり，結節部以外にも研磨痕がみられる。

貝殻剥離痕（30）

ヤコウガイの貝匙などの製品を切り取った後の殻で，研磨や打ち割りが確認できるものである。

貝刃（31 ～ 33）

二枚貝の腹縁に片面からの押圧剥離によって刃をつけたもので，シレナシジミを素材にしたものが 3 点出土した。

貝 皿（22 ～ 25）

8点出土し，そのうち3点を図示した。貝種はシャゴウ6点，シラナミ2点である。34・35はシャゴウで放射筋の先端を研磨し，側面を平坦に形成している。深さは4.0，3.3㎝を測る。36はシラナミで，やはり先端部を研磨し，平坦面を作っている。深さは3.1㎝である。

有孔貝製品（37 ～ 39）

37・38はゴホウラの有孔貝製品である。37は背面に粗割を行ったが，欠損してしまったものである。38は背面・腹面に小孔を有するもので，貝輪を目的とした有孔製品である。
39はサラサバティラの殻頂部を削り取り，貝輪を製作中に欠損したと思われる製品である。

螺蓋製貝斧（40 ～ 43）

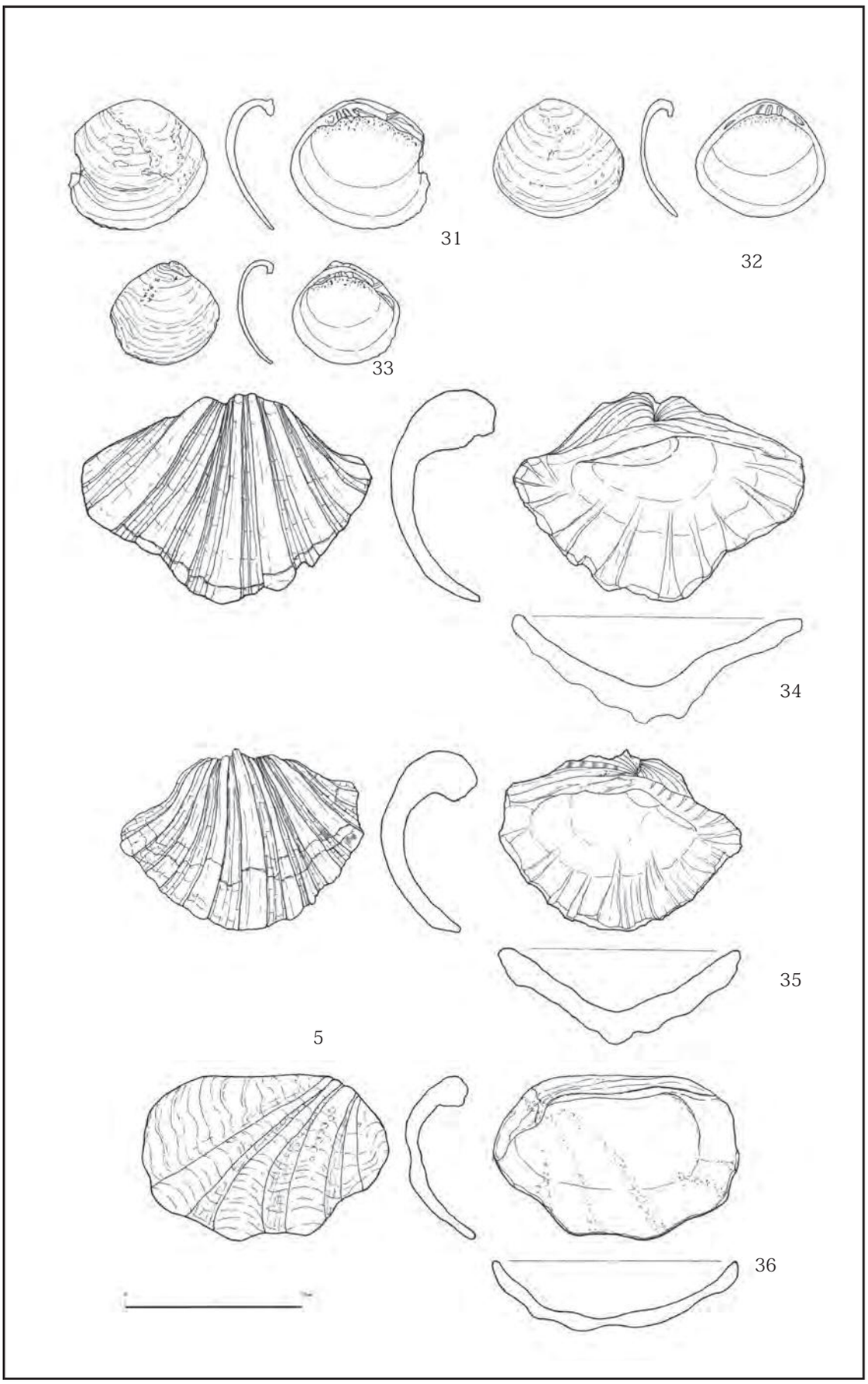
ヤコウガイの蓋の薄い部分を連続して，敲打により剝離し，刃部としたもので「敲打器」「蓋製品」などとも呼ばれているが，今回は「螺蓋製貝斧」の名称を使用したい。40は左右両端に付刃を行っている。左側は数次の打撃により付刃しているが，右側は追打による短刃を形成している。41・42は蓋の薄い部分に数次の打撃を加え、刃部を形成している。43も左右両端に，数回の打撃に加え付刃を行っている。

貝錘（44 ～ 53）

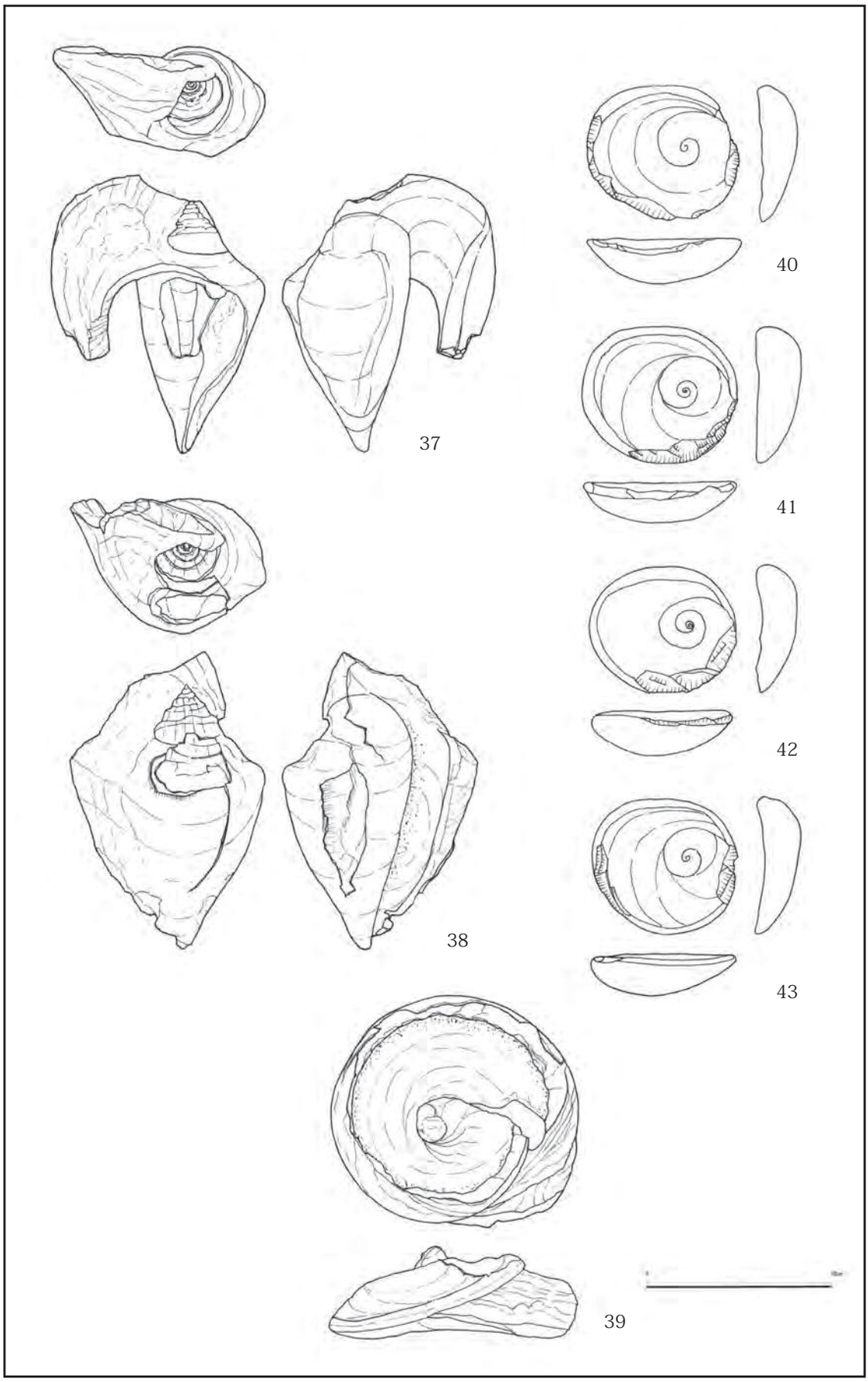
49点出土し，そのうち10点を図示した。貝種はシラナミ14点，ヒメジャコ3点，メンガイ26点，ソメワケグリ6点，ビノスモドキ1点である。44はヒメジャコで殻頂部を打ち割り穿孔したものである。45はシラナミの殻頂部をやはり打ち割り、穿孔を施している。44の穿孔の外径は4.5 × 3.4㎝、内径は3.2 × 1.2㎝を測る。45の穿孔外径は1.6 × 1.8㎝，内径は1.4 × 1.2㎝である。

46 ～ 49はメンガイを利用した有孔貝製品で，メンガイの殻頂近くに穿孔があり，偶発的に穿孔される場合も考えられるが，孔に数回の打ち割り調整がみられることから貝製品とした。

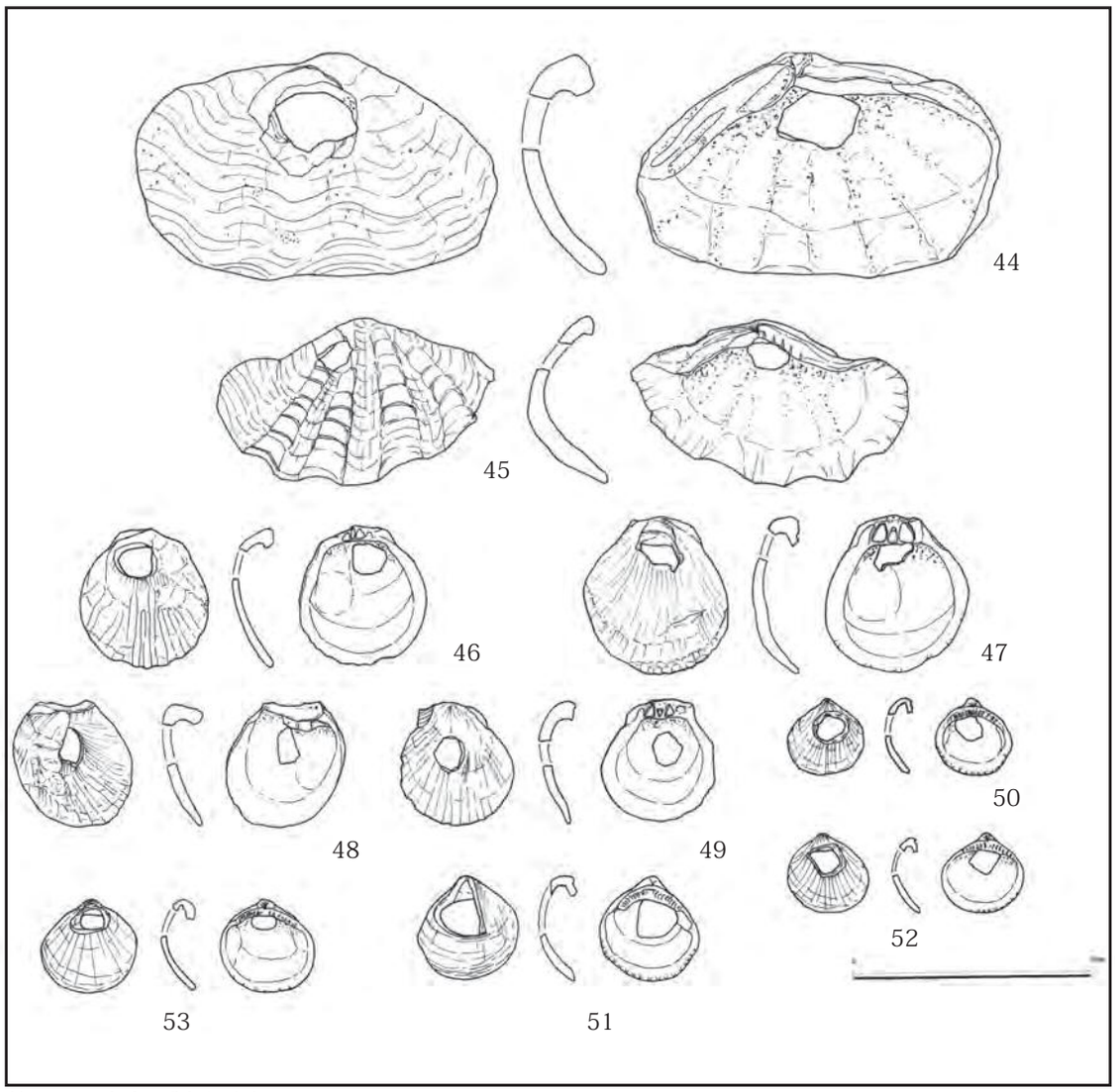
50～53はソメワケグリである。殻頂部に打ち割り穿孔を施す。外径は1.4～2.1㎝，内径は1.0～1.6㎝を測る。
いずれも穿孔以外に加工や使用痕等は認められず，網のおもりになる貝錘の用途が考えられる。



第 21 図 出土貝製品（4）



第 22 図 出土貝製品（5）



第 23 図 出土貝製品（6）

第５表　カヤ原遺跡Ａ地点出土貝製品

挿図	番号	器種	貝種	区	層	最大長cm	最大幅cm	重量g	遺物番号	備考
18	14	貝札	イモガイ	F1	Ⅲ下	3.0	2.3	5	100	
	15	貝札	イモガイ	F1	Ⅳ直上	3.4	2.5	5	174	
	16	貝札関連資料	ミカドミナシ	D2	Ⅲ下	4.9	3.4	15		
19	17	背面部	ハチジョウダカラ	E2	Ⅲ下	5.4	4.6	13	59	
	18	腹面部	ホシダカラ	G1	Ⅲ下	9.5	6.4	77		
	19	貝玉	マガキガイ	E2	Ⅲ下	2.2	2.3	5	127	
	20	螺塔部	クロフモドキ	C3	Ⅲ下	5.0	5.0	64		
	21	螺塔部	ｱﾝﾎﾟﾝｸﾛｻﾞﾒ	E2	Ⅲ下	4.8	4.5	34	95	
	22	小型貝容器	メンガイ	C3	Ⅲ下	5.2	4.6	20	42	
	23	小型貝容器	メンガイ	D2	Ⅲ下	5.4	4.9	27	101	
	24	小型貝容器	メンガイ	D2	Ⅲ下	6.6	6.3	38	102	
	25	小型貝容器	メンガイ	E2	Ⅲ下	9.1	7.0	127		
	26	小型貝匙	イモガイ	C2	Ⅳ上	5.1	3.5	20		
	27	貝匙	ヤコウガイ	C2	Ⅲ下	12.2	7.5	79	50	
	28	貝匙	ヤコウガイ	C2	Ⅲ下	10.7	8.0	92	77	
	29	貝匙	ヤコウガイ	C2	Ⅲ下	(10.2)	7.6	63	81	
20	30	剥ぎ取り痕	ヤコウガイ	D2	Ⅲ下	16.0	17.5	705	72	
21	31	貝刃	シレナシジミ	DE2	Ⅲ下	7.4	8.0	45		
	32	貝刃	シレナシジミ	A2	Ⅲ下	6.6	7.3	40	114	
	33	貝刃	シレナシジミ	A3	Ⅲ下	5.9	6.2	21	165	
	34	貝皿	シャゴウ	A2	Ⅲ下	12.3	14.1	348	33	
	35	貝皿	シャゴウ	C3	Ⅲ下	11.7	16.2	554	40	
	36	貝皿	シラナミ	D2	Ⅲ下	13.0	17.5	386	138	
22	37	有孔	ゴホウラ	D2	表層下70cm	15.7	11.3	353		
	38	有孔	ゴホウラ	G1	Ⅲ下	16.2	11.0	548	8	
	39	剥ぎ取り痕	サラサバティラ	F1	Ⅲ下	13.4	12.5	319		
	40	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	C3	Ⅲ下	6.9	8.0	145	84	
	41	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	B3	Ⅲ下	7.7	8.2	176	110	
	42	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	D2	Ⅲ下	7.2	8.3	159	141	
	43	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	G2	Ⅳ上	7.5	8.2	164	211	
23	44	貝錘	シラナミ	E1	Ⅲ下	9.4	15.3	298	64	
	45	貝錘	シラナミ	C1	Ⅲ上	7.0	11.8	90	2	
	46	貝錘	メンガイ	B3	Ⅲ下	5.9	5.4	25	86	
	47	貝錘	メンガイ	C3	Ⅲ下	6.6	6.1	39	120	
	48	貝錘	メンガイ	B4	Ⅲ下	5.3	5.1	21	159	
	49	貝錘	メンガイ	C2	Ⅳ上	5.2	4.8	14	202	
	50	貝錘	ソメワケグリ	E2	Ⅲ下	3.2	3.3	5	133	
	51	貝錘	ソメワケグリ	D1	Ⅲ下	3.4	3.5	5	52	
	52	貝錘	ソメワケグリ	D2	Ⅲ下	4.4	4.2	13	103	
	53	貝錘	ソメワケグリ	B3	Ⅲ下	4.0	4.1	9		
	54	螺塔部	ｱﾝﾎﾟﾝｸﾛｻﾞﾒ	D2	Ⅲ下	4.2	3.8	28		
	55	背面部	ハチジョウダカラ	E2	Ⅲ下	6.5	(4.8)	18	61	
	56	背面部	ハチジョウダカラ	D2	Ⅲ下	6.6	5.7	25	58	
	57	背面部	ホシダカラ	E2	Ⅲ下	5.7	(4.2)	12	60	
	58	背面部	ホシダカラ	E2	Ⅲ下	6.7	(5.2)	16	63	
	59	背面部	ホシダカラ	G1	Ⅲ下	(5.6)	6.1	16		
	60	背面部	ホシダカラ	C3	Ⅲ下	(5.3)	(4.3)	9		
	61	腹面部	ハチジョウダカラ	D2	Ⅲ下	6.7	4.5	32	145	
	62	腹面部	ホシダカラ	D2	Ⅲ下	9.8	6.5	102	139	
	63	腹面部	ホシダカラ	F2	Ⅲ下	9.7	6.6	119	131	
	64	腹面部	ホシダカラ	D2	Ⅲ下	7.8	5.3	75	143	
	65	腹面部	ホシダカラ	D3	Ⅲ下	9.9	7.0	100		
	66	腹面部	ホシダカラ	C2	Ⅲ下	9.0	6.2	112		
	67	腹面部	ホシダカラ	C3	Ⅲ下	9.1	5.9	86		
	68	腹面部	ホシダカラ	C2	Ⅲ下	9.0	6.3	96		
	69	貝錘	シラナミ	C2	Ⅲ下	7.0	9.6	58	36	
	70	貝錘	シラナミ	D1	Ⅲ下	3.2	5.2	7	51	
	71	貝錘	ヒメシャコ	F2	Ⅲ下	7.7	9.7	60	68	
	72	貝錘	シラナミ	C2	Ⅲ下	8.8	12.0	129	78	
	73	貝錘	ヒレシャコ	C2	Ⅲ下	7.8	10.1	71	82	
	74	貝錘	シラナミ	C2	Ⅲ下	5.6	9.2	45	83	
	75	貝錘	シラナミ	F2	Ⅲ下	7.1	12.1	104		
	76	貝錘	シラナミ	C3	Ⅲ下	5.5	9.4	43	119	
	77	貝錘	シラナミ	C3	Ⅲ下	8.2	12.1	124	121	

挿図	番号	器種	貝種	区	層	最大長cm	最大幅cm	重量g	遺物番号	備考
	78	貝錘	シラナミ	C3	Ⅲ下	(6.4)	11.3	73	122	
	79	貝錘	シラナミ	D2	Ⅲ下	6.0	9.6	42		
	80	貝錘	シラナミ	E2	Ⅲ下	8.8	17.3	267	134	
	81	貝錘	シラナミ	D3	Ⅲ下	3.8	5.6	11	150	
	82	貝錘	シラナミ	E2	Ⅲ下	3.1	4.9	6	169	
	83	貝錘	ヒメシャコ	G1	Ⅳ上	7.0	(6.8)	44	184	
	84	貝錘	メンガイ	D1	Ⅲ	6.5	5.5	35	16	
	85	貝錘	メンガイ	E1	Ⅲ下	5.6	5.0	19	17	
	86	貝錘	メンガイ	C2	Ⅲ下	6.0	4.8	12	37	
	87	貝錘	メンガイ	E1	Ⅲ下	6.1	6.2	22	55	
	88	貝錘	メンガイ	C2	Ⅲ下	3.1	2.8	7	78	
	89	貝錘	メンガイ	C2	Ⅲ下	4.0	3.8	8		
	90	貝錘	メンガイ	D2	Ⅲ下	4.7	4.2	9		
	91	貝錘	メンガイ	F2	Ⅲ下	4.3	4.0	6	94	
	92	貝錘	メンガイ	E2	Ⅲ下	4.2	(3.8)	5	126	
	93	貝錘	メンガイ	E2	Ⅲ下	5.2	4.4	10		
	94	貝錘	メンガイ	E2	Ⅲ下	4.2	3.8	5		
	95	貝錘	メンガイ	E2	Ⅲ下	4.4	4.4	8		
	96	貝錘	メンガイ	E2	Ⅲ下	3.8	3.2	5		
	97	貝錘	メンガイ	D2	Ⅲ下	5.8	5.7	21	148	
	98	貝錘	メンガイ	D3	Ⅲ下	6.1	6.6	30	149	
	99	貝錘	メンガイ	E2	Ⅲ下	4.9	4.0	7	170	
	100	貝錘	メンガイ	E2	Ⅲ下	4.2	4.1	5	171	
	101	貝錘	メンガイ	E2	Ⅲ下	4.9	4.4	9	172	
	102	貝錘	メンガイ	E2	Ⅲ下	7.5	5.7	29		
	103	貝錘	メンガイ	D3	Ⅲ下	7.3	6.6	42		
	104	貝錘	メンガイ	B2	Ⅲ下	5.5	4.6	12		
	105	貝錘	メンガイ	D2	Ⅲ下	5.2	4.6	17		
	106	貝錘	ソメワケグリ	F3	Ⅲ下	3.5	3.6	6		
	107	貝錘	ソメワケグリ	C1	Ⅲ下	3.1	3.0	4		
	108	貝錘	ビノスモドキ	F2	Ⅲ下	2.9	3.2	5		
	109	自然貝	ゴホウラ	F1	Ⅲ下	13.9	8.1	251		
	110	自然貝	ゴホウラ	E2	Ⅲ下	13.1	7.1	145	62	
	111	自然貝	ゴホウラ	E1	Ⅲ下	20.5	7.6	301	65	
	112	自然貝	ゴホウラ	E2	Ⅲ下	13.8	9.9	380	71	
	113	自然貝	ゴホウラ	C2	Ⅲ下	16.0	11.4	427	80	
	114	自然貝	ゴホウラ	C3	Ⅲ下	12.9	10.9	320	85	
	115	自然貝	ゴホウラ	B3	Ⅲ下	13.2	7.9	240	90	
	116	自然貝	ゴホウラ	E2	Ⅲ下	17.4	9.6	428	97	
	117	自然貝	ゴホウラ	B3	Ⅲ下	14.6	7.9	245		
	118	貝皿	シャゴウ	C3	Ⅲ下	14.5	20.0	1135	41	
	119	貝皿	シャゴウ	B3	Ⅲ下	12.2	17.6	566	89	
	120	貝皿	シャゴウ	E3	Ⅲ下	10.2	15.3	429	160	
	121	貝皿	シラナミ	G2	Ⅲ下	9.7	13.5	234	186	
	122	貝皿	シャゴウ	C3	Ⅲ下	12.0	18.7	535		

自然遺物

本遺跡の自然遺物はほとんどが貝類であり、獣魚骨類の出土は少数の出土となっている。調査時には獣魚骨類が僅少である印象を受けたが、遺構サンプル土のフローテーションを行った結果、微小な獣魚骨類が得られた。

貝類

貝類は海産、陸産の種が見られた。海産貝はシラナミ、マガキガイ、サラサバティ等を主体に142種が確認され､陸産貝はオキナワヤマタニシ等5種が出土している。優占種の割合として、シラナミが陸産貝を含めた数量全体の23.28％､マガキガイが14.45％､サラサバティが9.82％を占めている。陸産貝に関しては、オキナワヤマタニシが多数（418点　1.76%）を占め、バンダナマイマイ、シュリマイマイ、オキナワウスカワマイマイが確認された。

本遺跡での出土貝類の優占種としては､陸産貝を含めてもシラナミ､マガキガイ､サラサバティといったリーフ内に生息する種となっている。

第６表　カヤ原遺跡Ａ地点　出土貝類一覧表

	出土地 / 貝種	A -1	A -2	A -3	B -1	B -2	B -3	C -1	C -2	C -3	D -1	D -2	D -3	E -1	E -2	E -3	F -1	F -2	F -3	G -1	G -2	G -3	計
海産貝																							
	腹足綱																						
1	ツタノハ	0	4	0	0	2	5	0	3	2	0	6	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	25
2	リュウキュウウノアシ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
3	＊コシダカサザエ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	2	2	0	3	0	0	0	0	0	0	0	10
4	チョウセンサザエ	0	1	2	4	12	23	2	10	18	2	18	3	7	25	2	1	8	1	1	1	0	141
5	チョウセンサザエ(フタ)	8	44	33	15	43	163	7	57	63	15	161	31	10	87	8	13	27	3	0	23	2	813
6	ヤコウガイ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2	0	1	0	0	0	0	0	5
7	ヤコウガイ(フタ)	1	0	0	0	0	3	0	2	1	0	2	1	1	5	0	1	1	1	0	1	0	20
8	オオウラウズ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
9	ニシキウズ	1	3	1	4	18	35	1	19	34	8	52	4	2	28	9	11	12	0	2	3	0	247
10	ギンタカハマ	0	0	0	1	2	9	0	1	3	1	3	1	1	7	0	0	0	0	0	0	0	29
11	サラサバテイラ	7	17	8	49	209	233	35	173	287	61	312	57	93	465	13	77	185	3	18	27	6	2335
12	リュウキュウアマガイ	1	13	2	2	4	23	2	4	17	0	80	2	3	9	2	5	12	1	0	1	0	183
13	アマオブネ	0	3	3	6	7	8	0	4	15	6	13	3	10	21	0	61	3	2	0	0	0	165
14	＊カノコガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
16	オニノツノガイ	0	2	3	4	10	15	2	18	22	5	32	1	14	56	0	4	19	0	0	3	1	211
17	クワノミカニモリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
18	イボウミニナ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
19	マガキガイ	5	83	70	57	449	625	20	209	296	58	513	131	92	541	39	75	161	8	3	12	6	3453
20	スイショウガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
21	アツソデガイ	0	0	0	1	1	4	0	0	3	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	13
22	クモガイ	0	0	1	1	10	9	0	12	6	1	18	4	4	21	2	4	8	0	3	1	0	105
23	スイジガイ	0	0	0	1	3	1	1	4	5	0	7	2	1	7	0	1	5	0	0	0	0	38
24	＊ヘビガイ類	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4

貝種	出土地	A -1	A -2	A -3	B -1	B -2	B -3	C -1	C -2	C -3	D -1	D -2	D -3	E -1	E -2	E -3	F -1	F -2	F -3	G -1	G -2	G -3	計
25	キイロイガレイシ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
26	ハナビラダカラ	0	2	12	1	9	19	2	10	14	3	29	16	1	4	8	2	4	1	5	1	0	143
27	コモンダカラ	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
28	ハナマルユキ	1	9	10	6	38	22	6	20	46	14	116	14	11	48	6	23	13	1	0	7	0	411
29	ハチジョウダカラ	0	1	2	4	1	9	3	11	9	2	13	0	2	19	1	9	6	0	0	3	0	95
30	ヤクシマダカラ	1	3	4	5	38	34	2	9	39	7	58	10	20	70	8	15	21	1	0	2	0	347
31	ホシダカラ	0	1	1	1	1	7	3	2	3	5	11	1	6	17	0	1	13	2	1	0	0	76
32	シオボラ	0	0	3	6	4	6	2	6	6	4	9	1	2	12	3	3	7	0	0	0	0	74
33	ホラガイ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	4
34	オキニシ	1	6	2	9	18	27	2	16	21	6	52	13	9	48	2	12	19	2	1	3	0	269
35	ツノテツレイシ	0	4	0	4	26	12	0	22	21	3	57	15	16	39	4	6	9	0	2	1	2	243
36	ツノレイシ	0	2	2	4	23	8	2	16	2	1	9	6	17	18	2	3	11	1	1	3	1	132
37	レイシダマシ	0	0	1	1	0	1	0	1	1	0	6	0	0	2	0	1	0	0	0	1	0	15
38	アカイガレイシ	1	0	0	5	17	22	3	15	15	1	34	4	7	56	2	6	26	0	1	5	1	221
39	オニコブシ	3	0	1	0	6	7	2	9	9	1	18	3	10	7	1	0	5	0	0	1	0	83
40	コオニコブシ	0	7	9	6	45	46	13	54	58	7	85	19	16	128	9	27	36	2	2	7	0	576
41	イトマキボラ	0	1	0	2	10	16	2	12	13	5	28	2	11	22	1	6	9	0	0	0	1	141
42	チトセボラ	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	3	1	1	2	0	1	0	0	0	0	0	12
43	マダライモ	0	0	0	0	2	2	0	2	4	0	2	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	17
44	イボシマイモ	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
45	カバミナシ	0	2	1	3	9	2	1	9	6	0	22	7	11	31	1	5	8	0	0	2	1	121
46	ミカドミナシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
47	アカシマミナシ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
48	クロザメモドキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
49	アンボンクロザメ	0	0	0	2	2	4	1	3	0	1	5	1	1	1	0	1	3	0	0	0	0	25
50	クロフモドキ	0	1	1	0	3	6	0	7	3	0	7	3	0	7	1	2	4	0	1	0	2	48
51	＊カイコガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	4
52	リュウキュウツノマタ	0	0	1	0	2	1	1	0	3	0	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	12
53	アラレイモ	0	1	4	1	11	14	1	12	15	1	48	11	0	12	4	2	8	0	0	1	1	147
54	ウラウズガイ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
55	カサウラウズ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
56	キセルガイ	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	5
57	キナレイシ	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5
58	クチベニレイシダマシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
59	クチムラサキダカラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
60	クロミナシ	0	0	1	0	1	4	0	0	2	0	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	12
61	コシダカガンガラ	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
62	コシダカギンタカハマ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	5

貝種 ＼ 出土地		A -1	A -2	A -3	B -1	B -2	B -3	C -1	C -2	C -3	D -1	D -2	D -3	E -1	E -2	E -3	F -1	F -2	F -3	G -1	G -2	G -3	計
66	シロクチキナレイシ	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
67	シロナルトボラ	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	6
68	ジュセイラ	0	1	0	0	7	6	0	3	3	5	24	5	5	29	2	6	7	0	0	3	1	107
69	センジュガイ	0	0	0	0	0	1	0	2	2	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	8
70	ソメワケグリ	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	5	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	10
71	コタカラガイ	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
72	ツヤイモ	0	3	0	0	1	0	0	5	2	1	13	0	0	6	0	3	3	0	0	0	1	38
73	テツボラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
74	ナガサラサミナシ	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
75	ニシキノキバフデ	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	6
76	ベッコウガサ	0	1	0	1	4	7	1	2	2	1	9	0	1	7	0	1	1	0	0	0	0	38
77	ホソコオロギ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
78	ホソスジテツボラ	0	0	0	0	2	4	0	0	2	0	5	1	2	2	1	0	1	0	0	0	0	20
79	マアナゴ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5
80	マクラガイ	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	5
81	マツバガイ	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6
82	ムカシタモト	0	0	2	0	2	4	0	0	4	1	10	1	2	2	0	1	0	1	0	4	0	34
83	ムラサキイガレイシ	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
84	ムラサキウズ	1	1	2	0	14	27	1	22	18	1	16	7	12	32	2	2	11	0	0	0	1	170
85	ムラサキレイシガシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
86	ユキゲイモ	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	0	7
87	イボダカラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
88	ウズイチモンジ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4
89	ウズガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
90	カスリイシガキモドキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
91	カスリミヤシロ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
92	カノコダカラ	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	5
93	カモガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
94	キイロダカラ	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	7
95	キバアマガイ	0	1	0	0	4	0	1	1	1	0	4	1	1	1	2	1	1	1	0	0	0	20
96	シボリダカラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
97	シロイガレイシ	0	2	1	0	22	21	3	16	22	1	45	17	11	46	6	13	22	0	0	1	1	250
98	タルダカラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
99	フジツボ	0	0	2	4	2	7	2	9	20	1	16	1	8	23	4	7	4	0	0	1	0	111
100	マルニシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
101	ヨコワカニモリ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	6
102	レイシダマシ	0	2	1	1	3	3	1	2	6	0	3	1	2	4	0	2	4	0	0	0	0	35
103	ハナワイモ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	二枚貝綱																						
	エガイ	0	4	0	0	5	10	0	2	7	0	4	3	0	6	0	0	0	0	0	1	0	42
104	リュウキュウサルボオ	0	0	0	0	3	0	0	2	1	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	10
105	リュウキュウヒバリ	0	25	2	0	21	27	0	18	25	0	47	8	0	30	5	0	9	1	0	1	0	219

貝種＼出土地		A -1	A -2	A -3	B -1	B -2	B -3	C -1	C -2	C -3	D -1	D -2	D -3	E -1	E -2	E -3	F -1	F -2	F -3	G -1	G -2	G -3	計
106	スキゲヒバリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
107	クロチョウガイ	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
108	アコヤガイ？	0	205	17	0	222	387	0	247	272	0	900	167	0	263	38	0	63	13	0	8	3	2805
109	シュモクアオリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0	30
110	ハボウキ	0	0	0	1	0	0	5	0	0	4	0	0	8	0	0	12	0	0	0	0	0	30
111	リュウキュウナデシコ	1	0	0	23	0	0	13	0	0	30	0	0	29	0	0	377	0	0	1	0	0	474
112	メンガイ類	0	1	0	0	5	7	0	3	2	0	15	1	0	7	1	0	3	0	0	1	0	46
113	シャコガキ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
114	ニセマガキ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	1	0	0	5
115	クロフトマヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
116	キクザル類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
117	カワラガイ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
118	＊オキナワヒシガイ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
119	シラナミ類	0	90	39	0	464	759	0	469	698	0	1006	104	0	1081	34	0	627	11	0	125	27	5534
120	ヒレジャコ	0	0	0	0	4	4	0	7	16	0	14	1	0	19	0	0	9	0	0	2	2	78
121	ヒレナシジャコ？	1	0	0	11	0	0	1	0	0	7	0	0	9	0	0	14	0	0	4	0	0	47
122	ヒメジャコ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
123	シャゴウ	0	5	2	0	18	23	0	15	16	0	37	1	0	41	4	0	24	1	0	4	0	191
124	リュウキュウバカガイ	12	0	0	128	0	0	97	0	0	95	0	0	201	0	0	291	0	0	81	0	0	905
125	タママキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	4	0	0	0	0	0	6
126	イソハマグリ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
127	リュウキュウマスオ	0	0	0	0	0	2	0	4	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
128	シレナシジミ	0	0	0	0	1	1	0	1	3	0	8	0	0	8	2	0	1	0	0	2	0	27
129	ヌノメガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
130	ホソスジイナミ	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
131	アラスジケマン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
132	ヒメイナミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	3
133	ユウカゲハマグリ	0	0	0	1	0	0	2	0	0	3	0	0	6	0	0	7	0	0	4	0	0	23
134	ヒメリュウキュウアサリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
135	トウドウマリハマグリ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	1	0	0	3	0	0	2	0	0	10
136	アラヌノメ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	5
137	イナズマスダレ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	4
138	ウミギク	0	0	0	0	1	4	1	5	3	3	7	2	3	5	0	3	2	0	0	0	0	39
139	オオヌノメ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
140	シロチョウガイ	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	9
141	チョウセンハマグリ	0	3	0	2	1	6	0	1	0	2	11	2	0	8	1	4	5	0	0	3	0	49
142	ユキノカサ	0	1	0	0	1	4	0	7	4	2	6	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	27
陸産貝																							
	腹足綱																						
143	オキナワヤマタニシ	2	3	2	7	21	30	4	21	27	12	79	40	5	30	13	43	45	7	11	15	1	418

貝種 ＼ 出土地		A -1	A -2	A -3	B -1	B -2	B -3	C -1	C -2	C -3	D -1	D -2	D -3	E -1	E -2	E -3	F -1	F -2	F -3	G -1	G -2	G -3	計
144	シュリマイマイ	0	2	0	0	0	2	0	0	1	0	4	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	13
145	パンダナマイマイ	1	4	1	1	5	14	1	8	7	1	12	6	2	9	1	0	5	4	7	4	0	93
146	オキナワウスカワマイマイ	0	0	0	0	1	2	0	1	0	1	1	2	0	1	0	2	0	0	0	0	0	11
147	イトマンケマイマイ	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	5	1	0	0	1	0	11
		51	577	256	397	1927	2860	259	1693	2301	407	4280	761	714	3685	253	1212	1555	72	155	295	61	23771

魚骨類

魚骨類に関しては第Ⅳ層中より得られ、フローテーション分析により微小骨などが得られた。

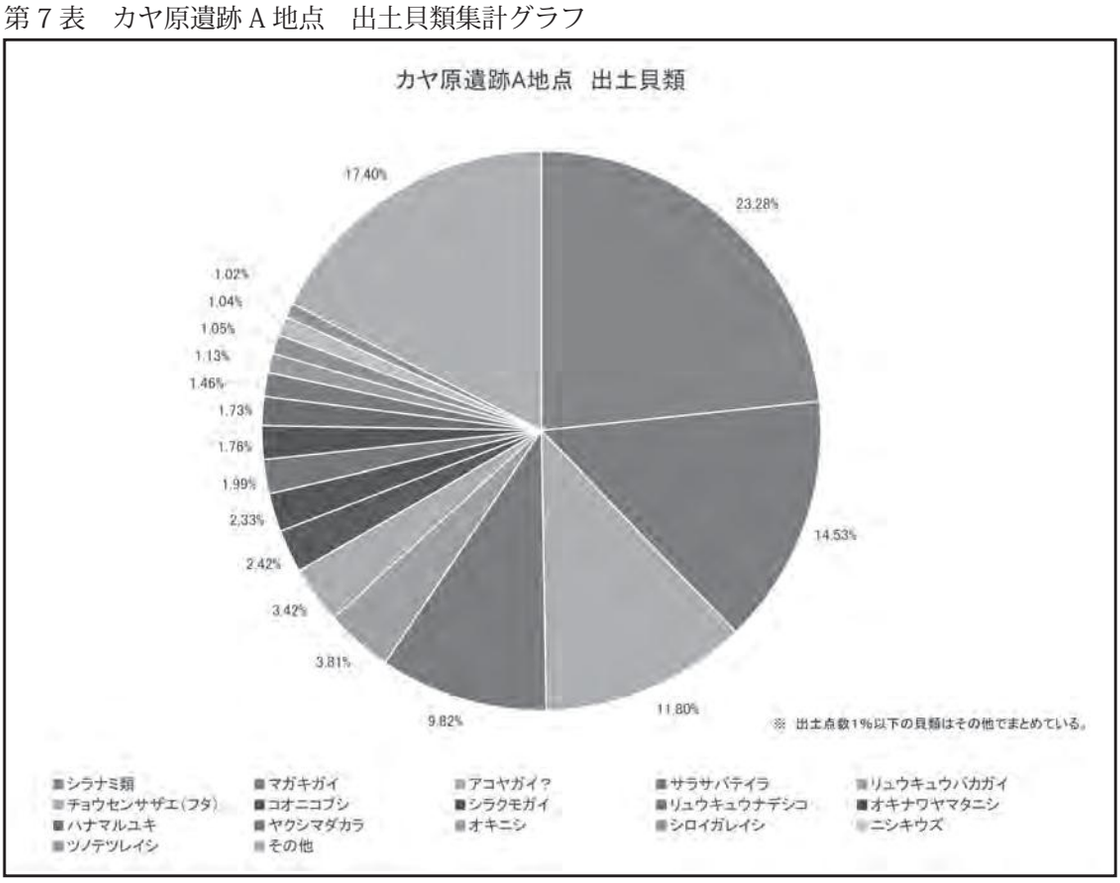
獣骨類

調査時に得られた獣骨類として、貝塚１よりイノシシ骨の四肢骨と思われる破片資料が得られた。その他、微小骨がフローテーション分析により得られている。

甲殻類

甲殻類に関しては発掘調査中、カニ類と思われる資料が２点採取され、サンプル土のフローテーションでは、甲殻類の微細資料が得られた。

第７表　カヤ原遺跡Ａ地点　出土貝類集計グラフ



小結

以上、カヤ原遺跡 A 地点の遺構、出土遺物について概略した。カヤ原遺跡 A 地点では、1 枚の遺物包含層が確認され、出土遺物の内容からアカジャンガー式期のものと判断した。遺構としては、貝塚が２基、18 基の貝溜りが検出された。遺構内から出土した貝種は主にサラサバティ、マガキガイ、ミドリアオイ、シラナミなどとなっている。貝溜りは調査区外西側及び南側への広がりを見せており、調査区の西側及び南側を掘削する際には貝溜りの有無及びその広がりについて留意する必要がある。

出土遺物は土器、石器、貝製品、自然遺物などがあり、土器は有文、無文の資料が見られた。器種はほとんど甕形となっている。土器の底部形態はほとんどがくびれ平底となっている。石器は磨製石斧、クガニイシなどが出土した。貝製品は貝皿、貝錘、貝符などが出土した。自然遺物に関しては、貝類が多数となっている。獣魚骨類は少数であり、調査時は数点のみ確認したが、フローテーションを行い、微小な獣魚骨類を得ることが出来た。本遺跡における出土貝類はシラナミ、マガキガイ、サラサバティなどが出土している。出土炭化物からの年代測定では、補正年代で 1,630 ± 30 ～ 1,280 ± 30 という測定値が得られた。

本遺跡は 1997 年から 1998 年に行われた範囲確認調査では、縄文時代前期（貝塚時代前期）の遺跡とされたが、今回の調査では縄文時代前期の遺物を確認することは出来なかった。また、調査時に攪乱層からカムィヤキが出土している。今後、調査地近隣において今回の調査で発見されたアカジャンガー式期層の広がりの確認、グスク時代層の有無の確認の他、分布調査時に遺物が得られた縄文後期層及びグスク時代層の確認が必要となる。

第２節　ナガラ原東貝塚

ナガラ原東貝塚は、標高４～6m の海岸砂丘地に立地している貝塚である。調査地に隣接する箇所は、過去に熊本大学文学部考古学研究室が調査をおこなっており、今回の調査箇所は過去に熊本大学文学部考古学研究室が調査を行った箇所から南に約 50m 離れた箇所に位置となっている。調査予定面積は 1005.992㎡である。

層序

本調査区の層序は著しい攪乱を受けており、遺物包含層を確認することが出来なかった。聞き取り調査を行ったところ、過去に調査区付近において採砂が行われたという聞き取りが得られ、採砂による攪乱の可能性がある。

遺物

本調査区は先述したとおり、著しい攪乱を受けていた。そのため、遺物も保存状況が悪く、点数も少数であった。出土遺物としては、土器、石器、貝製品、自然遺物、現代遺物が挙げられる。

土器

本遺跡からは数点の土器片が出土している。完形を窺うことができる資料は確認することができなかった。

石器

石器は磨製石斧の１点が表採された。

自然遺物

ナガラ原東貝塚の自然遺物は貝類、獣魚骨類が出土している。

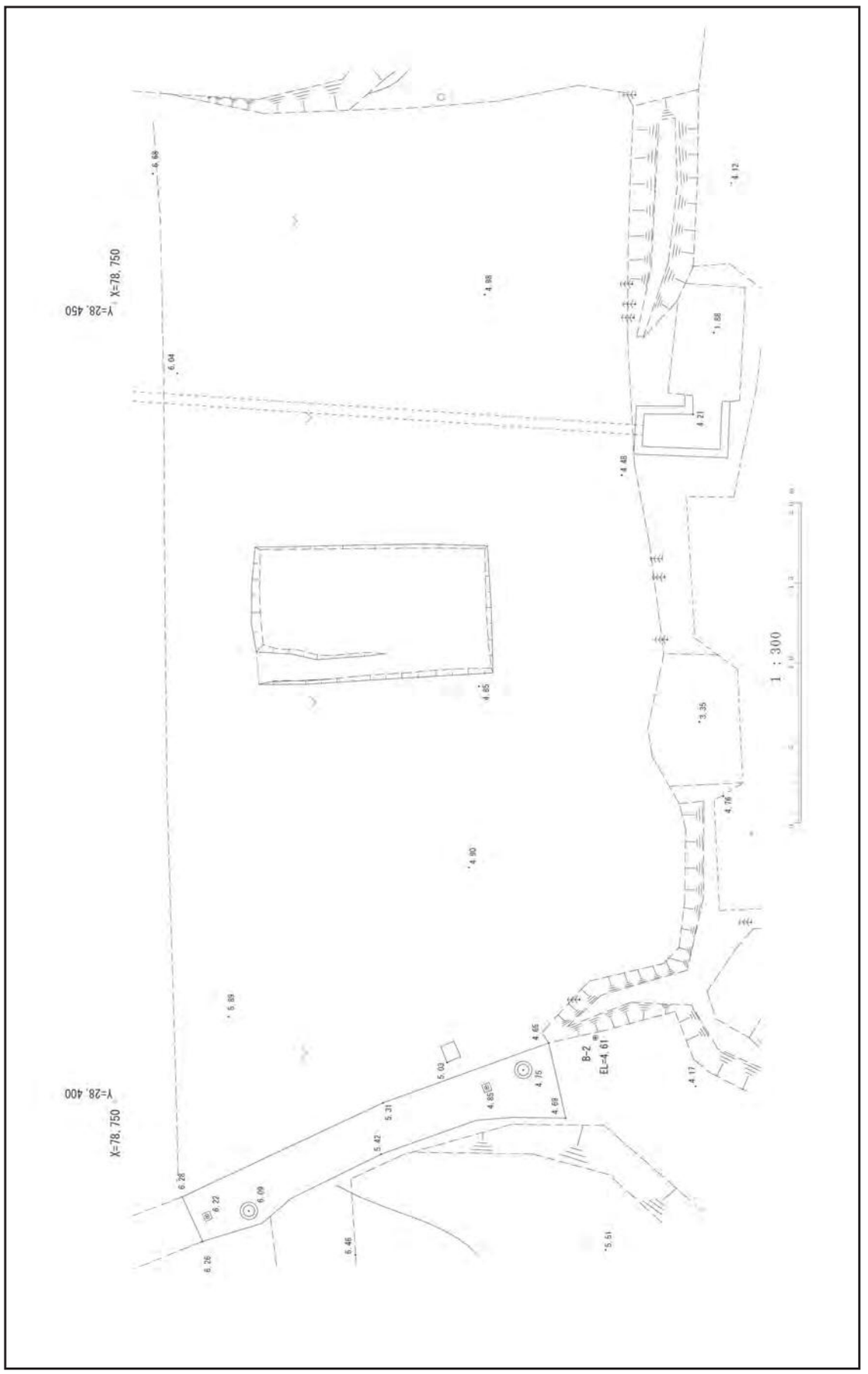
貝類

本調査区における貝類は、海産貝がシラナミ類、マガキガイ、アコヤガイ、サラサバティなど、陸産貝がオキナワヤマタニシ、パンダナマイマイなどとなっている。

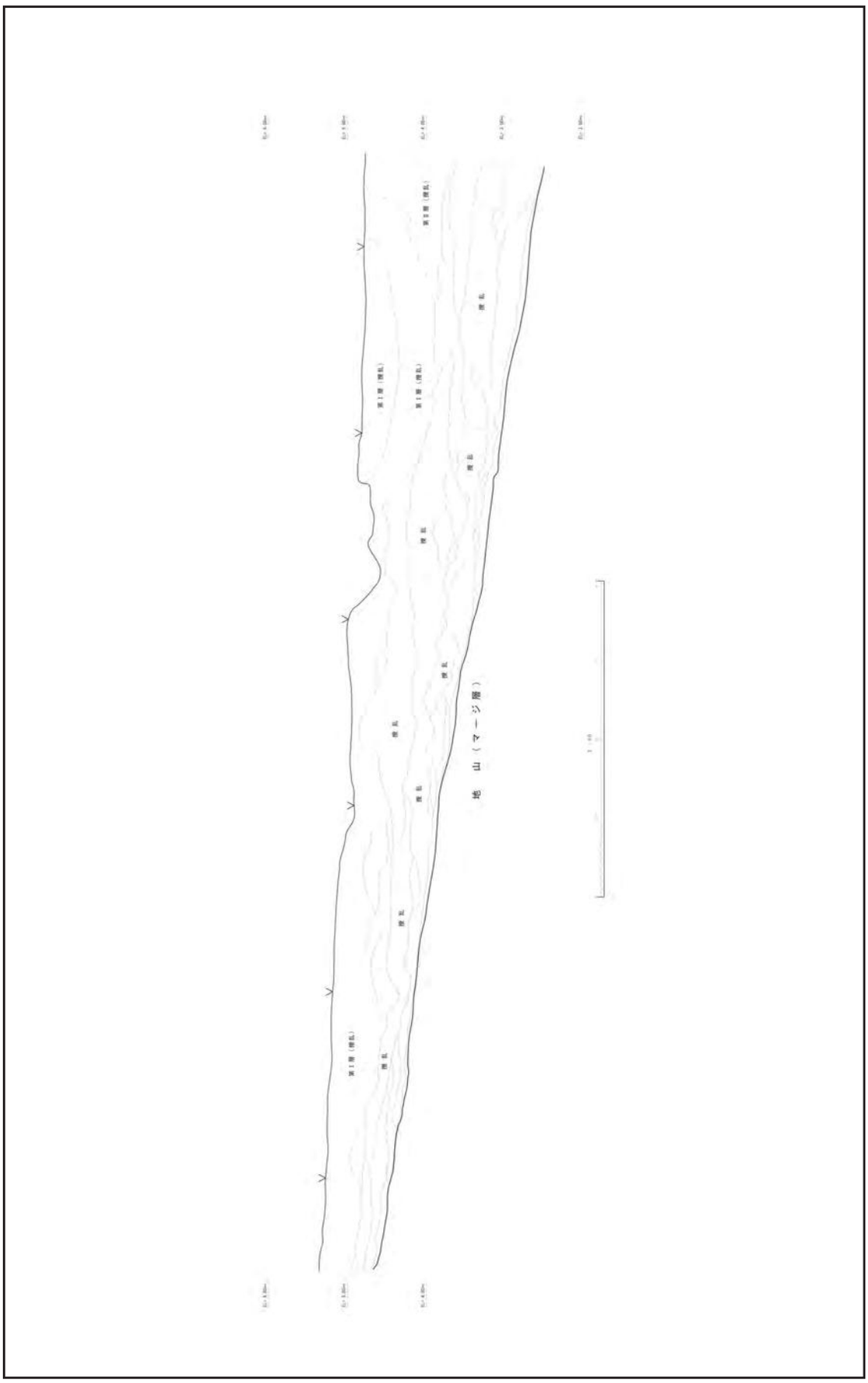
小結

ナガラ原東貝塚における今回の調査区は、著しい攪乱を受けたことが確認された。聞き取り調査から調査区付近で採砂が行われた情報が得られ、攪乱は採砂によるものの可能性がある。但し、地山直上で土器片が出土したことから、かつて遺物包含層が存在したことが考えられる。出土遺物はわずかであった。

今後、ナガラ原東貝塚の範囲確認調査を行い、包含層の残存範囲の把握が必要となる。



第 24 図　ナガラ原東貝塚　調査区配置図



第 25 図　ナガラ原東貝塚　層序図

第３節　ナガラ原第三貝塚

ナガラ原第三貝塚はナガラ原東貝塚の調査区から西方に約300m離れた箇所に位置している。平成９（1997）年～平成10（1998）年に行われた遺跡詳細分布調査では沖縄編年後Ⅲ期（弥生～古墳時代並行期､貝塚時代後期）の遺跡となっている（岸本編　1999)。本調査においては、弥生並行期層（第Ⅲ層、第Ⅳ層）と縄文後期層（第Ⅵ層）が確認され、多数の遺構、遺物が発見された。調査面積は566.658㎡となっている。

3-3-1　層序

本遺跡からは大別して８層の土層が確認され、その内３枚の遺物包含層が確認された。遺物包含層は第Ⅲ層、第Ⅳ層及び第Ⅵ層となっており、第Ⅵ層直上において縄文晩期の埋葬遺構が検出された。今回の調査において確認することは出来なかったが、Ⅵ層の上層に縄文晩期層が存在していた可能性がある。

本調査区における弥生時代相当期層（第Ⅲ層、第Ⅳ層）はは堆積が見られた。第Ⅳ層の分布域は調査区内北西側に限定され、その東側及び南側では耕作等による攪乱のため、層序を確認することは出来なかった。

第Ⅴ層は自然堆積による白砂層で、層中からはシャコガイ等の自然貝が含まれていた。

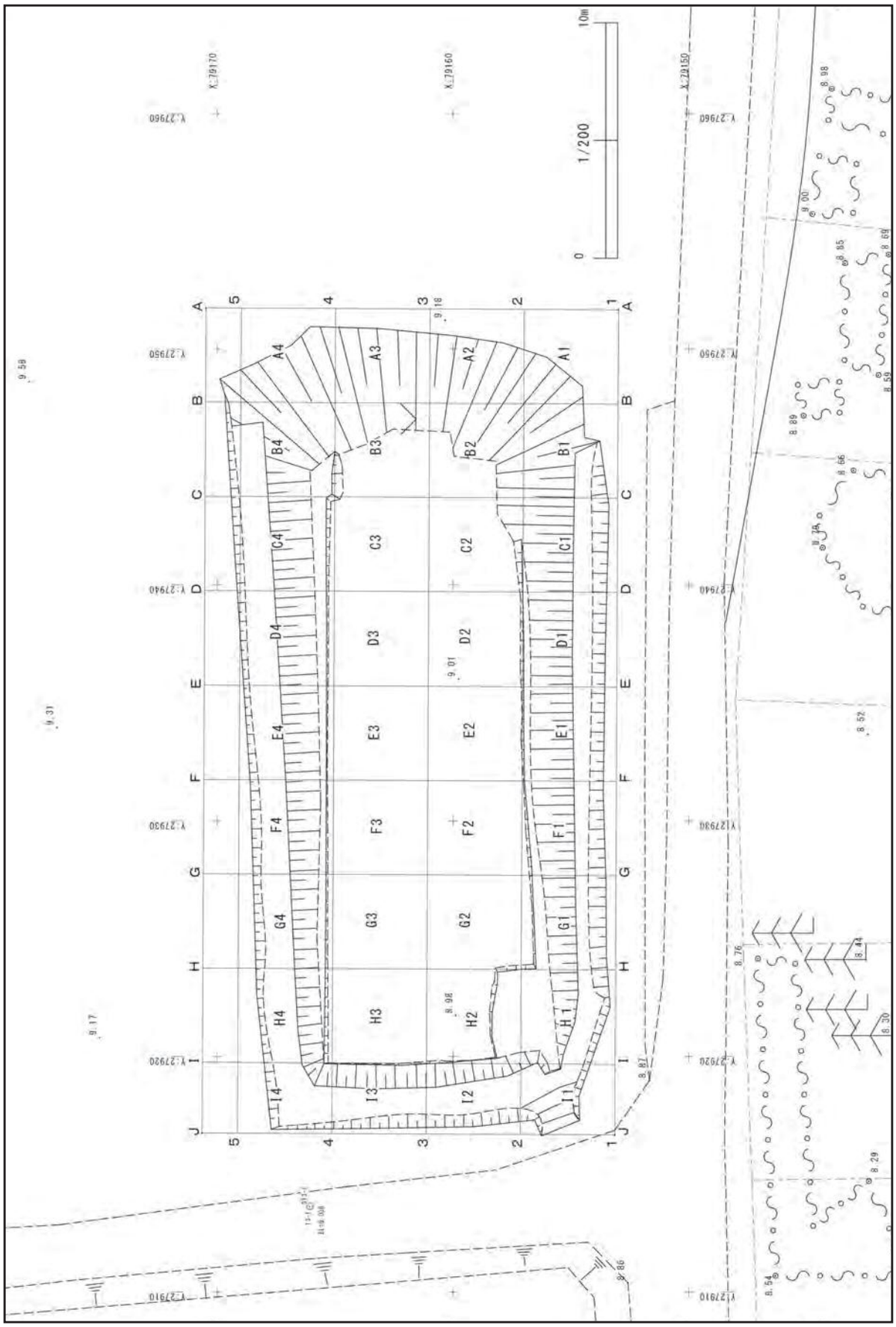
第Ⅵ層は更に９層に細分することができた。基本的に調査区西側から東側にかけて傾斜して堆積している。調査区西側、南側壁面においては遺構に由来する層も見られた。

本調査区における層序は以下の通りとなっている。

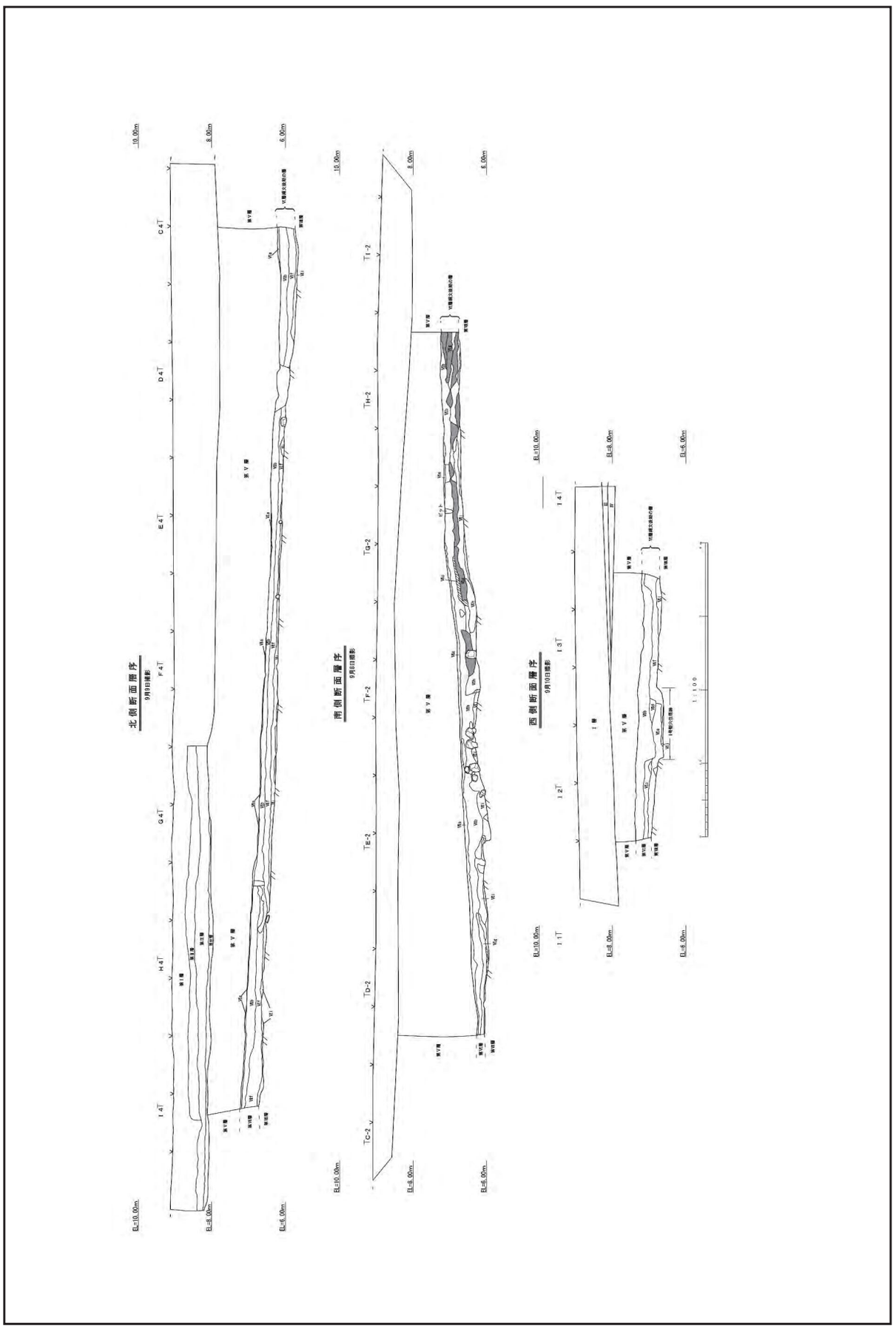
第Ⅰ層：表土層。耕作土であり、砂の混入が見られる。土色は淡褐色を呈する。
第Ⅱ層：攪乱層。土色は暗褐色を呈する。
第Ⅲ層：弥生時代相当期層。混土砂層で、灰褐色を呈する。
第Ⅳ層：弥生時代相当期層。茶褐色砂層。
第Ⅴ層:白砂層。間層であり、人工遺物は見られず、シャコガイなどの自然貝等が見られた（上層からの遺物の流れ込みなどは見られた)。
第Ⅵ層：縄文時代後期層。今回の調査では更に10層の細分を行った。
　Ⅵａ：黄褐色砂層
　Ⅵｂ：淡黒色砂層
　Ⅵｃ：灰黒色砂層
　Ⅵｄ：淡黄色砂層
　Ⅵｅ：暗黒色砂層
　Ⅵｆ：暗灰色砂層
　Ⅵｇ：混貝黒褐色砂層
　Ⅵｈ：焼土混入灰黒色砂層
　Ⅵｉ：淡黒色砂層
　Ⅵｊ：暗黄色砂層
第Ⅶ層：黄褐色砂層
第Ⅷ層：島尻マージ層。地山層。

第８表　ナガラ原第三貝塚基本層序表

層序区分		層厚（cm）	主な遺構・遺物	時期
Ⅰ層		128.2 ～ 33.3	現代遺物	近現代
Ⅱ層		30 ～ 16.3	現代遺物	近現代
Ⅲ層		30.7 ～ 10.6	土器、石器、貝製品	沖縄編年後期
Ⅳ層		13.9 ～ 3.9	貝だまり、イモガイ集積遺構、土器、石器、貝製品	沖縄編年後期
Ⅴ層		216.1 ～ 81.6	自然貝（シャコガイ等）	-
Ⅵ層	a	59 ～ 13	土器、石器、貝製品、自然遺物	縄文時代後期
	b	51.2 ～ 8.1	土器、石器、貝製品、自然遺物	縄文時代中期
	c	17.2 ～ 9.8	土器、石器、貝製品、自然遺物	
	d	17.3	土器、石器、貝製品、自然遺物	
	e	27.1 ～ 5.1	土器、石器、貝製品、自然遺物	
	f	36.5	土器、石器、貝製品、自然遺物	
	g	38.8	土器、石器、貝製品、自然遺物	
	h	39.5	土器、石器、貝製品、自然遺物	
	i	29.4	土器、石器、貝製品、自然遺物	
	j	5.7	土器、石器、貝製品、自然遺物	
Ⅶ層		-	地山。マージ層。	-



第 26 図　ナガラ原第三貝塚　調査区配置図



第 27 図　ナガラ原第三貝塚層序図

3-3-2　遺構

本調査において、Ⅳ層（弥生相当期層）から貝溜り、イモガイ集積遺構、Ⅵ層（縄文時代後期層）直上より３基の埋葬遺構、Ⅵ層より竪穴住居跡２基、炉跡 17 基、大型焼成遺構１基が確認された。以下、各遺構の詳細について記載する。また、貝溜り以外の遺構からの出土遺物に関しては、本項にて報告する。

Ⅳ層の遺構

貝塚

Ⅳ層からは２基の貝塚を確認することができた。遺構法量が大きい為、カヤ原遺跡Ａ地点での例に従い、「貝塚」と呼称する。

貝塚は調査区の北西側Ｈ・Ｉ‐３・４区において２ブロック確認された。以下、遺構について概略する。

貝塚１（SM １）

貝塚１は、Ｈ－３、Ｉ－３区の範囲で見られた。カヤ原遺跡Ａ地点の貝塚、貝溜りと比較すると遺物の密度は低い印象を受ける。遺構内からは土器片、砥石、サラサバティ、シャゴウ、ヒレジャコ、ヤコウガイなど大型貝が見られた。

遺構法量は、長軸約 305.5cm、短軸約 212cm、深さ約 50cm を測る。

貝塚２（SM ２）

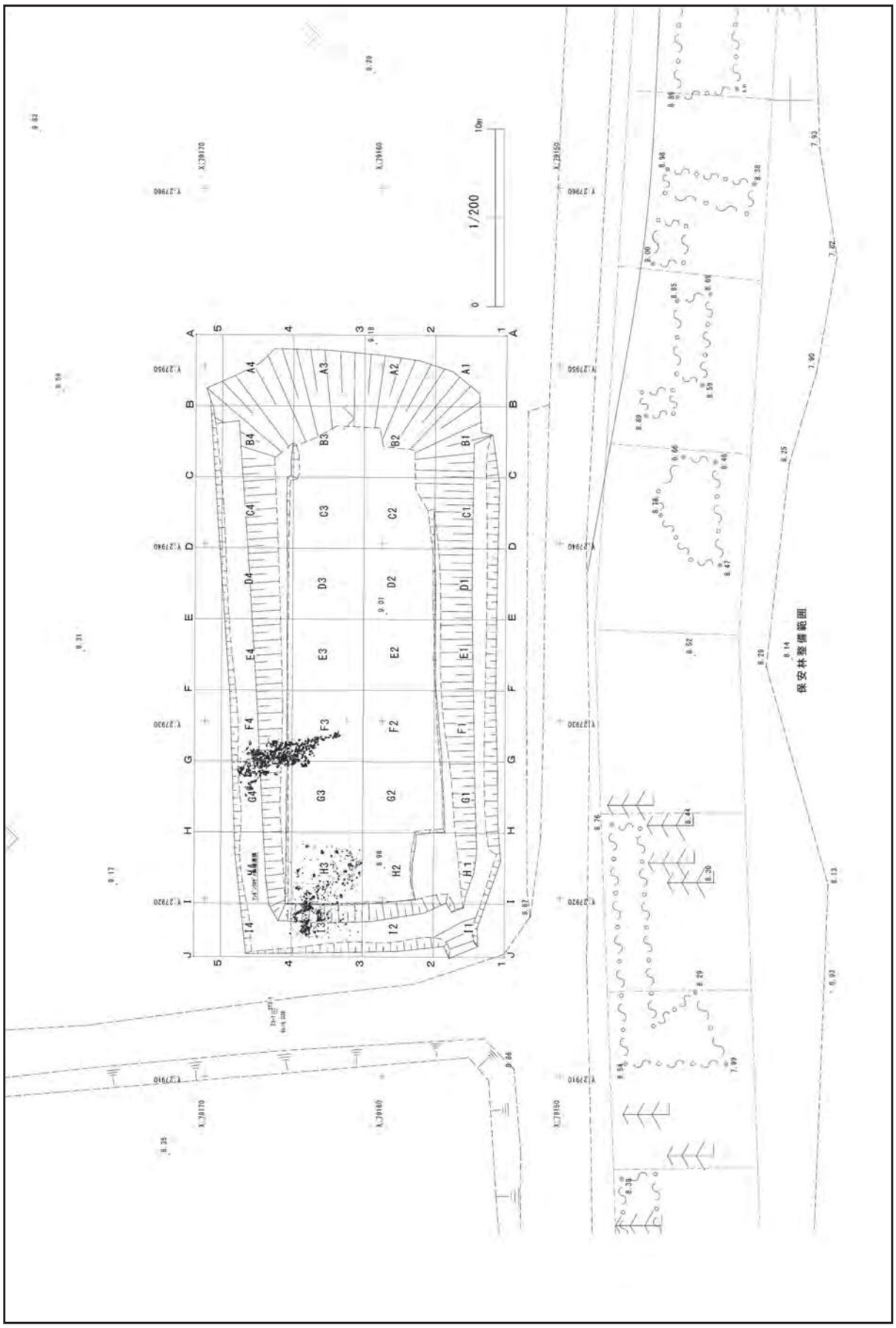
貝塚２は、Ｆ・Ｇ－３・４区で見られた。本遺構は南北方向に細く伸びる貝塚であり、調査区北壁まで続いていることから調査区外北側に延びる可能性がある。出土遺物は尖底土器片、平底土器片、ホラガイ製有孔製品、サラサバティ、シャゴウ、ヒレジャコ、ヤコウガイ、ホラガイなどが見られた。明確な廃棄ブロックに関しては確認することが出来なかった。

遺構法量は長軸 605.9cm、短軸 163.9cm、深さ約 30cm を測る。

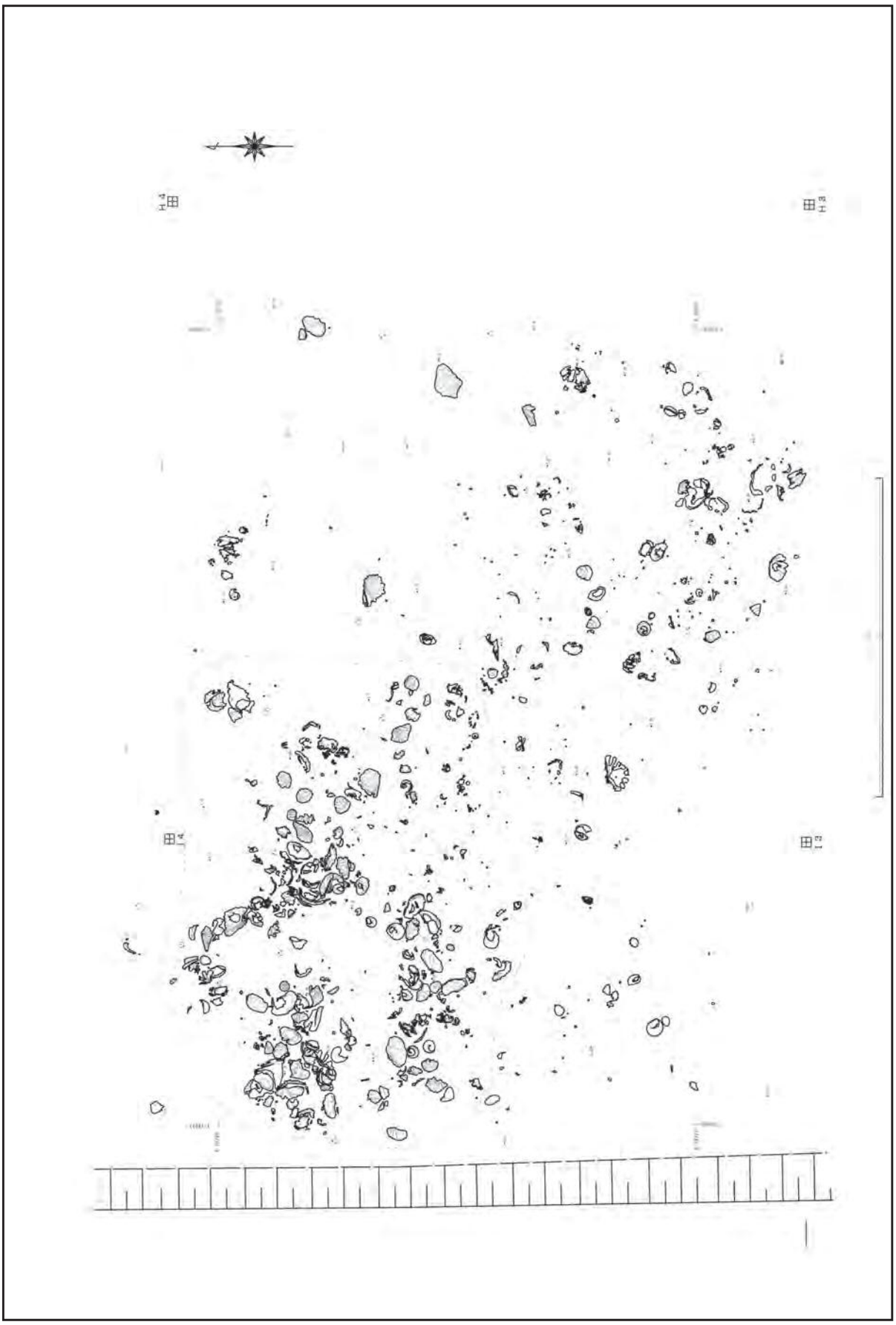
イモガイ集積遺構（SU1）

イモガイ集積遺構は、H-4 区第Ⅴ層を掘り下げる形で検出された。掘削時に貝の取り上げを行ってしまったため、記録図面及び図版に関しては復元後のものである。予めご了承願いたい。

本遺構は上面円形となっており、Ⅴ層を掘り込んで造られている。アンボンクロザメの殻頂部を円の外側に向けて、放射状に配置している。遺構の長径は 26.4cm、短径が 23.0cm を測る。隣接する遺跡では、詳細は報告されていないが、ナガラ原西貝塚において事例が報告されている。

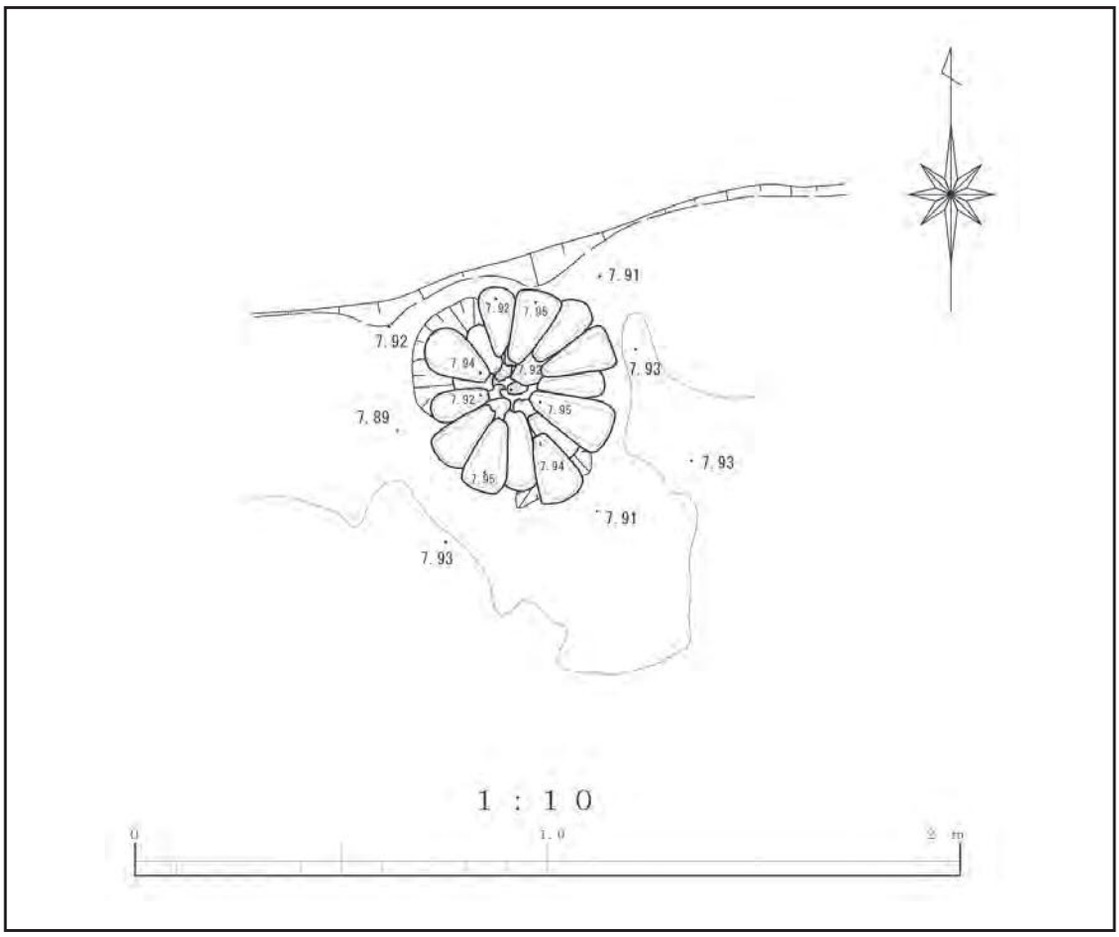


第 28 図　ナガラ原第三貝塚第Ⅳ層　遺構配置図



第 29 図　ナガラ原第三貝塚第Ⅳ層　貝塚 1　平面図・断面図

第 30 図　ナガラ原第三貝塚第Ⅳ層　貝塚 2　平面図・断面図



第 31 図　ナガラ原第三貝塚第Ⅳ層　イモガイ集積遺構平面図

今回検出されたイモガイ集積遺構は現地において保存された。

Ⅵ層直上の遺構

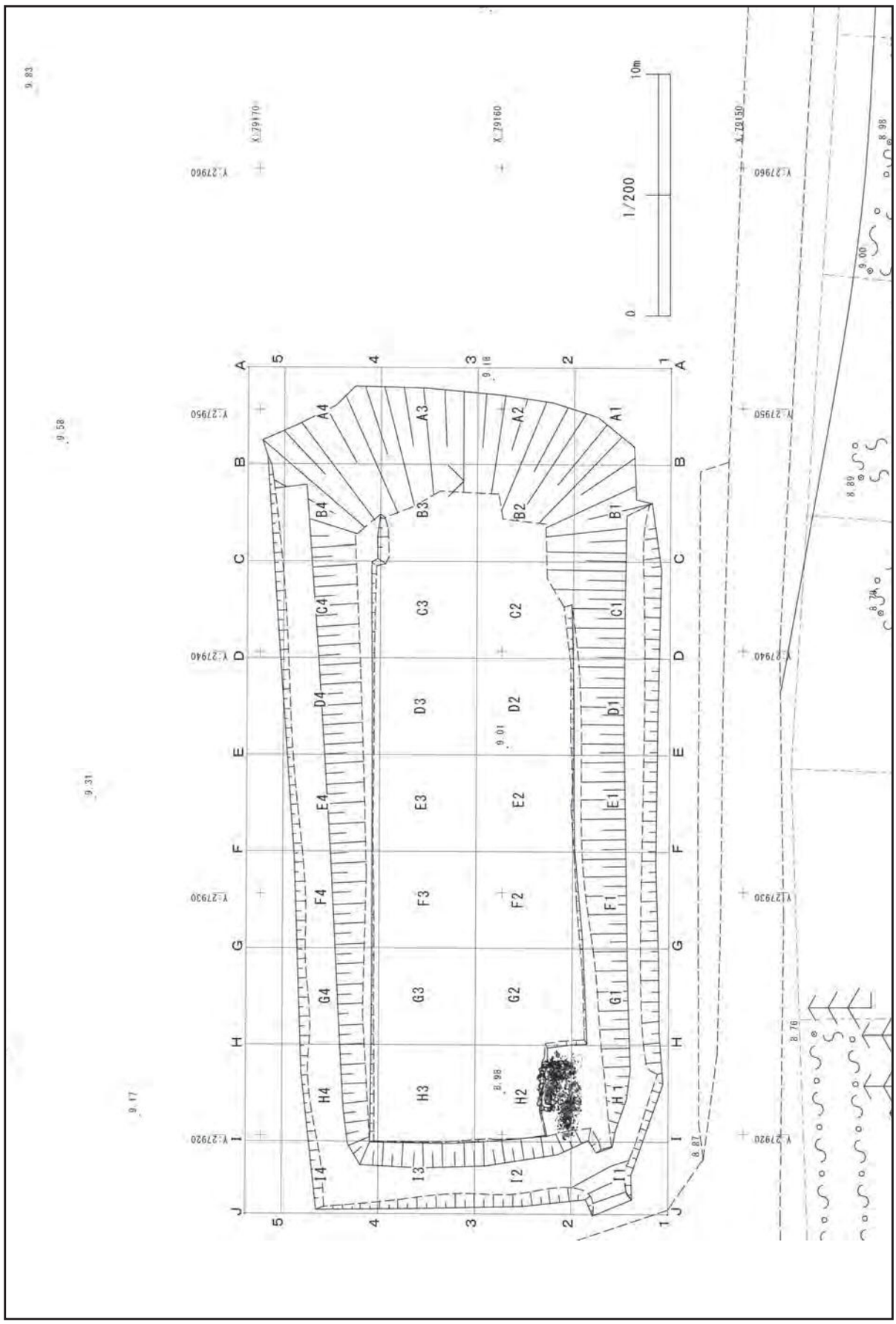
Ⅵ層検出時に調査区南西隅より人骨が検出され、その後調査を進めた結果、埋葬遺構 3 基が確認された。

埋葬遺構

埋葬遺構はⅥ層直上、H-1、H- 2 区にかけて検出された。当初は時期を示す遺物が見られなかったため、他遺跡での類例から縄文時代晩期（前Ⅴ期）～弥生並行期の遺構と判断したが、人骨からの年代測定を行った結果、埋葬遺構 1 の 2 体の人骨、埋葬遺構 3 の人骨共に約 2,500 年前の人骨との結果が得られた。埋葬遺構 2 の頭骨に関しては、年代測定を行っていないが、遺構の位置、切り合い関係等から、ほぼ同時期の遺構であると考えられる。

本項では遺構の詳細に関して報告を行う。遺構内出土人骨及び年代測定の詳細に関しては第 4 章 4 節 2 を参照、また遺構内のサンプル土をフローテーション作業により採取した遺物については、同章 4 節 1 を参照していただきたい。

なお、出土人骨に関しては取り上げを行い、本村教育委員会にて保管している。



第 32 図　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構配置図

埋葬遺構 1（ST 1）（第 33 図、第 34 図、第 35 図　図版 34、35）

埋葬遺構 1 はⅥ層検出時にⅥ層直上より検出された。遺構の形状を確認することが出来なかったが、土壙墓などを構築して埋葬した可能性を考慮し、便宜上遺構として報告する。

本遺構からは 2 体分の人骨が確認された。一見すると各部位がバラバラの状態であり、埋葬状況が判別し難いが、2 体とも一部の骨格部位（鎖骨、肩甲骨、上腕骨、脛骨）の配置がほとんど原位置を保っていたため、一次葬の可能性は否定できない。2 体の人骨はほぼ接するように重なった状態となっており、埋葬した時期はほぼ同時期であったと推測される。但し、この様な出土状況のために個体別に人骨を判別することは難しい状況であった。埋葬姿勢に関しては、骨の位置関係から 2 体とも伸展葬と思われる。又、2 体とも頭蓋骨は確認出来なかったことから、頭蓋骨を別の箇所に再葬した可能性がある。身体の向きから判断して 2 体とも頭位は東と考えられる。共伴遺物は少ないが、人骨に隣接して無文土器片などが得られた。

遺構の法量に関しては、遺構の形状を確認することが出来なかったため、法量不明である。

埋葬遺構 2（ST2）（第 36 図　図版 36）

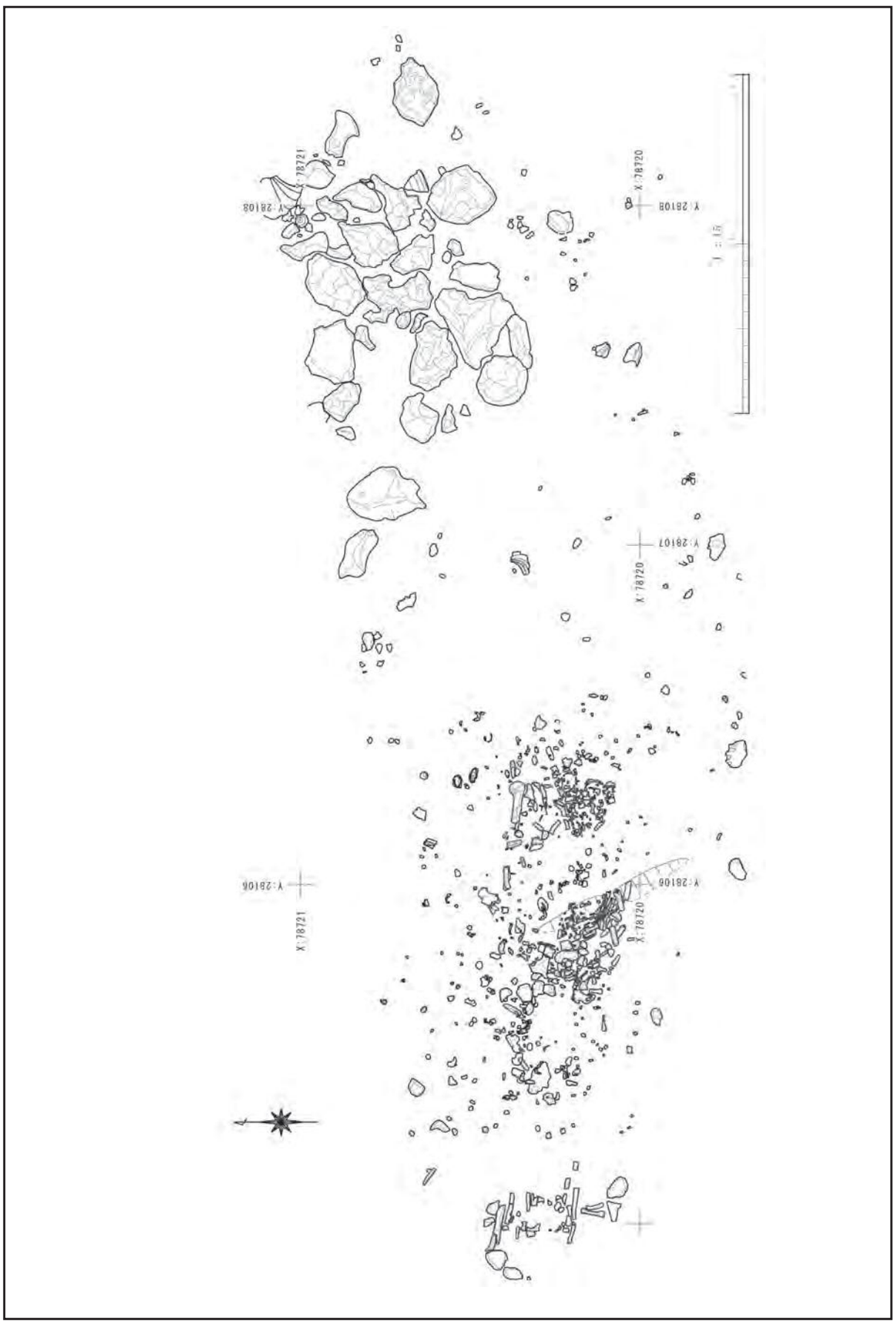
埋葬遺構 2 は頭骨及び頸椎の一部が納められた遺構で、Ⅵ層面を掘り込んで造られた遺構（土壙墓）である。平面形は略楕円形。本遺構に納められた頭骨は、埋葬遺構 1 の人骨の内、一体から改葬されたものの可能性がある。遺構内からはサメ歯状貝製品が得られた。本遺構の長軸は 78.5cm、短軸 59.7cm を測る。

遺構内出土遺物

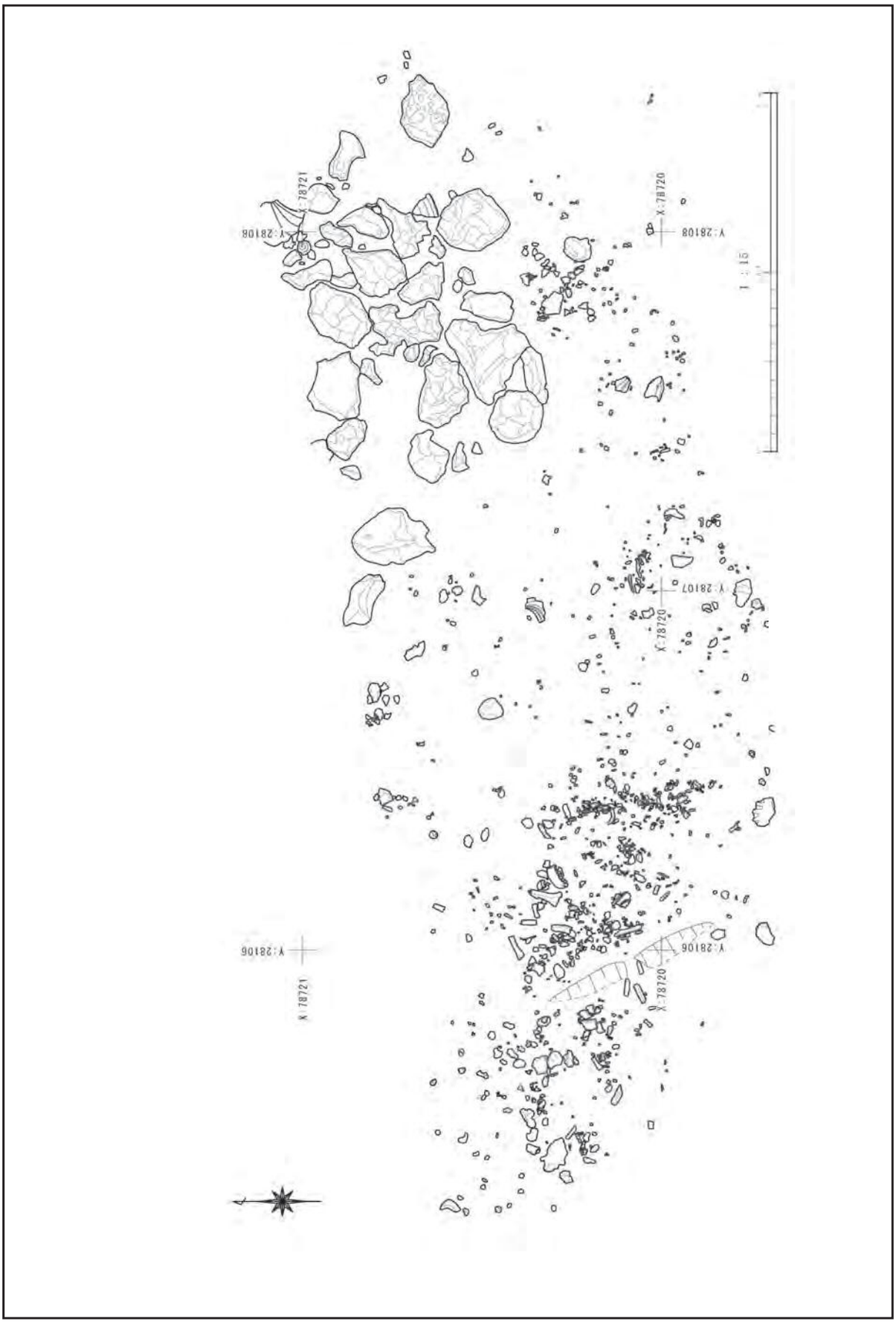
サメ歯状貝製品（第 37 図 2）

サメ歯状貝製品は埋葬遺構 2 内より出土した。頭骨の南側に隣接して出土しており、副葬品である可能性もあるが、土壙がⅥ層を掘り下げて形成されていることから、Ⅵ層に由来する遺物である可能性も否定できない。

本製品は、イタチザメの歯を模して作られており、縁辺部にはサメ歯の鋸歯を模した刻みが施されている。

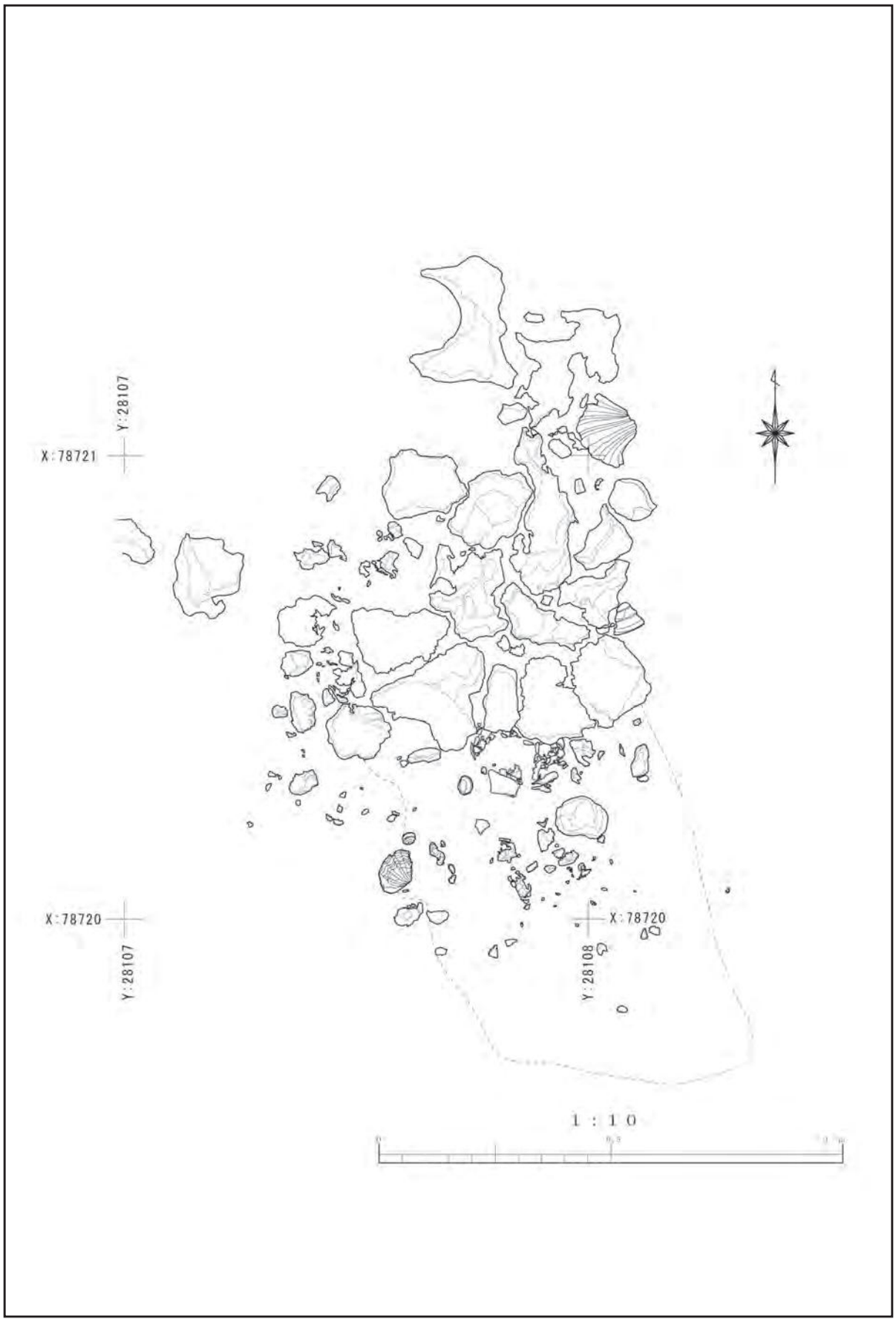


第 33 図　埋葬遺構 1（上部）　人骨出土状況平面図



第 34 図　埋葬遺構 1（下部）　人骨検出状況平面図

第 35 図　埋葬遺構 1（上部・下部）　人骨出土状況平面図



第 36 図　埋葬遺構 2　平面図

埋葬遺構３（ST3）（第 37 図　図版 37）

埋葬遺構３は、石棺墓となっており、石灰岩やサンゴ礫などを用いて造られている。遺構床面は北から南にかけてわずかな傾斜が見られ、遺構内人骨も遺構の中心軸よりやや南側に安置されていた。遺構内からは左手首にゴホウラ製貝輪を着装した状態の人骨１体が確認された。遺構北側の石積みには一部石積みがなされていない箇所が見られた。遺構全体を覆う蓋石は見られなかったが、板状の礫によって遺構の一部（遺構南東角の一部）が覆われていた状況が見られた。遺構はⅥ-b 層を掘り込んで造られており、遺構の下部には後述するⅥ層の炉跡１が断面より確認されている。

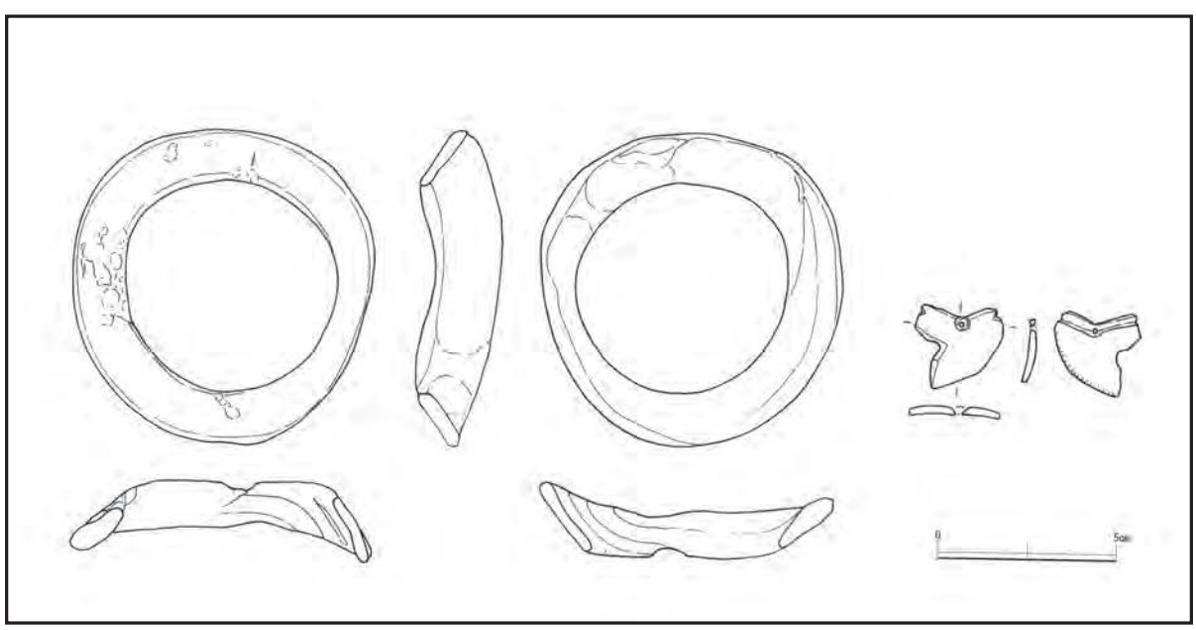
埋葬人骨は、１体のみが葬られていた。仰臥伸展葬で葬られており、頭蓋骨の後頭部に礫が配置され、頭部が起きている状態であった。頭位は西となっている。遺構内の遺物は人骨に着装された貝輪の他、自然貝、頭蓋骨を起こしていた礫程度であった。本遺構の法量は、長軸 190.7cm、短軸 80.1cm、深さ 25.9cm を測る。

遺構内出土遺物

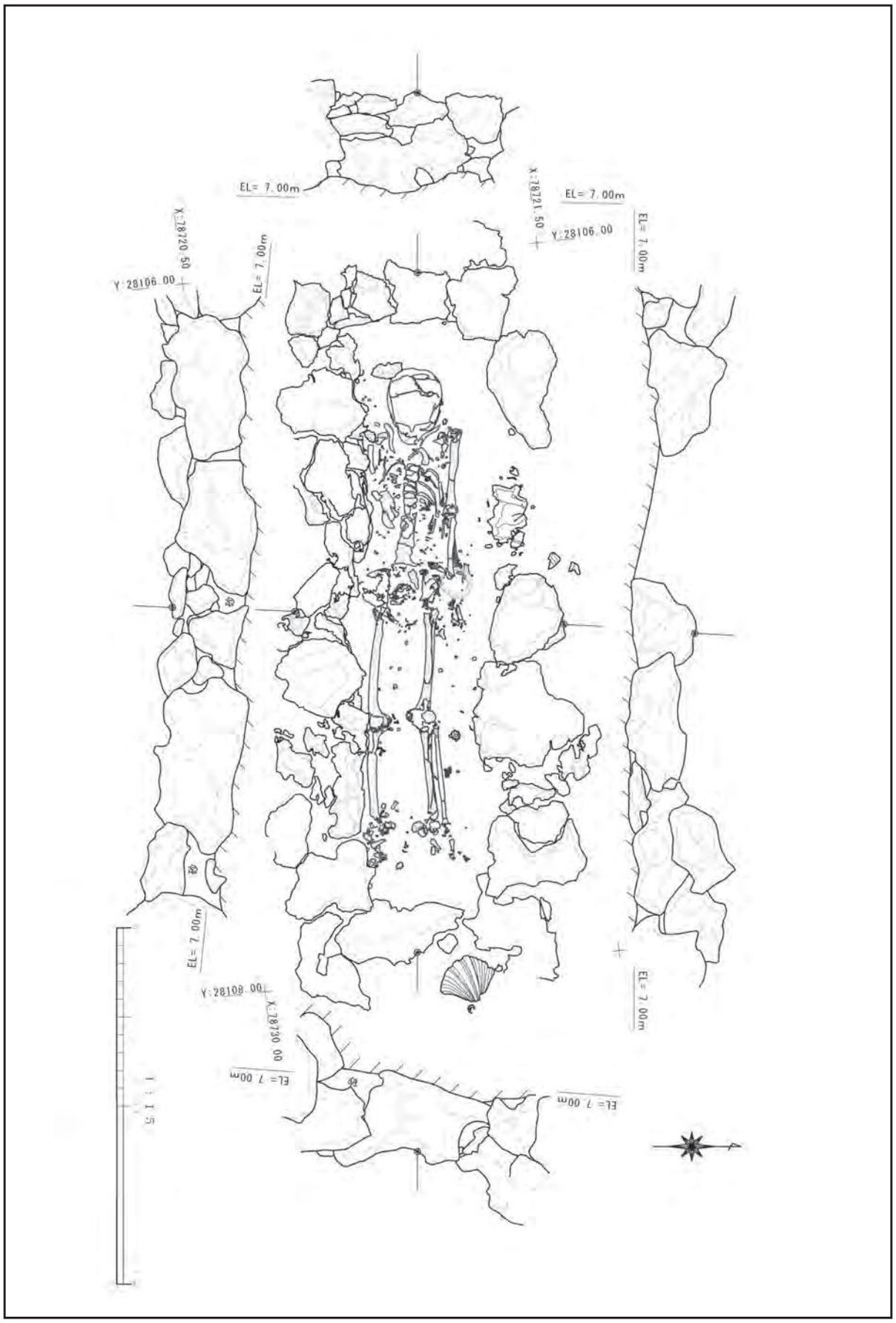
ゴホウラ製貝輪

第 37 図１のゴホウラ製貝輪は先に記載した通り、人骨の左手首に着装した状態で検出された。人骨取り上げ時にゴホウラの背面を利用して製作したと思われる。

長軸 8.9cm、短軸 8.6cm、内径 6.0 ～ 6.0cm、重量 45g を測る。



第 37 図　埋葬遺構２・３　出土遺物



第 37 図　埋葬遺構 3　平面図・側面図

Ⅵ層の遺構

Ⅵ層の遺構として、竪穴住居跡が 2 基、炉跡が 17 基、大型焼成遺構が 1 基検出された。以下、遺構の概略を述べる。なお、竪穴住居跡の床面から炉跡が検出されたが、この炉跡に関しては、竪穴住居跡に伴う遺構であるため、炉跡の検出数には含めていない。遺構サンプル土のフローテーション分析の結果に関しては第 4 章 1、年代測定を行った遺構の年代値に関しては、第 4 章 3 にて詳細の記載を行う。

竪穴住居址

竪穴住居祉と思われる遺構は 2 基確認され、いずれもⅦ層を掘り込む形で検出された。以下、2 基の遺構について概略する。

竪穴住居址 1（SI 1）

竪穴住居址 1 は、I-2、I-3 区の西壁にかかる形で検出された。そのため、遺構全体の形状、法量は不明である。竪穴の周辺には礫の配置が見られたことから、石積みの壁が存在していた可能性がある。遺構床面には、炉跡が形成されており、遺構壁面沿いにはピットが 4 基、炉跡を囲むように配されており、うち 2 基は竪穴の隅に配置されていた。遺構壁面に焼けた跡が見られないことから、屋内炉の可能性がある。本遺構の南西隅のピット（SP4）より得られた試料より、3,280 ± 30 の補正年代が得られた。

遺構内埋土の層序は 2 層に分層でき、a 層が黒褐色砂層で陸産貝が層中に多く含まれていた。b 層は黒褐色砂層となる。炉跡は 3 層に分層でき、1 層はサンゴ礫層で灰白色を呈し、2 層は黒褐色土層で炭の混入が見られる。3 層はサンゴ礫層で赤褐色を呈する。住居址内の炉跡からは土器片などが出土している。

竪穴住居址は東西軸約 120cm、南北軸約 150cm、深さ約 25cm を測り、屋内炉は長軸 100.1cm、短軸 93.4cm、深さ 21.3cm を測る。遺構内ピットの深さについて、東側のピット（SP１、SP2）は 22.9 ～ 23.8cm、西側のピット（SP3、SP4）は 15.7 ～ 17.2cm を測る。

遺構内出土遺物

竪穴住居址 1 からは土器片、石器、骨錐、獣魚骨類などが出土した。以下、代表的な遺物について報告する。

土器

第 42 図 1 は口径復元可能な土器片で胴部まで残存している。口縁部は波状口縁となっており、山形部は瘤状となる。頸部で微弱にくびれ、胴部はやや膨らむ。口縁部に押引文、連点文が施される。外面に口径 13.0cm、器厚 0.6cm をを測る。

第 42 図 2 は頸部片で突帯文、綾杉文が施される資料である。器厚 0.6cm を測る。

石器

第 42 図 3、4 は石器（敲石・磨石）である。3 は破損資料で、表面に敲打痕と磨り痕、側面に

2 り痕が確認できた。4 も同様に表面に敲打痕と磨り痕が、側面に磨り痕が見られる。

骨牙製品

第 42 図 5 はイノシシの尺骨を用いた骨錐で、本遺構の埋土中より出土した。破片資料で上半部が欠損している。先端が欠損し、付近に擦痕が見られる。残存部の最大長 4.2 ｃｍ、最大幅 1.75 ｃｍ、最大厚 0.95 ｃｍ、重量 4.0g を測る。

竪穴住居祉 2（SI2）

竪穴住居址 2 は C-2、D-2 区において検出された。平面形は略長方形を呈する。遺構北壁中央にスロープ状の遺構が見られた。スロープ状の遺構の南側に焼土面が見られたが、炉跡かどうかは判別できない。また､ピットが遺構の四隅付近と南壁中央部付近､計 5 基が配されていた。竪穴住居址 1 とは異なり、竪穴周辺での石列の配置は見られなかった。

遺構埋土は 5 層に分層され、a 層は灰黒色土、b 層は暗黒色土、c 層は黒褐色土で焼土の混入が見られた。d 層は淡黒色土で炭の混入が見られた。e 層は黒褐色土となる。

今回の調査においては 1 基の住居祉であると判断したが、2 基の住居址が重複している可能性も否定できない。遺構内層序 c 層出土の炭化物から 3,240 ± 30、遺構内ピット（SP8、SP9）出土の炭化物から 3,060 ± 60 の年代測定値が得られた。

遺構の法量は長軸 292.2cm、短軸 119.7cm、深さ 25.5cm を測る。遺構内ピットの深さは、10.2 ～ 17.2cm を測る。遺構内ピットの法量は、遺構東側のピット（SP5、SP6）が深さ 9.7cm、遺構中央部のピット（SP7）が深さ 13.3cm、遺構西側のピット（SP8、SP9）が深さ 14.0 ～ 17.2cm を測る。

遺構内出土遺物

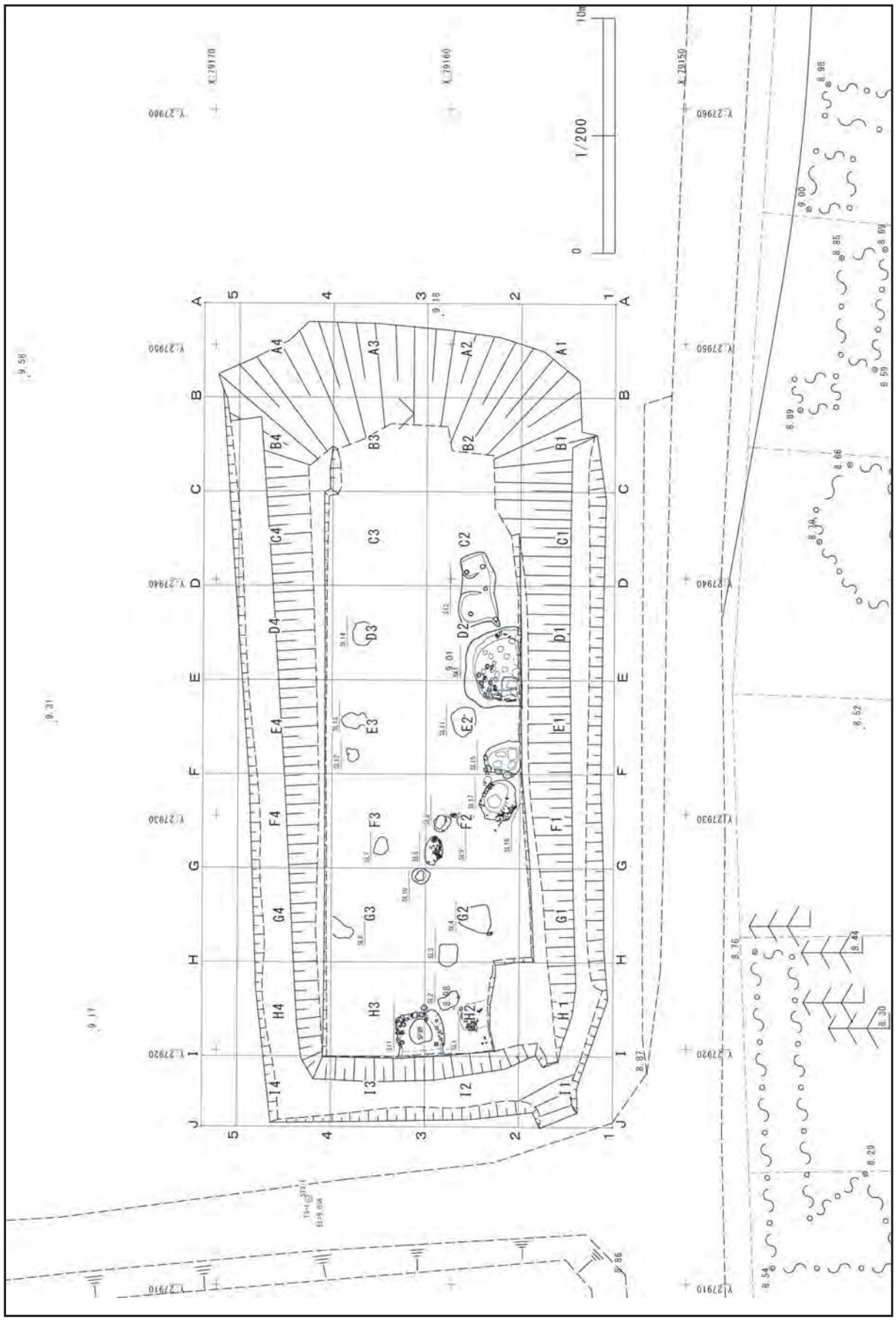
竪穴住居跡 2 からは土器、獣骨類の出土が確認された。

土器

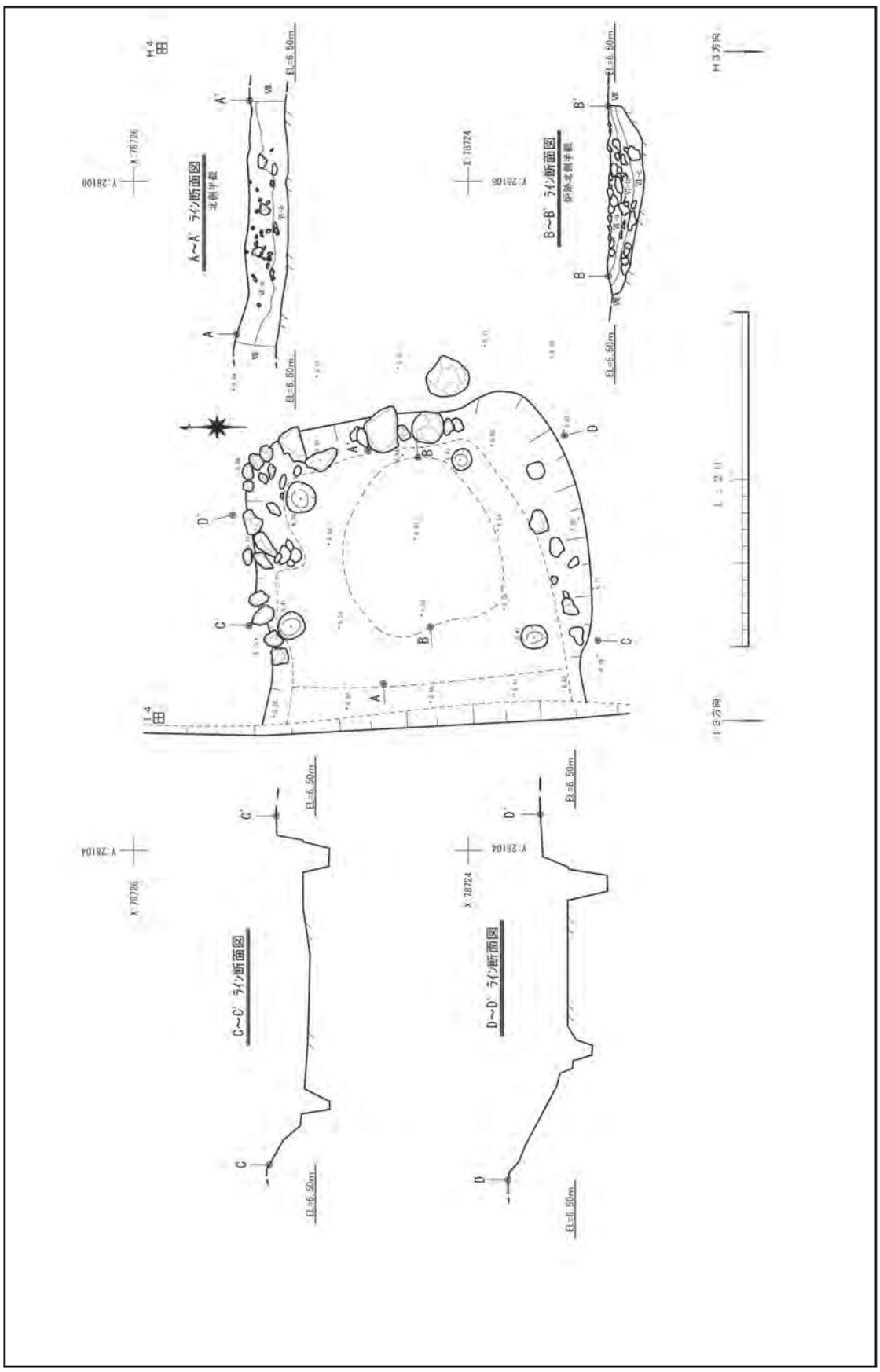
竪穴住居跡 2 内より土器片などが出土している。

第 42 図 6 は胴部まで残存している口縁部片で山形口縁を持つ。口縁部が外反し、頸部でくびれ、胴部で膨らみ最大径となる。無文資料で、外面内面共にナデ調整が見られる。口径 12.8cm、器厚 0.8cm を測る。

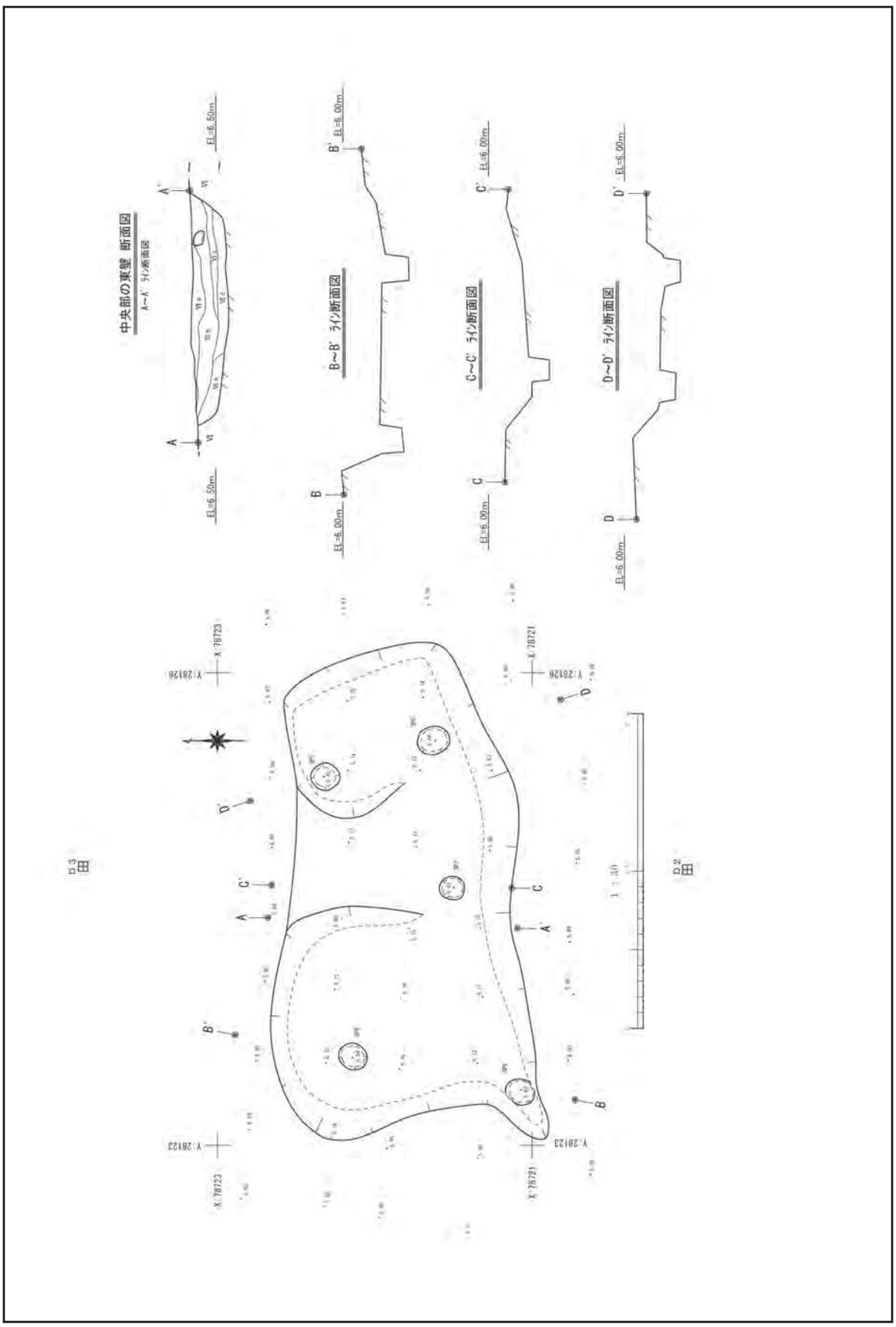
第 42 図 7 は頸部資料で楕円形の外耳を有する。文様は連点文、鋸歯文、縦位の沈線文が見られる。器厚は 0.8cm を測る。



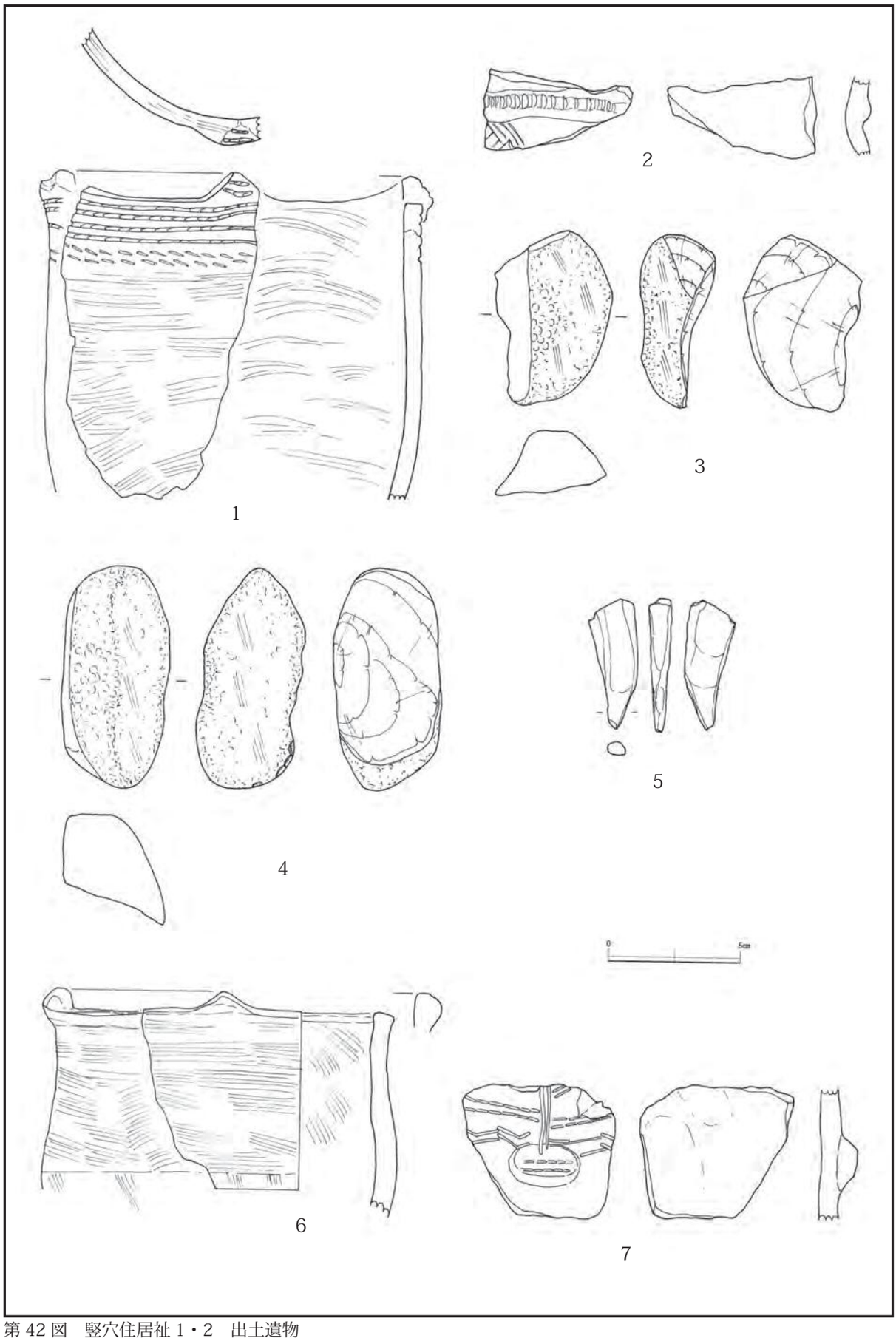
第 39 図　第Ⅵ層遺構配置平面図



第 40 図　竪穴住居祉 1　平面図・断面図



第 41 図　竪穴住居祉２　平面図・断面図



第 42 図　竪穴住居祉 1・2　出土遺物

炉跡・大型焼成遺構

本遺跡からは炉跡が 17 基、大型焼成遺構が 1 基確認された。炉跡に関しては、遺構の形態から 4 類に分類を行った。分類ごとの炉跡の基数はⅠ類が 10 基、Ⅱ類が 4 基、Ⅲ類が 2 基、Ⅳ類が 1 基となっている。遺構の配置状況に関しては調査区の西側に比較的多く分布しており、東側に向かうにつれて分布が薄くなる（第 37 図）。以下、遺構図、観察表（第 7 表）と共に各遺構の詳細を記載する。

Ⅰ類：地床炉。礫などを配置せず、地表面に孔を掘るなどして火を焚いたもの。
Ⅱ類：礫敷炉。炉の床面に石灰岩礫、サンゴ礫を敷き、炉として使用しているもの。
Ⅲ類：石囲炉。石灰岩礫などを用いて炉の周囲を囲むもの。
Ⅳ類：石組炉。石灰岩礫などを組み合わせて構築しているもの。

炉跡 1（SL1）（第 43 図　図版 41）

炉跡 1 は石組炉と思われる遺構で H-2 区から検出された。東西軸に 2 列の石組みが見られ、石列の間にサンゴ礫が配されていた。配置された石灰岩礫、サンゴ礫は加熱を受けた影響からか石灰が溶けて固まった状態が見られた。
炉跡内の層序は炭層も含めて 4 層に分けられ、Ⅵ -a 層（漆黒褐色土層）、Ⅵ -b 層（炭層）、Ⅵ -c 層（石灰層）、Ⅵ -d 層（焼土層）となる。

隣接する埋葬遺構 3 の下層断面に炉跡の断面が見られたことから、埋葬遺構 3 の下層に続く可能性がある。なお、埋葬遺構 3 の下層に関しては遺構保存のため未調査となっている。

遺構法量は、長軸の長さは不明、短軸 105.8cm、深さ 44.0cm を測る。

炉跡 2（SL2）（第 43 図　図版 42）

炉跡 2 は地床炉で平面形が円形となる。H -4 区において検出された。
遺構の層序は 3 層となっており、a 層は灰層、b 層は赤褐色の焼土層、c 層は灰黄色の砂層となっている。遺構法量は、長径 90.2cm、短径 49.6cm、深さ 13.0
cm を測る。

炉跡 3（SL3）（第 43 図　図版 43）

炉跡 3 は地床炉で平面形は円形である。G-2、H-2 区において検出された。
遺構の層序は 3 層となっており、a 層は灰層、b 層は赤褐色の焼土層、c 層は砂層で炭化物が混入している。長径 94.7cm、短径 75.5cm、深さ 7.1cm を測る。

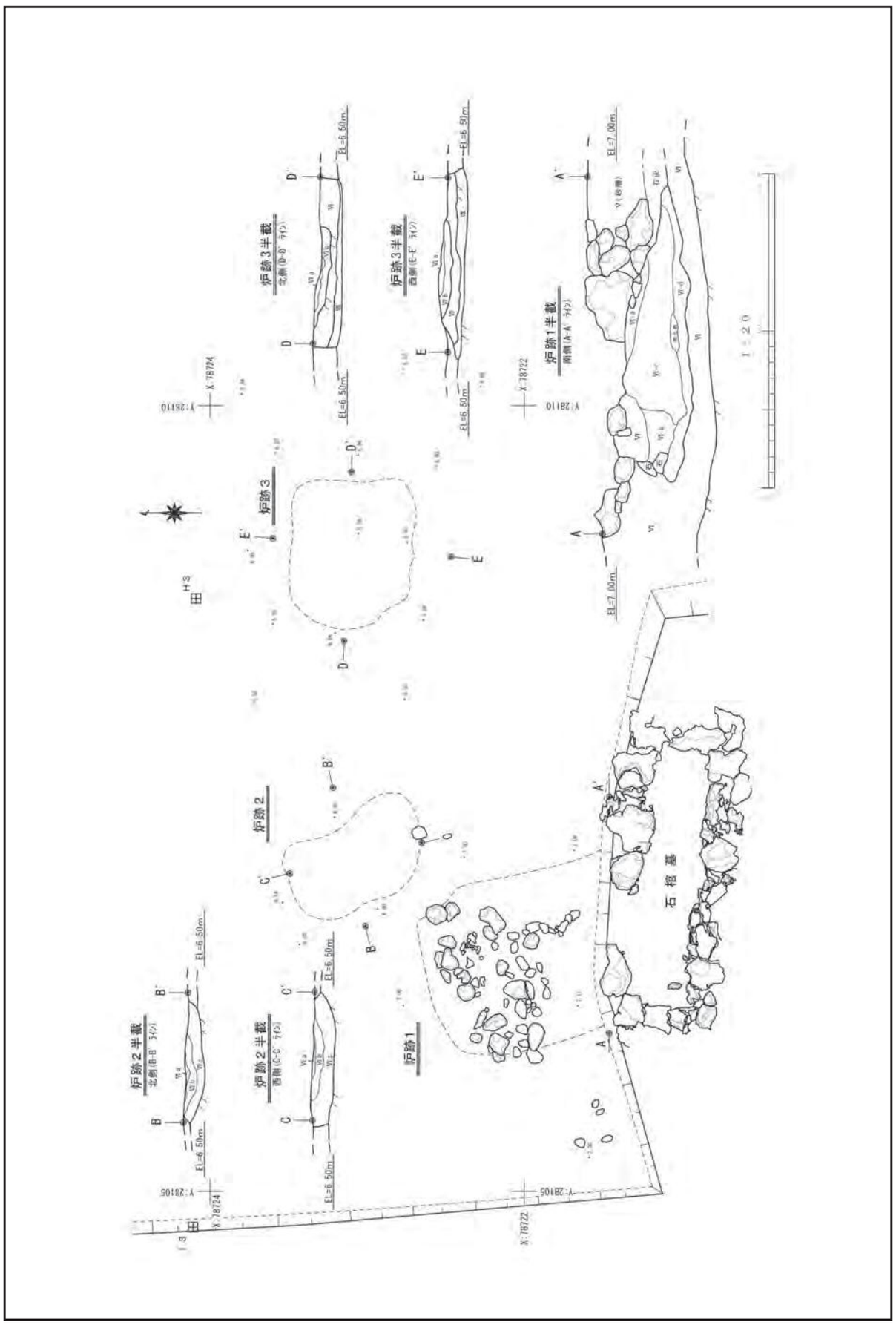
炉跡 4（SL4）（第 44 図　図版 44）

炉跡 4 は地床炉で、平面略三角形（不定形）となる。G-2 区から検出された。

遺構面直上で深鉢形土器が一括して見られ、その土器の下部から魚骨等を含む土が見られた。このことから調理用または加工用の遺構の可能性がある。本炉跡は 2 層に分層でき、a 層は灰層、b 層は灰黒色砂層で炭化物の混入が見られた。遺構の法量は長径 135.6cm、短径 107.6cm、深

第９表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層炉跡観察表

遺構名	地区	法量	炉細別		平面形状	石灰化・石灰層の有無	サンゴ礫　礫敷の有無	灰層の有無	遺物の有無	備考
炉跡１	H-2	長軸：(106.8) 短軸：113.8 深さ：44.0	Ⅳ類	石組炉	方形	有	有	無		埋葬遺構３直下に続く可能性有。
炉跡２	H-4	長軸：90.2 短軸：49.6 深さ：13.0	Ⅰ類	地床炉	円形	無	無	有		
炉跡３	G-2 H-2	長軸：94.7 短軸：77.5 深さ：7.1	Ⅰ類	地床炉	円形	無	無	有		
炉跡４	G-2	長軸：135.6 短軸：107.6 深さ：12.1	Ⅰ類	地床炉	楕円形	無	無	有	伊波式、陸産貝、獣魚骨、炭化物	
炉跡５	F-2	長軸：121.7 短軸：74.8 深さ：9.8	Ⅰ類	地床炉	楕円形	無	無	有	土器片	
炉跡６	G-3	長軸：(120) 短軸：71 深さ：11.8	Ⅰ類	地床炉	楕円形	無	無	有	土器片	
炉跡７	F-3	長軸：78.6 短軸：58.3 深さ：10.7	Ⅰ類	地床炉	円形	無	無	有		
炉跡８	F-2	長軸：72.1 短軸：70.5 深さ：18.4	Ⅱ類	礫敷炉	円形	有	有	有	礫	
炉跡９	F-2	長軸：72.9 短軸：54.5 深さ：15.3	Ⅱ類	礫敷炉	円形	無	有	有	魚骨、カニ類	
炉跡 10	G-2 G-3	長軸：71.7 短軸：64.9 深さ：10.0	Ⅱ類	礫敷炉	円形	有	有	有		
炉跡 11	E-2	長軸：125.4 短軸：103.6 深さ：19.6	Ⅰ類	地床炉	円形	無	無	無	礫	
炉跡 12	E-3	長軸：49.9 短軸：47.7 深さ：8.1	Ⅰ類	地床炉	円形	無	無	無		
炉跡 13	E-3	長軸：107.0 短軸：71.1 深さ：16.0	Ⅰ類	地床炉	楕円形	無	無	無		
炉跡 14	D-3	長軸：99.4 短軸：77.7 深さ：22.9	Ⅰ類	地床炉	楕円形	無	無	無		
炉跡 15	E-2 F-2	長軸：(152.5) 短軸：159.7 深さ：約 29.0	Ⅲ類	石囲炉？	方形		無			床面に４ヶ所の焼土面。長軸法量は掘削範囲の計測値。
炉跡 16	F-1 F-2	長軸：(39.4) 短軸：48.4 深さ：10.8	Ⅱ類	礫敷炉	方形	有	有	有		長軸法量は掘削範囲の計測値。
炉跡 17	F-2	長軸：161.4 短軸：158.4 深さ：29.7	Ⅲ類	石囲炉	円形	無	有	無	石器、炭化物	炉跡 16 の下部に位置。
大型焼成遺構	D-2 E-2	長軸：339.7 短軸：(約 200)		-	円形	有	有	無（炭層は有）	土器、礫	短軸法量は掘削範囲の計測値。



第 43 図　炉跡 1、2、3　遺構平面図・断面図

さ 7.1cm を測る。

炉跡 4 内出土遺物

炉跡 4 直上より土器がまとまって異なる文様の土器が複数出土した。

土器と炉跡上面との間の土より魚骨等が確認された。本項では炉跡 4 内及び遺構直上より出土した代表的な遺物について記載する。なお、魚骨等を含む土壌に関しては回収しフローテーションを行っている。フローテーションの詳細に関しては第 4 章 1 を参照願いたい。

土器

第 43 図 1 は土器口縁部資料で胴部下半付近まで残存している。山形口縁で口縁部は微弱に外反し、胴部で膨らみ最大径となる。文様は押引文が施される。口径は 13.0cm、器厚 0.7cm を測る。

同図 2 も胴部下半まで残存する資料である。山形口縁で、口縁部が大きく外反し、頸部でくびれ、胴部で膨らむ。文様は押引文、鋸歯文が施される。口径 14.0cm、器厚 0.6cm を測る。

同図 3 ～ 5 は破片資料で、器形を伺えることはできない。いずれも口縁部、口唇部に施文が見られる。また、器形に大きく外反せず、直口に近い器形となる。

同図 3 は口縁部に押引文、鋸歯文が施される。口唇部には沈線文が施される。器面調整に関しては確認することが出来なかった。器厚 0.7cm を測る。

同図 4 は口縁部に押引による綾杉文が施される。口唇部には押引文が見られる。器厚 0.7cm を測る。

同図 5 は口縁部に押引技法による文様が施される。口唇部にも押引文が施される。器厚 1.0cm を測る。

炉跡 5（SL5）（第 46 図　図版 45）

炉跡 5 は地床炉で、平面形が略楕円形となる。F-2 区から検出された。

炉跡 4 同様、遺構面直上、遺構の中央部より複数の土器片がまとまって見られた。このことから、炉跡 4 同様調理用もしくは加工用の遺構の可能性が考えられる。3 層に分層でき、a 層は灰層、b 層は赤褐色の焼砂層、c 層は黄灰色砂層となる。法量は長軸 121.7cm、短軸 74.8cm、深さ 9.8cm を測る。

炉跡 5 内出土遺物

炉跡内より土器が複数点出土した。上記の通り、炉跡 5 でも遺構面直上の中央部より複数の土器がまとまって見られた。以下、本遺構から出土した代表的な遺物について記載する。

土器

第 45 図 1 は口径復元可能な資料で胴部まで残存する。平口縁で、口縁部が外反し、胴部が微弱に膨らむ。文様は 2 つの刻目突帯文に鋸歯文が挟まれている。内面に調整痕が見られる。法量は口径 13.4cm、器厚 0.7cm を測る。

同図２は破片資料で押引文が施される。器厚は 0.7cm を測る。

同図４は底部資料である。外面にナデ調整などが見られる。底径は 6.4cm、器厚 0.8cm を測る。

炉跡６（SL6）（第 48 図　図版 46）

炉跡６は地床炉で、平面形が楕円形となる。G-3 区より検出された。遺構の一部が調査区北壁に掛かる。遺構の層序は４層に分層でき、a 層は赤褐色の焼土層、b 層は灰褐色土で炭化物の混入が見られた。c 層は赤褐色の焼土層、d 層は灰黄色砂層となる。焼土層が２層あることから、複数回にわたって使用されたことが推察される。遺構法量は長軸 120cm、短軸 71cm、深さ 11.8cm を測る。

炉跡７（SL7）（第 48 図　図版 47）

炉跡７は地床炉で、平面形は円形となる。F-3 区より検出された。遺構の層序は３層に分層でき、a 層は灰層、b 層は赤褐色の焼土層、c 層は暗褐色砂層で炭の混入が見られた。遺構法量は長軸 78.6cm、短軸 58.3cm、深さ 10.7cm となる。

炉跡８（SL8）（第 49 図　図版 48）

炉跡８は礫敷炉で、平面形は円形となる。炉跡中央付近に立石が見られた。F-2 区より検出された。遺構の層序は５層に分層でき、a 層は灰白色のサンゴ礫層、b 層は赤褐色のサンゴ礫層、c 層は黒褐色土層で炭の混入が見られた。d 層は淡灰色の砂層、e 層は赤褐色のサンゴ礫層となる。法量は長軸 72.1cm、短軸 70.5cm、深さ 18.4cm を測る。

炉跡９（SL9）（第 49 図　図版 49）

炉跡９は礫敷炉で、平面形は楕円形となる。F-2 区より検出された。遺構の層序は２層に分層でき、a 層は灰層、b 層はサンゴ礫層で赤褐色を呈する。

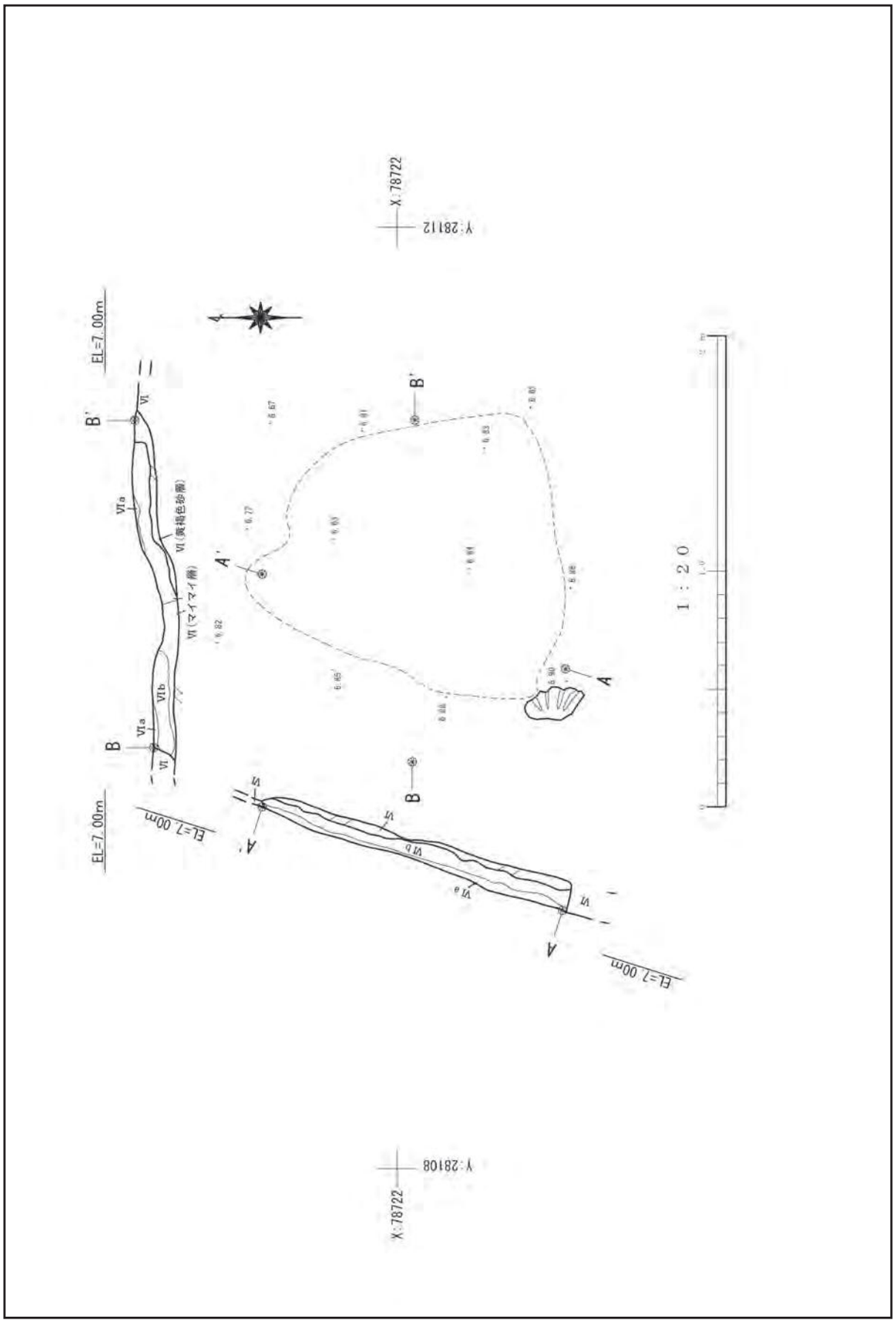
法量は長軸 72.9cm、短軸 54.5cm、深さ 15.3cm を測る。

炉跡 10（SL10）（第 46 図　図版 50）

炉跡 10 は礫敷炉で、遺構面が２面見られた。G-2、３区より検出された。遺構層序は４層に分層でき、a 層は灰層、b 層は赤褐色の焼土層、c 層はサンゴ礫層で加熱により石灰化していた。d 層は下面の炉跡面となり、サンゴ礫が敷かれていた。そのため、当初は礫敷炉として利用されていたが、その後に地床炉として利用されたものと思われる。土器の出土が確認されている。法量は長軸 71.7cm、短軸 64.9cm、深さ 10.0cm を測る。

炉跡 11（SL11）（第 50 図　図版 51）

炉跡 11 は地床炉で、平面形楕円形となる。E-2 区より検出された。遺構中央付近に立石が２点見られた。遺構層序は３層に分層でき、a 層は赤褐色の焼土層、b 層は客土のマージ層で赤褐色を呈する。c 層は混土砂層でマージの混入が見られた。法量は長軸 125.4cm、短軸 103.6cm、深さ 19.6cm を測る。



第 44 図　炉跡 4　遺構平面図・断面図

炉跡 12（SL12）（第 51 図　図版 52）

炉跡 12 は地床炉で、平面形は略方形となる。E-3 区より検出された。遺構は 2 層に分層でき、a 層は赤褐色の焼土層、b 層は黄褐色のマージ層で客土となる。遺構の下層はⅥ層（包含層）となる。法量は長軸 49.9cm、短軸 47.7cm、深さ 8.1cm を測る。

炉跡 13（SL13）（第 51 図　図版 53）

炉跡 13 は地床炉で、平面形は瓢箪形となる。E-3 区より検出された。遺構は 3 層に分層でき、a 層は赤褐色の焼土層、b 層は灰褐色砂層で炭化物の混入が見られた。c 層は黄褐色のマージ客土となる。法量は長軸 107.0cm、短軸 71.1cm、深さ 16.0cm を測る。

炉跡 14（SL14）（第 52 図　図版 54）

炉跡 14 は地床炉で、平面形は略方形となる。D-3 区より検出された。遺構は 5 層に分層でき、a 層は赤褐色土で焼土、炭化物が混入する。b 層は赤褐色土、c 層は灰褐色土、d 層は赤褐色層、e 層は黒褐色層、f 層は黒灰色土層で灰、炭化物の混入が見られた。遺構法量は長軸 99.4cm、短軸 77.7cm、深さ 22.9cm を測る。

炉跡 15（SL15）（第 53 図　図版 55）

炉跡 15 は石囲炉と思われる遺構で、平面形は隅丸方形となる。E-2、F-2 区より検出された。遺構の一部が南壁にかかるため、全形は不明。遺構上面西側に石灰岩礫が配される。炉跡床面に四カ所の焼土面が見られた。焼土面が同時に使用されたとは考えられず、長期間にわたり炉を使用していたと推測される。全体法量は不明だが、短軸 159.7cm、深さ約 29cm を測る。

炉跡 16（SL16）（第 53 図　図版 56）

炉跡 16 は礫敷炉で、平面形は方形となる。F-1、F-2 区より検出された。但し、遺構の一部が南壁にかかるため全形を確認することは出来なかった。遺構は 2 層に分層でき、a 層、 b 層共に赤褐色のサンゴ礫層となる。遺構全体の法量は不明だが、短軸 48.4cm、深さ 10.8cm を測る。

炉跡 17（SL17）（第 53 図　図版 57）

炉跡 17 は石囲炉で、平面形は円形となる。F-2 区より検出された。遺構の南西側、北東側に礫の配置が見られた。複数回使われた痕跡が見られ、遺構の層序に表れている。7 層に分層でき、Ⅵ -a 層は赤褐色を呈するサンゴ礫層、Ⅵ -b 層は黒色砂層、Ⅵ -c 層は灰白色を呈するサンゴ礫層、Ⅵ -d 層は淡黒色砂層で炭の混入が見られる。Ⅵ -e 層はサンゴ礫層、Ⅵ -f 層は砂層で炭の混入が見られた。Ⅵ -g 層は赤褐色のマージで下部には焼土面が見られた。遺構の法量は、長軸 161.4cm、短軸 158.8cm、深さ 29.7cm を測る。

炉跡 17 内出土遺物

第 47 図 3 は炉跡 17 から出土した石器（敲石）である。表面及び側面に敲打痕が見られ、裏面は扁平に整形される。法量は長軸 13.5cm、短軸 8.4cm、厚さ 4.7cm、重量 97g を測る。

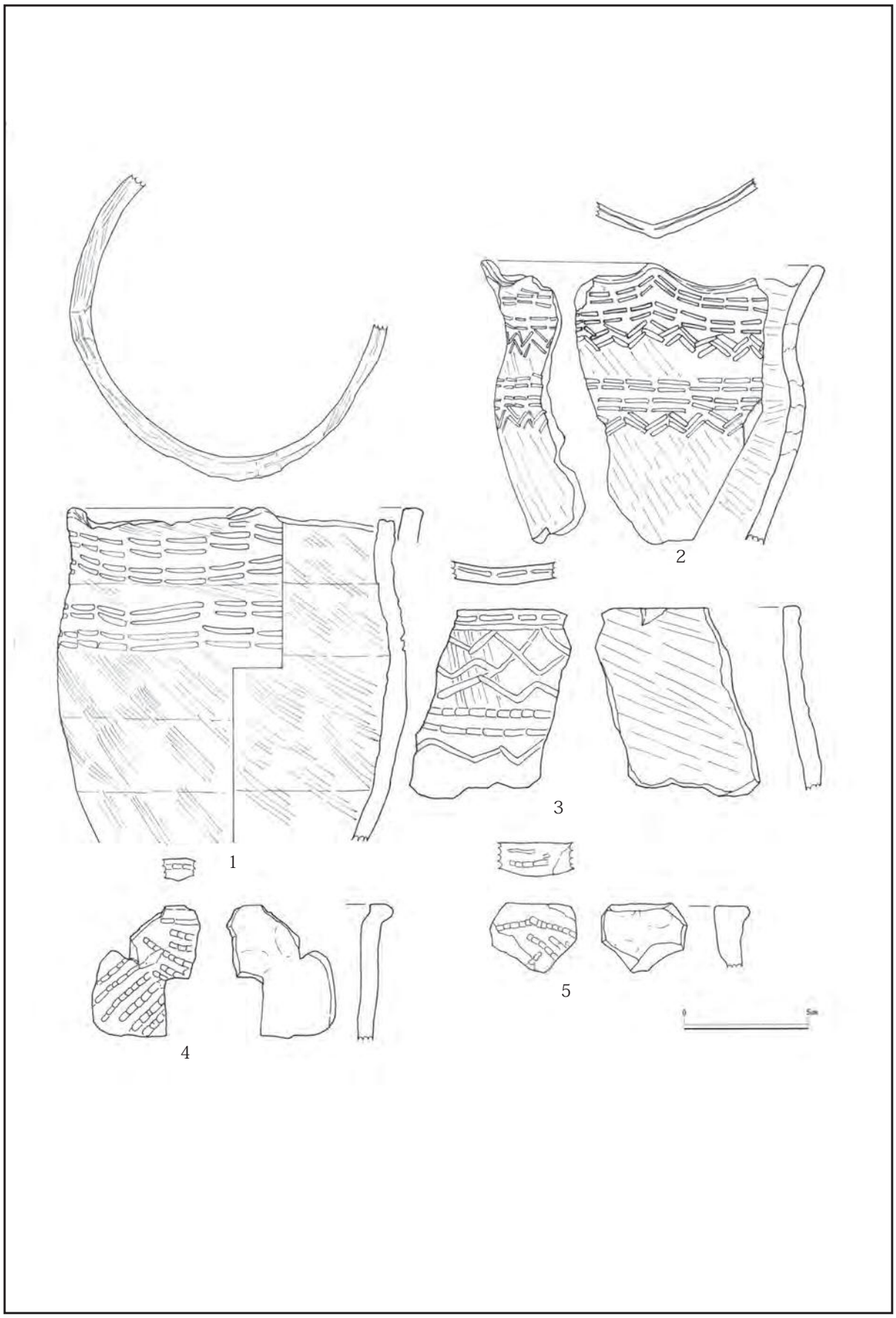
大型焼成遺構（SK 1）（第 54 図　図版 58）

大型焼成遺構は D2・E2 区Ⅵ層を掘り込んで造られた遺構である。炉跡群との関連性も考えられるが、遺構の規模を考慮して別の名称とした。遺構内には石灰岩が配置されたと考えられるが、熱の影響で石灰岩礫が崩れている、もしくは溶けて再度固まっている状態となっていた。遺構西側に関しては石灰岩礫が残存している。遺構内からの遺物はほとんど確認することができなかった。遺構内層序は 3 層に分けられ、Ⅵ-a 層は埋土、Ⅵ-b 層は混礫・混炭土層、Ⅵ-c 層は石灰層となる。遺構床面（地山層）となるⅦ層であるが、加熱により土層の硬化が見られた。加熱の程度により便宜上 2 層に分層を行った。Ⅶ-a 層は赤褐色を呈し、加熱によってレンガのように硬い層である。その下層となるⅦ-b 層は黄褐色を呈する地山層である。遺構法量は長径 339.7cm、短径 245.7cm（掘削を行った範囲の法量）、深さ 68.3cm を測る。

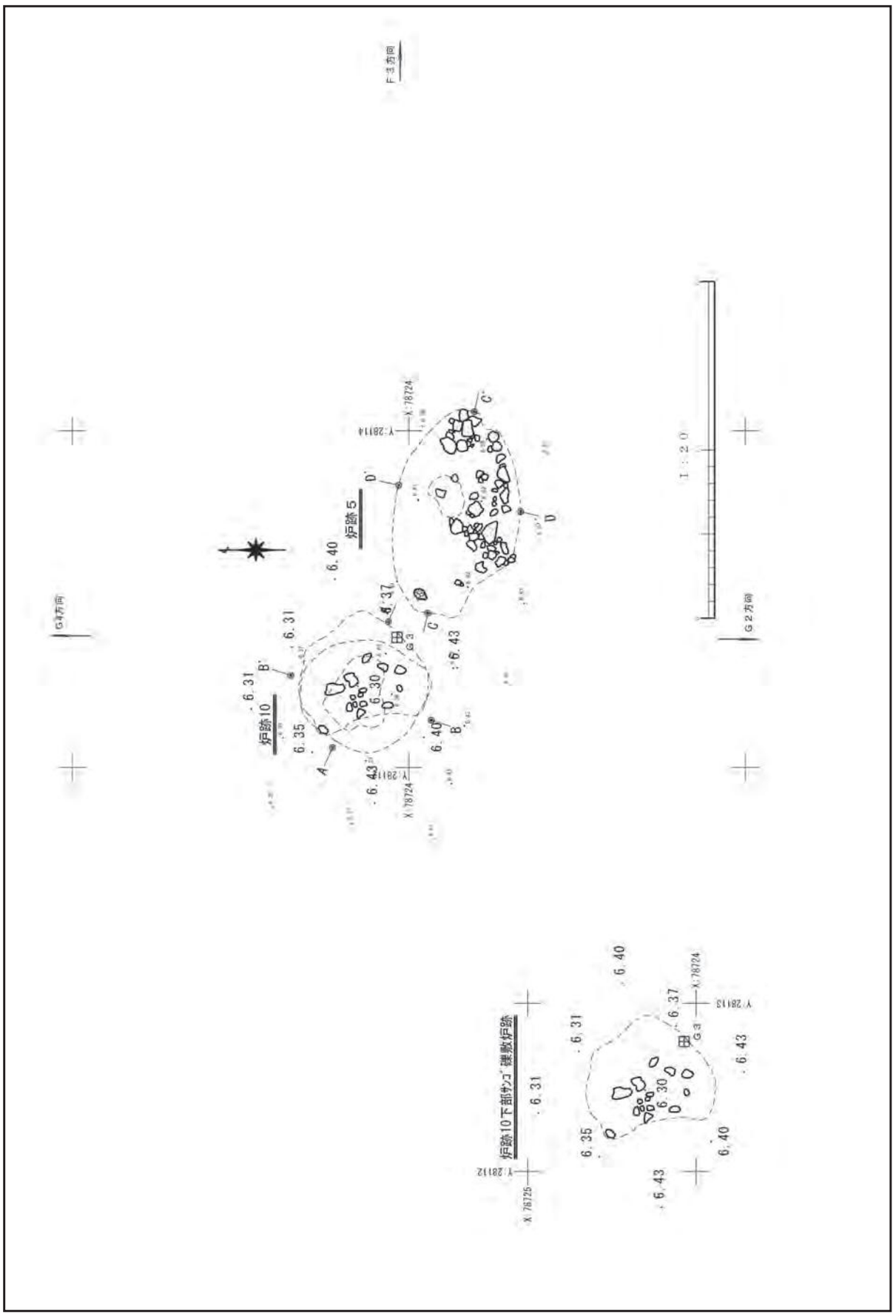
大型焼成遺構内出土遺物

大型焼成遺構からは土器片などの資料が出土している。

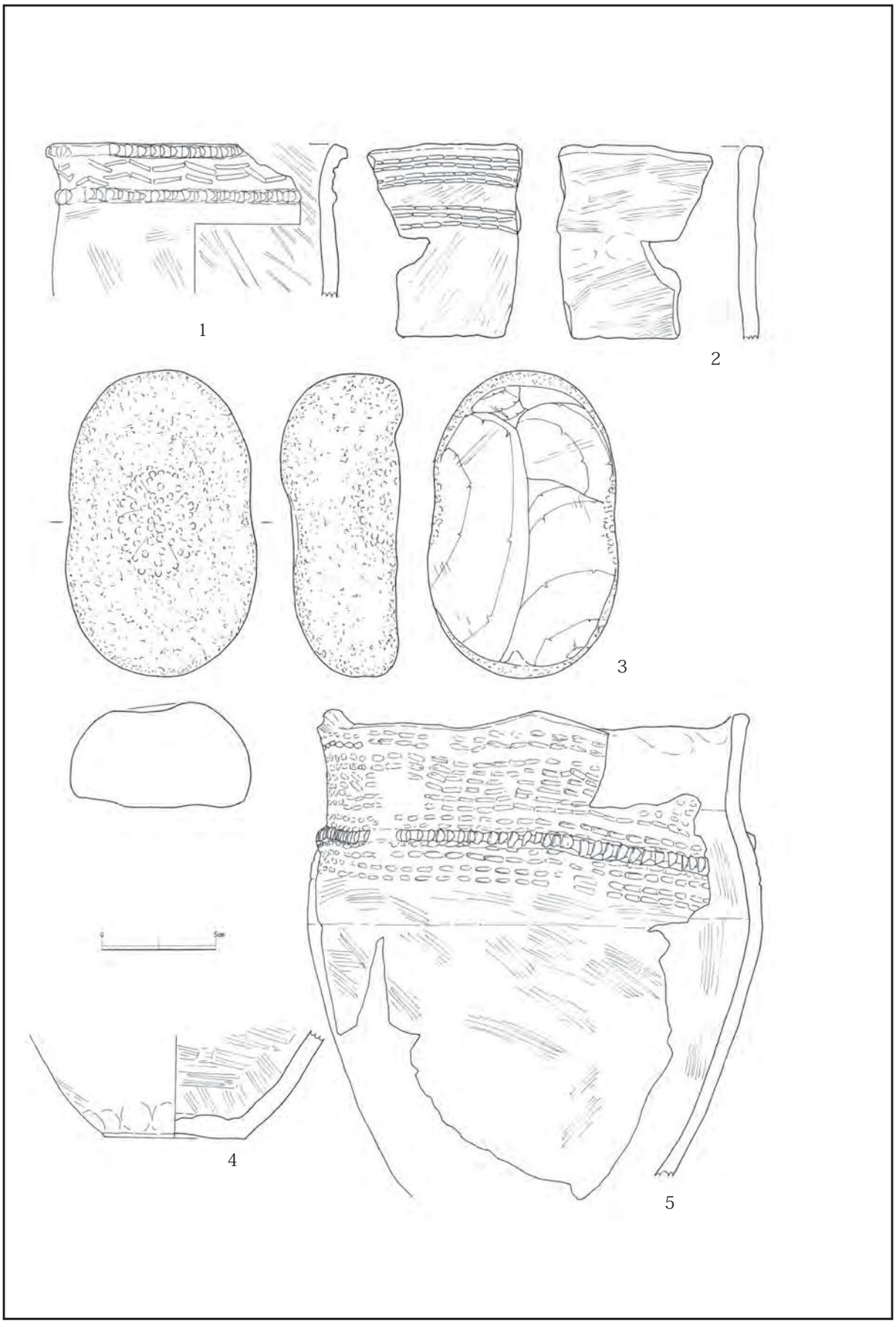
第 47 図 5 は底部付近までの器形が伺える資料で、山形口縁を呈する。口縁部が微弱に外反し、頸部ですぼまり、胴部がふくらむ。施文は押引文、突帯文が施される。器面調整は内外面ともナデ調整が見られ、内面の一部には指圧痕が残存している。口径は 19.3cm、器厚 0.6cm を測る。



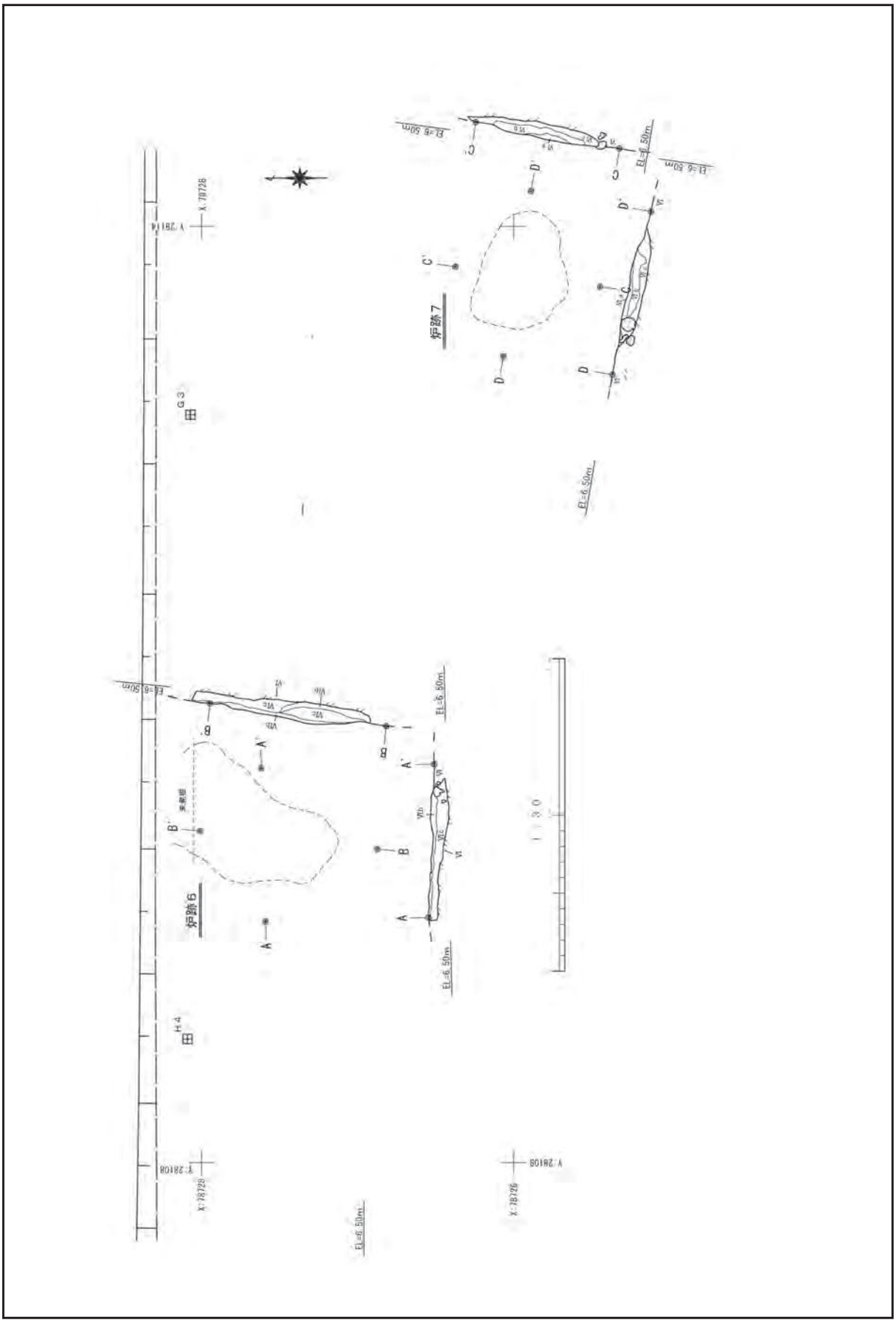
第 45 図　ナガラ原第三原貝塚　第Ⅳ号　炉跡 4　出土土器



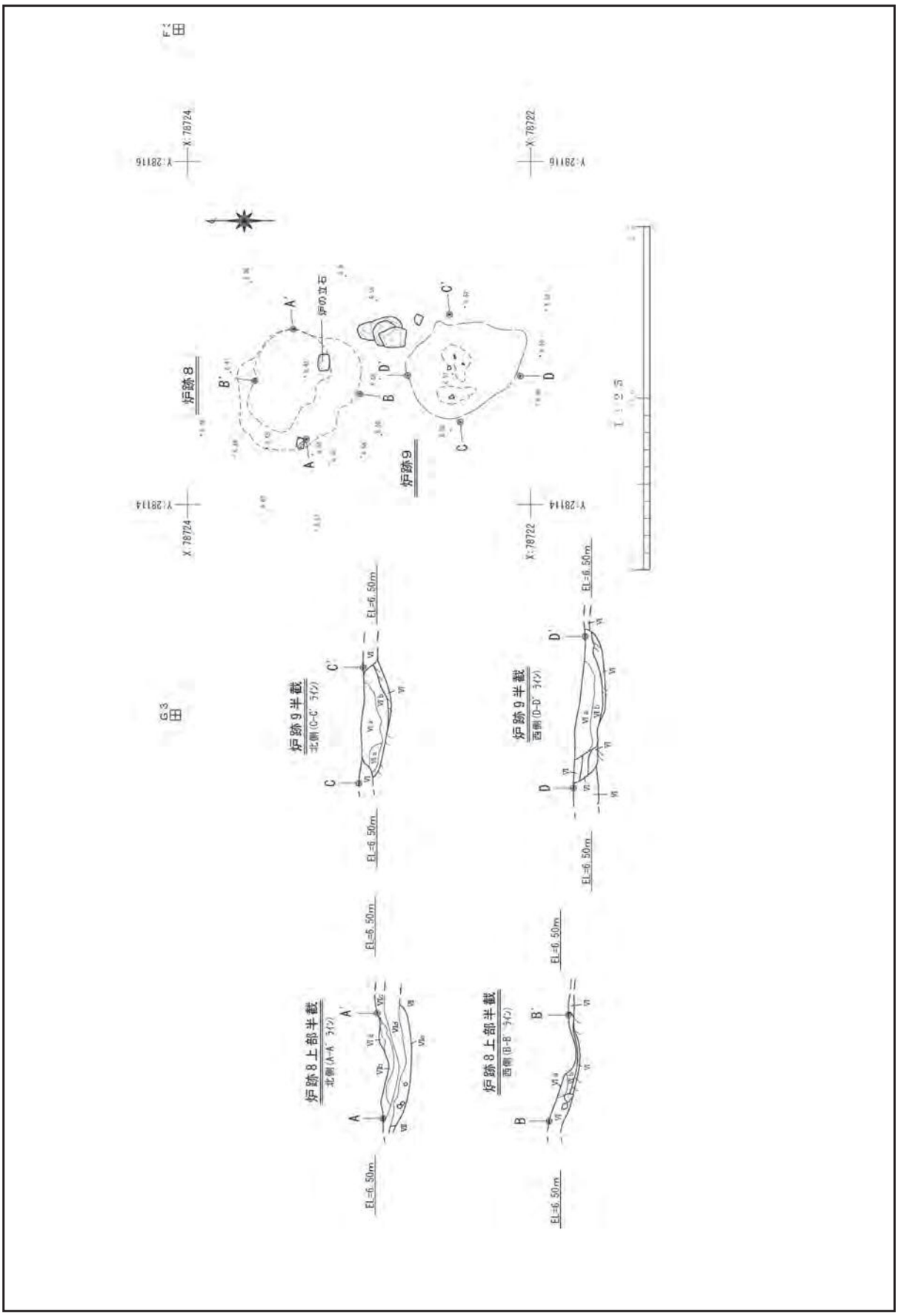
第 46 図　炉跡 5、炉跡 10　平面図



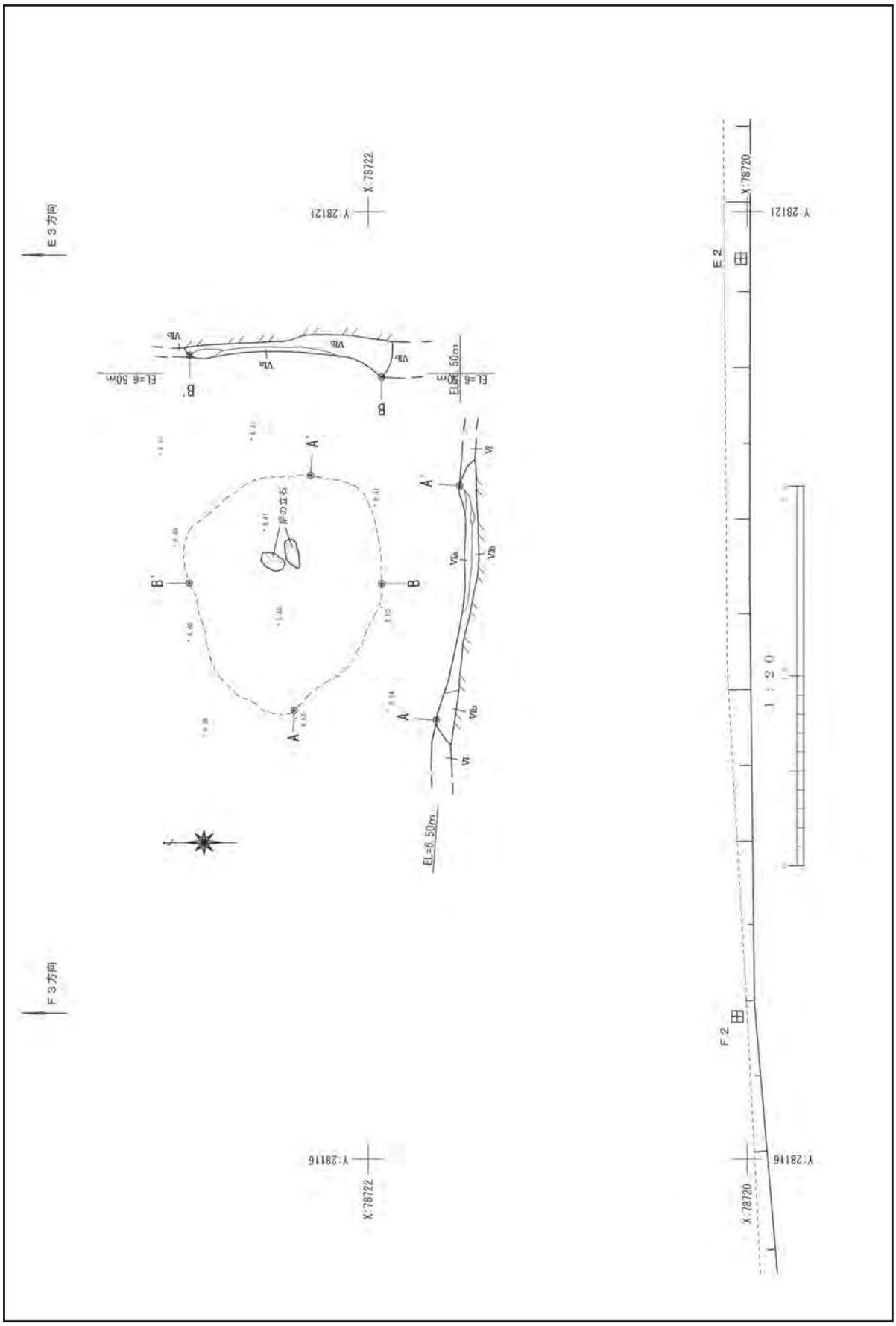
第 47 図　ナガラ原第三貝塚　炉跡 5、炉跡 17　大型焼成遺構出土遺物



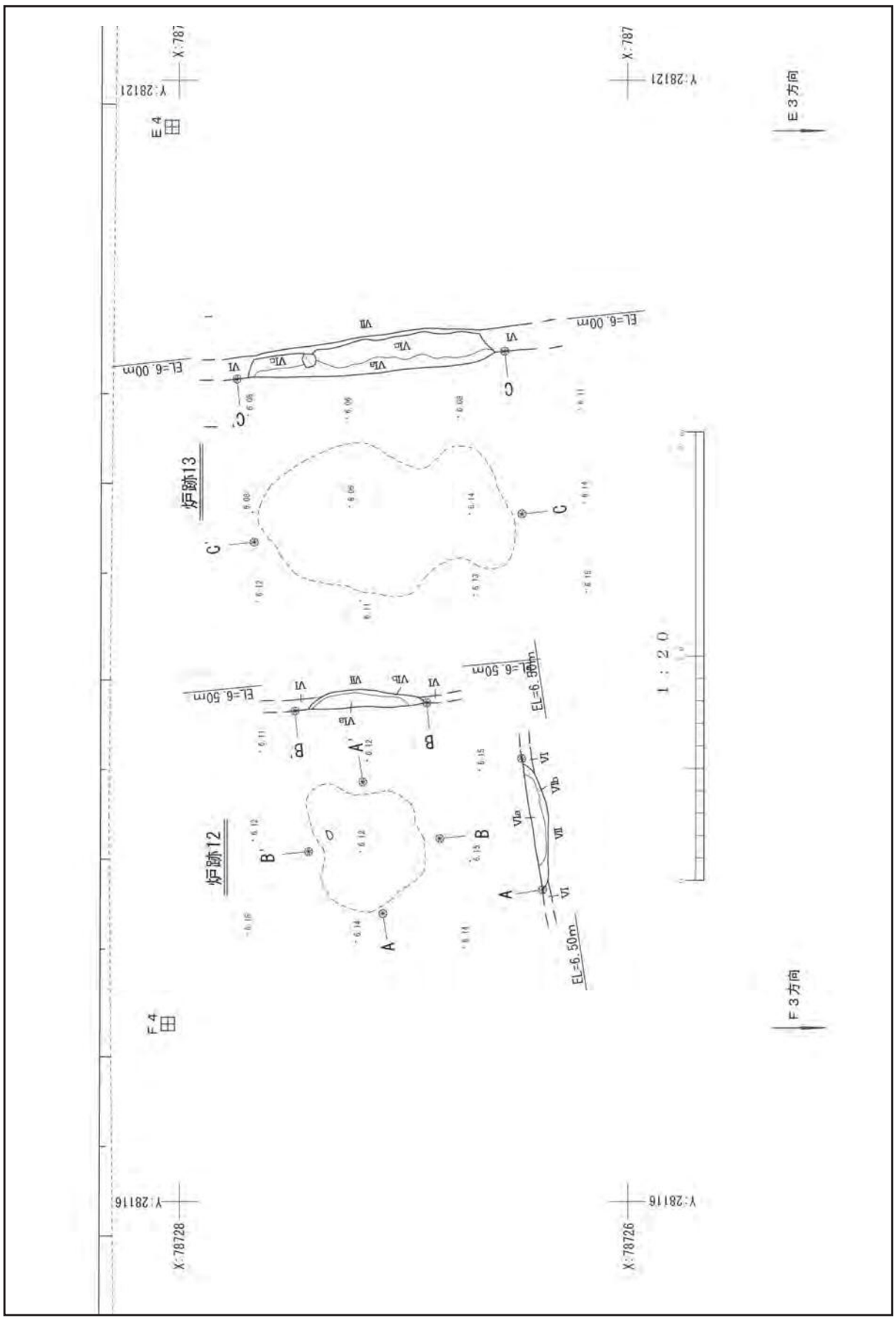
第 48 図　炉跡 6、炉跡 7　平面図



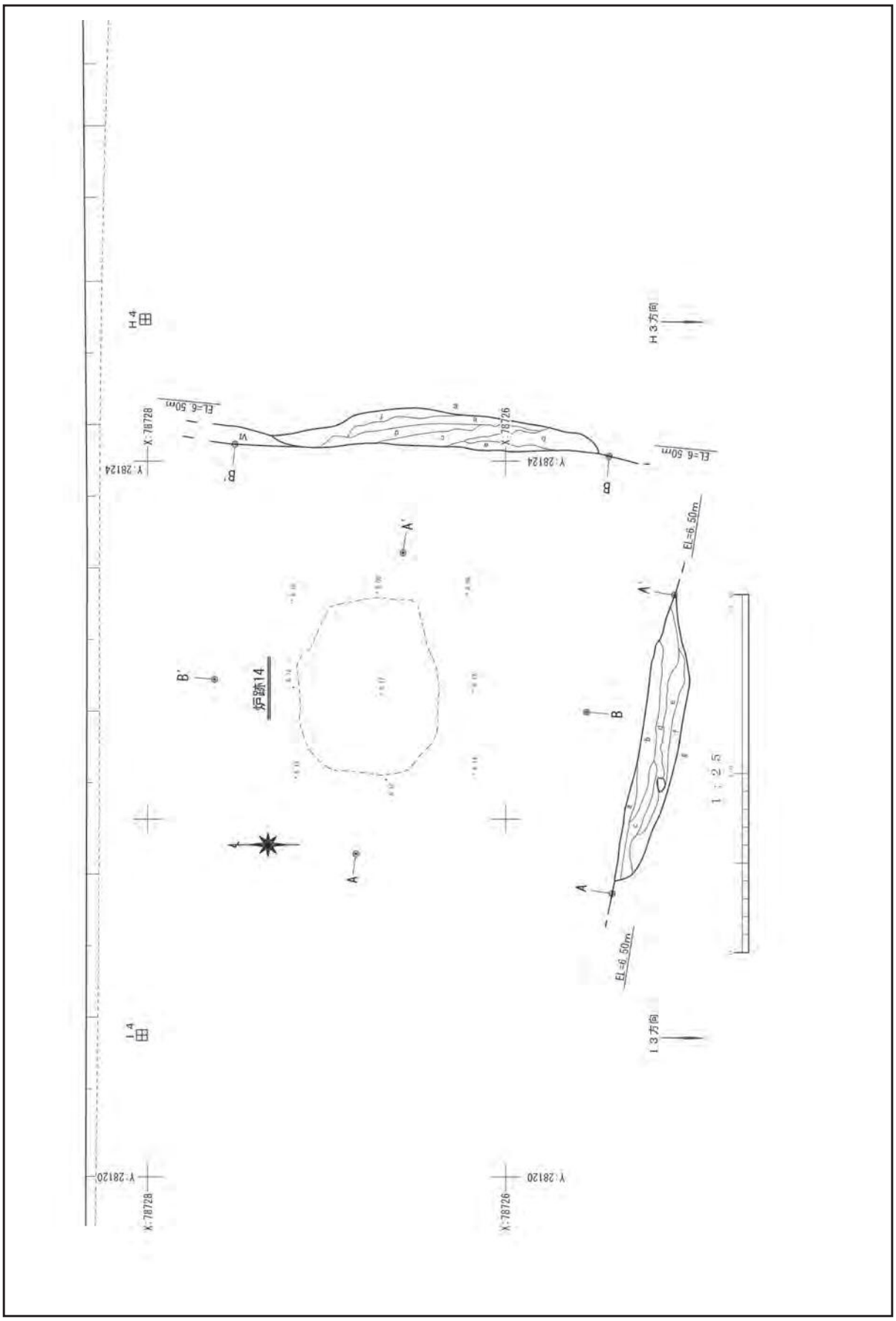
第 49 図　炉跡 8、炉跡 9　平面図



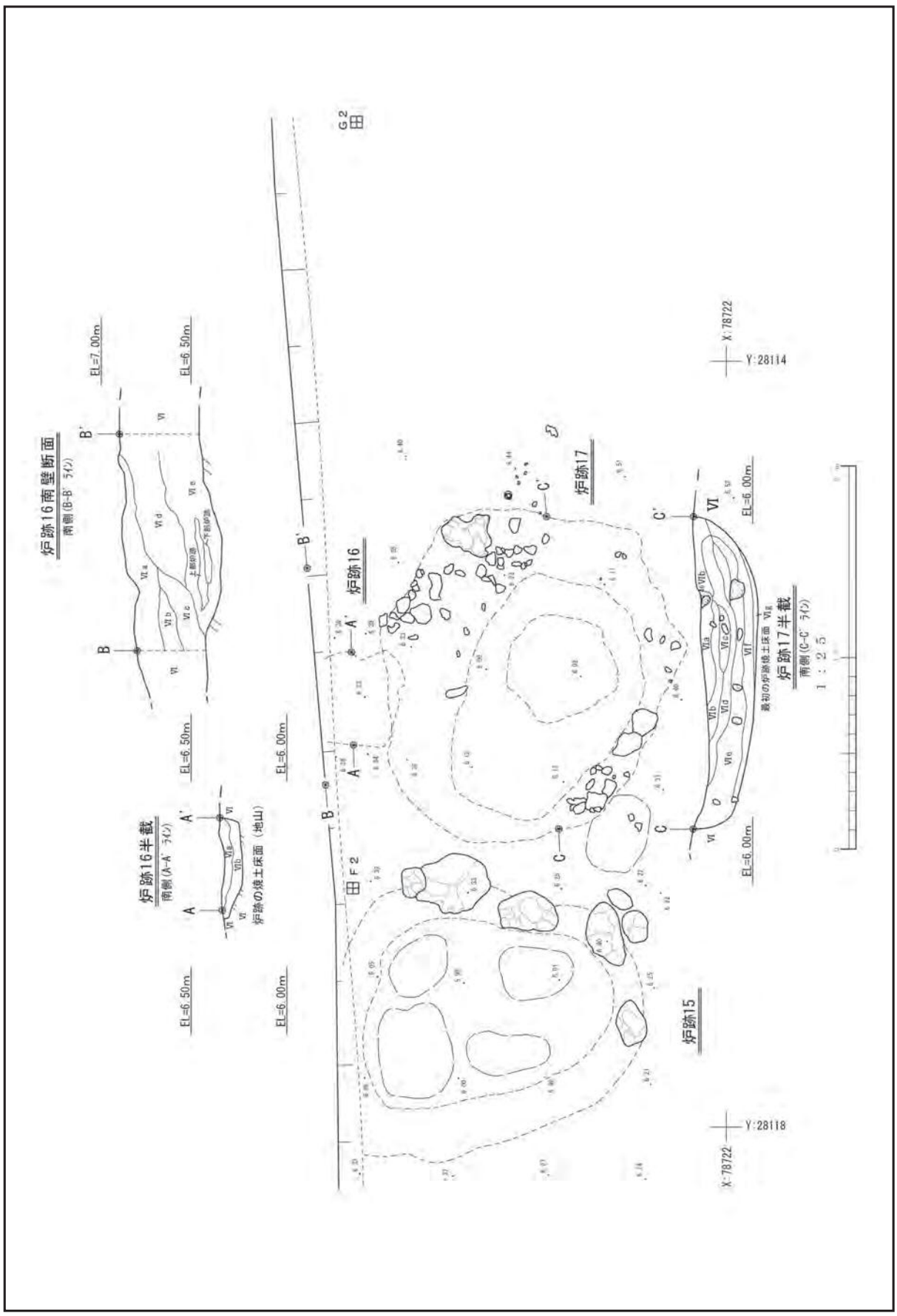
第 50 図　炉跡 11　平面図



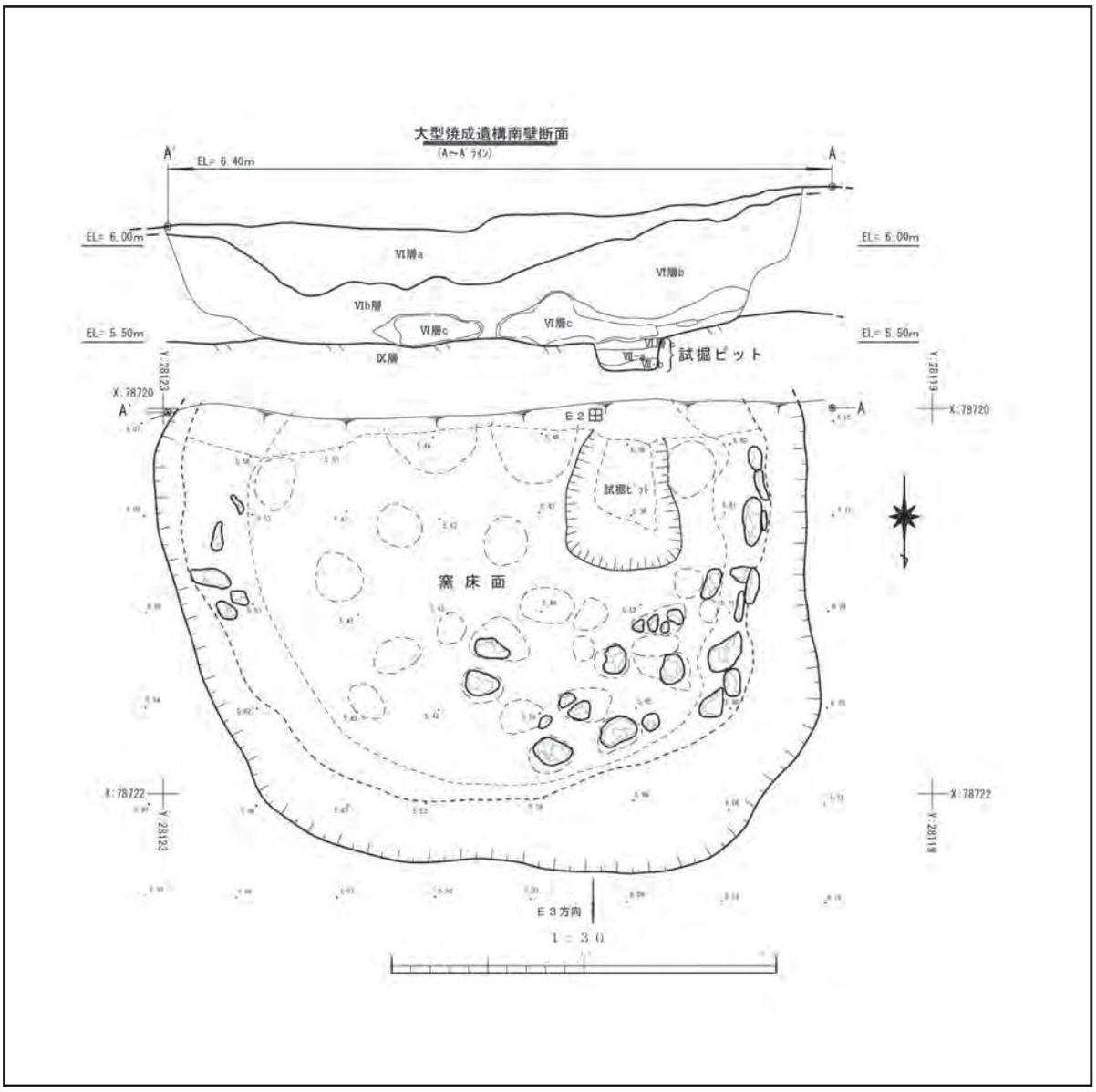
第51図　炉跡12、炉跡13　平面図



第52図　炉跡14　平面図



第 53 図　炉跡 15、炉跡 16、炉跡 17、 平面図



第 54 図　大焼成遺構断面図

3-3-3 出土遺物

出土遺物として、Ⅳ層からは土器、石器、貝製品、金属片、貝類、獣魚骨等が出土し、Ⅵ層直上からは土器、貝製品等、Ⅵ層中からは土器、石器、貝製品、骨牙製品、貝類、獣魚骨等が出土した。以下、各層中から出土した製品を出土層毎に報告する。

土器・土製品

Ⅳ層出土土器

Ⅳ層からは甕形土器、浅鉢形土器、壺形土器といった器種が見られた。以下、各器種と底部資料に関して記載を行う。

甕形土器

口縁部は有文の資料が少なく、無文の資料が多く見られた。ほとんどの資料がさほど器面調整が行われておらず、指圧痕が多く見られた。また有孔の資料も数点確認された。

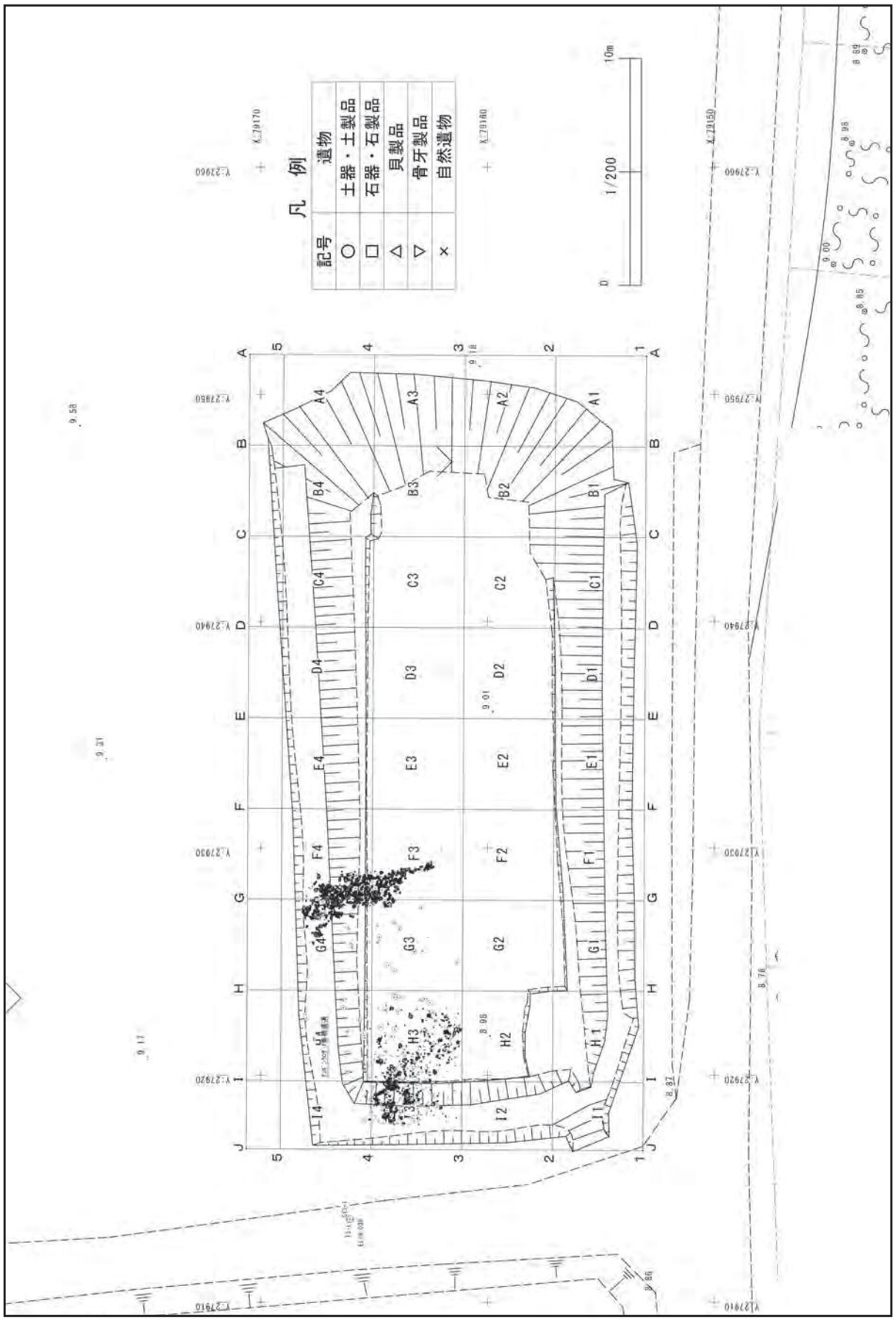
第 58 図 1 は口縁部から胴部まで残存している資料で、胴部に有孔が見られる。口縁は大きく外反し、そのまま胴部、底部に向かって窄まる。口径 27.0cm、器厚 0.7cm を測る。同図 2 も胴部まで残存する資料で、口縁部が微弱な波状を呈する。口径 10.6cm、器厚 1.0cm を測る。同図 3 は破片資料で口縁部に鞍状の突帯を有しているが、外面の鞍状突帯の一部が欠損している。器厚は 0.8cm を測る。同図 4 も破片資料で口縁部に山形の突起を有している。器厚は 0.7cm を測る。第 59 図 1 は有孔が見られる口縁部資料で、口縁部が微弱に外反する。器厚 1.0cm を測る。同図 2 は有孔が見られる胴部資料である。器厚は 0.7cm を測る。

浅鉢形土器

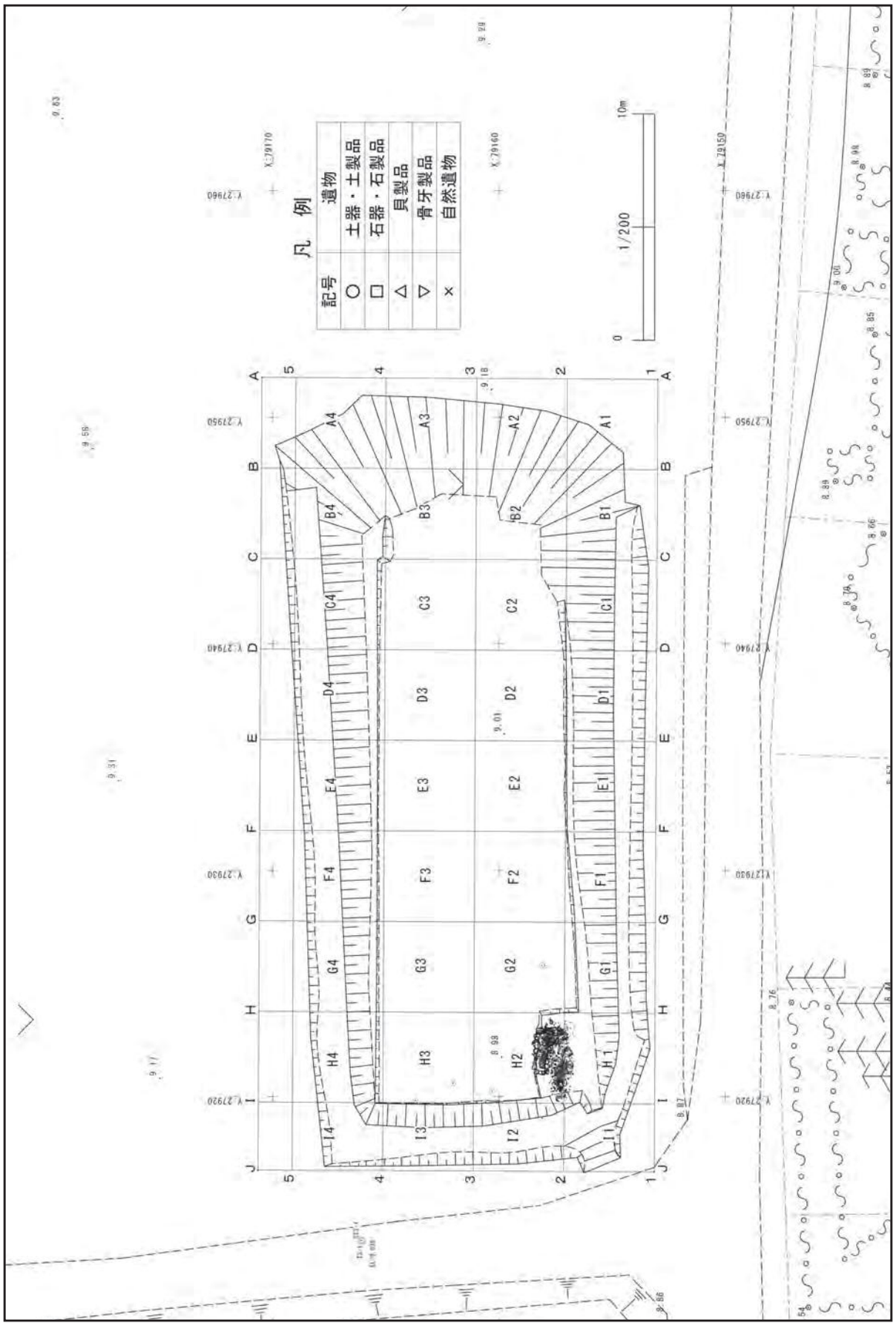
第 59 図 3 は完形を窺うことができる資料で、Ⅳ層の下部、Ⅴ層直上に半ば埋まる形で出土した。口縁部には山形の突起があり、突起は孔を有する。山形突起は 3 箇所残存しており、本来は 4 箇所に配置された可能性がある。孔は竹管工具を用いて開けられたと考えられ、三日月状を呈する。孔は縦位のものと横位のものが見られる。底部は尖底となる。口径は 20.5cm、器高は 8.2cm、器厚は 0.8cm を測る。

底部資料

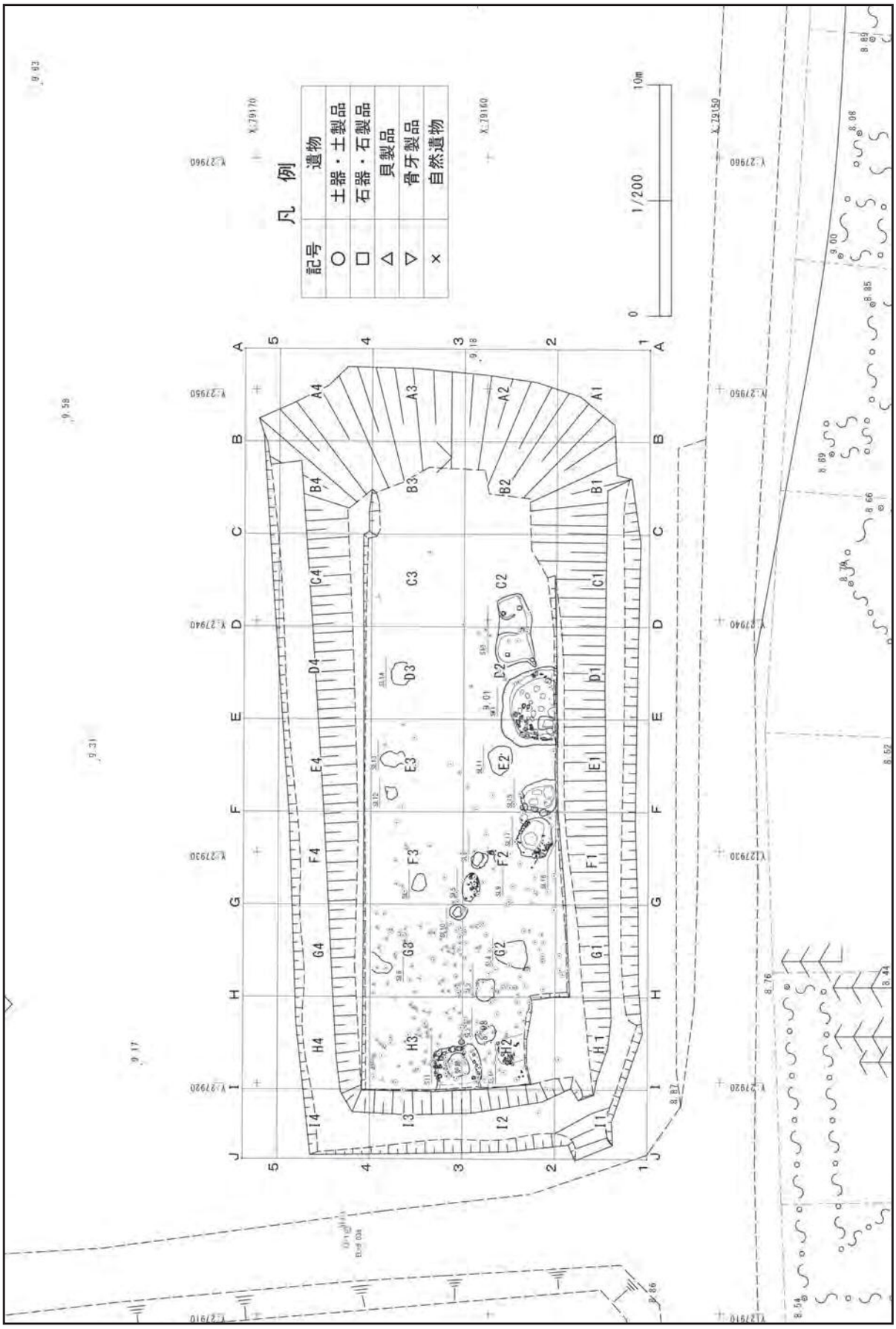
底部資料に関してはほとんどが尖底資料となっている。報告する尖底資料のほとんどは乳房状尖底となるが、第 59 図 7 のように底部が尖りきらず、やや平坦となる。内定面も比較的平坦となる資料も見られた。器面調整に関しては外面にナデ調整などが施される資料が見られた。



第 55 図　ナガラ原第三貝塚第Ⅳ層出土遺物分布図



第 56 図　ナガラ原第三貝塚第Ⅵ層直上出土遺物分布図



第 57 図　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土遺物分布図

Ⅵ層出土土器

Ⅵ層出土土器は伊波式・荻堂式土器を主体としており、2型式の他に大山式、室川式、カヤウチバンタ式、面縄東洞式、嘉徳Ⅱ式、縄文中期に比定される面縄前庭式が出土した。以下、各型式の出土資料について概観する。なお、本調査において口縁部から底部まで残存、復元できた資料は見られなかったため、口縁部と底部に項目を分けて報告を行う。

山形口縁資料

第60図1は口縁部片で綾杉文が施される。内面にはナデ調整が見られる。推定口径17.0cm、器厚0.6cmを測る。

同図2も綾杉文が施される資料である。内面には山形口縁を成形する際の指圧痕が見られた。器厚は0.9cmを測る。

3も綾杉文が施されるが、横位、縦位の押引文により区画される。器厚は0.7cmを測る。

4も綾杉文が施されるが文様が簡略化されているように見える。綾杉文以外に縦位の沈線が見られる。器厚は0.6cmを測る。

5は押引文が施される資料である。押引文は口唇部にも見られる。器厚は0.6cmを測る。

第61図1は横位の押引文の下部に鋸歯文が一条施される資料で、胴部下半まで残存している。口縁部は内湾気味の直口で胴部に向かって膨らみ胴部で最大径となる。推定口径14.6cm、器厚0.7cmを測る。

同図2は2条の押引文の間に2条の鋸歯文が施される資料である。口縁部には貼付けにより山形突起が付せられ、外反する。頸部で微弱にすぼみ、胴部でやや膨らむ。推定口径13.1cm、器厚0.7cmを測る。

3は押引文、鋸歯文が施される資料で、上記の2点とは縦位の押引文が施される点で違いが見られる。口縁部に貼り付けによる山形突起が見られる。推定口径13.4cm、器厚0.4cmを測る。

4は縦位、横位の押引文、鋸歯文が施される資料である。口縁部に山形突起が付せられている。推定口径10.7cm、器厚0.6cmを測る。

5も縦位、横位の押引文、鋸歯文が施される資料である。推定口径16.0cm、器厚0.8cmを測る。

第62図1は横位、縦位の押引文、鋸歯文が施される資料である。最大径は口縁部となり、口縁部は外反し、頸部ですぼみ、胴部でやや膨らむ。推定口径21.0cm、器厚0.9cmを測る。

同図2は沈線による波状文が施される資料である。最大径は口縁部となる。推定口径14.6cm、器厚0.8cmを測る。

第63図1は押引文、鋸歯文が施される資料である。器厚は0.7cmを測る。

2は沈線文、鋸歯文が施される資料である。器厚は0.9cmを測る。

3は押引文、鋸歯文が施される資料である。口唇部にも押引文が施文される。器厚は0.7cmを測る。

4は縦位、横位の押引文が施され、その下部に突帯が付される資料である。突帯には刻みが見られる。器厚は1.2cmを測る。

第64図1は押引文のみが施される資料である。口径15.0cm、器厚0.6cmを測る。

2も押引文のみが施される資料である。山形口縁が同図1と比べると小さい。口径17.0cm、

第 10 表　ナガラ原第三貝塚第Ⅳ層出土土器観察表

図	図版	出土地区	出土層	器種	器高	口径	底径	器厚	特記事項
56-1	1	H-3	Ⅳ層下	甕形	-	27.0	-	0.7	有孔
56-2	2	H-3	Ⅳ層上	甕形	-	10.6	-	1.0	
56-3	3	I-4	Ⅳ層下	甕形	-	-	-	0.8	鞍状突帯
56-4	4	G-3	Ⅳ層上	甕形	-	-	-	0.7	鞍状突帯
57-1	1	G-3	Ⅳ層上	-	-	-	-	1.0	有孔
57-2	2	G-4	Ⅳ層上	-	-	-	-	0.7	有孔
57-3	3	H-3	Ⅳ層	浅鉢形	8.2	20.5		0.8	山形突起、有孔
57-4	4	G-3	Ⅳ層上	-	-	-		0.9	
57-5	5	H-3	Ⅳ層上	-	-	-	2.2	0.9	乳房状尖底
57-6	6	G-3	Ⅳ層上	-	-	-		0.8	乳房状尖底
57-7	7	H-3	Ⅳ層上	-	-	-	2.8	0.8	乳房状尖底
57-8	8	E-3	Ⅳ層	-	-	-		0.7	乳房状尖底
57-9	9	F-3	Ⅳ層上	-	-	-		0.6	乳房状尖底
57-10	10	G-3	Ⅳ層下	-	-	-		0.6	乳房状尖底
57-11	11	G-3	Ⅳ層下	-	-	-		0.6	
57-12	12	G-4	Ⅳ層下	-	-	-		0.7	

器厚 .5cm を測る。

3 は綾杉文が施される破片資料である。器厚 0.6cm を測る。

4 は 2 条の押引文の間に斜方向の連点文が施される破片資料である。器厚は 0.9cm を測る。

5 は押引文と鋸歯文が施される破片資料である。器厚は 0.8cm を測る。

平口縁資料

第 65 図 1 は押引文と鋸歯文が施される破片資料である。器厚は 0.7cm を測る。

2 は押引文が施される破片資料である。器厚は 0.7cm を測る。

3 は押引文が施される破片資料である。器厚は 0.6cm を測る。

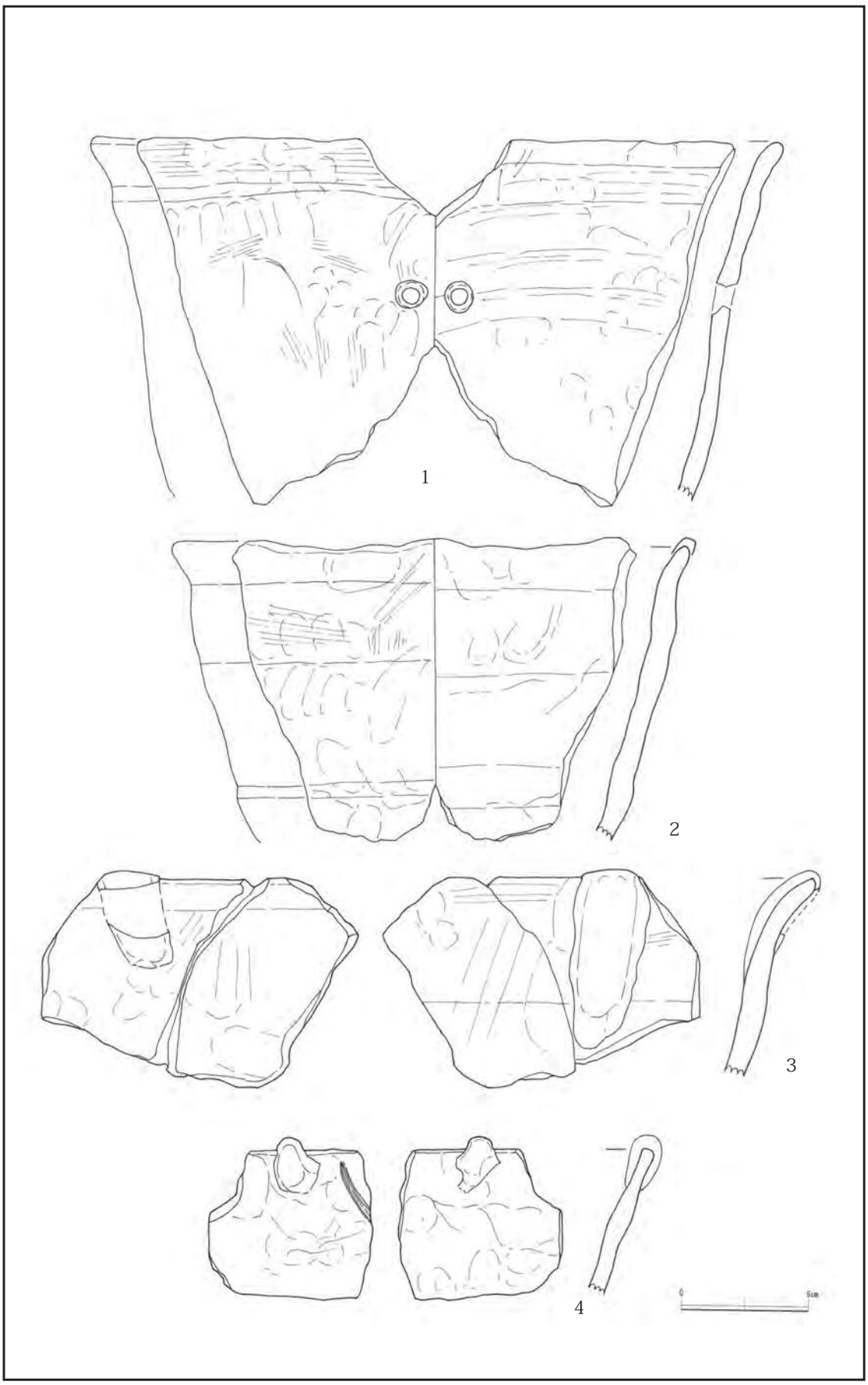
面縄東洞式

面縄東洞式は徳之島伊仙町に所在する面縄貝塚標識遺跡とする土器である。

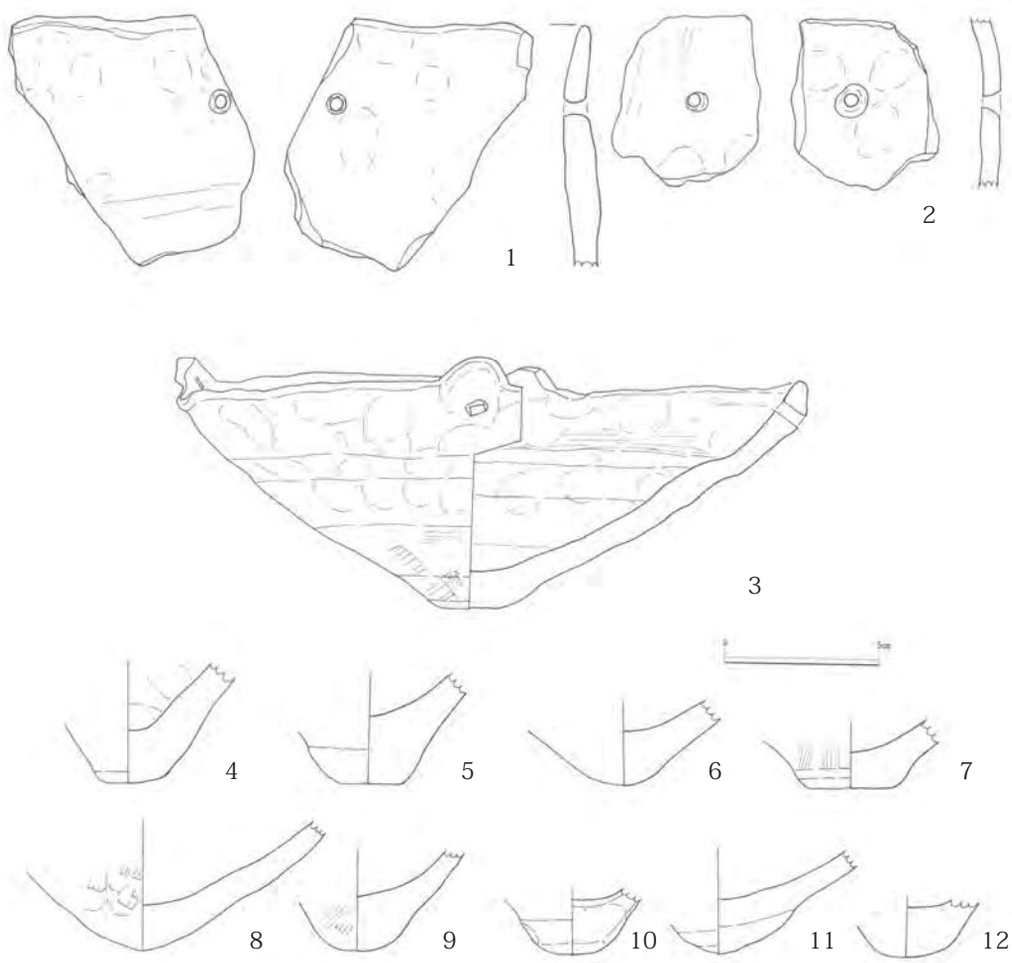
第 65 図 5 は口縁部の破片資料である。器種は深鉢形と思われる。口縁部断面が三角形状となり、籠目文が施される。器厚は 0.8cm を測る。

嘉徳Ⅱ式

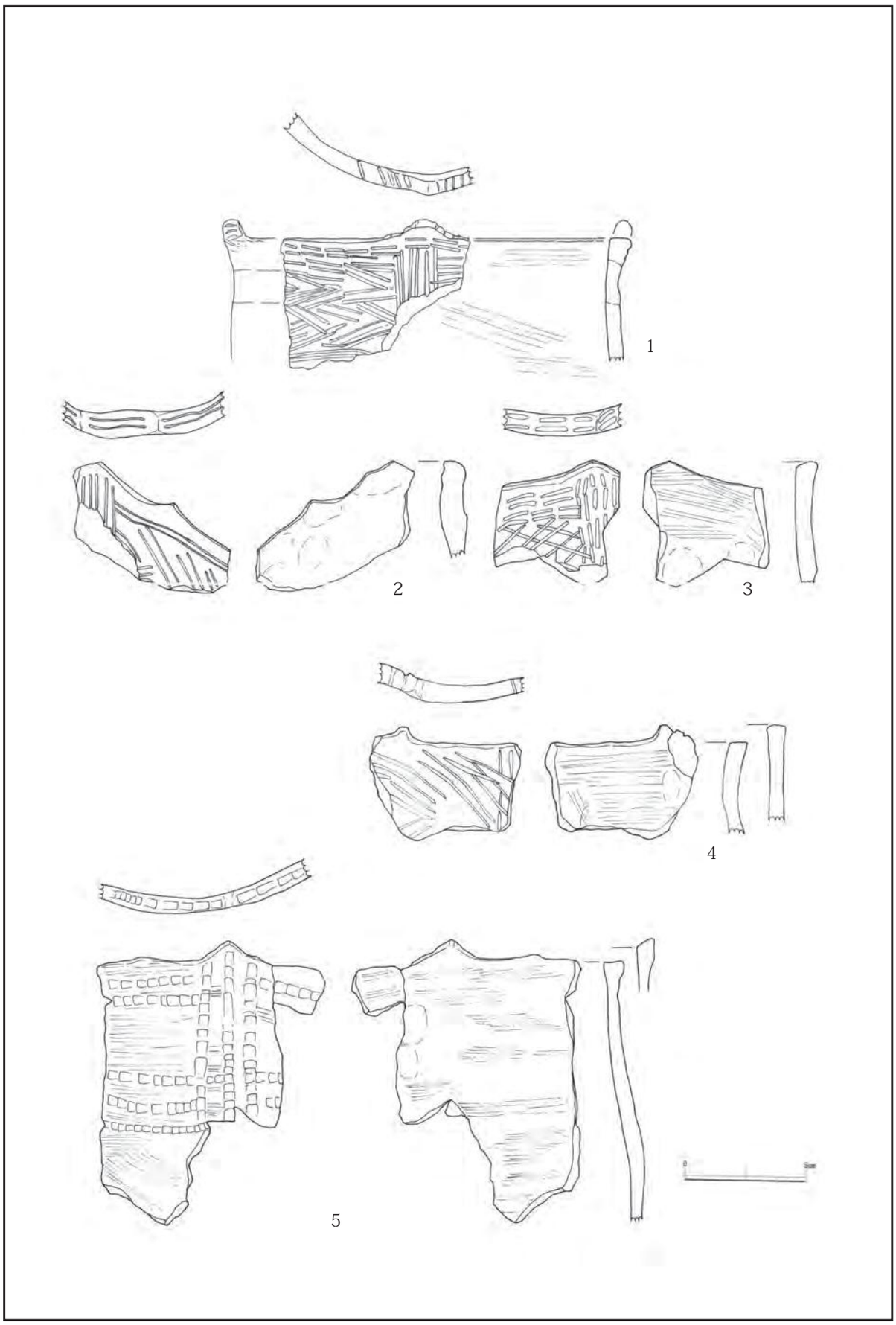
H-3 区第Ⅵ層において嘉徳Ⅱ式と思われる口縁部片が出土した。第 65 図 4 は口縁部に押引文などが施される。器種は深鉢形と思われる。器厚 0.8cm を測る。



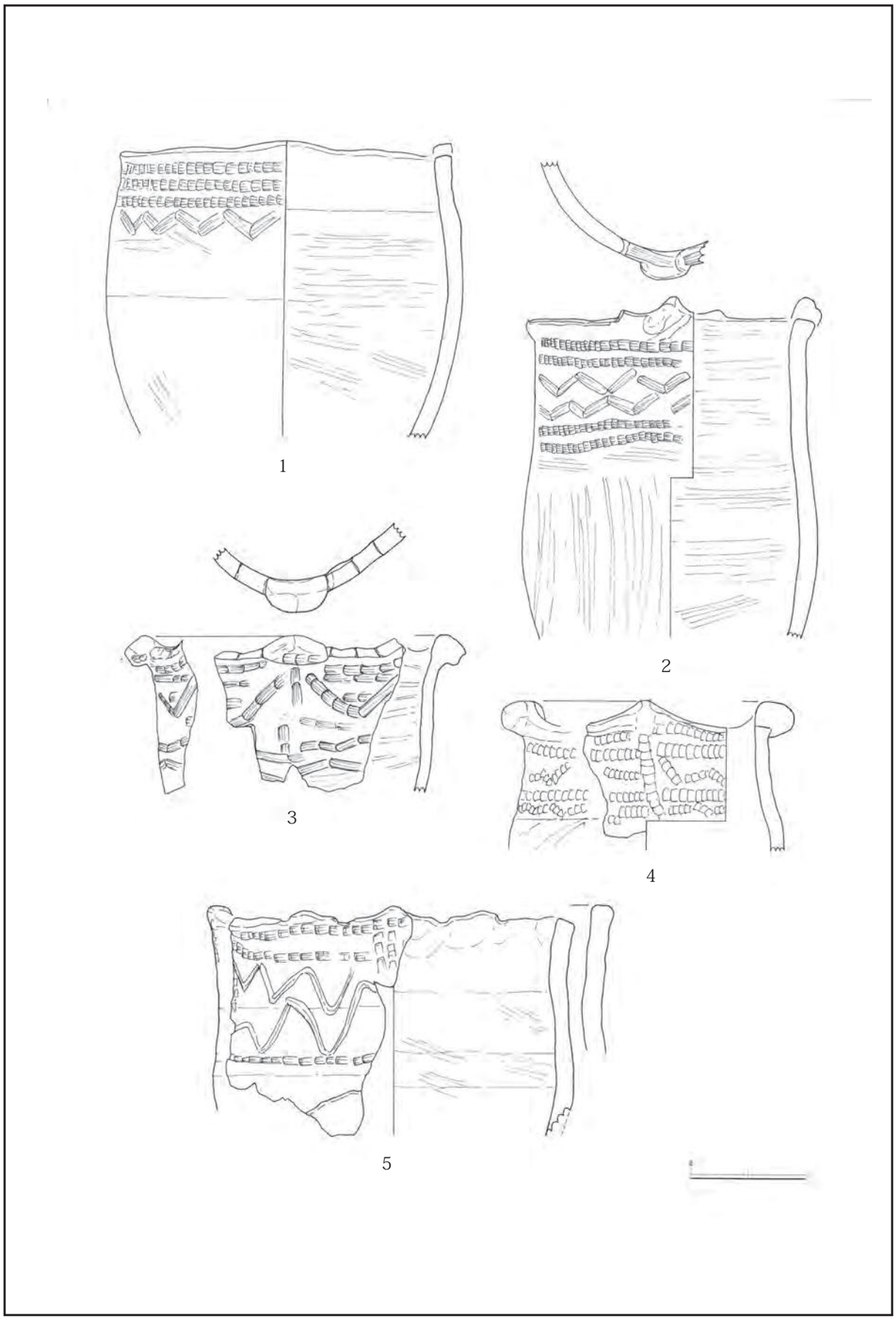
第 58 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土　無文土器（1）



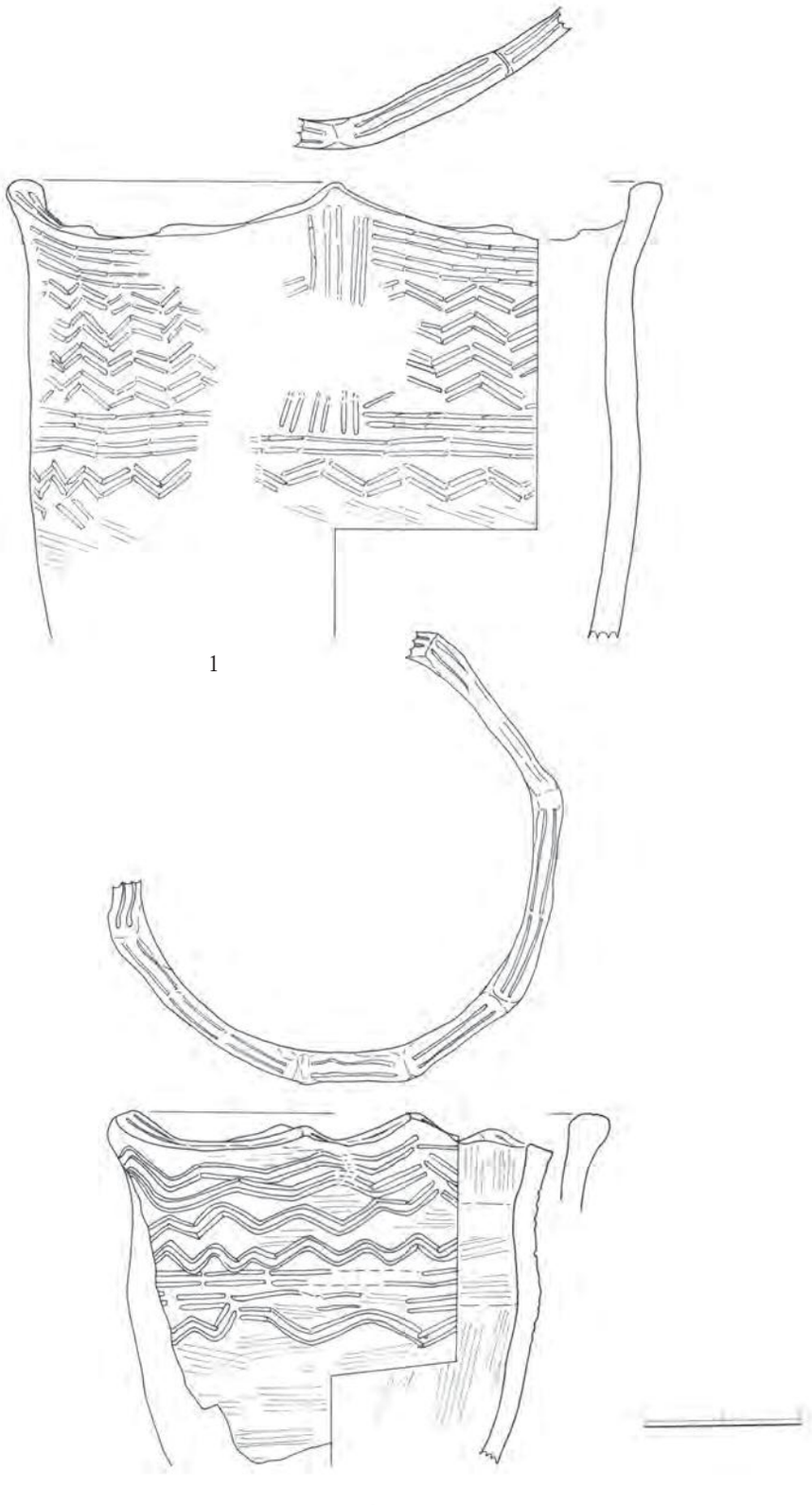
第 59 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土　無文土器（2）底部



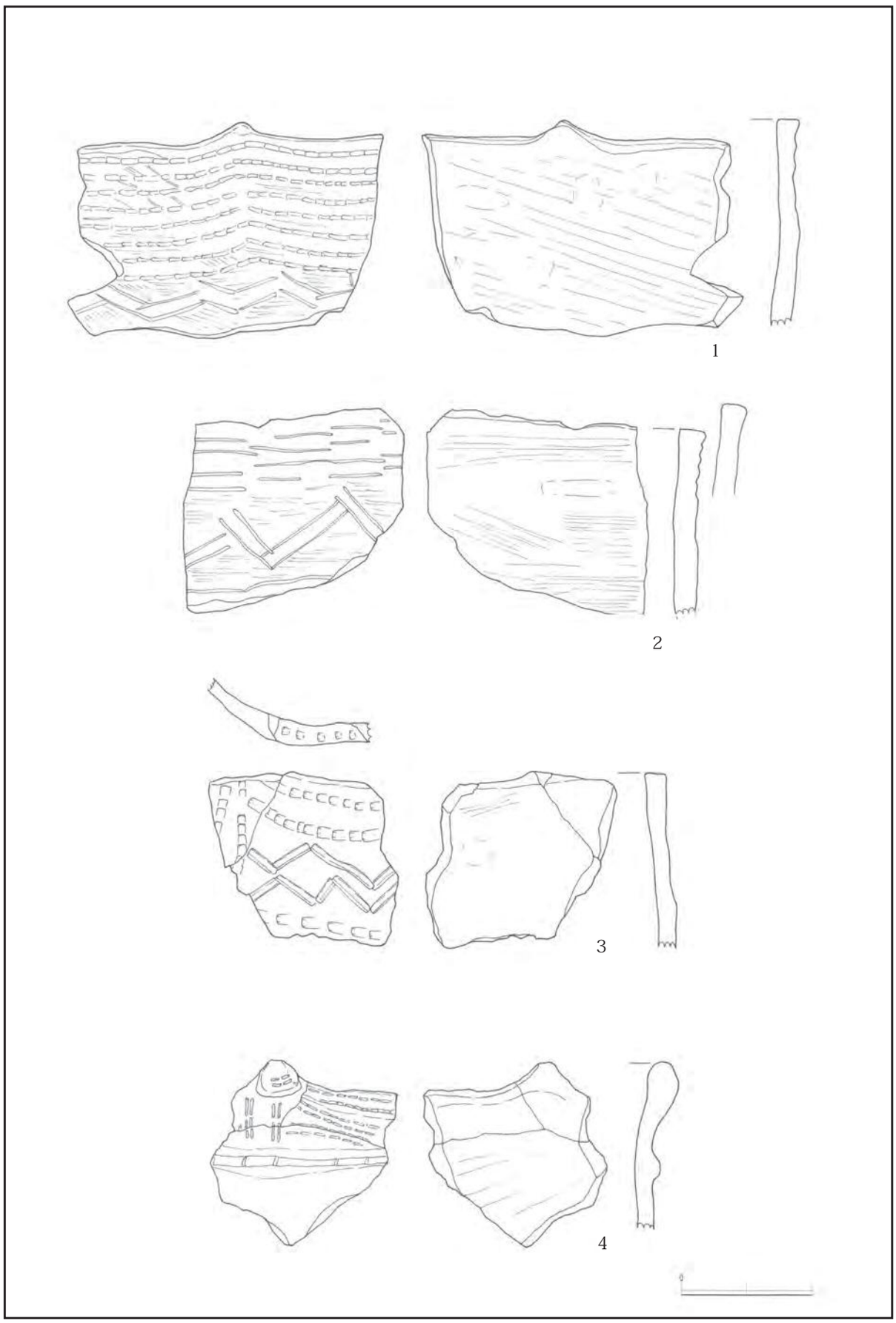
第 60 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土　有文土器（1）



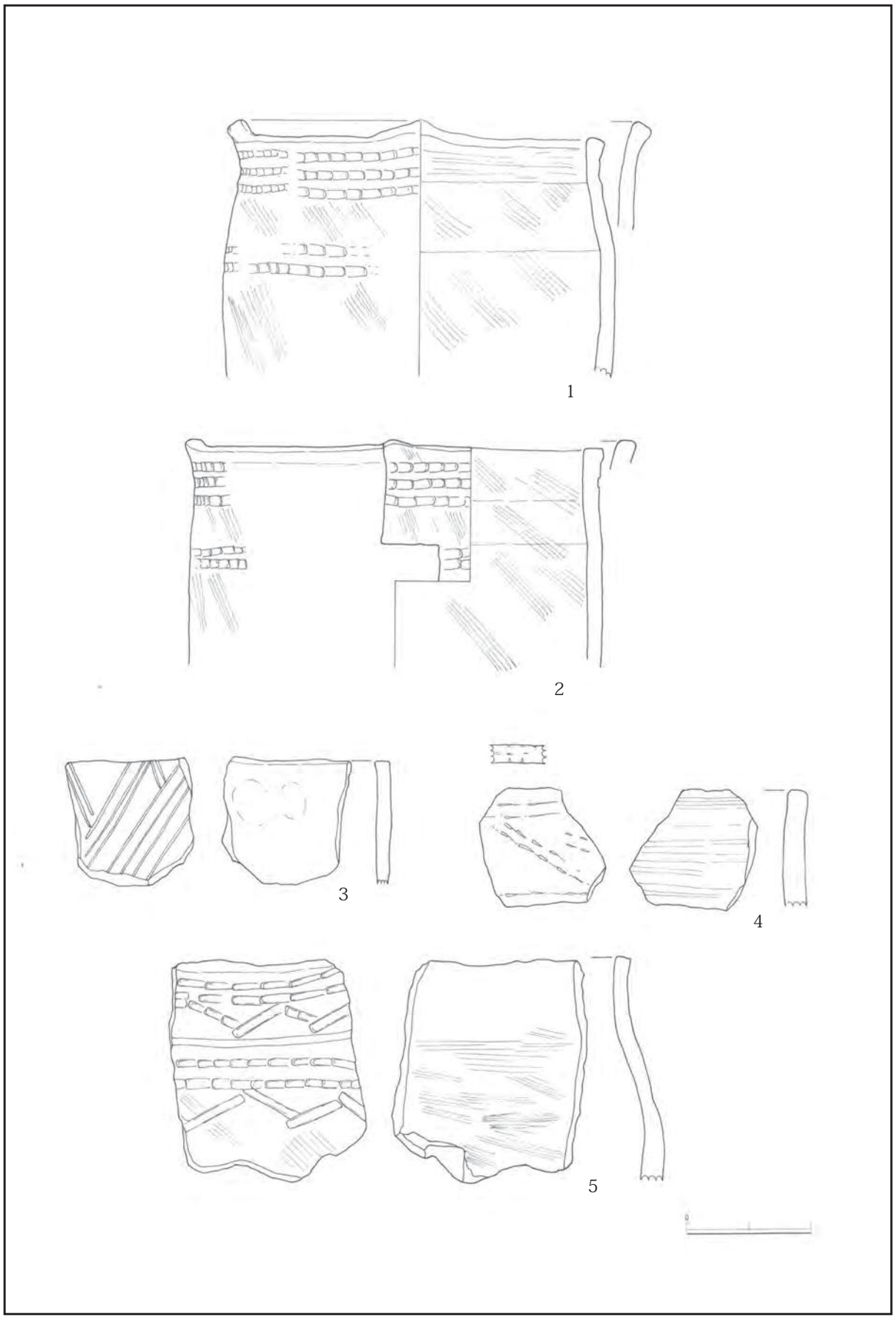
第 61 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土　有文土器（2）



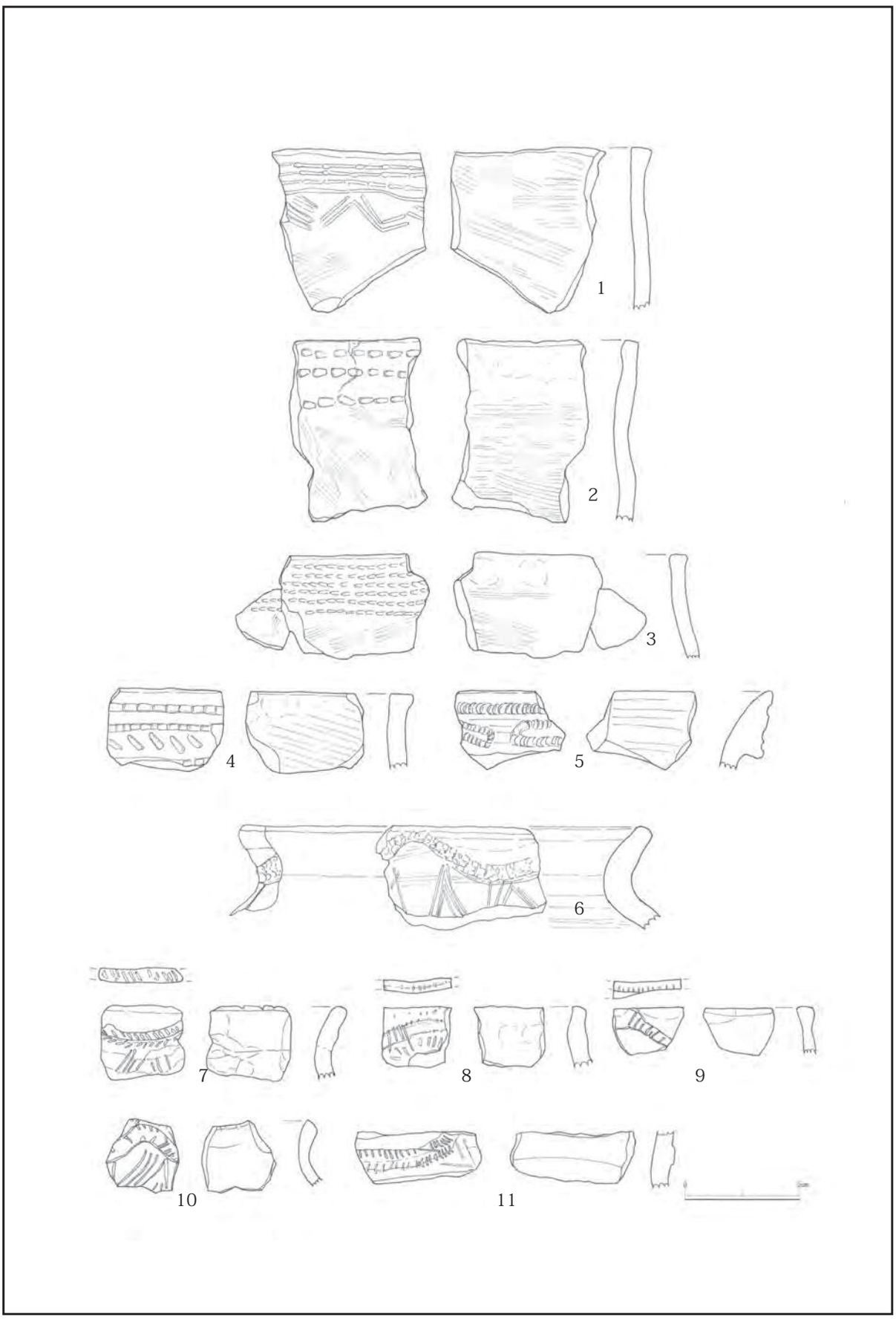
第 62 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土　有文土器（3）



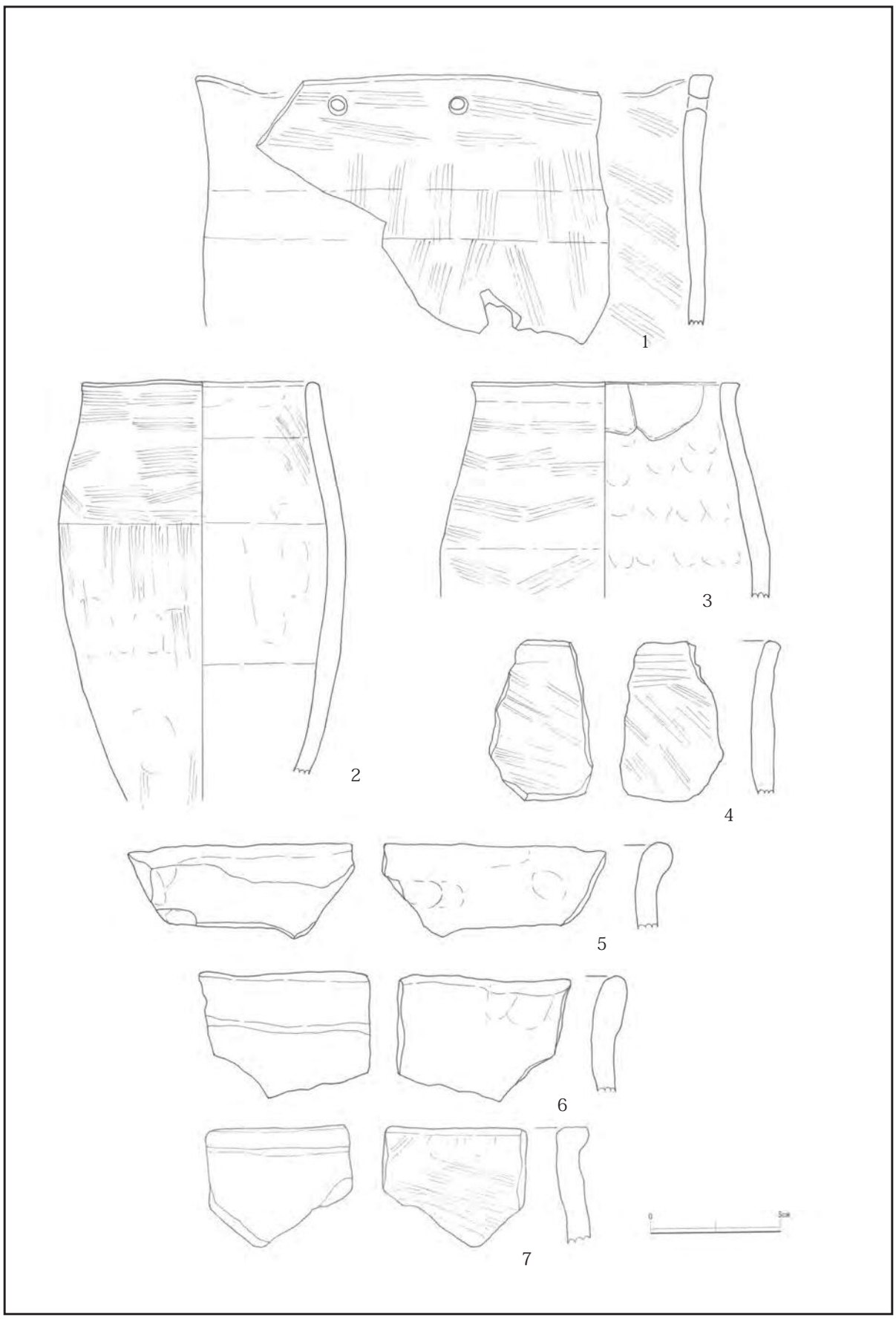
第 63 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土　有文土器（4）



第 64 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土　有文土器（5）

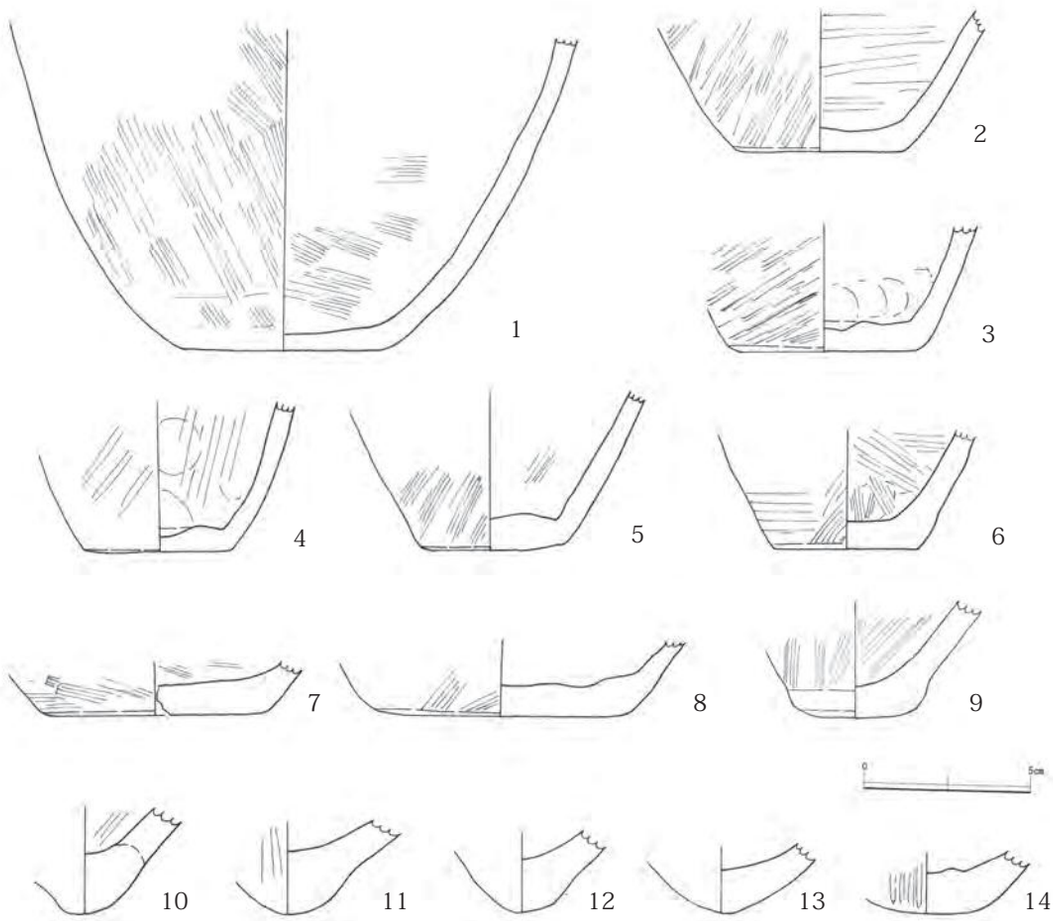


第 65 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層出土　有文土器（6）



第 66 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土　無文土器（1）

第 67 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土　無文土器（2）



第 68 図　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層出土　底部資料

面縄前庭式

面縄前庭式は徳之島伊仙町に所在する面縄貝塚（面縄第四貝塚）を標識遺跡とする土器で、Ⅵ層から出土した。

第 65 図 6 は口縁部片で、波状の突帯、鋸歯文が施される。口縁部は大きく外反する。口径 18.2cm、器厚 1.0cm を測る。

7 は平口縁で口縁部及び口唇部に施文が見られる資料である。口縁部には羽状文を持つ突帯が付され、その直下に鋸歯文が施される。口唇部には刻目文が施される。6 同様、口縁部が大きく外反する。器厚は 0.7cm を測る。

8 は平口縁資料で口縁部及び口唇部に施文が見られる。口縁部の外反度合は微弱である。器厚は 1.1cm を測る。

9 は平口縁資料で、後円部に突帯文と口唇部に刻目文が見られる。本製品は内湾気味にわずかに屈曲する。器厚は 0.6cm を測る。

10 は口縁の残存部分に屈曲が見られることから波状口縁の資料と思われる。口縁に刻目を施した突帯が見られ、その下部に鋸歯文が施される。器厚は 0.5cm を測る。

11 は頸部のみが残存している資料である。突帯が付され、突帯が羽状文のようになっている。器厚は 0.5cm を測る。

無文土器

Ⅵ層出土の無文土器は平口縁のものと山形口縁のものが出土している。以下、代表的な資料について報告を行う。なお、有段資料に関しては平口縁資料と分けて報告を行う。

平口縁資料

第 66 図 1 はⅥ層（0 ～ 10cm）より出土した口縁部片である。焼成が比較的良好であり、焼成、胎土から後期土器の可能性も否定できない。口縁部が波状を呈しており、口縁直下に有孔が 2 点見られる。頸部が微弱にくびれ、胴部が若干膨らむ。器面調整は横位のナデ調整、頸部から下方は縦位のナデ調整となる。法量は口径 20.4cm、器厚 0.7cm を測る。

2 はⅥ層より出土した底部付近まで残存している資料である。口縁部がやや波打つ平口縁で、頸部がややすぼまり、胴部が最大径となる。外面の調整は口縁部から胴部上半までが横位のナデ調整となり、胴部下半から下部にかけて縦位のナデ調整となる。また、指ナデによる調整も見られる。内面には指ナデ、ナデ調整が見られる。F-2 区、G-3 区より出土。口径 9.2cm、最大胴径 11.2cm を測る。

3 はⅥ層より出土した無文資料で、胴部まで残存している。器形は口縁直下でややすぼまり、胴部にかけて膨らみ、最大径となる。器面調整は内外面に指ナデによる調整が見られる。口径 10.4cm を測る。

4 は無文土器の口縁部破片資料で、やや外反する。器厚は 0.7cm を測る。

第 67 図 6 は有孔土器の破片資料である。器厚 0.7cm を測る。

山形口縁資料

第 67 図 2 は荻堂式土器の無文資料で、胴部下半まで残存している。内外面共にナデ調整が見られる。口径 11.4cm、器厚 0.7cm を測る。

同図 3、図 4 は共に山形口縁部片である。前者は器厚 1.0cm、後者は器厚 0.8cm を測る。

5 は明確な山形口縁ではないが、口縁部に弱い傾斜が見らえることから、こちらに記述する。口縁部に縦位の取手状の外耳を有する破片資料で、内湾している。器厚は 0.8cm を測る。

肥厚口縁資料

肥厚口縁資料では、器形を伺える資料を確認することが出来なかった。そのため、破片資料のみ報告を行う。これらの肥厚口縁土器の一部はⅥ層の最上層における出土見られた。Ⅵ層直上の埋葬遺構と同時期の遺物である可能性も否定できないが、本項において記載する。

第 66 図 5 は口縁部を肥厚させる資料である。内面に成形の際の指痕が見られる。器厚 0.8cm を測る。

同図 6 は口縁部断面を植木鉢状に肥厚させ、有段を作る資料である。器厚 0.9cm を測る。

同図 7 は口縁部断面を歯ブラシ状に作る資料である。内面にはナデ調整が見られる。器厚 0.8cm を測る。

第 67 図 1 は口縁断面が略三角形状に肥厚する資料である。口縁部が微弱に外反し、頸部がくびれ、胴部が膨らむ。器厚は 0.8cm を測る。

底部資料

Ⅵ層における底部資料はほとんどが平底であるが、尖底（丸底）がわずかに見られた。以下、底部形態に分けて記載する。

平底資料

平底資料は伊波式・荻堂式土器、「奄美系」土器などの底部となる。器面調整は内外面にナデ調整が見られ、内面には成形の際につけられたと思われる指痕を残す資料も見られた。

第 68 図 1 は胴部付近まで残存する破片資料で、底径 5.8cm、器厚 0.7cm を測る。2 は内外面にナデ調整が見られる。底径 5.0cm、器厚 0.6cm を測る。3 は内面に粘土帯接合の為の指圧痕が残る。底径 5.6cm、器厚 0.6cm を測る。4 は底径 4.4cm、器厚 0.6cm を測る。5 は底径 4.2cm、器厚 0.6cm を測る。6 は底径 4.2cm、器厚 0.7cm を測る。7 は推定底径 6.8cm、器厚 0.7cm を測る。8 は底径 7.7cm、器厚 0.5cm を測る。

尖底（丸底）資料

尖底（丸底）資料は面縄前庭式などの底部資料の可能性がある。各資料の器面調整に関しては外面にヘラ削りなどの調整を有する資料がいくつか見られた。第 66 図 9 ～ 12 に関しては乳房状尖底を呈する。

第 68 図 9 は内外面にヘラ削りによる器面調整がなされる。底径 3.4cm、器厚 0.8cm を測る。10 は器厚 0.9cm を測る。11 は乳房状尖底となる資料で、器厚 0.9cm を測る。12 は器厚 1.0cm

を測る。面縄前庭式の可能性がある。13 は器厚 0.8cm を測る。14 は丸底となる資料で、器厚 0.7cm を測る。

第 11 表　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器観察表

図	図版	出土地区	出土層	器種	器高	口径	底径	器厚	特記事項
58-1	1	H-2	Ⅵ層	深鉢形	-	17.0	-	0.6	山形口縁。
58-2	2	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.9	山形口縁。
58-3	3	H-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.7	山形口縁。
58-4	4	H-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.6	山形口縁。
58-5	5	F-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.6	山形口縁。
59-1	1	G-3	Ⅵ層	深鉢形	-	14.6	-	0.7	山形口縁。
59-2	2	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	13.1	-	0.7	山形口縁。
59-3	3	G-3	Ⅵ層	深鉢形	-	13.4	-	0.4	山形口縁。
59-4	4	H-2	Ⅵ層	深鉢形	-	10.7	-	0.6	山形口縁。
59-5	5	F-2、G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	16.0	-	0.8	山形口縁。
60-1	1	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	21.0	-	0.9	山形口縁。 口縁及び口唇部に施文。
60-2	2	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	14.6	-	0.8	山形口縁。 口縁及び口唇部に施文。
61-1	1	H-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.7	山形口縁。
61-2	2	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.9	山形口縁。
61-3	3	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.7	山形口縁。
61-4	4	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	1.2	山形口縁。
62-1	1	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	15.0	-	0.6	山形口縁。
62-2	2	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	17.0	-	0.5	山形口縁。
62-3	3	G-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.6	
62-4	4	D-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.9	口縁及び口唇部に施文。
62-5	5	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.8	
63-1	1	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.7	
63-2	2	G-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.7	
63-3	3	G-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.6	
63-4	4	H-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.8	
63-5	5	G-1	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.8	
63-6	6	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	18.2	-	1.0	突帯
63-7	7	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.7	突帯
63-8	8	E-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	1.1	突帯
63-9	9	G-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.6	突帯
63-10	10	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.5	波状口縁。突帯
63-11	11	F-3	Ⅵ層	-	-	-	-	0.5	突帯
64-1	1	D-2	Ⅵ層	深鉢形	-	20.4	-	0.7	有孔
64-2	2	F-2、G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	9.2	-	0.7	
64-3	3	G-3	Ⅵ層	深鉢形	-	10.4	-	0.7	
64-4	4	H-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.7	
64-5	5	E-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.8	肥厚口縁
64-6	6	H-3	Ⅵ層直上	深鉢形	-	-	-	0.9	肥厚口縁
64-7	7	G-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.8	肥厚口縁

図	図版	出土地区	出土層	器種	器高	口径	底径	器厚	特記事項
65-1	1	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.8	肥厚口縁
65-2	2	D-2	Ⅵ層	深鉢形	-	11.4	-	0.7	山形口縁
65-3	3	G-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	1.0	山形口縁
65-4	4	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.8	山形口縁
65-5	5	H-3	Ⅵ層	-	-	-	-	0.8	取手状外耳
65-6	6	H-3	Ⅵ層	-	-	-	-	0.7	有孔
66-1	1	E-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	5.8	0.7	
66-2	2	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	5.0	0.6	
66-3	3	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	5.6	0.6	
66-4	4	G-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	4.4	0.6	
66-5	5	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	4.2	0.6	
66-6	6	H-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	4.2	0.7	
66-7	7	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	6.8	0.7	
66-8	8	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	7.7	0.5	
66-9	9	E-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	3.4	0.8	
66-10	10	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.9	
66-11	11	H-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.9	
66-12	12	G-3	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	1.0	
66-13	13	F-2	Ⅵ層	-	-	-	-	0.8	炉跡５の下層より出土
66-14	14	F-2	Ⅵ層	深鉢形	-	-	-	0.7	
42-1	1	H-3	竪穴住居跡１	深鉢形	-	13.0	-	0.6	山形口縁。 口縁及び口唇部に施文。
42-2	2	H-3	竪穴住居跡１	-	-	-	-	0.6	突帯。
42-6	6	G-2	竪穴住居跡２	深鉢形	-	12.8	-	0.8	山形口縁。無文。
42-7	7	D-2	竪穴住居跡２		-	-	-	0.8	外耳
45-1	1	F-2	炉跡４	深鉢形	-	13.0	-	0.7	山形口縁。
45-2	2	F-2、G-2	炉跡４	深鉢形	-	14.0	-	0.6	山形口縁。 口縁及び口唇部に施文。
45-3	3	F-2	炉跡４	深鉢形	-	-	-	0.7	口縁及び口唇部に施文。
45-4	4	F-2	炉跡４	深鉢形	-	-	-	0.7	口縁及び口唇部に施文。
45-5	5	F-2	炉跡４	深鉢形	-	-	-	1.0	口縁及び口唇部に施文。
47-1	1	F-2	炉跡５	深鉢形	-	13.4	-	0.7	突帯。
47-2	2	F-3	炉跡５	深鉢形	-	-	-	0.7	
47-4	4	F-2	炉跡５	深鉢形	-	-	6.4	0.8	
47-5	5	G-1,D・E-2	大型焼成遺構	深鉢形	-	19.3	-	0.6	山形口縁。突帯。

石器・石製品

石器・石製品はⅣ層及びⅥ層において出土している。以下、各層に分けて石器の報告を行う。

Ⅳ層出土石器

Ⅳ層では，石斧１点，凹石１点，敲石９点，磨石７点，礫器１点，砥石３点，石皿１点，礫４点が出土した。石材には，緑色岩・チャート・砂岩・粘板岩等がみられた。

石斧

１は，Ｈ３区・Ⅳ層下部から出土した石斧である。刃部を欠損しているが，磨製石斧の基部であり側縁部に敲打による整形痕がみられる。

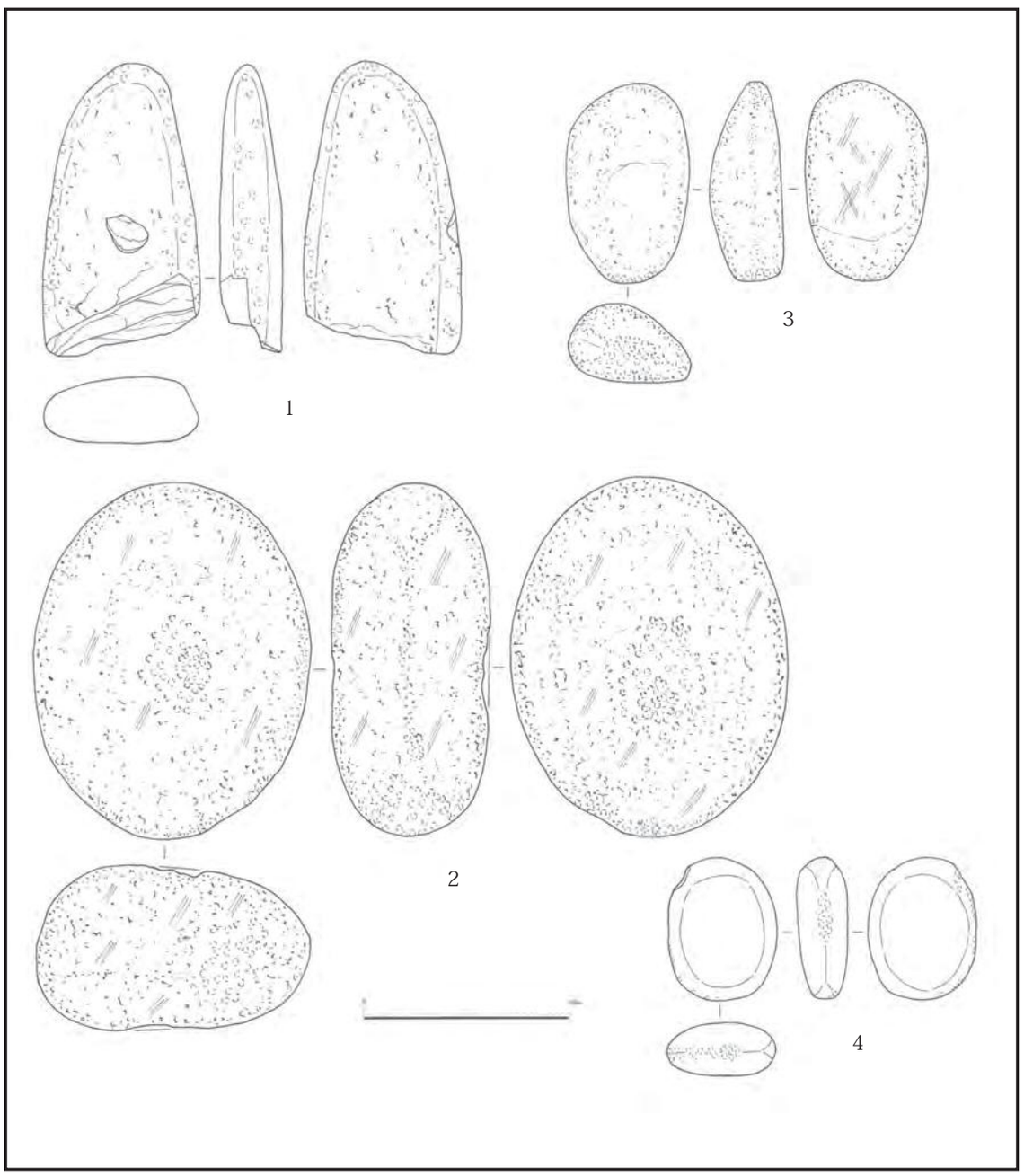
石器

Ⅳ層では，石斧１点，凹石１点，敲石９点，磨石７点，礫器１点，砥石３点，石皿１点，礫４点が出土した。石材には，緑色岩・チャート・砂岩・粘板岩等がみられた。

１は，Ｈ３区・Ⅳ層下部から出土した石斧である。刃部を欠損しているが，磨製石斧の基部であり側縁部に敲打による整形痕がみられる。

２は，砂岩の自然礫を石材に用いた凹石で，磨り面・敲打痕に凹みがあるものである。表裏二面２か所に凹みがみられ，凹みの深さは0.3㎝を測る。

磨石は９点出土し，５点を図化した。３は，大形の砂岩自然礫を用いたもので，下端部から側辺部にかけて敲打痕がみられる。火を受けた痕跡があり，表面はボロボロである。４はチャ



第69図 Ⅳ層出土石器（１）　石斧・凹石・敲石

ートの摩耗円礫を石材に用いたもので，側縁部に敲打痕がみられるが，磨り面はみられない。

５～７は磨り面・敲打痕のあるもので５は，ややいびつな形の砂岩自然礫を石材に用いたもので，上下両端に敲打痕がみられる。側辺部には敲打痕はみられず，平坦な下面には研磨痕がみられ磨石としての用途も兼ねている。６は，球状の砂岩自然礫を石材に用い，表面中央部及び側辺部に敲打痕がみられる。７は，砂岩円礫を用いた敲石である。敲打痕は下面中央部と片側面のみであるが，研磨痕が顕著で磨石としての使用が主であったと思われる。

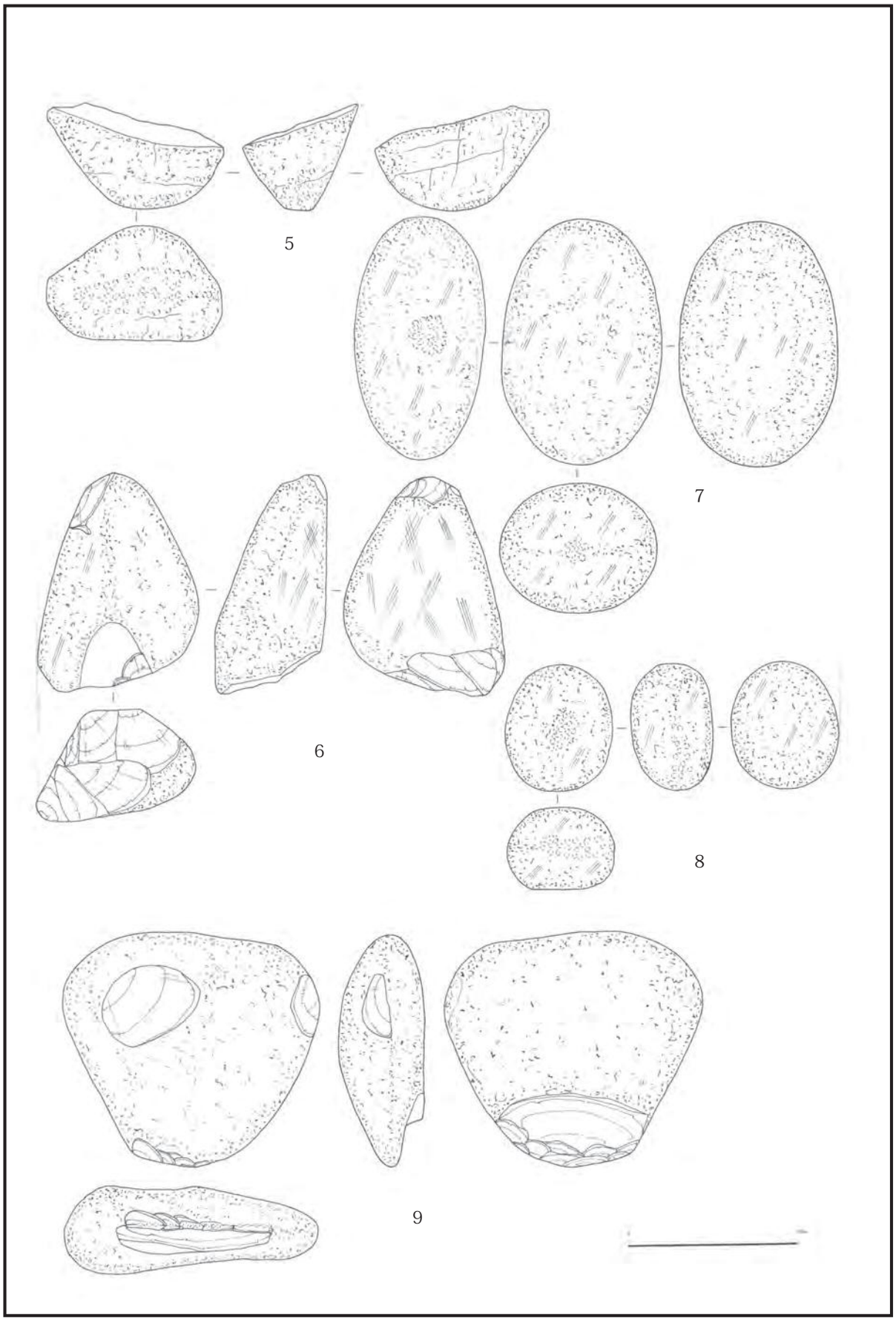
磨石は７点出土したが１点を図化した。８は，砂岩の自然礫を用いた断面三角形の磨石である。三角形の底面は研磨痕が顕著で光沢を発している。

９は，砂岩製の円礫を石材に用い，下端部を交互剥離によって刃部を形成した礫器である。

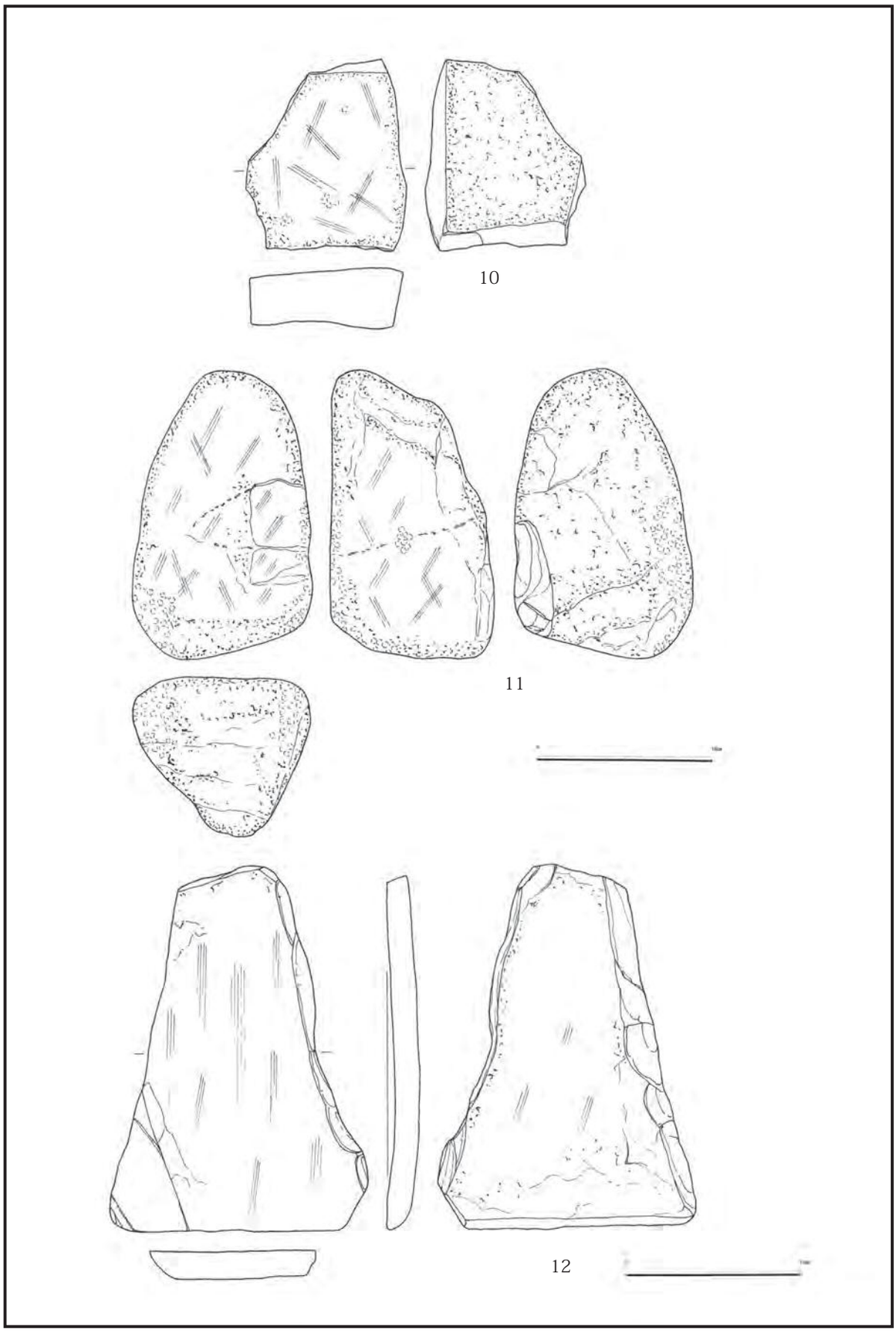
10・11 は扁平な砂岩を石材に用いた砥石で，10 は片面，11 は表裏面ともに磨り面がみられる。11 は研磨面が湾曲していることから使用頻度が高かったと想定されるが，石皿としての使用も考えられる。12 は砂岩の自然礫を石材に用い，二面に研磨痕がみられるものである。

第 10 表 Ⅳ層出土石器一覧表

挿図	番号	器種	石材	区	層	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺物番号	備考
68	1	石斧(基部)	砂岩	H3	Ⅳ下	13.0	9.5	6.6	397		
	2	凹石	砂岩	H3	Ⅳ上	16.3	13.6	7.7	1246	2	
	3	敲石	砂岩	I3	Ⅳ上	9.1	6.1	3.6	300	40	
	4	敲石	チャート	H3	Ⅳ上	6.5	5.4	2.5	136	33	
69	5	敲石	砂岩	H3	Ⅳ上	(6.3)	10.4	6.9	343	25	
	6	磨石	砂岩	G4	Ⅳ下	(13.4)	9.4	6.8	831		
	7	敲石	砂岩	G3	Ⅳ下	7.5	6.4	4.9	369	57	
	8	磨石	砂岩	H3	Ⅳ上	14.5	9.4	7.7	1524	27	
	9	礫器	砂岩	H4	Ⅳ下	14.8	15.0	5.1	1332	76	
70	10	砥石	砂岩	H3	Ⅳ上	11.0	9.3	3.5	526	26	
	11	砥石	砂岩	H3	Ⅳ下	16．7	10．4	9．5	1420	72	
	12	砥石	砂岩	H3	Ⅳ下	20.9	15.0	1.5	661	74	
	13	敲石	砂岩	H3	Ⅳ上	(8.1)	9.3	(5.1)	490	24	
	14	敲石	砂岩	F4	Ⅳ下	(5.6)	8.0	(3.9)	174		
	15	敲石	チャート	G3	Ⅳ下	9.3	6.7	4.7	440		
	16	敲石	チャート	G3	Ⅳ下	9.3	6.7	4.6	411	56	
	17	磨石	砂岩	H3	Ⅳ上	9.3	4.0	4.7	232		
	18	磨石	砂岩	G3	Ⅳ下	(5.7)	(5.7)	(4.0)	97	57	
	19	磨石	砂岩	G3	Ⅳ下	(5.0)	(4.7)	(2.6)	74	57	
	20	磨石	砂岩	G3	Ⅳ下	(4.7)	(3.5)	(1.9)	41	57	
	21	磨石	砂岩	H3	Ⅳ下	(4.3)	8.2	(5.7)	303	70	
	22	磨石	砂岩	G3	Ⅳ上	4.9	4.3	1.7	32		
	23	石皿	砂岩	H3	Ⅳ下	(7.9)	(5.1)	(13.2)	403		
	24	礫	粘板岩	G3	Ⅳ下	18.8	11.1	3.8	1278	66	
	25	礫	砂岩	G4	Ⅳ下	(8.4)	(2.8)	(4.1)	97	54	
	26	礫	砂岩	G3	Ⅳ下	10.7	6.1	5.3	445	58	
	27	礫	砂岩	G3	Ⅳ上	(7.1)	(3.3)	1.7	58		



第 70 図 Ⅳ層出土石器（2） 敲石・磨石



第 71 図 Ⅳ層出土石器（3） 砥石

Ⅵ層の石器

Ⅵ層の石器は，石斧 27 点・凹石 4 点・敲石 30 点・磨石 51 点・チャート剝片 10 点・チャート原石 1 点・楔形石器 2 点・扁平磨製石器 2 点・双角状石器 1 点・円盤形礫器 1 点・礫器 5 点・石錘 1 点・砥石 2 点・石鏃 5 点が出土している。

石材には，緑色岩・輝緑岩・チャート・粘板岩・頁岩・砂岩がみられた。

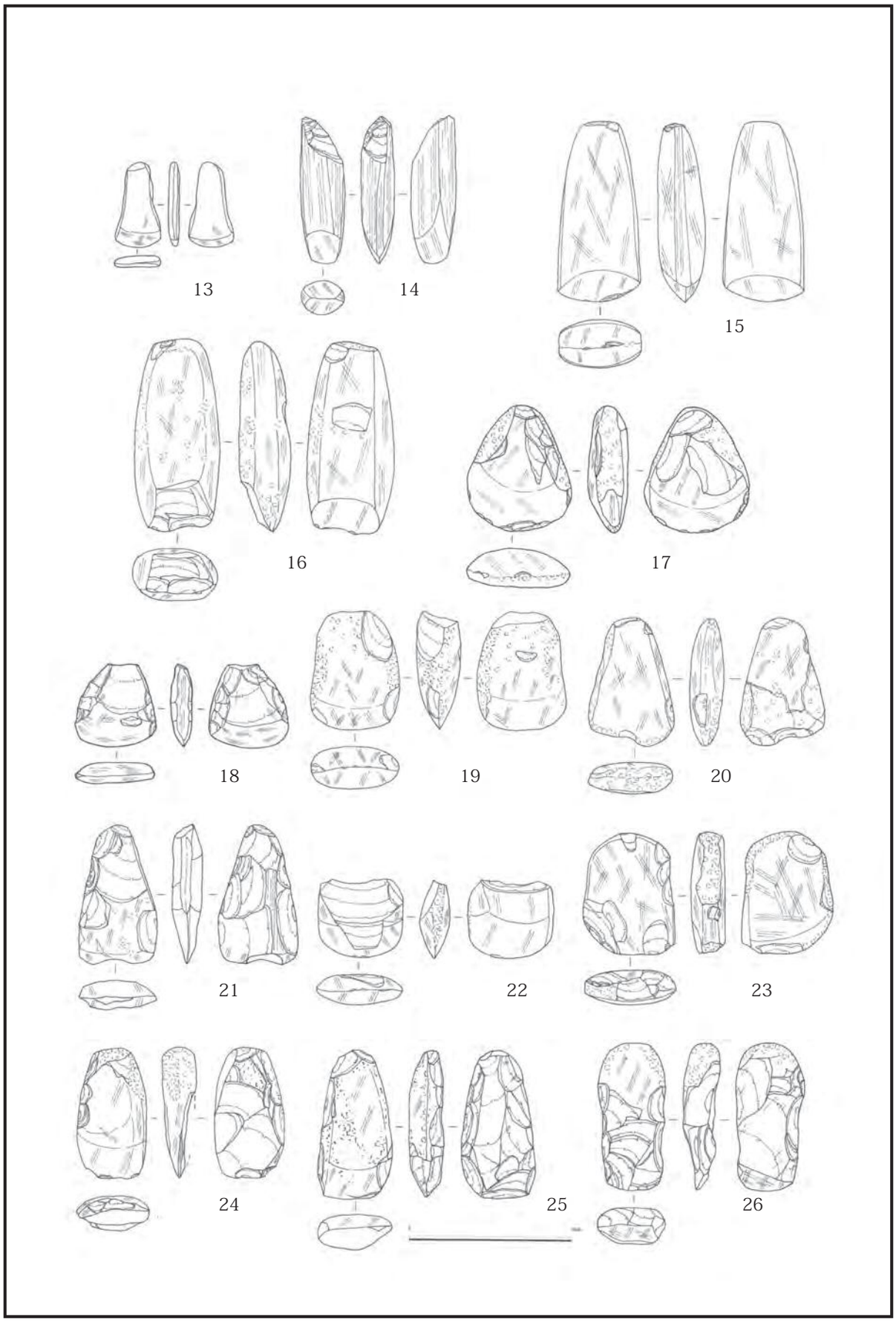
石斧

石斧は 22 点出土し，そのうち 18 点を図示した。

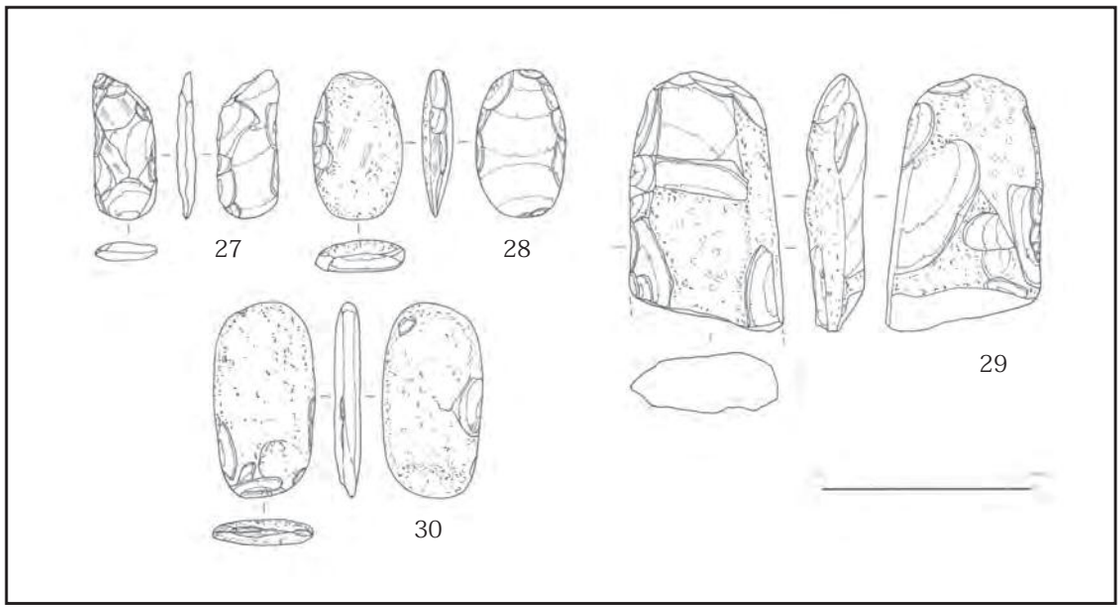
13 は，粘板岩の扁平礫を用いたもので，側辺部は自然面を残しバチ状を呈す。刃部は片刃であるがシャープさはなく，石斧ではない可能性もある。14 は，基部を欠損しているが、小型の両刃磨製石斧である。刃部には使用痕がみられる。15 は，完形品で基部には敲打痕が，刃部は両刃で使用痕がみられる。磨り面は丁寧で光沢がみられる。16 は，基部が直線で，刃部は円刃と思われるが欠損している。側辺部は敲打で整形し，研磨仕上げで磨製石斧を作成している。刃先から敲打を加え楔状の刃部をつくり，楔形石器としての使用も考えられる。17 ～ 19 は幅広で最大長が短いバチ状の形態を呈している磨製石斧である。いずれも円刃で，使用痕がみられる。20・21 も同様の形状であるが，20 は刃部が敲打され，21 は刃部が細いものである。22 は刃部のみであるが，蛤刃で使用痕が顕著にみられる。23 は側辺上部に柄の装着用と思われる抉りが 2 か所にみられ，基部も敲打痕がみられる。刃部は敲打痕がはっきりしている刃部で，敲石の可能性もある。24 はやや膨らみをもつ短冊状の形状を呈し，基部は直線で敲打痕がみられる。

第 13 表 Ⅵ層出土石器一覧表（1）石斧

図版	番号	器種	石材	区	層	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺物番号	備考
71	13	小型磨製石斧	シルト岩	G2	Ⅵ下	5.3	2.9	0.7	14	314	
	14	ﾐﾆ型磨製石斧	砂岩	H2	Ⅵ下	9.1	2.8	2.1	78	408	
	15	磨製石斧	輝緑岩	H2	Ⅵ直上	11.2	5.1	3.0	278	77	
	16	磨製石斧	班レイ岩	E3	Ⅵ上	11.9	5.2	3.2	345	275	
	17	磨製石斧	緑色岩	F2	Ⅶ	7.7	6.5	2.5	181		
	18	磨製石斧	砂岩	F2	Ⅵ上	5.1	5.0	1.3	52	398	
	19	磨製石斧	輝緑岩	F1	Ⅵ	7.3	5.5	2.7	172		
	20	磨製石斧	輝緑岩	C3	Ⅵ上	7.9	5.3	2.1	125		
	21	磨製石斧	砂岩	C2	Ⅵ下	8.6	4.9	1.9	87		
	22	磨製石斧	砂質ハン岩	F3	Ⅵ下	(4.9)	5.3	1.9	75	332	
	23	磨製石斧	緑色岩	G2	Ⅵ下	7.5	5.6	2.1	166		
	24	磨製石斧	砂岩	F2	Ⅵ上	8.1	4.3	2.2	93		
	25	磨製石斧	安山岩	H2	Ⅵ上	9.1	4.5	2.2	126	99	
	26	局部磨製石斧	班レイ岩	H3	Ⅵ下	9.1	4.2	2.3	123		
72	27	小型磨製石斧	砂質片岩	E3	Ⅵ下	7.0	3.0	0.9	25	360	
	28	打製石斧	砂岩	D2	Ⅵ	7.0	4.4	1.5	63	356	
	29	石斧	粘板岩	F3	Ⅵ下	9.3	4.9	1.2	89		
	30	石斧	砂岩	F2	Ⅵ上	12.4	7.4	2.9	438		
	31	磨製石斧	班レイ岩	H3	Ⅵ上	(6.1)	4.8	2.5	97		
	32	磨製石斧	緑色岩	G3	Ⅵ上	(4.2)	4.7	2.3	63	13	
	33	磨製石斧	砂岩	G3	Ⅵ	(5.2)	(3.6)	1.6	50	21	
	34	磨製石斧	緑色片岩	F2	Ⅵ下	10.0	6.3	1.7	200	22	
	35	磨製石斧	玄武岩	G1	Ⅵ下	(9.2)	5.2	2.9	191	23	
	36	磨製石斧	安山岩	D3	Ⅵ上	(7.8)	6.8	2.7	178	24	
	37	打製石斧	黒色片岩	F2	Ⅵ上	9.4	5.3	1.7	106	25	
	38	打製石斧	角閃石安山岩	E2	Ⅵ上	10.5	6.0	1.4	122	26	
	39	打製石斧	砂岩	F2	Ⅵ上	(7.0)	6.0	1.8	108	27	
	40	局部磨製石斧	砂岩	H2	Ⅵ下	9.8	5.1	1.9	124		
	41	磨製石斧	砂岩	D3	Ⅵ下	7.2	5.6	2.1	122		



第 72 図 Ⅵ層出土石器（1）　石斧（1）



第 73 図 Ⅵ層出土石器（2） 石斧（2）

刃部は片刃の円刃で使用痕がみられる。整形は敲打で行われ，刃部周辺は丁寧な研磨が施されている。25 は，片面に自然面を残しながら，刃部と中央付近を研磨している局部磨製石斧である。裏面は剥離整形を行っている。形状はバチ状を呈し，基部は円く，刃部は直刃である。26 は，基部が円く敲打整形され，刃部は片刃を呈す。基部・刃部以外の側縁部は粗い剥離で整形を行っている。刃部は丁寧な研磨を施している。27 は基部が欠損し，刃部も剥脱しているが，片面に研磨痕がみられ局部磨製石斧であることがわかる。28 は，砂岩の円礫を石材に用い両端部からの剥出で剥片を作成し，周縁を調整して石斧状の形状をなす。側縁部には研磨痕がみられるが，使用痕は認められない。29 は扁平な粘板岩の自然礫を用いた石斧である。側縁部は敲打により整形し，剥離により刃部を作り出している。30 は，大型の砂岩自然礫を用いた打製石斧である。刃部は欠損して不明であるが，片側片は自然面を残し，片面は剥離調整により整形している。また，表裏面は敲打により整形している。

凹石・敲石・磨石

凹石・敲石・磨石は，元来分類すべきであろうが，形態の類似性や痕跡の複合製など，分類が難しく，同一の項で取り扱うことにした。

凹石（31 ～ 34）

凹石は，凹みのあるもの全てを凹石で取り扱った。凹みがあり，敲打痕・磨り面がみられるものなど 4 点が出土した。

31 は， 4 面 4 か所に凹みが，上下端部に敲打痕がみられるものである。凹みの深さは 0.3 ～ 0.4㎝で研磨痕はみられない。32 は，表裏面に 2 か所凹みがあり，磨り面がみられ，周縁部全周に敲打痕がみられるものである。凹みの深さは浅く 0.2㎝程度である。33 は， 4 面 4 か所に凹みが，上下両端に敲打痕がみられるものである。全体的に磨り痕がみられ，凹みの深さは浅く 0.2 ～ 0.3㎝である。34 も 3 同様， 4 面 4 か所に凹みが，上下両端に敲打痕がみられるものである。凹みは深く 0.7 ～ 0.8㎝を測る。また，表裏面とも磨り面が確認される。

敲石（35 ～ 42）

敲石は 29 点出土し，そのうち 7 点を図示した。39・42 を除いて全てに磨り面がみられる。石材は，サンゴ塊・珪岩・安山岩・緑色岩が一部みられるが，砂岩が多数を占める。

35 は，砂岩の自然礫を用い，敲打によって周縁を調整し，上面および下面に磨り面がみられるものである。下面の磨り面は平坦を呈し，下端部に敲打痕がみられる。36 は，サンゴ礫を楕円形に整形し，上・下端および側面に敲打痕がみられるもので，全体的に磨り面もみられる。37 は，砂岩の自然礫を石材に用いたもので，周縁部に敲打痕がみられる。上・下端は平坦な磨り面をもつものである。38 は，砂岩の自然礫を石材に用いたもので，下端部に敲打痕がみられる。39 は，珪岩で拳大の自然礫を石材に用い，上・下端に敲打痕がみられる。40 は，砂岩の大型礫を用い，下端部全体に敲打痕がみられ，その他の面には磨り面がみられる。杵のような敲き潰す用途をもった敲石であろうか。41 は，砂岩の扁平礫を用いたもので，下端部に敲打痕がみられる。42 は，石斧の再利用とも考えたが，当初より敲石を意識して整形を行ったことも考えられる。砂岩の自然礫を石材に用い，側縁部を両面加工により調整を施し，敲打痕がその先端部にみられる。

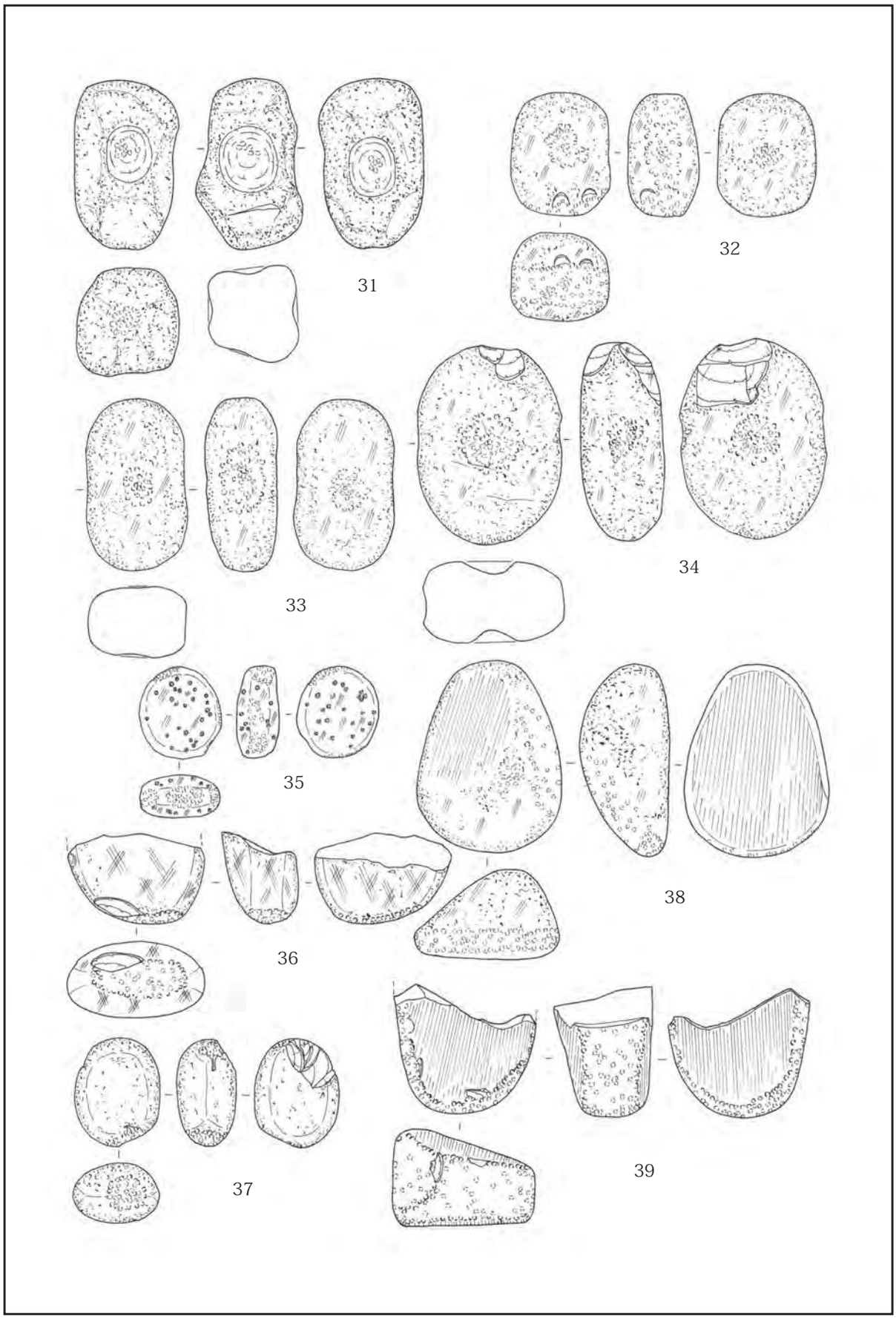
磨石（43・44）

磨石は 51 点出土したが， 2 点を図示した。

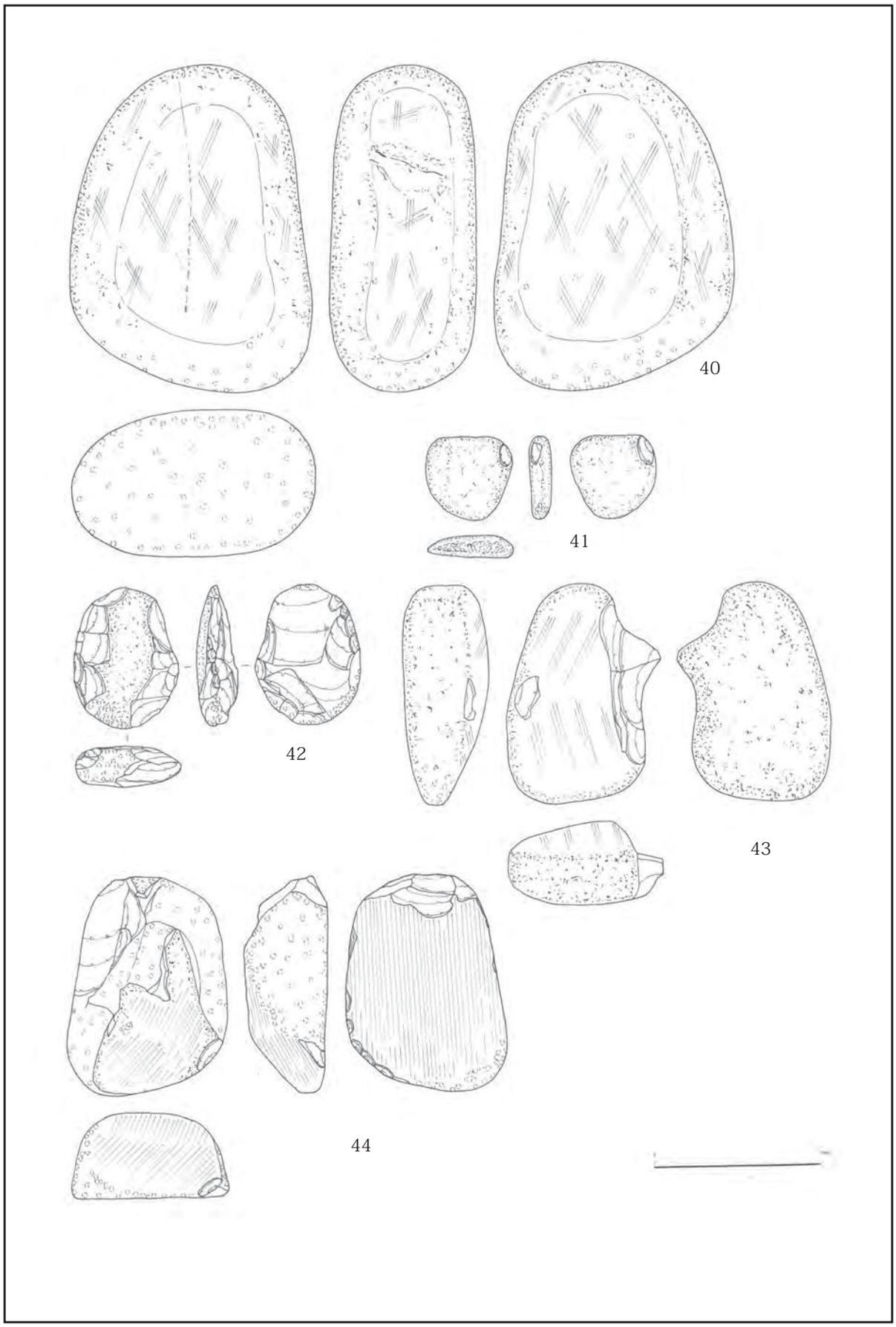
石材は，全て砂岩で，拳大の石材を用いたものが多く，全周に敲打痕がみられるものが大半である

43 は，砂岩の大型礫を石材に用いたもので，片面に長軸方向に研磨した痕がみられる。

44 は，安山岩の大型礫を石材に用いたもので，敲打により周辺を整形し，上面端および下面に磨り痕がみられるもので，下面の磨り面は平坦である。やはり長軸方向に平行な研磨を行い，バレンの様な用途に使ったのであろうか。



第 74 図 Ⅵ層出土石器（3）　凹石・敲石



第 75 図 Ⅵ層出土石器（4）　敲石・磨石

第 14 表 Ⅵ層出土石器一覧表（2）凹石・石敲

番号	器種	石材	区	層	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺物番号
31	凹石	安山岩	G3	Ⅵ上	10.6	6.5	6.7	657	183
32	凹石	砂岩	G2	Ⅶ	7.7	6.2	4.5	364	
33	凹石	砂岩	E2	Ⅵ上	10.8	6.3	4.4	522	331
34	凹石	安山岩	F1	Ⅵ下	2.4	9	5.2	760	399
35	敲石	砂岩	H3	攪乱	12.0	8.9	5.6	772	
36	敲石	サンゴ塊	D2	Ⅵ上	5.7	5.1	2.7	84	
37	敲石	砂岩	G3	Ⅵ下	(8.0)	8.9	6.1	518	
38	敲石	砂岩	E3	Ⅵ	(5.6)	8.5	4.8	290	
39	敲石	硅岩	E2	Ⅵ上	6.7	5.3	3.7	175	
40	敲石	砂岩	E3	Ⅵ下	19.8	14.7	8.9	4100	361
41	敲石	砂岩	F2	Ⅶ	5.1	5.3	1.3	58	
42	敲石	砂岩	H1	Ⅵ上	8.6	6.4	2.5	170	
43	磨石	輝石安山岩	E3	Ⅵ下	13.2	9.7	5.0	761	
44	磨石	安山岩	F2	Ⅵ下	13.4	9.5	4.5	932	
15	敲石	サンゴ塊	E3	一括	(10.2)	(5.8)	5.8	388	
16	敲石	砂岩	H3	Ⅵ上	(14.0)	(13.5)	(10.8)	1851	98
17	敲石	砂岩	H2	Ⅵ上	11.7	7.4	(3.4)	474	
18	敲石	砂岩	F2	Ⅵ上	(8.7)	(4.5)	5.5	320	
19	敲石	砂岩	F2	Ⅵ上	(13.8)	(5.2)	7.6	796	
20	敲石	砂岩	G3	Ⅵ上	(5.9)	(8.2)	(2.5)	180	
21	敲石	砂岩	G2	Ⅶ	7.8	6.2	5.9	377	
22	敲石	砂岩	F2	Ⅵ上	(8.1)	(8.0)	(2.0)	164	
23	敲石	砂岩	D2	Ⅵ上	(9.9)	(5.3)	(3.3)	228	
24	敲石	砂岩	D2	Ⅵ上	(6.4)	(5.2)	(6.0)	204	
25	敲石	砂岩	D3	Ⅵ上	(4.4)	9.8	(3.4)	213	
26	敲石	砂岩	D2	Ⅵ	(5.2)	8.1	5.9	198	
27	敲石	砂岩	D2	Ⅵ	(8.9)	(4.3)	(5.2)	297	
28	敲石	砂岩	D2	Ⅵ下	9.9	8.6	4.9	496	
29	敲石	砂岩	H4	Ⅵ	(7.8)	(3.2)	(4.3)	140	
30	敲石	砂岩	G2	Ⅵ上	(2.0)	(5.9)	(3.6)	132	
31	敲石	砂岩	F2	Ⅵ上	(7.8)	(8.4)	(2.0)	180	
32	敲石	砂岩	F2	Ⅵ	(6.9)	5.1	(1.4)	88	
33	敲石	砂岩	F2	Ⅵ下	(6.1)	5.5	4.0	171	
34	敲石	砂岩	F1	Ⅵ下	(8.0)	(4.9)	(4.7)	218	
35	敲石	砂岩	G2	Ⅶ	(6.7)	(5.2)	(1.5)	46	
36	敲石	砂岩	F2	Ⅵ下	9.0	4.1	2.3	132	
37	敲石	砂岩	G2	Ⅵ下	8.3	7.0	2.6	232	
38	敲石	砂岩	H2	Ⅵ下	6.7	4.3	2.4	88	
39	敲石	緑色岩	D3	Ⅵ下	5.1	4.5	1.1	35	
40	磨石	砂岩	H3	Ⅵ上	(5.9)	(7.9)	(6.5)	298	
41	磨石	砂岩	H3	Ⅵ上	(6.7)	(6.5)	(3.2)	203	
42	磨石	砂岩	G3	Ⅵ上	(7.6)	(6.5)	(3.2)	212	
43	磨石	砂岩	H3	Ⅵ上	(6.3)	(3.7)	(1.5)	34	
44	磨石	砂岩	H3	Ⅵ上	(5.8)	(2.7)	(1.8)	24	
45	磨石	砂岩	G2	Ⅵ上	(7.8)	(5.7)	(5.2)	280	
46	磨石	砂岩	H3	Ⅵ上	13.3	(5.7)	8.6	788	220
47	磨石	砂岩	G2	Ⅵ	(6.5)	(6.7)	(2.6)	95	
48	磨石	砂岩	F2	Ⅵ上	(6.5)	(5.6)	(1.5)	66	
49	磨石	砂岩	F2	Ⅵ上	11.8	5.0	4.0	324	
50	磨石	砂岩	F3	Ⅵ	(11.2)	(7.3)	(5.9)	468	
51	磨石	砂岩	F3	Ⅵ	13.8	(5.2)	5.9	506	
52	磨石	砂岩	F2	Ⅵ	14.7	(5.2)	(3.5)	419	
53	磨石	砂岩	G3	Ⅵ	11.3	9.0	(4.6)	507	
54	磨石	砂岩	E2	Ⅵ上	(5.0)	(4.7)	(1.4)	43	
55	磨石	砂岩	G2	Ⅵ下	(6.6)	(5.6)	(1.2)	52	
56	磨石	砂岩	G3	Ⅵ下	(4.8)	(5.9)	(2.1)	82	
57	磨石	砂岩	F2	Ⅵ上	(5.0)	(4.3)	(3.1)	66	
58	磨石	砂岩	H3	Ⅵ上	(5.4)	(4.3)	(2.7)	67	
59	磨石	砂岩	D2	Ⅵ上	(9.1)	(5.6)	(2.5)	94	
60	磨石	砂岩	D2	Ⅵ上	(6.0)	(5.2)	(5.4)	76	
61	磨石	砂岩	D2	Ⅵ上	(8.5)	(6.7)	(2.7)	88	
62	磨石	砂岩	C3	Ⅵ	(7.2)	(3.6)	(2.4)	47	
63	磨石	砂岩	D2	Ⅵ	(6.5)	(4.1)	(3.5)	91	
64	磨石	砂岩	H3	Ⅵ	(11.0)	(6.1)	(3.7)	225	
65	磨石	砂岩	D3	Ⅵ	(7.4)	(3.7)	(2.1)	58	

第 15 表 Ⅵ層出土石器一覧表（3）磨石

番号	器種	石材	区	層	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺物番号
66	磨石	砂岩	D3	Ⅵ	(6.4)	(3.1)	(2.8)	55	
67	磨石	安山岩	C3	Ⅵ上	(5.8)	(3.9)	(1.5)	34	
68	磨石	砂岩	D2	Ⅵ下	(8.4)	(5.6)	(2.0)	159	
69	磨石	砂岩	D2	Ⅵ下	(5.7)	(2.8)	(2.5)	42	
70	磨石	安山岩	E2	Ⅵ下	(3.0)	(4.8)	3.1	66	
71	磨石	安山岩	E2	Ⅵ下	(9.3)	(4.8)	(5.9)	268	
72	磨石	砂岩	C3	Ⅵ下	(7.8)	(4.8)	(2.8)	117	
73	磨石	砂岩	C3	Ⅵ下	(10.4)	(5.2)	(2.1)	119	
74	磨石	砂岩	D4	Ⅵ	9.6	7.4	(3.0)	248	
75	磨石	砂岩	G2	Ⅵ上	(7.7)	(6.0)	(4.4)	282	
76	磨石	砂岩	D2	Ⅵ上	(6.5)	(5.5)	(3.9)	152	
77	磨石	安山岩	E2	Ⅵ上	(6.9)	(7.3)	(5.8)	457	
78	磨石	硅岩	E2	Ⅵ上	(6.3)	(6.5)	(6.0)	382	
79	磨石	砂岩	G2	Ⅵ下	13.3	9.5	(4.1)	570	
80	磨石	砂岩	F2	Ⅵ上	(5.9)	(3.7)	(0.9)	24	
81	磨石	安山岩	E2	Ⅵ下	(4.6)	(4.8)	(4.0)	68	
82	磨石	砂岩	E2	Ⅵ下	13.9	10.1	5.2	938	
83	磨石	砂岩	C2	Ⅵ	(2.5)	(8.3)	(3.1)	107	
84	磨石	安山岩	F1	Ⅵ下	(9.4)	(3.4)	(3.3)	159	
85	磨石	砂岩	F1	Ⅵ	(5.8)	(2.8)	(4.2)	182	
86	磨石	砂岩	F2	Ⅵ下	(4.6)	(3.2)	(2.1)	27	
87	磨石	砂岩	F1	Ⅵ上	(5.1)	(5.9)	5.0	142	
88	磨石	砂岩	H2	Ⅵ下	5.3	8.0	2.4	96	
89	磨石	砂岩	F2	Ⅵ下	10.2	8.0	2.2	165	
90	磨石	砂岩	G2	Ⅵ下	3.5	3.7	1.1	15	
91	磨石	砂岩	H2	Ⅵ下	8.0	4.6	1.2	72	
92	磨石	砂岩	H2	Ⅵ下	5.6	4.2	1.2	95	
93	磨石	砂岩	F2	Ⅵ下	5.7	3.8	3.0	76	
94	磨石	砂岩	D3	Ⅵ下	9.2	3.3	2.1	63	

扁平磨製双刃石器（45・46）

この石器は，アッズ・ブレイド，扁平小型利器，カミソリ状石器，小型扁平利器，小型ノミ状石器等と称されている石器で，仲宗根求が「熱田原型石器」と提唱しているものである。（注）形態は，平面形が長方形を呈し，上下両端に鋭利な刃を有し（双刃），厚さが非常に薄く板状である特徴をもつ。

45 は片側辺に長さ 0.8㎝，深さ 0.3㎝の抉りが施されている。側辺は平坦で，上下端は両面からの研磨により鋭い刃部を形成している。46 は隣接して出土したものが接合したものである。一部破損しているが，ほぼ完形品である。上下端は両面からの研磨により鋭く，側辺も研磨され鋭利である。厚みは薄く２㎜を測る。表裏面とも丁寧な研磨整形が行われている。

剥片（チャート）（47・48）

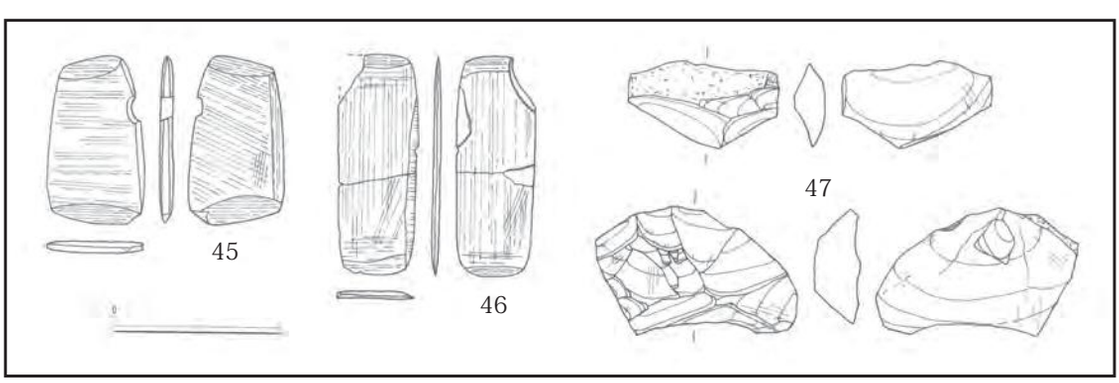
チャートの剥片は 19 点出土した。そのうちの２点を図示した。47 は，横剥ぎの剥片である。使用痕等は認められないが，良質のチャート剥片であり，また剥離等がみられ，剥片石器の素材としての使用が考えられる。48 も横剥ぎの良質のチャートを用いた剥片であるが使用痕等は認められない。

双角状石器（49）

49 は，三角形の扁平な砂岩の礫を石材としたもので，長軸部の側辺に両面剥離を施し，半円形の彎曲部を作り出すことによって，２か所の尖頭部を形作る石器で礫石器，尖頭状石器（双頭型）と呼ばれているものに類似するが，下縁部は直線的である。一側辺に剥離痕がみられスクレイパー的役割ももつ。尖頭部は２か所とも両面からの剥離調整を施している。

楔形石器（50・51）

楔形石器は２点出土した。50 は主要剥離面を大きく残した扁平な短冊状の粘板岩の剥片を素材とし，両端部が鋭いエッジ状をなし，上端部には敲打痕がみられる。51 も同様の主要剥離面を残した扁平なチャートの剥片を素材とし，両端部が鋭いエッジ状をなし，剥離痕が階段状に連続している。上下端に敲打痕がみられ，間接打撃が行われたことがわかる。



第 76 図 Ⅵ層出土石器（５）　扁平磨製石器・剥片（チャート）

礫器 (52 ～ 57)

礫器は７点出土した。そのうち６点を図化した。52 ～ 54 は砂岩の自然礫を石材に用い，側面に粗いタッチの調整を施している。敲打痕・研磨痕がみられ敲石・磨石も兼用していた可能性がある。いずれも再利用の可能性が考えられる。55 は砂岩の縦長剥片を素材に用い，側辺に粗いタッチ痕が見られ，一平面に磨り面・敲打痕がみられ，砥石の再利用の可能性もある。
56 は，敲打痕をもつ磨石の再利用と考えられる緑色岩を石材に用いたものである。これも片側辺に粗いタッチの調整を施し，他側辺には敲打痕がみられる。57 は約１㎝の厚みをもつ砂岩の扁平な円盤状礫を用い，周縁をやはり粗いタッチの交互剥離で刃部を作りだした礫器である。

礫石錘（58）

58 は, 長さ 15.1㎝, 幅 12.3㎝, 厚さ 10.5㎝を測る礫石錘である。凝灰岩の自然礫を石材に用い，表裏一面を敲打により上面を削除した円錐形に整形し，長軸中央に幅２㎝程度の溝を一周めぐらしたものである。この溝についても丁寧な敲打が施されている。底面には，整形時の敲打痕でなく使用による痕跡が明白にみられる。若干小型であるが，舟のイカリか網用の錘として利用された可能性がある。この石材の凝灰岩は，沖縄本島では採取されず，奄美の徳之島あたりの原産地の可能性があるとのことであった。（注 . 大城逸朗氏教示）

穿孔具（59）

59 は，穿孔具である。先尖りの砂岩礫を石材に用い，先端部は研磨によって整形をされ, 回転時についたと思われる斜方向の研磨使用痕がみられる。

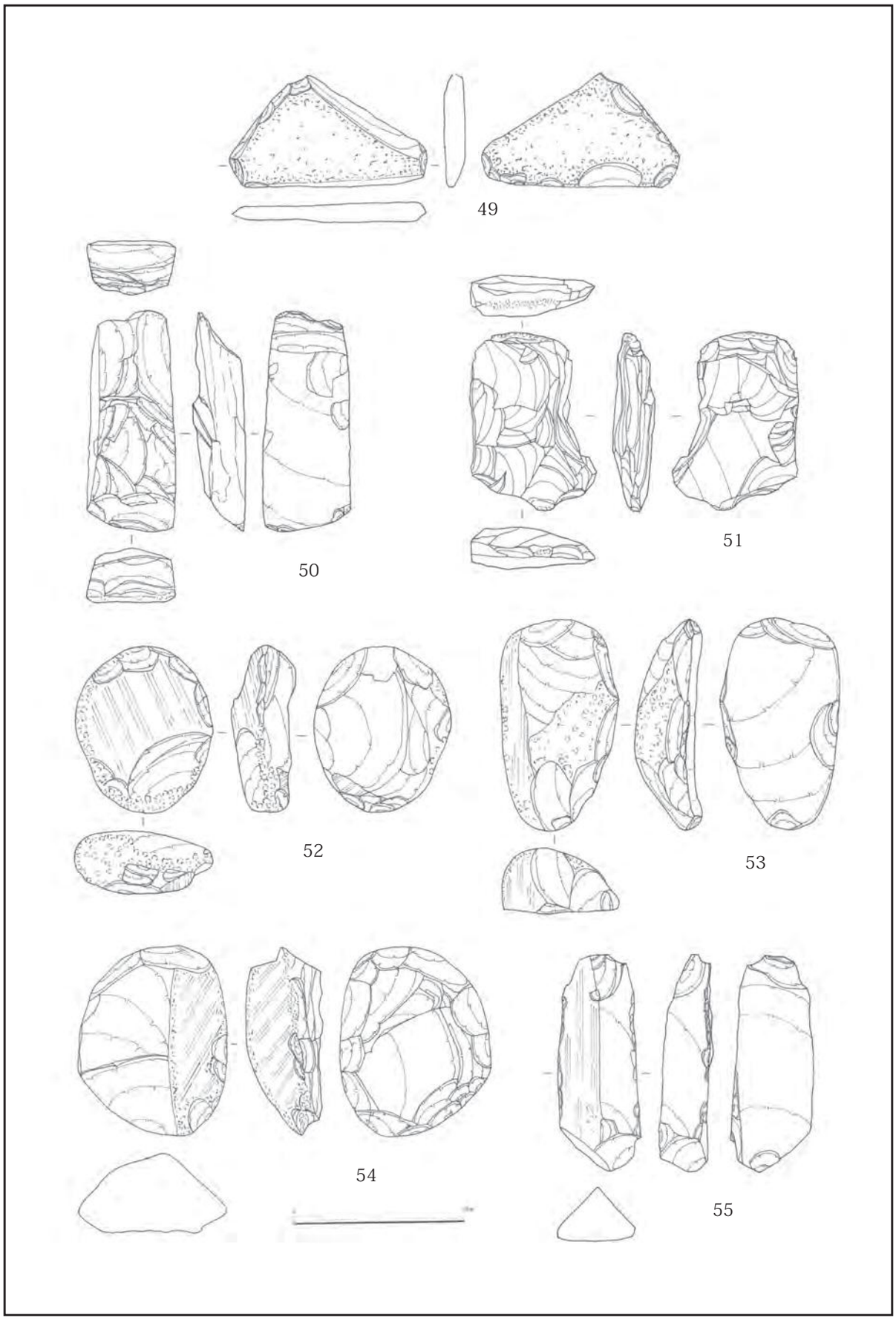
砥石（60）

60 は，細粒の砂岩の扁平礫を用いた厚さ１㎝を測る砥石である。裏面は剥離しているが，表面は研磨痕が顕著である。

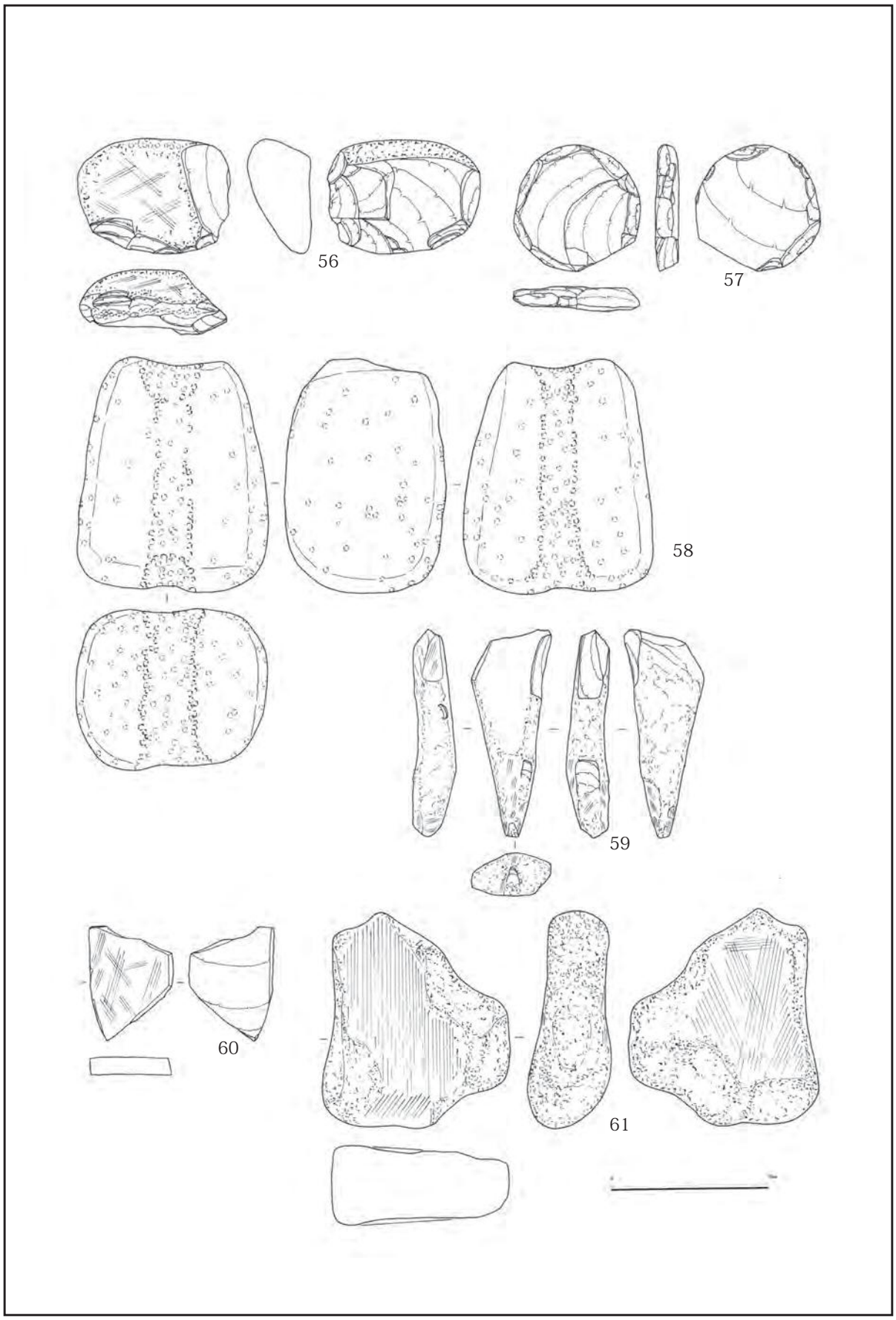
石皿（61 ～ 66）

石皿は７点出土し，そのうち６点を図示した。形態的には，ほぼ平坦で研磨痕がみられるもの（63・66），縁を残して中央が弓状に凹むもの（61・62・64・65）に大別できる。石皿７点の出土は多いようであるが，磨石等の出土が 84 点ある事からセット関係が想定される。

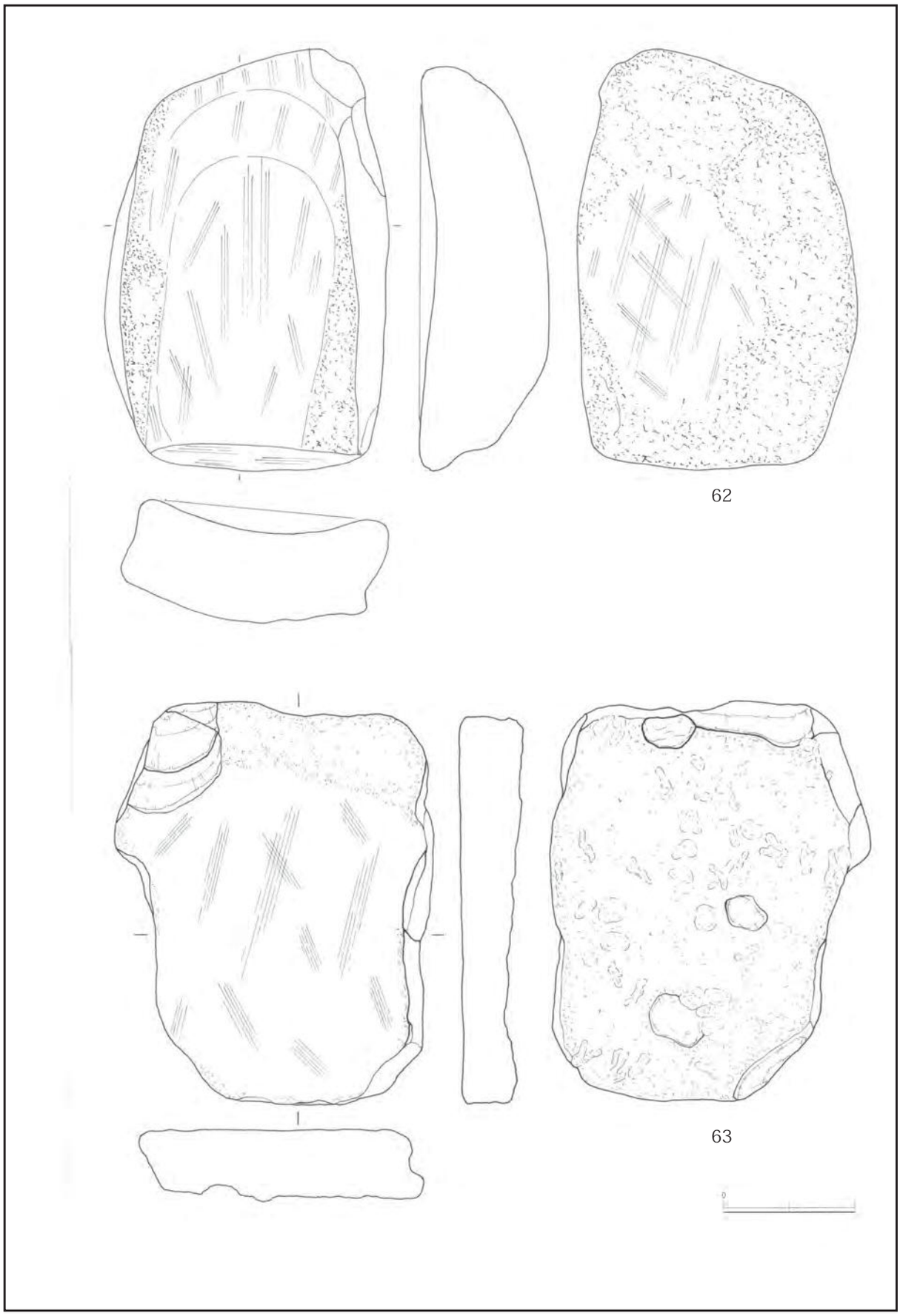
61 は，砂岩の自然礫を利用したもので，表裏二面に磨り面がみられ，凹みは 0.3㎝を測る。片側面に敲打整形を施している。62 は，砂岩大型自然礫を用いたもので，表面は縁を残して中央が弓状に凹み、その凹みが深く約 1.2㎝を測る。裏面は研磨痕が残るのみで，凹みはみられない。63 は，ビーチロックの板状角礫を用いたもので，片面のみ研磨痕があり，その研磨痕はほぼ全域に広がっているが平坦である。64・65 は，欠損しているが，砂岩の大型自然礫を利用したもので，それぞれ 0.5㎝・1.0㎝を測る凹みがみられる。周縁は自然面を利用している。66 は，やや厚みのある砂岩礫を石材として用いたもので，一面だけに平坦な磨り面をもつものである。周縁も敲打整形等がみられず，自然礫を利用したものである。



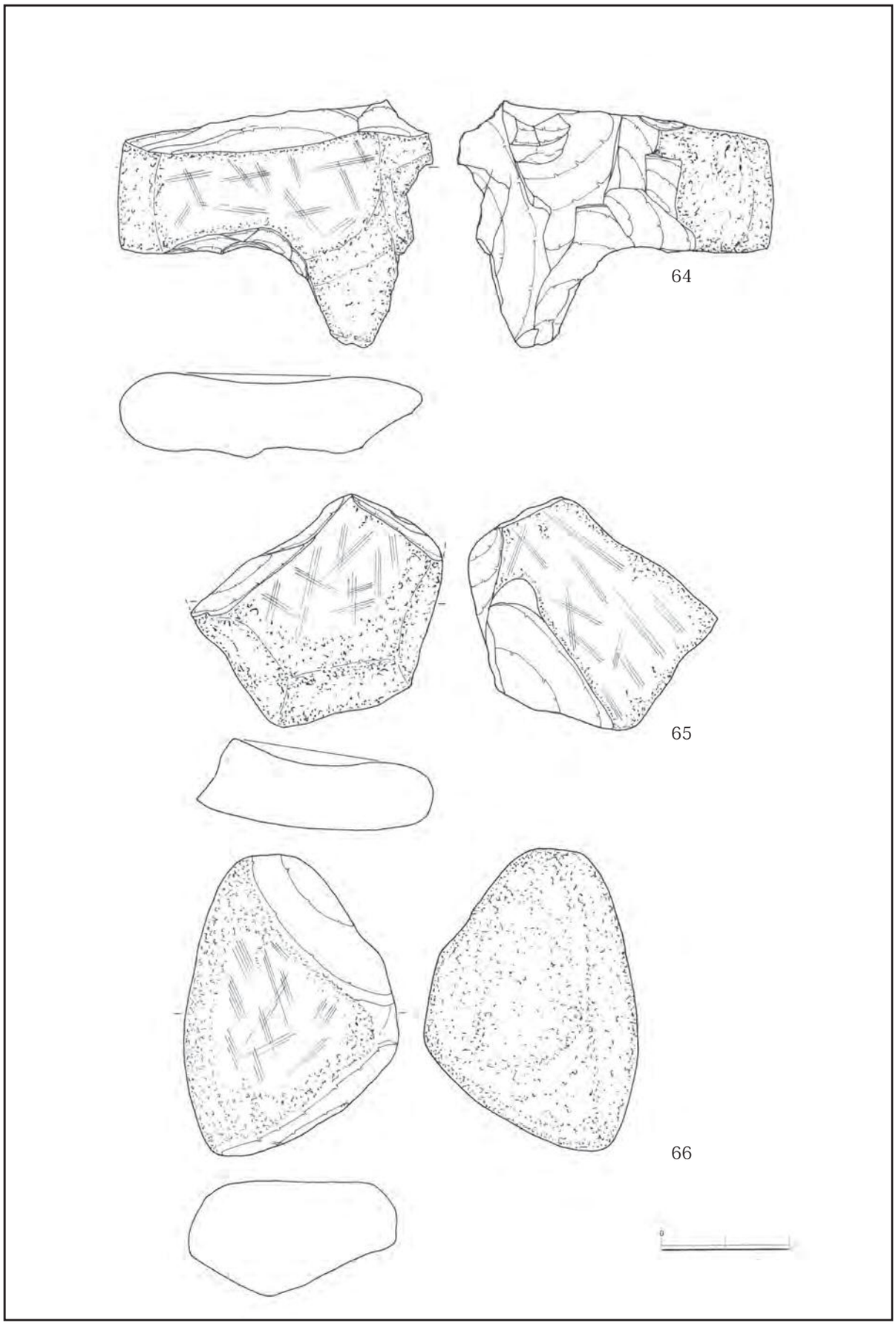
第 77 図 Ⅵ層出土石器（6）　双角状石器・楔形石器・礫器



第 78 図 Ⅵ層出土石器（7）礫器・礫石錘・砥石・石皿（1）



第 79 図 Ⅵ層出土石器（8） 石皿（2）



第 80 図 Ⅵ層出土石器（9） 石皿（3）

第 16 表 Ⅵ層出土石器一覧表（4）

図版	番号	器種	石材	区	層	最大厚cm	最大厚cm	最大厚cm	重量g	遺物番号	備考
75	45	扁平磨製石器	頁岩	表採		5.1	3.0	0.4	10		
	46	扁平磨製石器	頁岩	G2	Ⅵ	6.7	2.4	0.2	6	300	
	47	剥片	チャート	H3	Ⅵ下	2.2	4.6	0.9	10		
	48	剥片	チャート	E2	Ⅵ	3.9	6.1	1.4	31		
76	49	双角状石器	砂岩	F1	Ⅵ下	6.6	11.8	1.3	125		
	50	楔形石器	粘板岩	G2	Ⅵ下	13.0	5.2	3.2	329		
	51	楔形石器	チャート	G2	Ⅵ上	10.6	7.5	2.5	224		
	52	礫器	砂岩	G3	Ⅵ下	12.6	6.9	3.5	491		
	53	礫器	砂岩	F2	Ⅵ上	10.0	8.1	3.5	352		
	54	礫器	砂岩	H3	Ⅵ下	11.4	8.9	4.7	558		
	55	礫器	砂岩	F2	Ⅵ下	7.4	9.7	4.2	430		
77	56	礫器	緑色岩	F2	Ⅵ上	12.6	5.1	4.0	355		
	57	円盤形礫器	砂岩	H3	Ⅵ下	8.2	8.1	1.5	140	320	
	58	周溝石器	凝灰岩	F2	Ⅵ下	15.1	12.3	10.5	2839	385	
	59	穿孔具	砂岩	H2	Ⅵ上	13.4	5.0	2.7	179		
	60	砥石	砂岩	E2	Ⅵ上	7.4	5.3	1.0	63		
	61	石皿	砂岩	E3	Ⅵ下	13.8	12.0	5.4	1075		
78	62	石皿	砂岩	D3	Ⅵ	(18.5)	(19.3)	5.2	9500		
	63	石皿	ビーチロック	F3	Ⅵ	31.1	24.4	5.1	4978		
79	64	石皿	砂岩	H3	Ⅵ下	(19.5)	24.3	6.2	3900	326	
	65	石皿	砂岩	D2	Ⅵ下	31.0	21.7	9.2	3000		
	66	石皿	砂岩	E2	Ⅶ	(23.8)	(16.5)	9.2	4500		
	23	剥片	チャート	H3	Ⅵ上	4.2	2.5	2.3	10		
	24	剥片	チャート	G2	Ⅶ	7.0	3.9	2.2	52		
	25	剥片	チャート	G3	Ⅵ下	3.3	3.0	10.3	13		
	26	剥片	チャート	G3	Ⅵ下	5.5	2.5	2.5	41		
	27	剥片	チャート	H3	Ⅵ下	4.2	2.4	1.1	22		
	28	剥片	チャート	E3	Ⅵ	4.6	3.9	2.4	47		
	29	剥片	チャート	E3	Ⅵ	9.7	4.6	2.4	104		
	30	剥片	チャート	E2	Ⅵ	5.5	3.2	2.2	53		
	31	剥片	チャート	G2	Ⅵ下	4.1	3.4	0.8	12		
	32	剥片	チャート	G2	Ⅵ下	5.1	4.1	1.1	21		
	33	剥片	チャート	G2	Ⅵ下	5.2	2.3	2.2	31		
	34	剥片	チャート	F2	Ⅵ下	5.0	2.6	1.4	21		
	35	剥片	チャート	F2	Ⅵ下	2.8	2.7	1.4	13		
	36	剥片	チャート	F2	Ⅵ下	4.1	2.9	1.4	13		
	37	剥片	チャート	G2	Ⅵ下	6.6	4.7	1.7	46		
	38	原石	チャート	F2	Ⅵ下	10.0	5.6	5.6	216		
	39	原石	チャート	H3	Ⅵ下	38.0	21.3	9.8	15000	264	
	40	剥片	千枚岩	H3	Ⅵ上	6.1	3.0	0.7	14	126	
	41	剥片	千枚岩	H2	Ⅵ上	5.6	4.9	0.8	29	148	
	42	剥片	千枚岩	F2	Ⅵ上	10.5	3.7	0.8	45		
	43	礫器	砂岩	H2	Ⅵ下	6.4	9.9	3.3	314		
	44	砥石	砂岩	D2	Ⅵ上	7.9	5.5	0.9	70		
	45	砥石	砂岩	F3	Ⅵ	7.6	6.3	1.0	67		
	46	石皿	砂岩	F2	Ⅵ下	8.2	10.9	3.4	304		

貝製品

Ⅳ層の貝製品

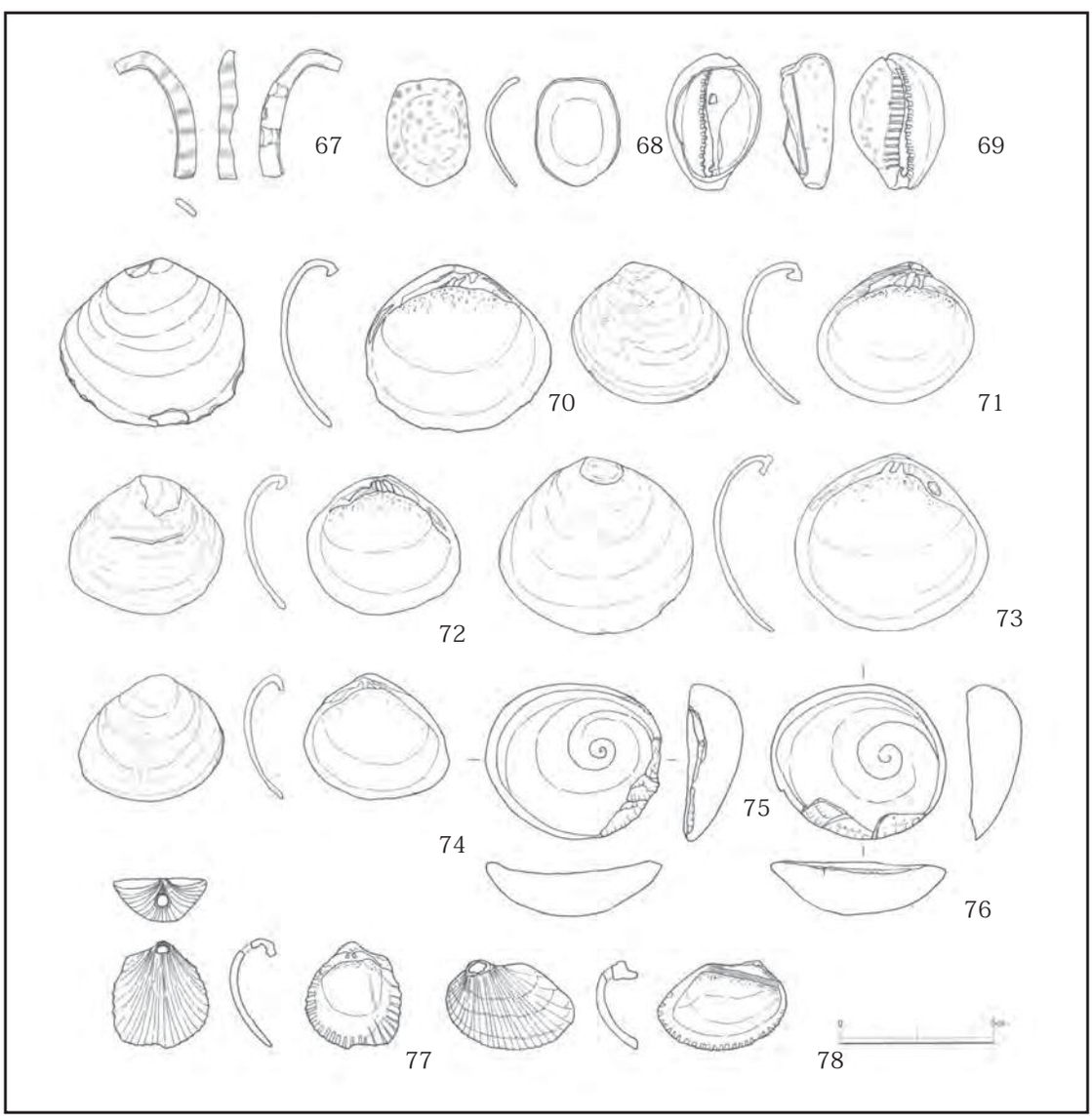
Ⅳ層の貝製品は，貝輪１点・タカラガイ製品 21 点・貝刃５点・螺蓋製敲打器２点・貝錘５点・ホラ貝製有孔製品２点・貝皿 33 点が出土した。

貝輪（67）

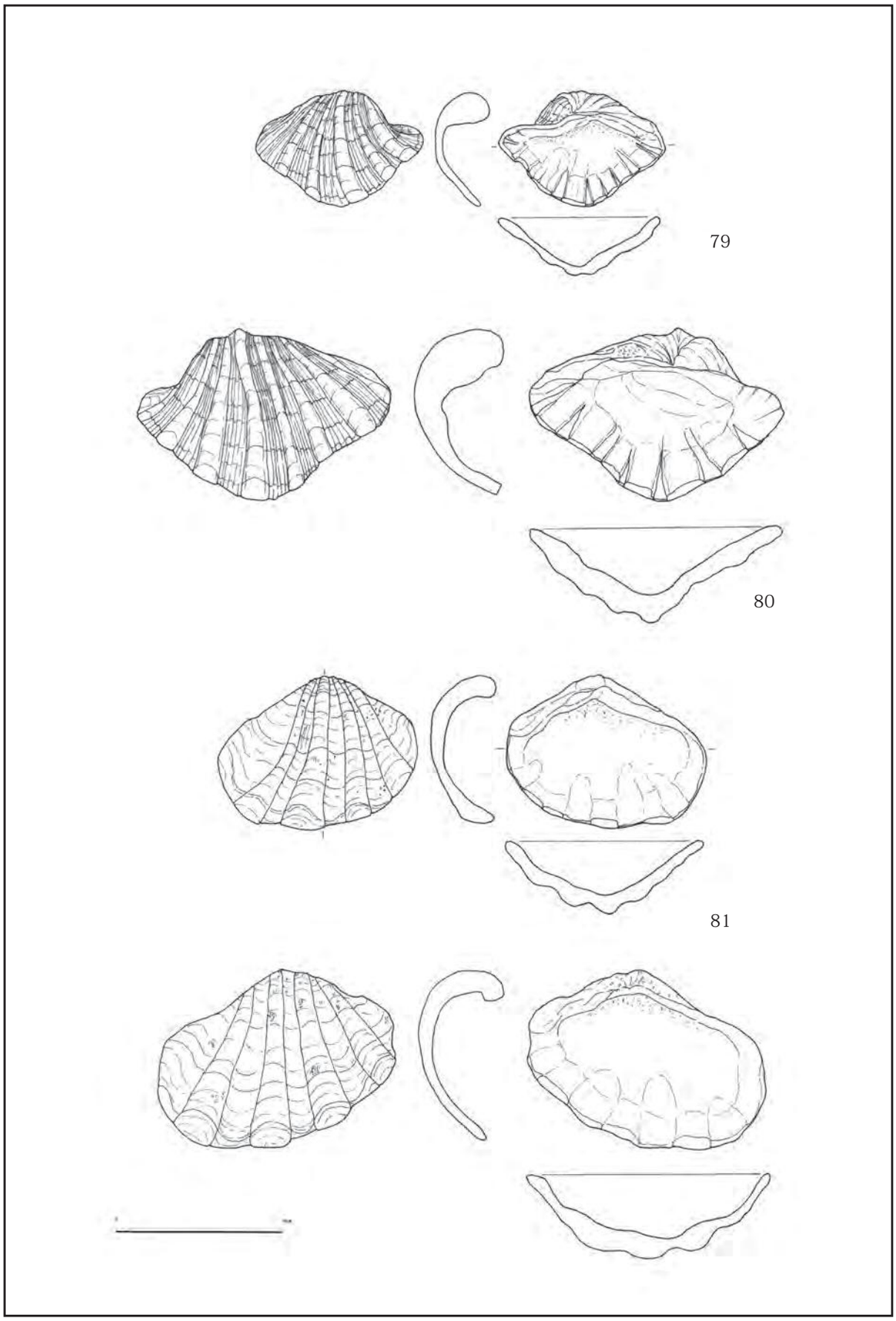
67 はオオツタノハ製の貝輪で，殻頂部を除去して環状に外縁部を有するもので，外殻は研磨により放射肋の凸凹を削り取っている。３分の２程が欠損しているが，貝殻は大きく復元すると縦８㎝，横６㎝前後が推定される。

タカラガイ製品（68・69）

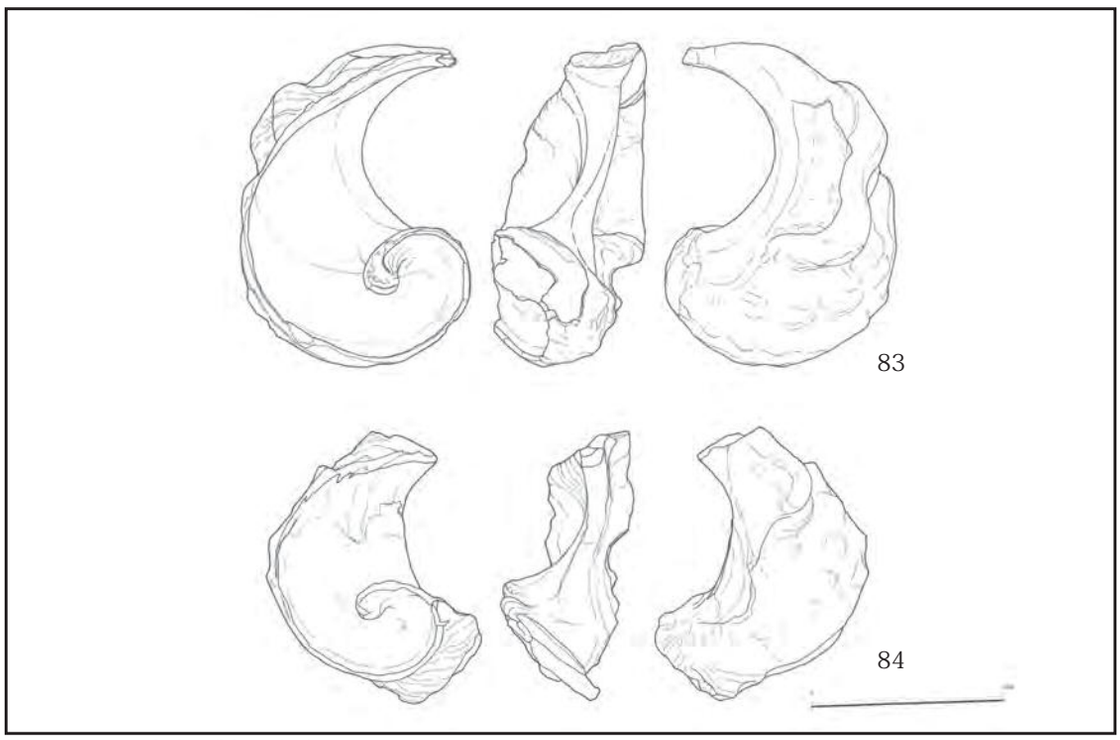
68 はホシダカラの背面を除去したもので，研磨が施されており装飾品を素材とした。69 はホシダカラの背面を除去したもので，食料残滓とも考えられるが，研磨が施されていることから装飾品の素材とした。



第 81 図 Ⅳ層出土貝製品（１）



第 82 図 Ⅳ層出土貝製品（2）



第 83 図 Ⅳ層出土貝製品（3）

貝刃（70 ～ 74）

５点出土した。貝種はチョウセンサザエ（70 ～ 72），シレナシジミ（73・74）で，二枚貝の腹縁に片面からの押圧剝離によって刃をつけたものである。

螺蓋製貝斧（75・76）

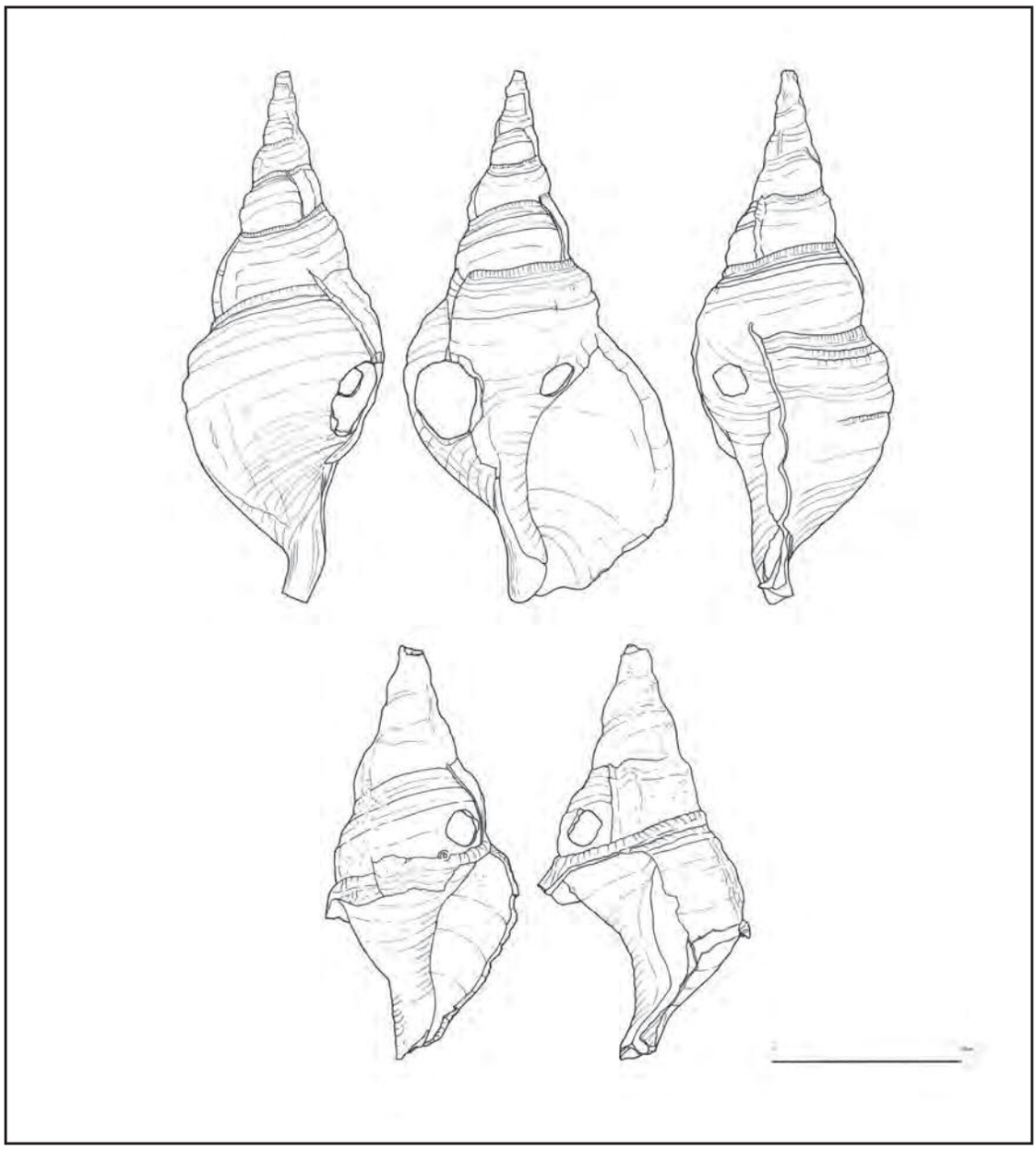
ヤコウガイの蓋の薄い部分を連続して，敲打によって剝離したもので「敲打器」「蓋製品」などと呼ばれているが，今回は螺蓋製貝斧の名称を使用したい。75 は右側辺に数次の打撃を連続して加えて刃部を形成している。この刃部の部分は薄手の部分でなく，やや厚みのある縁部に加撃を行っている。76 は蓋の一番薄い部に数回の打撃を加えて刃部を形成している。

二枚貝有孔製品（貝錘）（77・78）

殻頂近くに先行されたリュウキュウサルボウとカワラガイの有孔製品である。偶発的に穿孔される場合も考えられるが，孔に数回の打割調整がみられることから貝製品とした。貝錘の用途が推定される。

貝皿（79 ～ 82）

27 点出土した。貝種はシャゴウ 23 点，ヒメジャコ３点，シラナミ１点である。そのうち４点を図示した。79･80 はシャゴウで放射肋の先端部を研磨し，側辺を平坦に形成している。深さは 4.0㎝，5.3㎝を測る。81・82 はヒメシャコ・シラナミで , やはり先端部を研磨し平坦面を形成している。深さはそれぞれ 4.4㎝，5.3㎝である。



第 84　図　Ⅳ層出土貝製品（4）

貝殻剝離痕（83・84）

ヤコウガイの貝匙などの製品を切り取った後の殻で，研磨や打ち割りが確認できるものである。

ホラガイ有孔製品（85・86）

85 はホラガイの腹面に，径 4.2 × 3.3㎝と 2.0 × 1.5㎝の 2 か所の粗孔を施すもので，外唇は打ち割り，調整を行っている。86 は殻頂を除去し，外唇は打ち割り，細かいアバタがみられる。穿孔は 1 孔で径 2.0 × 1.5㎝を測る。

第 17 表 Ⅳ層出土貝製品一覧表

挿図	番号	遺物名	貝種	区	層	最大長cm	最大幅cm	重量g	遺物番号	備考
80	67	貝輪	オオツタノハ	G3	Ⅳ上	(6.3)	(4.0)	5		
	68	タカラガイ製品	ホシダカラ	G4	Ⅳ上	7.1	5.5	21	13	
	69	タカラガイ製品	ホシダカラ	I3	Ⅳ上	9.0	6.2	98	35	
	70	貝刃	ﾁｮｳｾﾝﾊﾏｸﾞﾘ	H3	Ⅳ上	5.5	5.9	17	23	
	71	貝刃	ﾁｮｳｾﾝﾊﾏｸﾞﾘ	I3	Ⅳ上	6.1	7.0	26	41	
	72	貝刃	ﾁｮｳｾﾝﾊﾏｸﾞﾘ	G4	Ⅳ下	8.8	9.3	67	19	
	73	貝刃	シレナシジミ	G4	Ⅳ下	6.6	7.4	34		
	74	貝刃	シレナシジミ	F3	Ⅳ下	9.5	10.1	94		
	75	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	H3	Ⅳ上	7.8	8.5	206	29	
	76	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	H3	Ⅳ上	7.7	8.5	202	31	
	77	貝錘	ﾘｭｳｷｭｳｻﾙﾎﾞｳ	I3	Ⅳ上	4.4	6.2	30		
	78	貝錘	カワラガイ	F4	Ⅳ下	5.3	4.7	17		
81	79	貝皿	シャゴウ	G3	Ⅳ上	4.1	13.3	527		
	80	貝皿	シャゴウ	G4	Ⅳ下	12.6	18.2	682	55	
	81	貝皿	ヒメジャコ	I4	Ⅳ下	12.2	16.3	752		
	82	貝皿	ヒメジャコ	F4	Ⅳ下	14.6	20.0	849		
82	83	貝匙剥離痕	ヤコウガイ	F4	Ⅳ下	14.5	16.5	601		
	84	貝匙剥離痕	ヤコウガイ	F3	Ⅳ下	13.0	12.0	282		
83	85	有孔貝製品	ホラガイ	G3	Ⅳ上	28.4	13.8	531	53	
	86	有孔貝製品	ホラガイ	G3	Ⅳ下	22.6	(10.5)	373	60	
	1	タカラガイ製品	ホシダカラ	I4	Ⅳ上	7.0	6.1	23	38	
	2	タカラガイ製品	ホシダカラ	H3	Ⅳ上	6.7	6.4	31	30	
	3	タカラガイ製品	ホシダカラ	G3	Ⅳ上	6.3	5.7	20	11	
	4	タカラガイ製品	ホシダカラ	G3	Ⅳ上	(6.6)	6.4	22	9	
	5	タカラガイ製品	ホシダカラ	H3	Ⅳ上	6.7	(4.7)	17	21	
	6	タカラガイ製品	ホシダカラ	H3	Ⅳ上	6.7	5.8	23		
	7	タカラガイ製品	ホシダカラ	H3	Ⅳ上	5.0	4.6	11		
	8	タカラガイ製品	ホシダカラ	I4	Ⅳ上	8.5	5.7	92	37	
	9	タカラガイ製品	ホシダカラ	I3	Ⅳ上	10.6	7.2	144	44	
	10	タカラガイ製品	ホシダカラ	H3	Ⅳ上	10.5	6.3	111	46	
	11	タカラガイ製品	ホシダカラ	H3	Ⅳ上	9.8	6.0	80	47	
	12	タカラガイ製品	ホシダカラ	G4	Ⅳ上	10.0	6.5	137	51	
	13	タカラガイ製品	ホシダカラ	G3	Ⅳ下	9.0	6.1	109	61	
	14	タカラガイ製品	ホシダカラ	F3	Ⅳ下	9.4	6.5	136		
	15	タカラガイ製品	ホシダカラ	F3	Ⅳ下	8.8	5.6	66		
	16	タカラガイ製品	ホシダカラ	G4	Ⅳ下	9.2	6.3	103		
	17	タカラガイ製品	ホシダカラ	H3	Ⅳ下	9.0	6.1	87		
	18	タカラガイ製品	ホシダカラ	G3	Ⅳ下	9.6	6.7	97		
	19	貝皿	シャゴウ	G3	Ⅳ上	15.1	18.3	1056		
	20	貝皿	シャゴウ	G4	Ⅳ下	11.4	14.2	492		
	21	貝皿	ヒメジャコ	G3	Ⅳ上	12.0	16.2	569		
	22	貝皿	シャゴウ	I3	Ⅳ下	12.5	19.4	750		
	23	貝皿	シャゴウ	I4	Ⅳ下	13.5	18.0	854		
	24	貝皿	シャゴウ	H3	Ⅳ下	13.0	16.5	744		
	25	貝皿	シャゴウ	G4	Ⅳ下	14.2	18.2	965		
	26	貝皿	シャゴウ	I3	Ⅳ下	14.2	18.6	980		
	27	貝皿	シャゴウ	F3	Ⅳ下	14.0	19.3	1066		
	28	貝皿	シャゴウ	G4	Ⅳ下	13.9	19.4	1100		
	29	貝皿	シラナミ	F4	Ⅳ下	10.8	16.6	459		
	30	貝皿	シャゴウ	I4	Ⅳ下	13.5	18.0	854		
	31	貝皿	シャゴウ	F4	Ⅳ下	14.2	19.6	970		
	32	貝皿	シャゴウ	F4	Ⅳ下	14.2	20.0	1028		
	33	貝皿	シャゴウ	F4	Ⅳ下	14.2	20.0	1051		
	34	貝皿	シャゴウ	F3	Ⅳ下	14.8	19.6	1129		
	35	貝皿	シャゴウ	G4	Ⅳ下	13.9	20.9	1228		
	36	貝皿	シャゴウ	G3	Ⅳ下	15.5	19.7	1216	8	
	37	貝皿	シャゴウ	F3	Ⅳ下	15	20.4	1007		
	38	貝皿	シャゴウ	F4	Ⅳ下	14.0	21.8	1070		
	39	貝皿	シャゴウ	G4	Ⅳ下	15.7	21.1	1329		
	40	貝皿	シャゴウ	I3	Ⅳ下	16.5	23.2	1666		
	41	貝皿	シャゴウ	I4	Ⅳ下	16.7	24.2	1835		
	42	貝錘	メンガイ	G4	Ⅳ下	6.0	5.5	16	16	
	43	貝錘	ヒメジャコ	H4	Ⅳ下	9.1	11.2	485	75	
	44	貝錘	ヒメジャコ	F3	Ⅳ下	8.8	12.2	390		

Ⅵ層出土の貝製品

ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土の貝製品は，貝輪 16 点・蝶形貝製品２点・貝珠３点・螺塔研磨品３点・ノシガイ珠１点・線刻製品１点・有孔巻貝１点・ペンダント７点・円盤状貝製品１点・螺塔部製品５点・小型貝容器６点・小型貝匙 14 点・ヤコウガイの貝匙８点・螺蓋製敲打器７点・ホラ貝製有孔製品２点・スイジガイ製利器・貝刃８点・貝錘 46 点・貝皿８点が出土した。

貝輪

一枚貝のオオツタノハ，二枚貝のメンガイ類・クロチョウガイ，巻貝のゴホウラ・アツソデガイが出土した。オオツタノハは沖縄では産しないとされ，またゴホウラ･アツソデガイは「南海産貝輪交易」の対象の貝である。

以下，貝種別に略述したい。

オオツタノハ（85）

殻頂を除去し環状に外縁部を有するもので，半月形の穿孔を施したものである。内外面とも丁寧に研磨され，側縁部にも研磨がみられる。穿孔は両面から施され，外径 0.3 ～ 0.5㎝，内径 0.1 ～ 0.2㎝を測る。

メンガイ（86 ～ 91）

メンガイ類の周縁を輪の外縁とし，内部に大きく穿孔したものである。内外縁を打ち割りによって細かく加工した後，研磨を施しているものである。

86 は穿孔を施すもので，両端は欠損しているが，内外縁とも丁寧な研磨がみられる。穿孔は両面から施され，外径 0.5㎝，内径 .2㎝を測る。87 は内縁に研磨痕がみられ，製作途中で欠損し，破棄されたものと思われる。88 はやや小型であるが，内外縁部は研磨されていることから，使用中に欠落したものと思われる。89 もメンガイの内外縁部とも丁寧な研磨がみられるもので，左端部に研磨痕がみられる事から，半月形の貝輪であろう。90 は欠損し，側縁部のみであるが殻頂部を打ち割りにより穿孔し，細かく加工した後研磨を丁寧に施しているものである。91 は庇形貝輪の未製品である。片側縁に外径 0.7㎝，内径 0.4㎝の穿孔を内面から外面に向けて施している。内外縁部には研磨等はみられない。

クロチョウガイ（92）

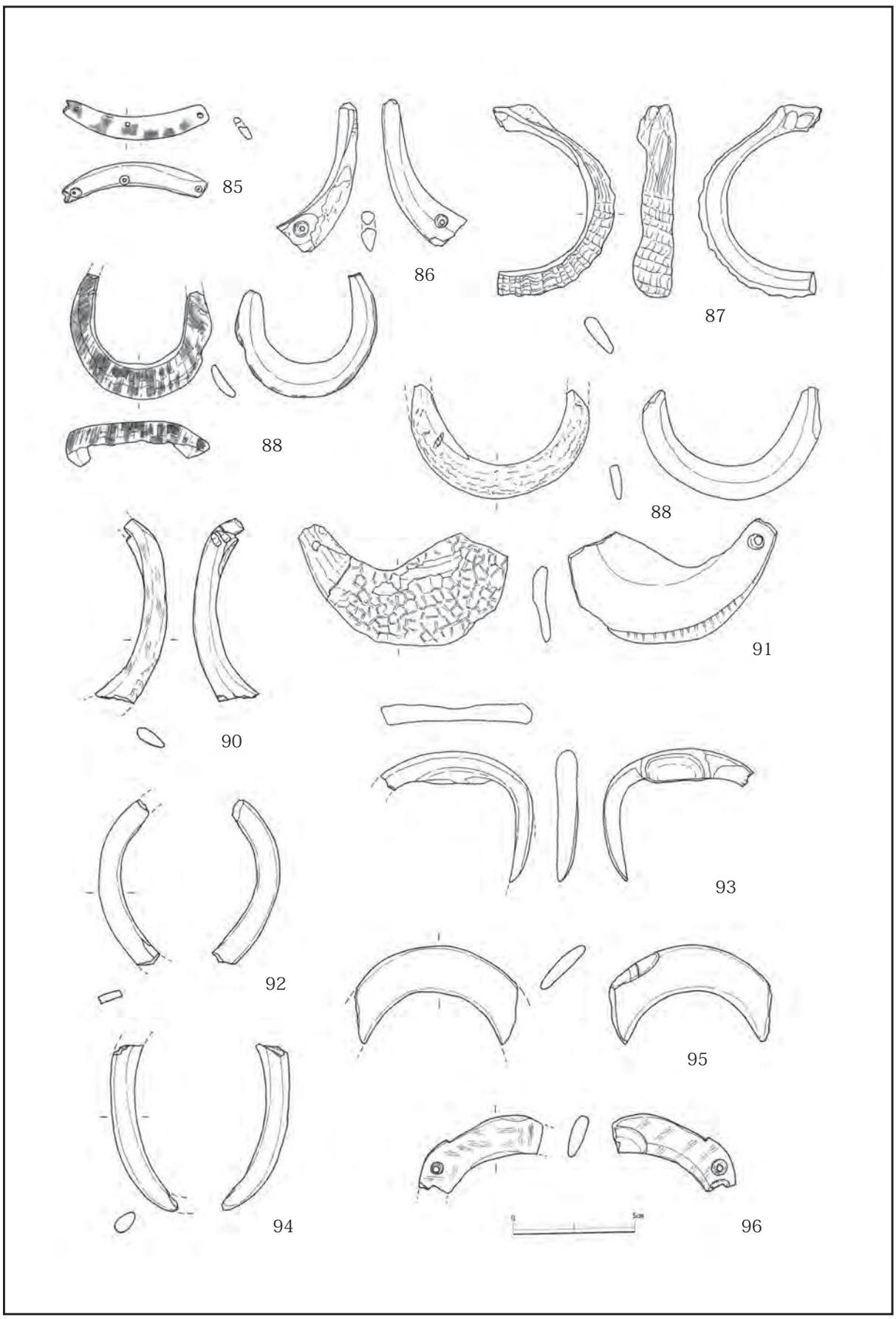
復元外径が，８㎝を測る厚さ 0.3㎝のクロチョウガイを利用した貝輪である。内外縁に丁寧な研磨を施し，自然の真珠膜の光沢が美しい製品である。

ゴホウラ（93 ～ 96）

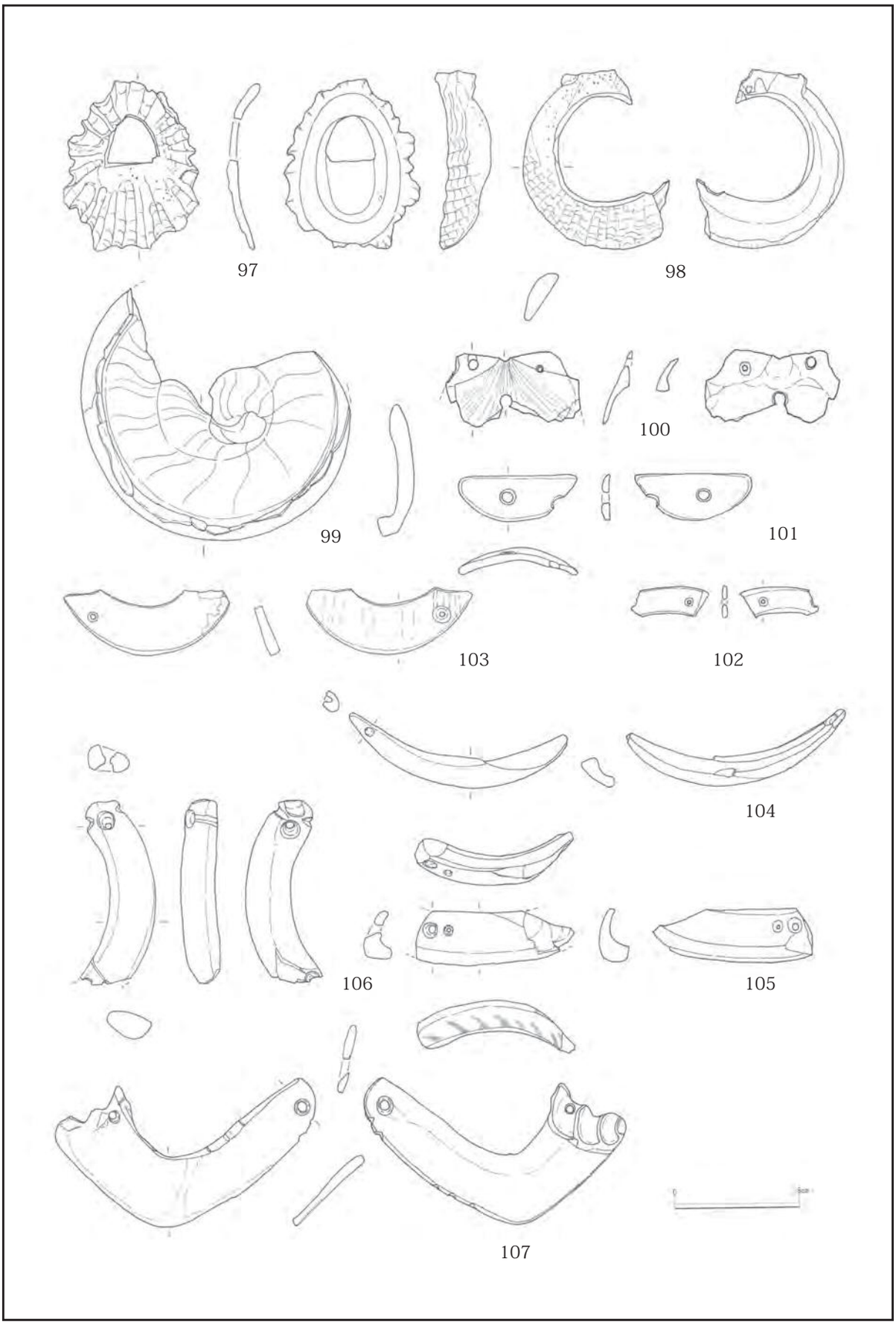
背面型貝輪のみの出土である。93 は螺塔の部分を利用し，内外縁とも丁寧な研磨を施している。94 は半環状製品で，ゴホウラの袖部をかなり削り込み，半環状に加工したものである。95 も螺塔部を丁寧に研磨したもので，96 は袖部を削り込み，半環状に加工したもので，外径 0.6㎝，内径 0.2㎝を測る穿孔を両面から穿っている。組み合わせの貝輪かあるいはイノシシの牙に類似することから，その模造品の可能性もある。

貝輪未製品（97・98）

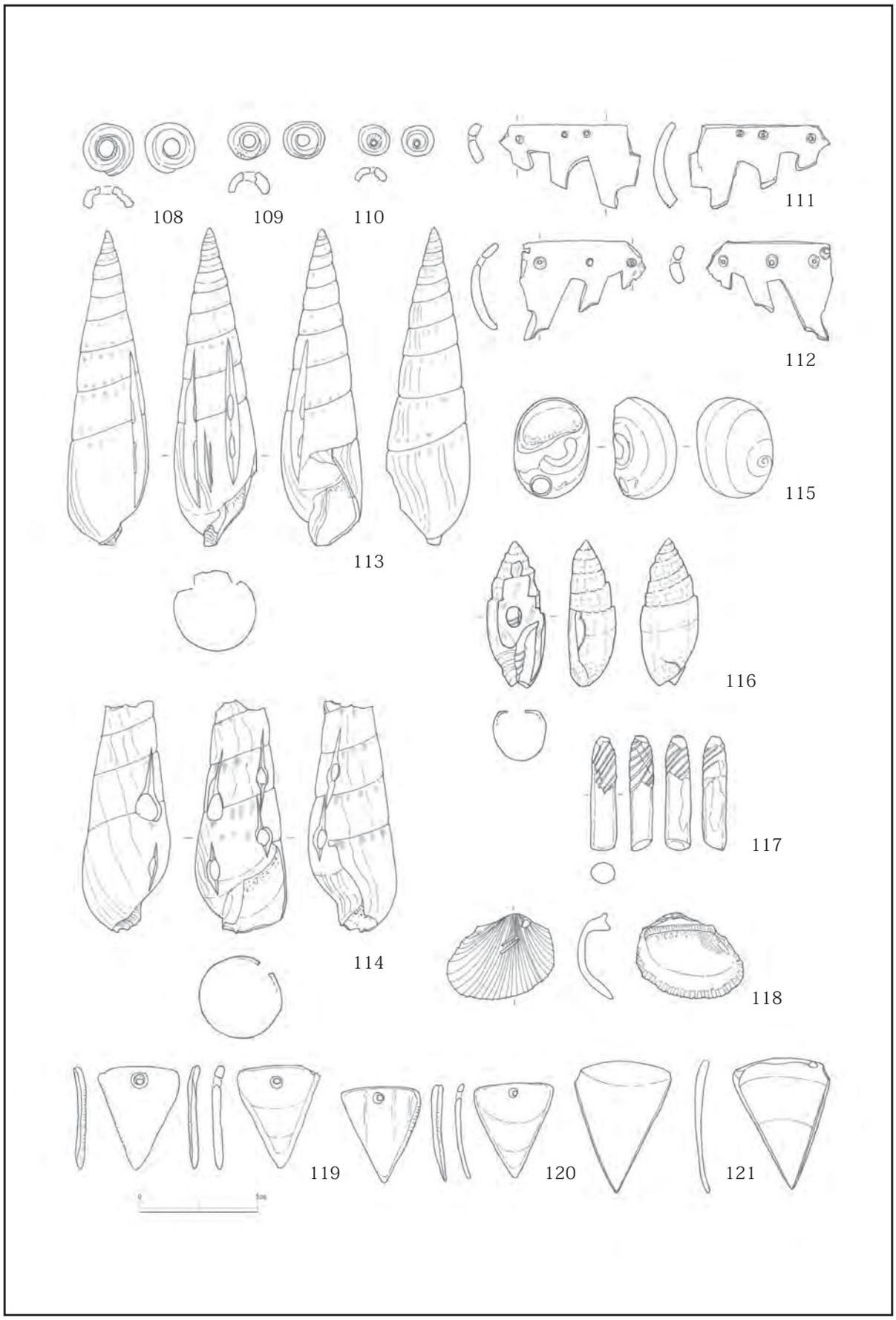
97 はオオツタノハの未製品で，98 はメンガイの内孔製作中に欠損したと考えられるものである。



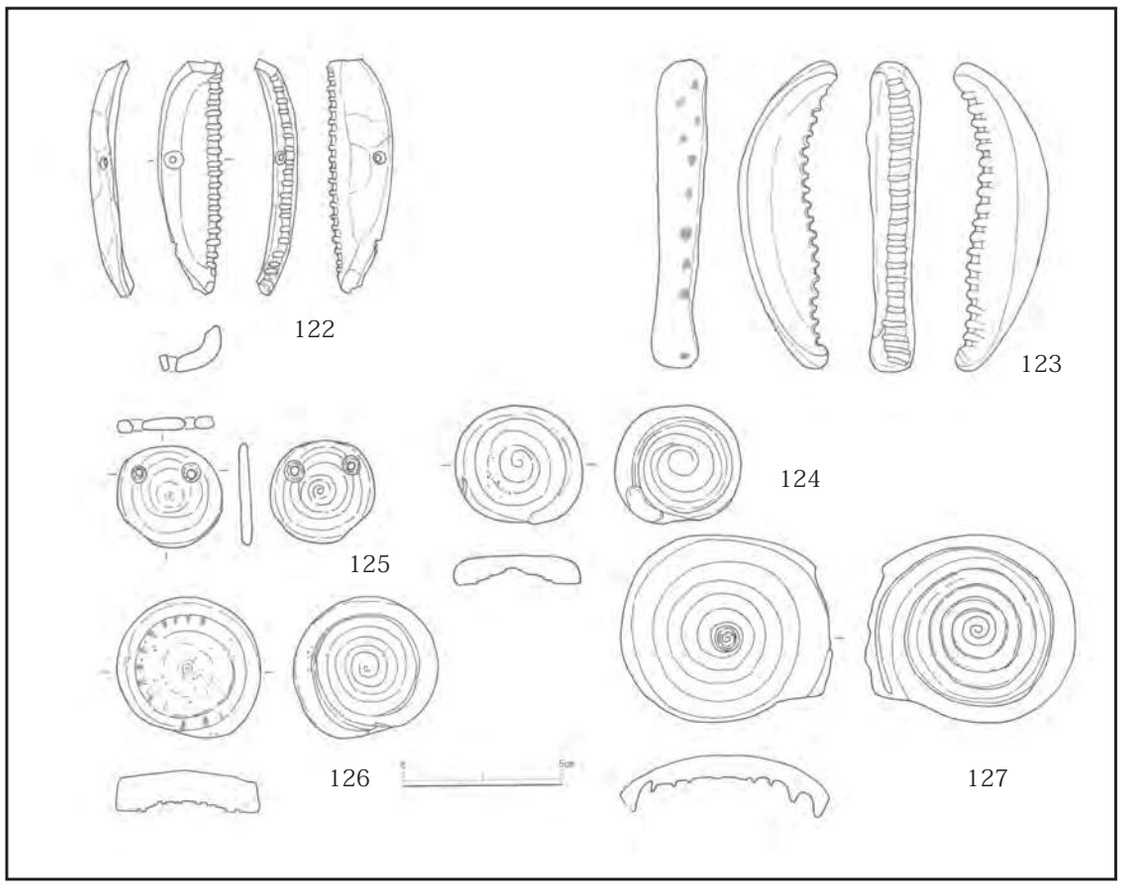
第 85 図 Ⅵ層出土貝製品（1）貝輪



第 86 図 Ⅵ層出土貝製品（2）貝輪



第 87 図 Ⅵ層出土貝製品（3）



第 88 図 Ⅵ層出土貝製品（4）

99 はサラサバティラの殻頂部を削り取り，貝輪を製作中に欠損したと思われる製品である。

貝製装飾品（100 ～ 107）

貝種はイタヤガイ・メンガイ・ゴホウラ・サラサバティラが出土した。

100 はイタヤガイの装飾品で，両耳部及び殻上部中央の３か所に穿孔が施されている。左耳部の孔は両面から，他の孔は内側から外側に穿っている

101 はゴホウラの装飾品で，中央部に両側からの穿孔が施してある札状製品である。外径 0.7㎝，内径 0.5㎝を測る。

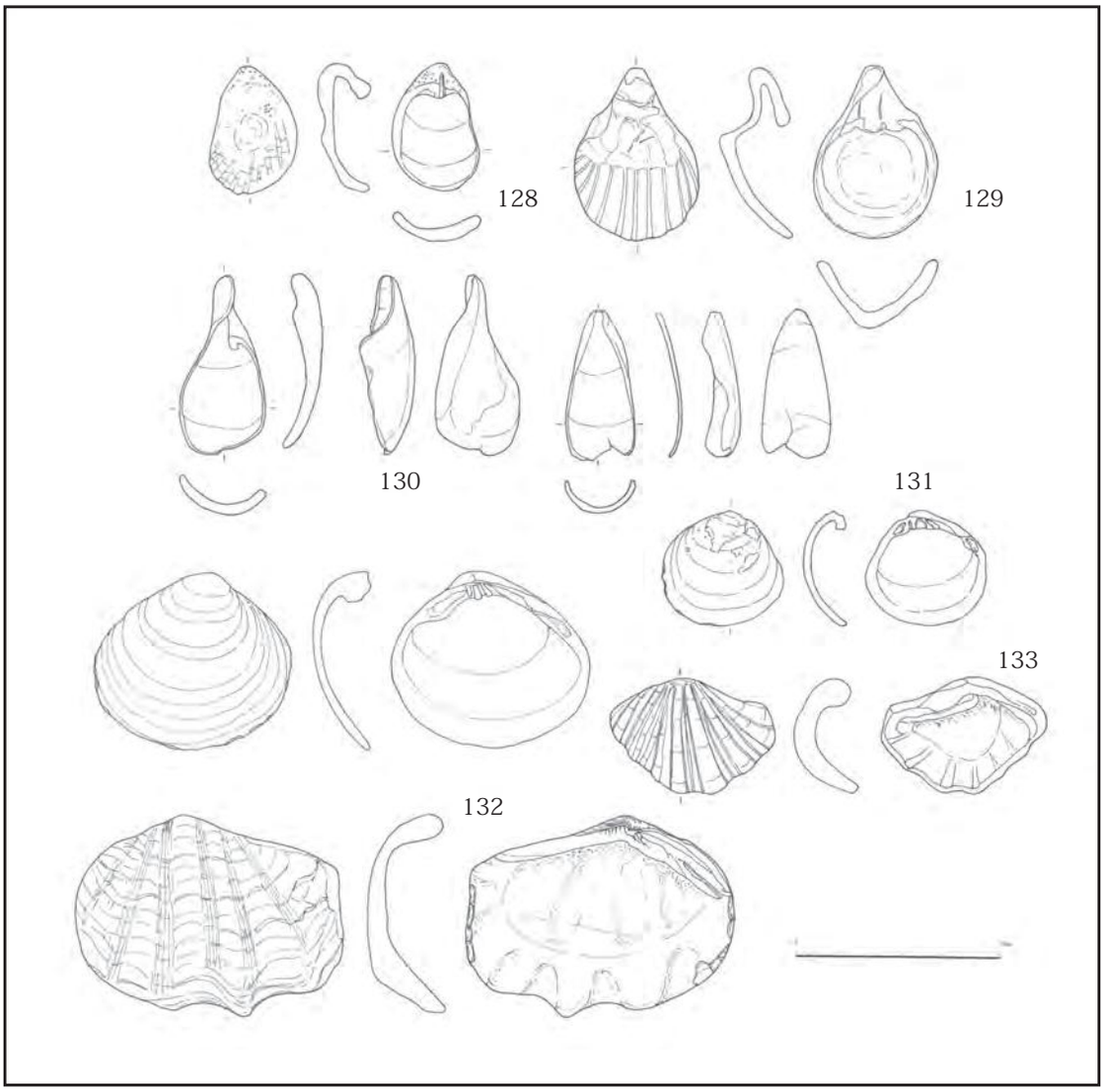
102 は貝種は不明であるが，穿孔が２カ所みられる。貝輪の可能性もあるが装飾品で取り上げた。

103 は庇形貝輪とも想定されたが，内・外縁の丁寧な研磨痕等により装飾品にした。貝種はウミギク科である。

104・105 はゴホウラ・サラサバティラに穿孔を施した装飾品である。

106 はサラサバティラ製で大型の背面部を打ち割り，内・外縁部に丁寧な研磨を施し，装飾品（垂飾）としたものである。外縁には７か所のＵ字状刻目を施している。両端にある２か所の穿孔は両面から施したもので，外径 0.7 ～ 0.5㎝，内径 0.3㎝を測る。

107 はゴホウラ製の装飾品である。ゴホウラの外唇部を切り取り，研磨によって形を整え，両端に内外からの穿孔を施しているが一端は欠損している。両側面に３条の線刻がみられ，穿孔の配置から装飾品とした。



第 89 図 Ⅵ層出土貝製品（5）

貝玉（108 ～ 110）

マガキガイや中・小型イモガイの螺塔や体層を玉状に加工したものである。従来「貝玉」「ビーズ」「貝小玉」などと報告されているもので，そのなかには海岸で容易に採集できる打ち上げ貝を含む場合もある。ナガラ原第三貝塚は，海岸に近く打ち上げ貝も多くあることから，製品に明瞭な研磨痕が認められる等，人為的要素が確認される 3 点を製品として扱った。108・109 は，マガキガイの螺塔部を素材にし，大きさは 2.1㎝・1.7㎝，孔径 0.8㎝・0.5㎝を測るものである。敲打により螺塔部を体層部の中軸部分を除去し，粗孔を穿ったものである。穿孔部上面の研磨が顕著である。110 は，小型イモガイの螺塔を素材にしたもので，長さ 1.3㎝・孔径 0.3㎝を測る。やはり，螺塔部に研磨痕がみられる。

獣形製品（27・28）

逆円錐形の大型イモガイの肩部を軸に略三角形に切り取り，周縁を階段状に象り，長辺に沿うように小孔を施すものである。111 は階段状に施される抉りは深いが，側縁部は欠損する。

孔は上縁に平行して４個施され，大きさは径0.5㎝前後である。２個が両面から，後の２個は裏面からの穿孔である。上縁は直線で，欠損してより全体は不明であるが，下縁にはやや斜方向に抉りが３個施され，その幅は１㎝前後と大きい。またそれによってできた突起部には浅いＵ字状の抉りがみられる。112も同様であるが，向きが反対である。やはり階段状に施される抉りは深いが側縁部は欠損している。孔は上縁に平行して４個施され，0.4㎝前後であり，いずれも両面からの穿孔である。上縁は直線で側縁部が欠損していて全体は不明であるが，下縁にはやや斜方向に抉りが３個施され，その幅は１㎝前後と大きく，それによってできた突起部は平坦である。

螺塔研磨品（113・114）

113・114は螺塔を研磨した穿孔貝製品である。29はリュウキュウタケノコガイの体層部の長軸に平行して２回の研磨穿孔により２組４孔をもうけている。研磨面の角度は両方とも殻口側が約80°を測る。孔径は殻口側上位より，1.05 × 0.25㎝，1.52 × 0.23㎝，もう片方が1.05 × 0.24㎝，1.16 × 0.25㎝を測る。また，その研磨穿孔の間には長さ２㎝，深さ0.1㎝程の擦り切り研磨痕が２か所みられる。114も同様のものであるが殻頂部を欠損している。体層部の長軸に平行して４回の研磨穿孔により４組４孔をもうけている。１か所は欠損しているが，その他の孔径は0.81 × 0.31㎝，0.56 × 0.38㎝，0.74 × 0.42㎝を測る。

有孔巻貝（115）

115はトミガイの腹面を研磨して穿孔したものである。穿孔は外径0.9 × 0.8㎝，内径0.8 × 0.6㎝を測る。

螺塔研磨品（116）

キバフデガイの腹面を研磨して穿孔したものである。穿孔は外径0.9 × 0.7㎝を測る。背面は自然で手を加えていない。

線刻製品（117）

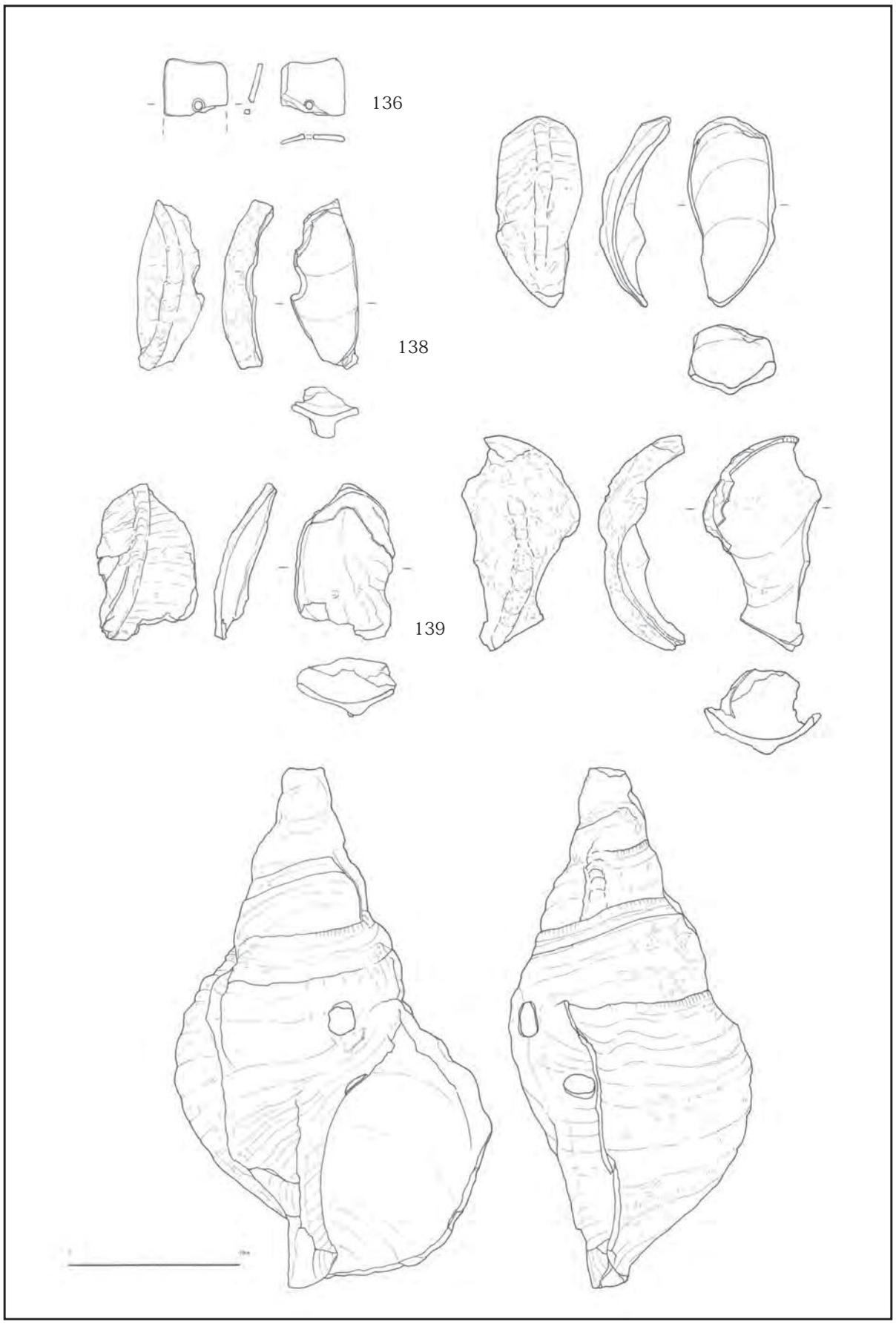
パイプウニの棘を利用した線刻製品である。幅0.1㎝，深さ0.1㎝の溝を螺旋状に８条施している。

線刻のある二枚貝（118）

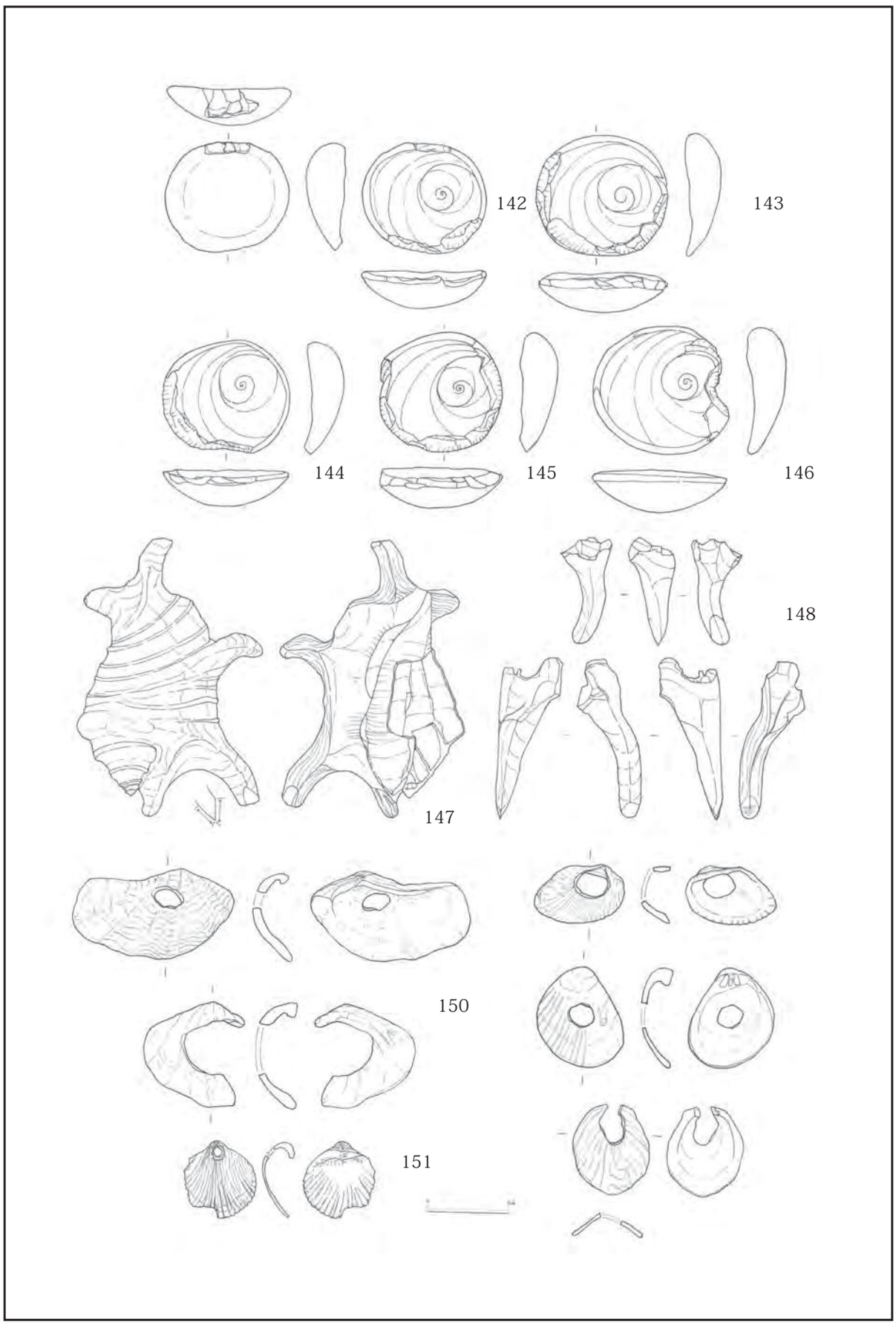
118は幅0.1㎝で0.9㎝と0.8㎝の溝を２本施している。穿孔のための擦痕と考えられる。

サメ歯状貝製品（119～121）

サメの歯を用いた垂飾品を模倣したもので，３点得られている。３点ともシャコガイ科を素材に用い，丁寧な研磨を施しサメ歯を模造している。119・120は歯根部をほぼ中央に１孔を両面から施す。外径表は0.54 × 0.28㎝で，裏面0.48 × 0.27㎝の穿孔を施す。裏面の側縁部は丁寧な研磨を施し，歯根部には両面の鋸歯を深く密に刻む。



第 90 図 Ⅵ層出土貝製品（6）



第 91 図 Ⅵ層出土貝製品（7）

札状貝製品（122・123）

122 はタカラガイ製の垂飾品である。ホシダカラの外唇を割り取り，敲打にて整形したもので，外唇の鋸歯も丁寧な研磨を施している。穿孔の位置は中位で，内外殻面から穿孔し，外径 0.6 × 0.4㎝，内径 0.2㎝を測る。123 もホシダカラの外唇を割り取り，打ち割り後研磨したものであり，製作途中と考えられる。

巻貝殻頂製品（124 ～ 127）

アンボンクロザメやクロフモドキ等の大型イモガイの螺塔を切り取り，研磨により円盤状に仕上げたもので，穿孔のあるもの（124）と無孔のもの（125 ～ 127）の 4 点が出土した。124 は穿孔のあるもので，螺塔の外殻・内殻とも丁寧に研磨し，厚さ 0.3㎝の平坦な面を施している。孔は 2 個あり内外殻面から穿孔し，外径 0.6，0.5㎝，内径 0.3，0.2㎝を測る。125 ～ 127 は螺塔の外殻面は縁に若干，自然面を残しているが研磨が顕著である。内殻面は縁を中心に水平に研磨され，凹部，周縁は自然である。

小型貝容器（128・129）

128・129 はメンガイを利用した小型の貝容器である。貝殻のもつ自然の曲面（凹み）を利用して液体物を入れる小型製品である。深さは 0.6㎝，2.4㎝を測る。いずれも周縁部は研磨が施されている。

小型貝匙（130・131）

貝殻のもつ自然の凹みを利用して，これをスプーン状にした小型の製品である。130 はタカラガイ（ホシダカラ）のタテ半分を欠き取り，前溝部をつくる部分の突起を柄として，滑層部をスプーンの底外面にしたものである。131 はイモガイの滑層先端部，前溝部をつくる部分の突起を柄として，殻内の凹みを匙としたものである。

貝刃（132・133）

7 点出土した。貝種はチョウセンハマグリ 3 点，シレナシジミ 4 点である。そのうち 2 点を図示した。いずれもシレナシジミで，腹縁に片面からの押圧剝離によって刃をつけたものである。

貝皿（134・135）

2 点出土した。貝種はシラナミとシャゴウである。134 はシラナミの放射筋の先端を研磨し，側面を平坦に形成している。深さは 2.8㎝を測る。135 は小型のシャゴウでやはり先端部を研磨し，平坦面を作成している。深さは 1.8㎝を測る。

貝匙（136 ～ 140）

ヤコウガイの自然曲面を利用して，螺旋の方向に沿って切り取り，匙状に匙状に加工したものであり 5 点出土した。外殻の表層を研磨するもので，中には真珠層が露出するものもみられ

る。外殻は研磨し，表層が残っている。周縁は打ち割りを行い一部研磨痕もみられる。

136 は柄の部分であり，中央部に穿孔が施されている。穿孔は両面から穿ったもので，外径 0.4㎝，内径 0.2㎝を測る。全体を丁寧に研磨し整形を行っている。137 は胴部分であり，研磨は鮮明でないが，螺背面の二本の結節の一本は研磨により平坦となっている。138 も胴部であり周縁に研磨痕がみられる。139 は周縁部に研磨がみられ，螺背面の結節にも研磨が施されている。140 は胴部分であり，周縁の一部に研磨痕がみられるものである。

有孔製品（141）

ホラガイの内唇近くに粗孔を２個施すものである。本品は，民俗事例からヤカンの用途が想定されている。ホラガイの腹面に径 2.0 × 1.8㎝と 1.6 × 1.8㎝の２か所の粗孔を施すもので，殻頂を除去し，外唇は打ち割り調整を行っている。表層には細かいアバタがみられる。

螺蓋製貝斧（142 ～ 146）

142 は上下両端に付刃を行っている。上端の付刃は蓋の厚い部分に垂直の打撃を加え，下端は蓋の薄い部分に，表面からの打撃を加え，２か所の追打による短刃を形成している。143 は蓋の薄い部分，約四分の三に付刃を行っている。表面からの打撃の後，刃部部分には敲打により鋭利さを失っている。144 の左側縁は表面からの打撃により刃部が明瞭であるが，下端部は敲打により刃部が鈍角になっている。145 も 143 同様，表面からの打撃後，敲打が行われている。146 は敲打により表皮が剥離されている部分があり，右側縁には欠損部がみられる。

スイジガイ製利器（147 ～ 149）

９点出土したが，そのうちの３点を図示した。147 はスイジガイの突起に付刃するもので，突起棘の１本に付刃している。刃は横刃で平刃であり突起棘１本に付刃の研磨痕が認められる。148・149 は突起棘のみの製品であるが，148 の突起の研磨は，腹面が主で背面は若干みられる程度である。149 の突起の研磨は両面研磨で両刃である。

貝錘（150 ～ 155）

14 点出土し，そのうち６点を図化した。貝種はシラナミ９点，カワラガイ１点，リュウキュウサルボウ２点，メンガイ２点である。150 はシラナミの殻頂部を打ち割り，約２㎝の穿孔を施したものである。151 もシラナミであるが半壊している。152 はカワラガイの殻頂部に約 0.5㎝の穿孔を施したものである。153 はリュウキュウサルボウの殻頂部に約２㎝の穿孔を施したもので，154・155 はメンガイを利用した貝錘で，穿孔は約 1.5㎝を測る。

第 18 表 Ⅵ層出土貝製品 骨牙製品

挿図	番号	器種	貝種	区	層	最大長cm	最大幅cm	重量g	遺物番号	備考
84	85	貝輪	オオツタノハ	H2	Ⅵ上	(6.0)	1.7	4		穿孔有
	86	貝輪	ウミギク科	H2	Ⅵ上	4.9	1.5	10		穿孔有
	87	貝輪	ウミギク科	E3	Ⅵ上	7.7	(5.0)	19		
	88	貝輪	ウミギク科	F4	Ⅵ直上	5.1	5.7	12		
	89	貝輪	ウミギク科	D2	Ⅵ	(4.7)	7.2	11	357	
	90	貝輪	ウミギク科	F2	Ⅵ下	(6.9)	(4.5)	10		
	91	庇形	ウミギク科	H2	Ⅵ上	(5.0)	8.5	24		
	92	貝輪	クロチョウガイ	F3	Ⅵ下	(4.7)	(5.7)	4		
	93	貝輪	ゴホウラ	H2	Ⅵ上	(5.5)	(6.2)	8	100	
	94	貝輪	ゴホウラ	H3	Ⅵ上	(7.0)	1.0	9		
	95	貝輪	ゴホウラ	H3	Ⅵ上	(4.3)	(6.7)	19	123	
	96	貝輪	ゴホウラ	G2	Ⅵ下	3.3	5.0	9		
85	97	貝輪未製品	オオツタノハ	G4	Ⅵ上	6.8	5.5	23		
	98	貝輪未製品	メンガイ類	G2	Ⅵ	7.2	(5.9)	30	382	
	99	貝輪残欠品	サラサバティラ	G2	Ⅵ	(10.2)	10.8	135	306	
	100	貝製装飾品	イタヤガイ	G3	Ⅵ	3.0	5.4	6		
	101	貝製装飾品	ゴホウラ	G2	Ⅵ上	1.9	4.8	4		
	102	貝製装飾品	?	G3	Ⅵ上	(3.2)	(1.3)	1	225	
	103	貝製装飾品	ウミギク科	D3	Ⅵ	6.7	2.1	9		
	104	貝製装飾品	ゴホウラ	G2	Ⅵ下	7.4	3.1	30	374	
	105	貝製装飾品	サラサバティラ	G3	Ⅵ	8.8	3.1	17	284	
	106	貝製装飾品	サラサバティラ	G2	Ⅵ下	2.2	(6.3)	17		
	107	貝製装飾品	ゴホウラ	G2	Ⅵ下	6.0	3.6	42	304	
86	108	貝玉	マガキガイ	F3	Ⅵ上	2.1	2.0	3	269	
	109	貝玉	マガキガイ	C2	表採	1.7	1.5	2		
	110	貝玉	イモガイ類	F3	Ⅵ	1.3	1.2	1		
	111	獣形製品	イモガイ類	H2	Ⅵ下	6.0	3.6	11	376	
	112	獣形製品	イモガイ類	G2	Ⅵ	(5.3)	4.2	14		
	113	螺塔研磨品	リュウキュウタケノコガイ	E2	Ⅵ上	13.5	3.4	86	368	
	114	螺塔研磨品	リュウキュウタケノコガイ	G2	Ⅵ	(9.8)	3.7	69		
	115	有孔巻貝	タマガイ	F3	Ⅵ上	4.2	3.2	23	266	
	116	螺塔研磨品	ニシキキバフデ	G2	Ⅵ下	6.3	2.5	23		
	117	線刻製品	パイプウニ	H2	Ⅵ上	4.9	1.1	2	174	
	118	加工貝製品	リュウキュウサルボウ	H3	Ⅵ	3.4	4.6	13		
	119	シャコガイサメ歯状製品	シャコガイ	F2	Ⅵ上	4.4	3.5	7		
	120	シャコガイサメ歯状製品	シャコガイ	F2	Ⅵ上	4.1	3.4	4		
	121	シャコガイ三角状製品	シャコガイ	G2	Ⅵ上	5.6	4.1	8		
87	122	札状製品	ホシダカラ	H2	Ⅵ	7.4	2.0	15		
	123	札状製品	ホシダカラ	G3	Ⅵ上	9.8	2.9	34		
	124	円盤状貝製品	イモガイ類	H3	Ⅶ	3.2	3.3	8	324	穿孔有
	125	螺塔部	イモガイ類	G2	Ⅵ下	3.7	4.0	22		
	126	螺塔部	アンボンクロザメ	G3	Ⅵ下	4.5	4.6	44		
	127	螺塔部	イモガイ	G2	Ⅵ上	5.9	6.7	67	106	
88	128	小型貝容器	メンガイ	G3	Ⅵ上	6.3	4.4	37	240	
	129	小型貝容器	メンガイ	F2	Ⅶ	8.5	6.1	66		
	130	小型貝匙	タカラガイ	D2	Ⅵ上	8.8	4.2	43	343	
	131	小型貝匙	イモガイ	C2	Ⅵ上	7.4	3.4	18		
	132	貝刃	シレナシジミ	H3	Ⅵ下	8.7	9.7	77		
	133	貝刃	シレナシジミ	H2	Ⅵ下	5.6	5.9	30		
	134	貝皿	シラナミ	H1	Ⅵ	9.9	13.2	232		
	135	小型貝皿	シャゴウ	G2	Ⅵ上	5.7	8.2	91	193	
89	136	貝匙(柄)	ヤコウガイ	G2	Ⅵ	(3.3)	3.8	8		
	137	貝匙	ヤコウガイ	H3	Ⅶ	5.1	11.0	55	325	
	138	貝匙	ヤコウガイ	H3	Ⅵ	4.4	7.4	28	249	
	139	貝匙	ヤコウガイ	G3	Ⅵ	5.7	9.5	35	279	
	140	貝匙	ヤコウガイ	D2	Ⅵ下	8.8	5.3	55	298	
	141	有孔製品	ホラガイ	H2	Ⅵ	20.3	12.4	1023	372	
90	142	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	C2	Ⅵ上	6.8	7.6	149		
	143	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	G3	Ⅵ下	7.3	8.2	177		
	144	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	H3	Ⅵ上	6.9	7.9	144	114	
	145	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	F3	Ⅵ	7.3	7.5	179	280	
	146	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	F3	Ⅵ	7.8	8.4	185	280	
	147	利器	スイジガイ	F3	Ⅵ	17.2	11.4	323	276	
	148	利器	スイジガイ	G3	Ⅵ上	6.5	3.1	27	195	
	149	利器	スイジガイ	G3	Ⅵ	9.9	4.1	57	297	
	150	貝錘	シラナミ	G1	Ⅵ下	5.8	9.8	54		
	151	貝錘	シラナミ	G2	Ⅵ下	6.5	(6.4)	35		
	152	貝錘	カワラガイ	H3	Ⅵ	4.7	4.4	12	250	
	153	貝錘	Rサルボウ	H2	Ⅵ	3.5	5.3	14		
	154	貝錘	メンガイ	E2	Ⅵ	6.2	5.0	26		
	155	貝錘	メンガイ	E2	Ⅵ上	5.6	4.6	14		
	1	貝製品	ホシダカラ	H2	Ⅵ上	5.7	2.2	9	138	
	2	貝製品	ホシダカラ	F3	Ⅵ下	8.7	3.4	33	323	
	3	貝製品	ホシダカラ	H3	Ⅵ上	8.3	3.7	34	111	
	4	貝製品	ホシダカラ	D2	Ⅵ上	9.1	3.8	37	345	
	5	螺塔部	アンボンクロザメ	E3	Ⅵ上	4.6	4.4	39	309	

挿図	番号	器種	貝種	区	層	最大長cm	最大幅cm	重量g	遺物番号	備考
	6	螺塔部	アンボンクロザメ	E2	Ⅵ上	3.7	4.5	38	312	
	7	螺塔部	アンボンクロザメ	F3	Ⅵ下	4.8	(2.8)	28	282	
	8	小型貝容器	メンガイ	G3	Ⅵ上	5.9	4.5	26	196	
	9	小型貝容器	メンガイ	H2	Ⅵ下	8.3	5.6	69		
	10	小型貝容器	メンガイ	E2	Ⅵ下	7.8	5.6	45		
	11	小型貝容器	メンガイ	G2	Ⅵ下	5.7	4.4	30		
	12	小型貝容器	メンガイ	F2	Ⅵ下	9.2	6.4	110		
	13	小型貝容器	メンガイ	G2	Ⅵ下	9.1	6.5	131		
	14	小型貝容器	メンガイ	E3	Ⅵ	6.7	5.5	24	340	
	15	小型貝容器	メンガイ	F2	Ⅵ下	7.2	5.6	38		
	16	小型貝容器	メンガイ	F2	Ⅵ下	7.4	6.8	82		
	17	小型貝容器	メンガイ	G1	Ⅵ下	6.2	4.7	21		
	18	小型貝容器	メンガイ	E3	Ⅵ	5.7	5.4	24		
	19	小型貝匙	イモガイ	G3	Ⅵ上	5.5	2.8	15	199	
	20	小型貝匙	イモガイ	D2	Ⅵ上	4.6	2.6	13	344	
	21	小型貝匙	イモガイ	C2	Ⅵ上	7.6	4.3	35		
	22	小型貝匙	イモガイ	D3	Ⅵ下	4.6	3.2	18		
	23	貝刃	チョウセンハマグリ	H3	Ⅵ上	4.6	4.8	11	129	
	24	貝刃	シレナシジミ	D3	Ⅵ	6.3	6.6	20		
	25	貝刃	シレナシジミ	D2	Ⅵ下	7.6	8.4	46		
	26	貝刃	チョウセンハマグリ	F2	Ⅵ下	6.7	7.2	25		
	27	貝刃	チョウセンハマグリ	F2	Ⅵ下	6.4	6.9	20		
	28	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	H2	Ⅵ上	7.1	(4.1)	94	150	
	29	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ	H2	Ⅵ下	7.3	7.9	162	311	
	30	利器	スイジガイ	F3	Ⅵ	16.4	11.9	368	281	
	31	利器	スイジガイ	F2	Ⅵ下	18.5	11.2	382	289	
	32	利器	スイジガイ	G3	Ⅵ下	18.8	16.6	513	303	
	33	利器	スイジガイ	E2	Ⅶ	9.0	4.4	49	328	
	34	利器	スイジガイ	E3	Ⅵ	8.4	3.0	42	339	
	35	利器	スイジガイ	F2	Ⅵ下	6.9	3.2	44		
	36	貝錘	シラナミ	H2	Ⅵ上	4.9	8.0	25	153	
	37	貝錘	シラナミ	H3	Ⅵ下	6.3	(8.3)	42		
	38	貝錘	シラナミ	D2	Ⅵ下	6.8	11.5	116	388	
	39	貝錘	シラナミ	G2	Ⅵ下	3.9	5.2	14		
	40	貝錘	シラナミ	G2	Ⅵ下	6.9	12.7	115		
	41	貝錘	シラナミ	F2	Ⅵ上	4.2	6.7	18		
	42	貝錘	シラナミ	H3	Ⅶ	4.5	6.6	20		
	43	貝錘	リュウキュウサルボウ	F2	Ⅵ	4.2	5.7	21		

	165	笄	クジラ骨	G2	Ⅵ上	15.0	2.9	32	175	
	166	ヘラ状骨製品	ジュゴン	F2	Ⅵ下	(15.0)	4.2	21		
	167	蝶形骨製品	クジラ骨	F2	Ⅵ上	5.3	2.0	12		
95	168	尖頭状骨製品	クジラ骨	H1	Ⅵ上	(3.0)	1.2	2		
	169	垂飾品	イノシシ	E3	Ⅵ上	5.2	1.7	4		
	170	骨錐	イノシシ	D3	Ⅵ	6.1	2.7	7		
	171	骨錐	イノシシ	G2	Ⅶ	8.7	1.9	8		

チョウセンサザエ製貝器

調査中にⅥ層中から、チョウセンサザエを打ち欠いた貝製品が多量に出土した。

そこで，貝製品の形状に差異があることに気づき，分類を行ってみた。その結果，二つの種類がある。貝の腹縁部を帽子のつば状にしたもの（Ａタイプ）と，軸唇を削ったもの（Ｂタイプ）に分かれる。

また，Ａタイプは５種に分類される。Ⅰ類（自然貝），Ⅱ類（加撃前），Ⅲ類（使用前）に，Ⅳ類（使用中），Ⅴ類（使用後）である。Ⅱ類は腹縁部に加撃痕があり，Ⅲ類になると帽子のつば状の形状である。Ⅳ類の使用中はつば部に明瞭な摩耗痕がみられ，Ⅴ類はつば状突起が消耗してしまうものである。つば状突起の反対側には手ずれが顕著に残る。

Ｂタイプは４種に分類される。Ⅰ類（自然貝），Ⅱ類（加撃前），Ⅵａ類（有軸使用中），Ⅵｂ類（有軸使用後）である。

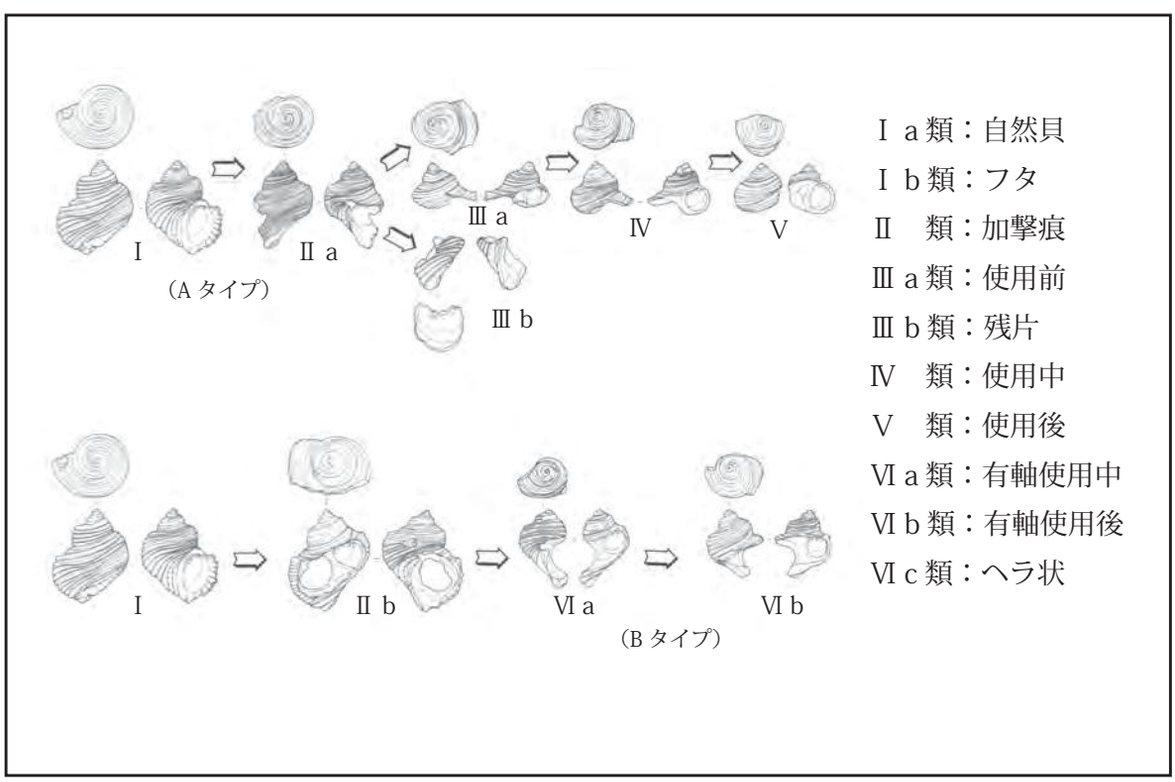
ＡタイプとＢタイプの違いは，用途によるものか，資料の増加を待ちたい。

用途については，想定するしかないが匙的な用途が考えられ，貝製の削器と思う。

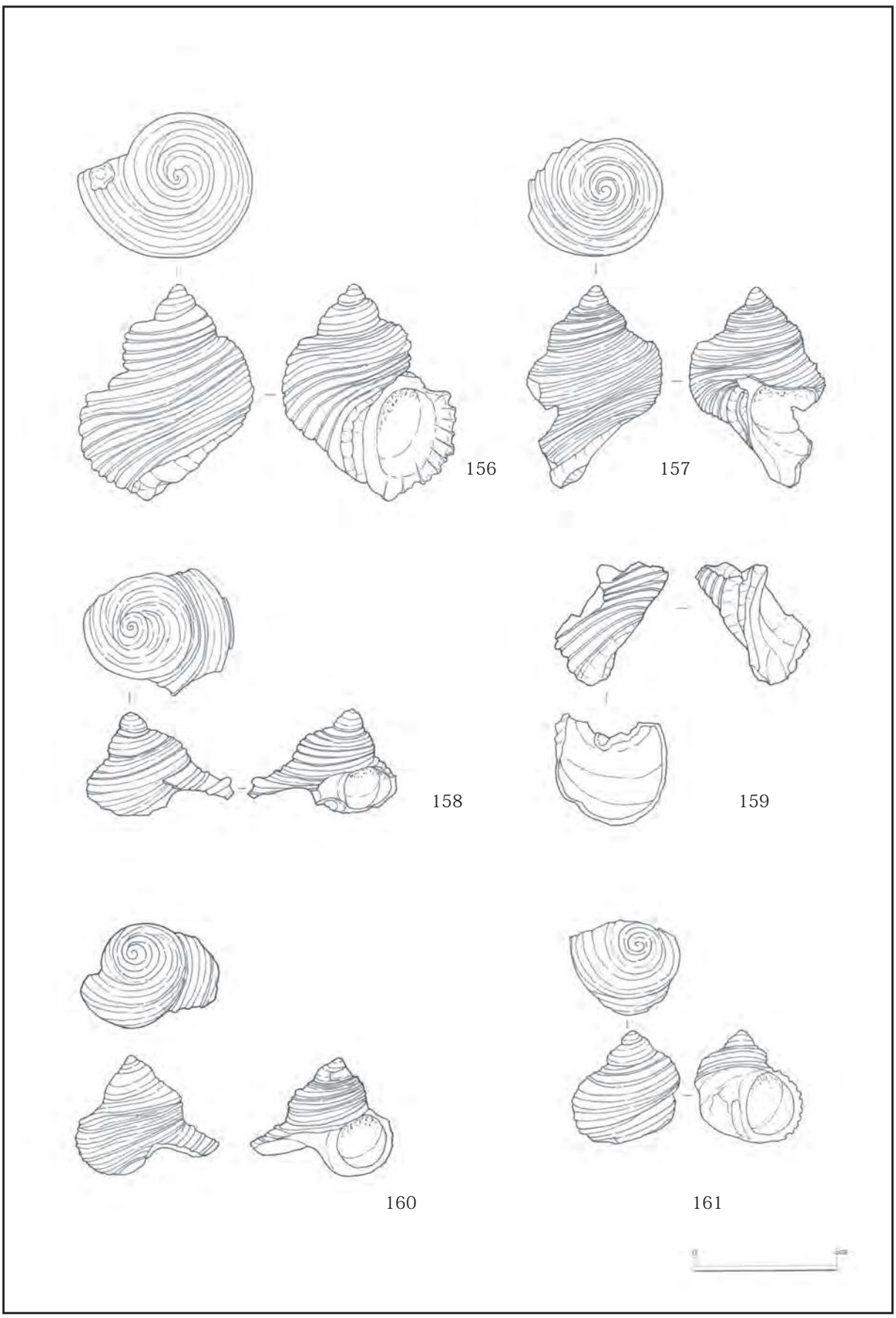
分類と区割りごとの一覧表を作成したが，Ａタイプの使用中の製品が圧倒的に多く，半分近くを占めている。これは製品の用途を考える上で参考になるものである。

今まで，報告例は少なかったが，奄美市（鹿児島県）の根差部集落遺跡において，時期は違うが類似事例が報告されている。また本遺跡のⅣ層からも 200 点以上出土している。

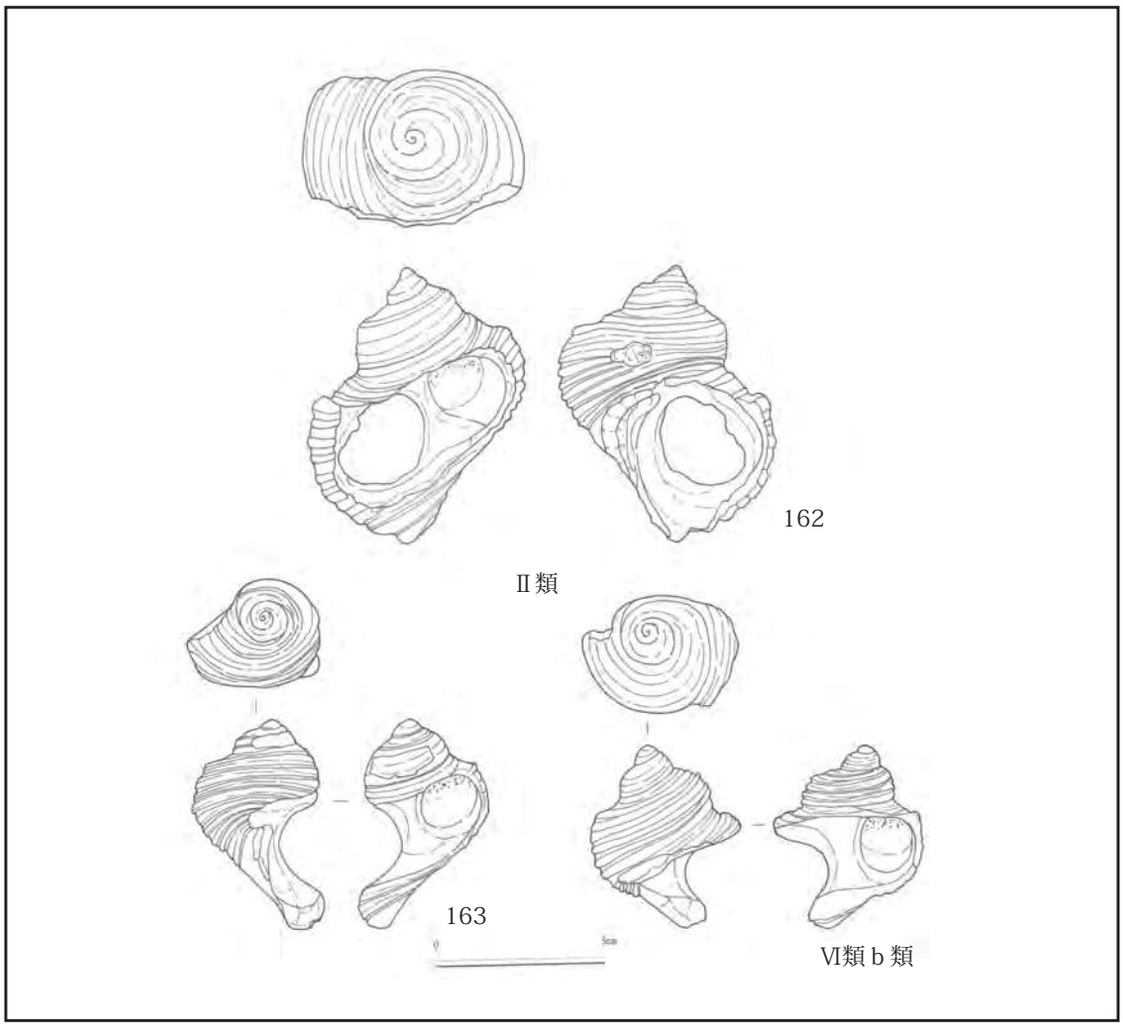
※参考文献 2005 名瀬市教育委員会「奄美大島名瀬市根差部集落遺跡」名瀬市文化財叢書六



第 92 図 貝器分類模式図



第93図 貝器（Aタイプ）



第 94 図 貝器（B タイプ）

Ⅵ層出土の骨牙製品

ナガラ原第三貝塚Ⅵ層から７点の骨牙製品が出土した。かんざし・ヘラ状骨製品・蝶形骨製品・垂飾品・尖頭状骨製品である。

１は海獣骨を利用したもので先端部を欠損しているが，丁寧な研磨により２か所の突起をもつ整形されたかんざしである。

２は鯨の骨と考えられるヘラ状骨製品である。基部の中央部に外径 1.0㎝，内径 0.8㎝の穿孔が両面から１孔穿されている。

３はクジラ等の海獣類の大きな骨を半環状に加工したものである。欠損しているが中央部に深さ 0.2㎝の溝を一周巡らしている。横方向に丁寧な研磨がなされ，先端から約２㎝のところに縦方向に研磨し段を施し，横断面は 1.6 × 1.3㎝の楕円形を呈している。

４は海獣骨の先端を尖らせたもので，尖頭状骨製品の先端部と思われる。欠損しているが，横断面は 1.2㎝のほぼ円形を呈している。縦方向に丁寧な研磨がなされ，先端部は鋭い。

５はイノシシの下顎犬歯を加工したものである。

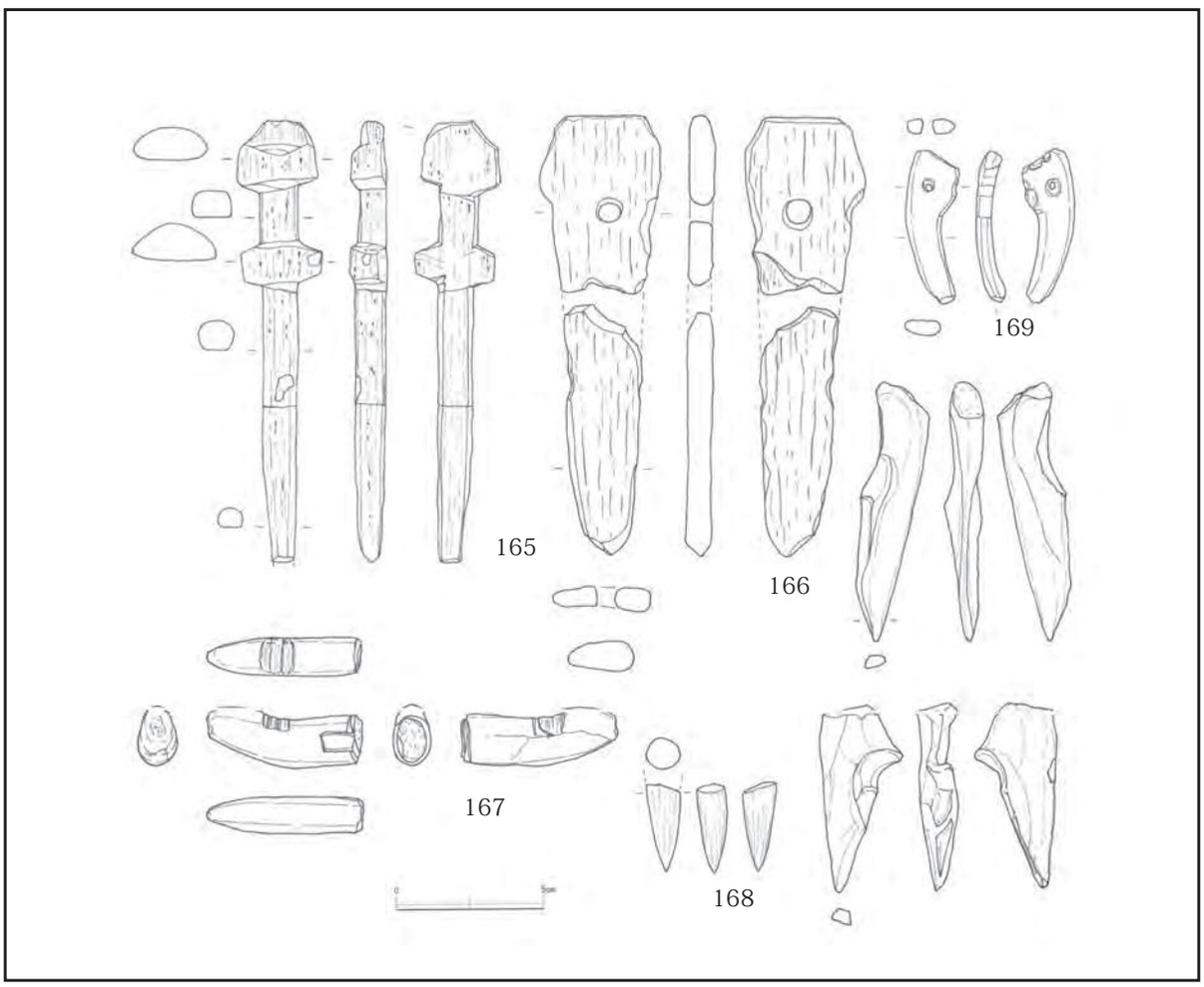
６・７はイノシシの四肢骨を縦に裂き半截し，その先端を平刃状にした骨錐である。

第 19 表 ナガラ第三貝塚 サザエ製品分類

類別出土割合

	H			G			F			E			D			C		
4	Ⅰa	9	(0.53%)	Ⅰa	1	(0.06%)	Ⅰa	0	(0.00%)	Ⅰa	0	(0.00%)	Ⅰa	0	(0.00%)	Ⅰa	0	(0.00%)
	Ⅰb	0	(0.00%)	Ⅰb	0	(0.00%)	Ⅰb	0	(0.00%)	Ⅰb	0	(0.00%)	Ⅰb	0	(0.00%)	Ⅰb	0	(0.00%)
	Ⅱ	11	(1.48%)	Ⅱ	2	(0.27%)	Ⅱ	0	(0.00%)	Ⅱ	0	(0.00%)	Ⅱ	0	(0.00%)	Ⅱ	0	(0.00%)
	Ⅲa	2	(0.36%)	Ⅲa	2	(0.36%)	Ⅲa	0	(0.00%)	Ⅲa	0	(0.00%)	Ⅲa	0	(0.00%)	Ⅲa	0	(0.00%)
	Ⅲb	0	(0.00%)	Ⅲb	11	(0.75%)	Ⅲb	1	(0.07%)	Ⅲb	7	(0.48%)	Ⅲb	1	(0.07%)	Ⅲb	1	(0.07%)
	Ⅳ	33	(0.54%)	Ⅳ	31	(0.51%)	Ⅳ	50	(0.82%)	Ⅳ	6	(0.10%)	Ⅳ	4	(0.07%)	Ⅳ	3	(0.05%)
	Ⅴ	4	(0.28%)	Ⅴ	7	(0.50%)	Ⅴ	0	(0.00%)	Ⅴ	0	(0.00%)	Ⅴ	0	(0.00%)	Ⅴ	1	(0.07%)
	Ⅵa	4	(0.66%)	Ⅵa	5	(0.82%)	Ⅵa	0	(0.00%)	Ⅵa	1	(0.16%)	Ⅵa	0	(0.00%)	Ⅵa	0	(0.00%)
	Ⅵb	0	(0.00%)	Ⅵb	2	(0.41%)	Ⅵb	0	(0.00%)	Ⅵb	1	(0.20%)	Ⅵb	0	(0.00%)	Ⅵb	0	(0.00%)
	Ⅵc	0	(0.00%)	Ⅵc	0	(0.00%)	Ⅵc	0	(0.00%)	Ⅵc	0	(0.00%)	Ⅵc	0	(0.00%)	Ⅵc	0	(0.00%)
	63		(0.37%)	61		(0.36%)	51		(0.30%)	15		(0.09%)	5		(0.03%)	5		(0.03%)
3	Ⅰa	218	(12.73%)	Ⅰa	165	(9.64%)	Ⅰa	139	(8.12%)	Ⅰa	47	(2.75%)	Ⅰa	21	(1.23%)	Ⅰa	12	(0.70%)
	Ⅰb	623	(16.06%)	Ⅰb	671	(17.30%)	Ⅰb	247	(6.37%)	Ⅰb	150	(3.87%)	Ⅰb	109	(2.81%)	Ⅰb	137	(3.53%)
	Ⅱ	98	(13.21%)	Ⅱ	91	(12.26%)	Ⅱ	73	(9.84%)	Ⅱ	22	(2.96%)	Ⅱ	8	(1.08%)	Ⅱ	5	(0.67%)
	Ⅲa	83	(15.01%)	Ⅲa	40	(7.23%)	Ⅲa	57	(10.31%)	Ⅲa	30	(5.42%)	Ⅲa	7	(1.27%)	Ⅲa	2	(0.36%)
	Ⅲb	202	(13.71%)	Ⅲb	191	(12.97%)	Ⅲb	74	(5.02%)	Ⅲb	67	(4.55%)	Ⅲb	54	(3.67%)	Ⅲb	29	(1.97%)
	Ⅳ	724	(11.95%)	Ⅳ	666	(10.99%)	Ⅳ	528	(8.71%)	Ⅳ	335	(5.53%)	Ⅳ	54	(0.89%)	Ⅳ	47	(0.78%)
	Ⅴ	192	(13.60%)	Ⅴ	155	(10.98%)	Ⅴ	135	(9.56%)	Ⅴ	82	(5.81%)	Ⅴ	22	(1.56%)	Ⅴ	14	(0.99%)
	Ⅵa	100	(16.45%)	Ⅵa	63	(10.36%)	Ⅵa	67	(11.02%)	Ⅵa	23	(3.78%)	Ⅵa	3	(0.49%)	Ⅵa	3	(0.49%)
	Ⅵb	59	(12.04%)	Ⅵb	52	(10.61%)	Ⅵb	45	(9.18%)	Ⅵb	21	(4.29%)	Ⅵb	7	(1.43%)	Ⅵb	3	(0.61%)
	Ⅵc	4	(8.16%)	Ⅵc	6	(12.24%)	Ⅵc	2	(4.08%)	Ⅵc	0	(0.00%)	Ⅵc	3	(6.12%)	Ⅵc	3	(6.12%)
	2,303		(13.56%)	2,100		(12.37%)	1,367		(8.05%)	777		(4.58%)	288		(1.70%)	255		(1.50%)
2	Ⅰa	101	(5.90%)	Ⅰa	271	(15.83%)	Ⅰa	523	(30.55%)	Ⅰa	135	(7.89%)	Ⅰa	52	(3.04%)	Ⅰa	18	(1.05%)
	Ⅰb	378	(9.74%)	Ⅰb	387	(9.98%)	Ⅰb	653	(16.83%)	Ⅰb	177	(4.56%)	Ⅰb	250	(6.44%)	Ⅰb	97	(2.50%)
	Ⅱ	23	(3.10%)	Ⅱ	146	(19.68%)	Ⅱ	152	(20.49%)	Ⅱ	70	(9.43%)	Ⅱ	25	(3.37%)	Ⅱ	9	(1.21%)
	Ⅲa	28	(5.06%)	Ⅲa	93	(16.82%)	Ⅲa	132	(23.87%)	Ⅲa	45	(8.14%)	Ⅲa	15	(2.71%)	Ⅲa	9	(1.63%)
	Ⅲb	146	(9.91%)	Ⅲb	139	(9.44%)	Ⅲb	243	(16.50%)	Ⅲb	155	(10.52%)	Ⅲb	94	(6.38%)	Ⅲb	46	(3.12%)
	Ⅳ	232	(3.83%)	Ⅳ	911	(15.03%)	Ⅳ	1,567	(25.85%)	Ⅳ	495	(8.17%)	Ⅳ	234	(3.86%)	Ⅳ	102	(1.68%)
	Ⅴ	56	(3.97%)	Ⅴ	183	(12.96%)	Ⅴ	316	(22.38%)	Ⅴ	140	(9.92%)	Ⅴ	64	(4.53%)	Ⅴ	26	(1.84%)
	Ⅵa	17	(2.80%)	Ⅵa	96	(15.79%)	Ⅵa	138	(22.70%)	Ⅵa	64	(10.53%)	Ⅵa	18	(2.96%)	Ⅵa	6	(0.99%)
	Ⅵb	18	(3.67%)	Ⅵb	79	(16.12%)	Ⅵb	129	(26.33%)	Ⅵb	43	(8.78%)	Ⅵb	12	(2.45%)	Ⅵb	8	(1.63%)
	Ⅵc	1	(2.04%)	Ⅵc	3	(6.12%)	Ⅵc	3	(6.12%)	Ⅵc	7	(14.29%)	Ⅵc	12	(24.49%)	Ⅵc	5	(10.20%)
	1,000		(5.89%)	2,308		(13.59%)	3,856		(22.71%)	1,331		(7.84%)	776		(4.57%)	326		(1.92%)
1	Ⅰa	0	(0.00%)	Ⅰa	0	(0.00%)	Ⅰa	0	(0.00%)									
	Ⅰb	0	(0.00%)	Ⅰb	0	(0.00%)	Ⅰb	0	(0.00%)									
	Ⅱ	0	(0.00%)	Ⅱ	1	(0.13%)	Ⅱ	6	(0.81%)									
	Ⅲa	0	(0.00%)	Ⅲa	6	(1.08%)	Ⅲa	2	(0.36%)									
	Ⅲb	1	(0.07%)	Ⅲb	4	(0.27%)	Ⅲb	7	(0.48%)									
	Ⅳ	0	(0.00%)	Ⅳ	24	(0.40%)	Ⅳ	15	(0.25%)									
	Ⅴ	1	(0.07%)	Ⅴ	3	(0.21%)	Ⅴ	11	(0.78%)									
	Ⅵa	0	(0.00%)	Ⅵa	0	(0.00%)	Ⅵa	0	(0.00%)									
	Ⅵb	1	(0.20%)	Ⅵb	4	(0.82%)	Ⅵb	6	(1.22%)									
	Ⅵc	0	(0.00%)	Ⅵc	0	(0.00%)	Ⅵc	0	(0.00%)									
	3		(0.02%)	42		(0.25%)	47		(0.28%)									

Ⅰa	1,712	自然貝
Ⅰb	3,879	フタ
Ⅱ	742	加撃痕
Ⅲa	553	使用前
Ⅲb	1,473	残片
Ⅳ	6,061	使用中
Ⅴ	1,412	使用後
Ⅵa	608	有軸手ずれ
Ⅵb	490	有軸ヘラ状
Ⅵc	49	ヘラ状
総計	16,979	



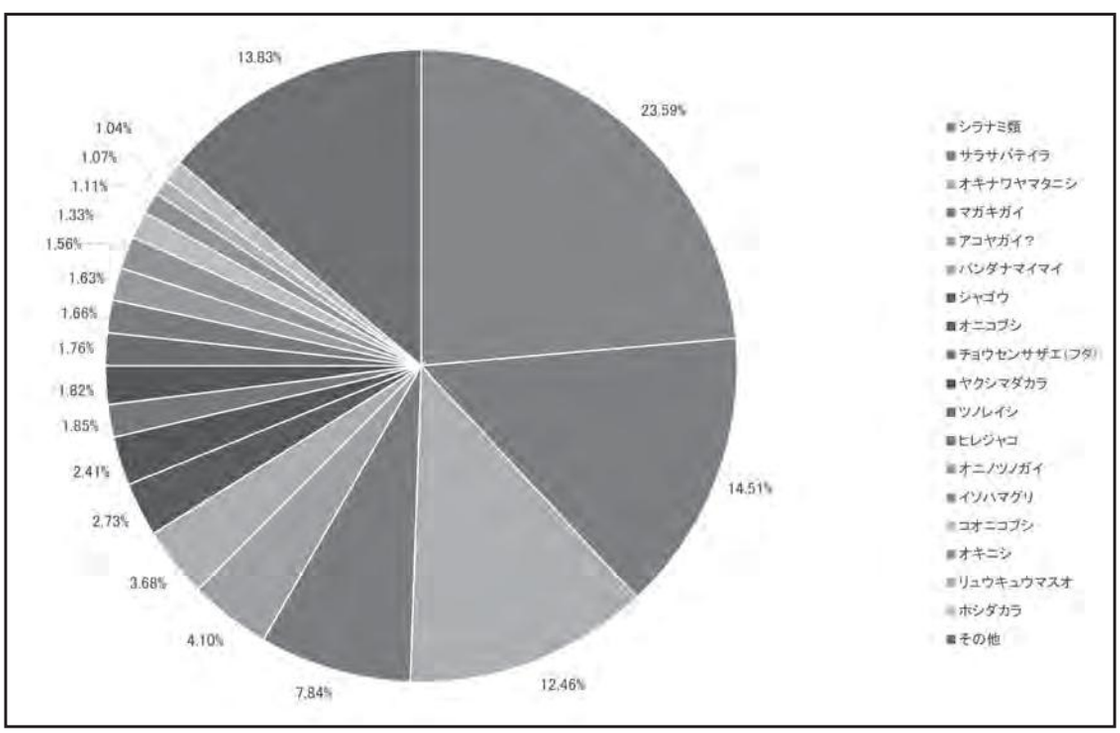
第 95 図 Ⅵ層出土骨牙製品

第 20 表　Ⅳ層出土貝類一覧表

		C - 2	C - 3	D - 2	D - 3	E - 2	E - 3	F - 2	F - 3	G - 2	G - 3	H - 2	H - 3	I - 2	I - 3	計
海産貝																
	腹足綱															
2	＊コシダカサザエ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
3	チョウセンサザエ	0	0	0	0	0	0	0	4	0	3	0	6	0	1	14
130	チョウセンサザエ（フタ）	0	0	0	0	0	0	0	8	0	18	0	24	0	7	57
7	ニシキウズ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	0	9	0	3	18
8	ギンタカハマ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	3
9	サラサバテイラ	0	0	0	0	3	0	0	209	0	85	0	73	0	76	446
10	リュウキュウアマガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	6
11	アマオブネ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	2	0	2	7
14	オニノツノガイ	0	0	0	0	0	0	0	8	0	11	0	11	2	18	50
19	マガキガイ	0	0	0	0	0	0	1	39	0	95	0	87	0	19	241
21	アツソデガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	1	4
22	クモガイ	0	0	0	0	0	0	0	6	0	3	0	3	0	5	17
23	スイジガイ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	1	4
25	キイロダカラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	0	0	5
26	ハナビラダカラ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	10	0	0	12
27	コモンダカラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
28	ハナマルユキ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	6	0	6	0	1	14
29	ハチジョウダカラ	0	0	0	0	1	0	0	7	0	4	0	3	0	1	16
30	ヤクシマダカラ	0	0	0	0	0	0	0	16	0	20	0	7	1	12	56
31	ホシダカラ	0	0	0	0	0	0	0	11	0	7	0	7	0	7	32
33	シオボラ	0	0	0	0	0	0	0	4	0	2	0	6	0	4	16
36	ホラガイ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	4
37	オキニシ	0	0	0	0	0	0	0	14	0	3	0	13	0	4	34
38	ツノテツレイシ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	1	4
39	ツノレイシ	0	0	0	0	2	0	0	15	0	5	0	23	1	8	54
41	アカイガレイシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
42	オニコブシ	0	0	0	0	0	0	0	29	0	17	0	13	0	15	74
43	コオニコブシ	0	0	0	0	0	0	0	4	0	6	0	21	1	9	41
45	イトマキボラ	0	0	0	0	1	0	1	6	0	4	0	5	1	4	22
46	チトセボラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
51	カバミナシ	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1	0	4	0	3	12
52	ミカドミナシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
55	アンボンクロザメ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	1	4
56	クロフモドキ	0	0	0	0	0	0	0	10	0	1	0	2	0	1	14
58	＊カイコガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2
64	アラレイモ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	4
73	コシダカガンガラ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2
74	コシダカギンタカハマ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
75	サソリガイ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
77	シラクモガイ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	3
79	シロナルトボラ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
80	ジュセイラ	0	0	0	0	0	0	0	4	0	2	0	3	0	2	11
81	センジュガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
85	テツボラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
88	ベッコウガサ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3	0	1	0	0	6
90	ホソスジテツボラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
91	マアナゴ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
93	マツバガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
94	ムカシタモト	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2
99	ユキゲイモ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
103	オハグロガキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
115	タママイマイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
118	ハルシャガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
121	ヒメヨウラク	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
124	メオニツノ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
127	レイシガイ	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1	0	1	0	1	7
	二枚貝綱															
131	エガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	3
133	リュウキュウヒバリ	0	0	0	0	0	0	0	7	0	7	0	14	0	0	28
135	アコヤガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	92	0	33	0	1	126
137	メンガイ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
138	シャコガキ	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	4
141	リュウキュウザルガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
142	シラナミ類	0	0	0	0	4	2	1	297	0	160	0	125	3	133	725
143	ヒレジャコ	0	0	0	0	0	0	1	26	0	8	0	7	0	9	51
145	シャゴウ	0	0	0	0	2	2	2	21	0	11	0	30	0	16	84
146	イソハマグリ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3	0	41	0	2	48
149	リュウキュウマスオ	0	0	0	0	0	0	0	3	0	8	0	20	0	2	33
151	シレナシジミ	0	0	0	0	0	0	0	4	0	7	0	12	1	4	28

		C - 2	C - 3	D - 2	D - 3	E - 2	E - 3	F - 2	F - 3	G - 2	G - 3	H - 2	H - 3	I - 2	I - 3	計
153	アラスジケマン	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	6	0	2	13
157	ウミギク	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
159	シロチョウガイ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
160	チョウセンハマグリ	0	0	0	0	0	0	0	4	0	2	0	16	0	0	22
161	ユキノカサ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2
162	リュウキュウタケノコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
164	トリガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	多板綱															
	ヒザラガイ類															
	頭足綱															
	コブシメ？															
	ウニ綱															
	パイプウニ（棘）															
陸産貝																
13	オキナワヤマタニシ	0	0	0	0	0	0	1	40	0	26	0	251	12	53	383
59	シュリマイマイ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
60	カツレンマイマイ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	3
61	パンダナマイマイ	0	0	0	0	0	0	1	15	0	5	0	68	6	18	113
62	オキナワウスカワマイマイ	0	0	0	0	0	0	0	6	0	4	0	17	0	2	29
65	イトマンケマイマイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	3	0	26
	計	0	0	0	0	13	4	6	801	0	623	0	675	12	384	3073

第 21 表　ナガラ第三原貝塚第Ⅳ層出土貝類集計グラフ



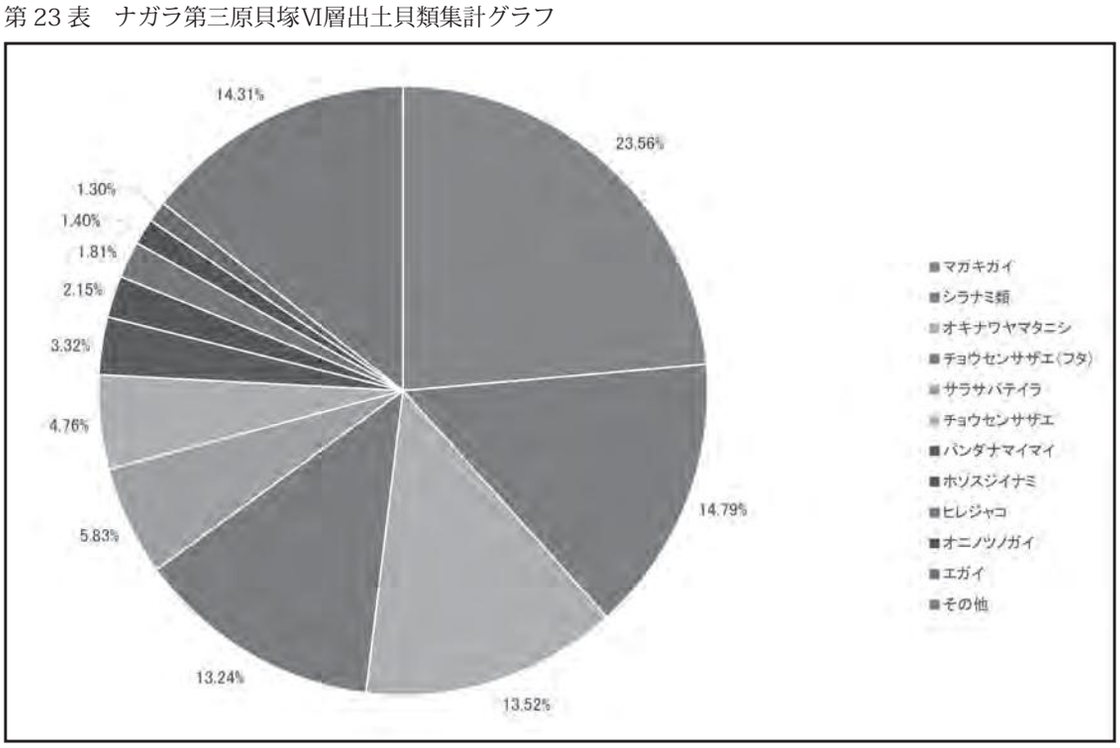
第 22 表　Ⅵ層出土貝類一覧表

		C - 2	C - 3	D - 2	D - 3	E - 2	E - 3	F - 2	F - 3	G - 2	G - 3	H - 2	H - 3	I - 2	I - 3	計
	腹足綱															
1	ツタノハ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	1	0	0	4
2	＊コシダカサザエ	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	1	3	0	0	7
3	チョウセンサザエ	12	9	41	16	104	32	456	109	218	127	93	177	0	0	1394
4	チョウセンサザエ（フタ）	97	137	250	109	177	150	653	247	387	671	378	623	0	0	3879
5	ヤコウガイ	0	1	2	0	4	0	5	2	4	2	1	3	0	0	24
6	ヤコウガイ（フタ）	4	1	6	3	4	3	8	2	10	9	7	11	0	0	68
7	カンギク	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
8	オオウラウズ	1	0	0	0	0	0	4	0	1	0	2	3	0	0	11
9	ニシキウズ	1	0	1	0	3	1	9	2	11	10	8	9	0	0	55
10	ギンタカハマ	7	3	13	1	17	3	33	10	34	9	13	20	0	0	163
11	サラサバテイラ	47	17	95	21	138	64	301	132	309	161	192	232	0	0	1709
12	リュウキュウアマガイ	0	0	1	0	2	0	5	1	0	2	2	2	0	0	15
13	アマオブネ	0	0	3	2	7	3	6	3	7	6	7	10	0	0	54
14	＊カノコガイ	2	0	1	0	0	0	2	0	1	0	0	1	0	0	7
16	オニノツノガイ	14	11	46	13	29	8	57	14	59	57	46	56	0	0	410
17	カヤノミカニモリ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
18	＊リュウキュウウミニナ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
19	イボウミニナ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
20	オハグロガイ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	4
21	マガキガイ	267	120	617	138	423	280	1154	451	757	1028	665	1002	0	0	6902
22	スイショウガイ	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2
23	クモガイ	10	7	24	2	13	3	30	13	56	20	49	27	0	0	254
24	スイジガイ	1	0	1	0	2	0	3	0	7	2	3	8	0	0	27
25	＊ヘビガイ類	0	0	1	0	2	0	0	2	0	0	0	2	0	0	7
26	キイロダカラ	0	0	2	0	1	0	1	0	0	1	2	1	0	0	8
27	ハナビラダカラ	1	2	0	1	0	0	3	1	0	1	2	2	0	0	13
28	コモンダカラ	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
29	ハナマルユキ	1	1	4	1	3	2	5	3	1	8	7	11	0	0	47
30	ハチジョウダカラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	2	0	0	5
31	ヤクシマダカラ	3	1	3	0	4	1	18	6	8	15	12	11	0	0	82
32	ホシダカラ	0	0	3	0	2	1	8	2	4	2	4	4	0	0	30
33	スクミウズラ	0	0	0	0	0	0	4	0	1	0	0	1	0	0	6
34	シオボラ	1	0	1	0	0	0	5	1	0	1	1	2	0	0	12
35	シノマキ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
36	フジツガイ	0	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	0	5
37	ホラガイ	1	0	2	0	1	0	4	0	4	2	2	3	0	0	19
38	オキニシ	3	2	10	2	9	4	46	10	37	25	20	32	0	0	200
39	ツノテツレイシ	0	0	0	0	0	1	3	0	2	0	0	3	0	0	9
40	ツノレイシ	0	1	3	0	3	3	9	6	12	7	4	5	0	0	53
41	レイシダマシ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
42	アカイガレイシ	1	1	2	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	7
43	オニコブシ	1	0	13	4	8	6	39	21	26	24	12	22	0	0	176
44	コオニコブシ	4	3	20	4	14	13	38	12	22	32	18	24	0	0	204
45	＊ヨフバイモドキ	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2
46	イトマキボラ	3	2	15	11	24	9	33	15	41	21	22	24	0	0	220
47	チトセボラ	1	0	1	1	0	0	3	1	3	0	1	4	0	0	15
48	マダライモ	0	0	3	2	2	1	8	1	1	4	2	4	0	0	28
49	サヤガタイモ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
50	イボシマイモ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
51	ヤナギシボリイモ	0	0	0	0	1	0	2	2	0	1	0	1	0	0	7
52	カバミナシ	0	0	1	0	4	2	5	4	0	3	3	5	0	0	27
53	ミカドミナシ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	4
54	アカシマミナシ	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	4	0	0	6
55	クロザメモドキ	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
56	アンボンクロザメ	4	2	6	0	4	1	14	3	12	12	11	12	0	0	81
57	クロフモドキ	2	1	5	1	5	3	9	3	10	6	6	10	0	0	61
58	ウシノツノ	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
59	＊カイコガイ	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2
60	リュウキュウツノマタ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
61	アラレイモ	1	2	8	1	3	2	2	2	1	9	3	5	0	0	39
62	ウラウズガイ	0	0	2	0	3	1	4	1	2	4	1	0	0	0	18
63	カサウラウズ	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	3
64	キセルガイ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
65	キナレイシ	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
66	クチベニレイシダマシ	0	0	0	0	0	0	3	0	1	1	0	2	0	0	7
67	クチムラサキダカラ	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
68	クロミナシ	1	0	0	0	0	1	0	0	0	4	0	3	0	0	9
69	コシダカガンガラ	1	0	4	0	3	0	4	0	1	1	1	2	0	0	17
70	コシダカギンタカハマ	1	0	4	0	1	1	0	0	1	1	2	2	0	0	13
71	サソリガイ	0	0	0	0	0	0	1	0	3	2	3	2	0	0	11

		C - 2	C - 3	D - 2	D - 3	E - 2	E - 3	F - 2	F - 3	G - 2	G - 3	H - 2	H - 3	I - 2	I - 3	計
72	サヤガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
73	シラクモガイ	1	1	2	0	5	2	8	4	3	6	3	4	0	0	39
74	シロクチキナレイシ	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	3
75	シロナルトボラ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
76	ジュセイラ	0	1	2	0	1	0	2	0	10	5	6	6	0	0	33
77	ソメワケグリ	0	0	0	0	1	1	5	0	1	3	0	0	0	0	11
78	コタカラガイ	2	0	2	1	0	1	2	0	1	3	2	2	0	0	16
79	ツヤイモ	0	0	0	0	1	0	4	0	2	0	1	0	0	0	8
80	テツボラ	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
81	ナガサラミナシ	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	2	0	0	5
82	ニシキノキバフデ	0	0	0	0	0	1	0	1	2	1	0	0	0	0	5
83	ベッコウガサ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2
84	ホソコオロギ	0	0	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	0	0	7
85	ホソスジテツボラ	0	0	0	0	0	1	2	3	1	2	2	2	0	0	13
86	マアナゴ	0	1	3	2	0	0	3	0	3	3	7	1	0	0	23
87	マクラガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
88	マツバガイ	0	0	0	0	0	1	1	0	1	2	1	0	0	0	6
89	ムカシタモト	0	0	1	0	0	0	0	0	2	1	1	2	0	0	7
90	ムラサキイガレイシ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1	2	0	0	6
91	ムラサキウズ	0	0	1	0	0	0	1	0	4	1	3	2	0	0	12
92	ムラサキレイシガシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	3
93	ユキゲイモ	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
94	リュウキュウエビスガイ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
95	イワカワトキワ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
96	ウズラガイ	1	0	0	0	0	0	5	0	0	1	1	0	0	0	8
97	オハグロガキ	0	0	3	0	3	0	10	1	2	7	0	10	0	0	36
98	ガクフイモ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	4
99	カニモリ	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	3
100	キバタケ	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2
101	コガタイモガイ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	4
102	サメムシロ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
103	シマイモボラ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
104	シロレイシダマシ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
105	スソムラサキイモ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	3
106	タカラガイ	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	0	0	0	6
107	タカラガイ（幼貝）	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
108	タマゴナリコゴメ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
109	タママイマイ	0	0	0	0	0	0	3	0	1	2	0	3	0	0	9
110	トコブシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
111	ナルトボラ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
112	ヒメイトマキボラ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
113	ヒロクチイガレイシ	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	4
114	ヒメヨウラク	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	3
115	ホシダカラ (幼貝)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
116	ホラダマシ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
117	ヤマザンショウ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	3
118	ロウソクガイ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
119	レイシガイ	2	0	2	0	1	1	4	1	1	1	2	2	0	0	17
120	ノシガイ	0	0	1	0	0	0	1	0	2	3	0	3	0	0	10
121	ミガキナガニシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	二枚貝綱															
131	エガイ	5	12	18	3	24	8	75	25	60	60	42	50	0	0	382
132	リュウキュウサルボオ	2	0	2	1	0	0	3	0	7	2	4	1	0	0	22
133	リュウキュウヒバリ	2	3	10	4	7	1	23	4	11	32	14	10	0	0	121
134	クロチョウガイ	1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	5
135	アコヤガイ？	2	1	2	0	1	0	2	1	1	2	3	0	0	0	15
136	シュモクアオリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3
137	メンガイ類	4	1	8	2	9	5	15	8	12	9	12	19	0	0	104
139	クロフトマヤ	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
140	カワラガイ	0	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	4
141	リュウキュウザルガイ	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	4
142	シラナミ類	90	57	310	82	288	111	671	187	1081	427	603	427	0	0	4334
143	ヒレジャコ	8	3	29	8	33	5	67	37	157	45	81	57	0	0	530
144	ヒメジャコ	2	1	0	3	9	4	13	4	22	10	12	3	0	0	83
145	シャゴウ	4	3	7	4	9	1	15	9	36	5	20	8	0	0	121
146	イソハマグリ	2	3	6	2	1	0	23	3	15	8	4	3	0	0	70
147	リュウキュウシラトリ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
148	サメザラ	1	1	0	0	2	0	6	1	6	3	1	5	0	0	26
149	リュウキュウマスオ	4	7	4	0	3	0	7	1	13	7	12	8	0	0	66
150	マスオガイ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
151	シレナシジミ	9	3	22	1	7	4	27	15	32	33	22	21	0	0	196
152	ホソスジイナミ	22	19	52	21	31	14	131	20	65	69	79	106	0	0	629
153	アラスジケマン	1	0	3	1	2	0	19	3	4	8	9	4	0	0	54

		C - 2	C - 3	D - 2	D - 3	E - 2	E - 3	F - 2	F - 3	G - 2	G - 3	H - 2	H - 3	I - 2	I - 3	計
154	ヒメイナミ	0	0	2	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	5
155	アラヌノメ	3	0	2	1	3	1	4	2	7	6	0	3	0	0	32
156	イナズマスダレ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0	0	7
157	ウミギク	1	2	2	0	3	1	8	2	5	5	0	8	0	0	37
158	オオヌノメ	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	4
159	シロチョウガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
160	チョウセンハマグリ	11	3	10	4	7	4	21	10	25	25	0	21	0	0	141
161	ユキノカサ	0	0	0	0	0	0	3	0	2	1	20	3	0	0	29
162	リュウキュウタケノコ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	9
163	オオシャコガイ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
165	ヒオウギ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
166	マツカゼ	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	3
	多板綱															
	ヒザラガイ類															
	頭足綱															
	コブシメ？															
	ウニ綱															
	パイプウニ（棘）															
陸産貝																
	腹足綱															
15	オキナワヤマタニシ	5	11	28	2	39	17	72	73	1285	416	1195	818	0	0	3961
59	シュリマイマイ	0	1	2	0	0	0	2	1	109	8	113	37	0	0	273
60	カツレンマイマイ	0	0	2	0	2	0	2	1	39	1	35	15	0	0	97
61	パンダナマイマイ	2	2	2	0	7	8	14	9	355	39	406	128	0	0	972
62	オキナワウスカワマイマイ	1	1	2	2	1	0	3	0	18	1	6	11	0	0	46
65	イトマンケマイマイ	1	0	0	0	0	0	4	2	28	2	24	39	0	0	100
	計	682	449	1734	479	1479	771	4212	1429	3676	3113	2608	3214	0	0	29295

第 23 表　ナガラ第三原貝塚Ⅵ層出土貝類集計グラフ



貝類

第Ⅵ層出土貝類として 29,295 点のピックアップ資料が調査中に採取された。海産貝はマガキガイ、シラナミ類、チョウセンサザエ（蓋）などが出土しており、陸産貝はオキナワヤマタニシ、パンダナマイマイなどが出土している。本層出土貝類の優占種はマガキガイ（23.56%）、シラナミ類（14.79%）、オキナワヤマタニシ（13.52%）、チョウセンサザエ（蓋）（13.24%）となっている。

その他、マングローブ地帯、河口域に生息するシレナシジミが 196 点出土しており、それを材料とした製品も出土している。

魚骨類

魚骨類では、ブダイ属、フエフキダイ属、マハタ属などが出土した。魚骨類は包含層中からの出土だけではなく、竪穴住居跡や炉跡 4 などの遺構中からの出土も確認された。

獣骨類

獣骨類においては、イノシシ、クジラなどの哺乳類、亀類などのは虫類の骨が見られた。イノシシ骨にはカットマーク、チョップマークといった骨に残る傷跡が見られる資料が確認された。

3-3-4 小結

以上、ナガラ原第三貝塚の調査内容について概観した。今回の調査においては、Ⅳ層とⅥ層、2 枚の遺物包含層が確認され、遺構・遺物の内容からそれぞれ弥生並行期と縄文後期の包含層であると判断した。また、Ⅵ層直上からは埋葬遺構が確認された。Ⅵ層直上の遺構内出土遺物が僅少であることから、遺物から帰属年代は判断しがたかったが、人骨の年代測定から約 2,500 年前のものであると判明し、読谷村の渡久地木綿原遺跡、南城市の武芸洞遺跡、鹿児島県伊仙町のトマチン遺跡などの事例と近似する年代観が得られた。このことから、3 時期の文化面が存在していたこととなる。

Ⅳ層においては、遺構として貝溜り、イモガイ集積遺構、遺物として土器、石器、貝製品、金属片、貝類、獣魚骨類を確認した。Ⅳ層出土土器は尖底を主体し、甕形の他、浅鉢形土器の完形に近い資料が出土した。石器としては石斧、敲石、磨石等が得られた。貝製品は貝皿、ホラガイ製有孔製品などが出土している。Ⅳ層からは上記の遺物の他、金属片が出土している。復元した形状、部位かに関しては不明であるが、何らかの製品の破片である可能性は否定出来ない。自然遺物は、シラナミ、サラサバティ、マガキガイなどの貝類、獣魚骨ではブダイ属、ウツボなどの魚類、獣骨はイノシシが出土している。

Ⅵ層直上に関しては明確な層序を確認することが出来なかったが、出土人骨の年代測定より約 2,500 年前の時期のものと判断した。遺構としては埋葬遺構 3 基が確認され、3 体分の人骨が出土した。遺構内出土遺物は少ないが、埋葬遺構 2 よりサメ歯状貝製品、埋葬遺構 3 より着装されたゴホウラ製貝輪が得られた。Ⅵ層直上より無文の肥厚口縁土器片が得られており、

人骨の年代測定値と合致する土器も得られている。

Ⅵ層においては、遺構として竪穴住居址、炉跡、大型焼成遺構が検出され、遺物は土器、石器、貝製品、骨牙製品、貝類、獣魚骨類が出土した。

土器は深鉢形を主体とし、壺形土器片が若干見られた。出土土器のほとんどが有文土器であるが、点数は少ないが残存状況が良好な無文土器も得られた。

Ⅵ層出土石器に関しては、石斧、磨石、敲石、石皿、扁平磨製石器など多くの器種が出土した。また、石材としてチャート塊が出土している。島内で得られるチャートの特徴（赤色を帯びている等）とは異なっており、島外からの持ち込みの可能性が考えられる。

Ⅵ層出土貝製品は、貝錘、貝刃などの実用品だけではなく、貝珠、獣形貝製品、タケノコガイ製品、パイプウニ線刻製品などが多種にわたる種類の製品が出土した。タケノコガイ製品は浜崎貝塚で類似品が出土している。サザエ製品に関しては、帽子のつば状という一定の形状のものが多くみられること、摩耗具合などから製品として報告した。現状では奄美大島名瀬市（現奄美市）根差部集落遺跡において時期は異なるものの類例が見られる。今後、沖縄諸島、奄美諸島における類例の増加、自然遺物としているチョウセンサザエから類似したものが見られるかを確認することにより、人工遺物か否か、用途など考察する必要がある。

Ⅵ層出土骨牙製品は、骨錐、箆状製品、蝶形骨器、簪状製品などが出土した。

自然遺物はマガキガイ、シラナミ、チョウセンサザエなどの海産貝、オキナワヤマタニシ、パンダナマイマイなどの陸産貝、ブダイ属といった種の魚骨、イノシシ、クジラなどの哺乳類の骨、カメの骨などが出土した。Ⅵ層での自然遺物の出土点数はⅣ層での出土点数を上回っている。Ⅳ層の残存範囲がチョウセンサザエ（蓋）に関しては貝製品とした物の蓋であった可能性も否定できない。製品としたものと自然遺物としたチョウセンサザエの殻を合計しても蓋との個数が著しく異なっている出土状況となった。

以上のように、第Ⅲ層、第Ⅳ層、第Ⅵ層直上、第Ⅵ層において多様にわたる遺構、遺物が確認され、また同地点での土地利用の変遷を垣間見ることができた。今後、調査区外への遺構の広がりを確認することが出来たことから、遺跡範囲の把握すること、また埋葬遺構を包蔵する時期の層が有無及び広がりを確認することが課題である。

1. 川平第２地区埋蔵文化財発掘調査に伴うフローテーション分析調査報告

喜納政英　玉城絵梨香
（株式会社イーエーシー）

はじめに

川平第２地区は、沖縄本島の本部半島から北西 9km の場所に位置する伊江島の南部、伊江港から西へ約２キロ進んだ海岸沿いに所在する。

平成 25 年７月、川平地内において県営農地保全整備事業の浸透池設置に伴う緊急発掘調査が行われた。カヤ原遺跡 A 地点・ナガラ原東貝塚・ナガラ原第３貝塚の３遺跡が確認され、大小複数の貝溜りや住居跡・炉跡・先史時代のものと見られる埋葬人骨など数多くの成果が得られた。今回、なかでも成果の多かったカヤ原遺跡 A 地点・ナガラ原第３貝塚からサンプル土壌を採取し、フローテーション分析調査を行った。フローテーション法を用いることで、発掘現場で見落としがちな微小の貝類遺存体や動物遺体、植物遺体、また微細な人工遺物の検出をめざし、発掘調査の補完資料を得ることを目的とした。

本稿は、平成 25 年度に行われた県営農地保全整備事業（川平第２地区）埋蔵文化財発掘調査の際、採取された貝塚遺構・住居跡遺構・石棺墓・ピット・土坑などのサンプル土をフローテーション処理し、LF（Light Fraction）・HF（Heavy Fraction）両資料を中心とした微細遺物の回収・選別の成果を記録した物である。

層序とサンプル土壌概要

今回、フローテーション処理を行ったサンプル土壌は、カヤ原遺跡 A 地点では弥生期（Ⅲ層）、ナガラ原第３貝塚では、縄文時代後期（Ⅵ層）～弥生時代並行期（Ⅳ層）に属すると考えられる。袋総数 54 袋、378 リットルの処理をおこなった。概要は下記に示す通りであり、サンプル土壌の土色は『新版標準土色帖 2006 年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）』を参照して識別し、個々の詳細についてはフローテーション台帳に記した。

フローテーション方法

まず、サンプル土壌は乾燥させ、サンプルごとの調査カードを作成し、採取年月日・層序・量（ℓ）等の必要情報を記入した。次に、乾燥したサンプルをフローテーション装置によって水洗選別処理を実施。なお、フローテーション装置の篩は LF 用外部の篩が上段 2.0㎜・下段 0.425㎜、HF 用内部篩が 1.0㎜である。

採取された資料は乾燥の後に選別作業を行い、選別された資料はそれぞれユニパックに入れて同定分析に備えてある。

サンプル概要

遺跡名	遺構名	グリッド	層序	数量（袋）
カヤ原遺跡 A 地点	大貝塚①	C－2， E～F－2	Ⅲ層下部	×14
カヤ原遺跡 A 地点	大貝塚②	C－3	Ⅲ層下部	×6
ナガラ原第３貝塚	貝塚①	I－3	Ⅳ層下部	×1
ナガラ原第３貝塚	貝塚②	G－4	Ⅳ層下部	×1
ナガラ原第３貝塚	骨集中地	G－2	Ⅵ層	×1
ナガラ原第３貝塚	人骨周辺 (埋葬遺構 2)	H－1・2	Ⅵ層直上	×12
	人骨周辺 (成人)		Ⅵ層 (0～10cm)	
	人骨周辺 墓内			
	石棺墓			
ナガラ原第３貝塚	竪穴住居跡 1	H－3	Ⅵ層 (10～30cm)	×5
ナガラ原第３貝塚	竪穴住居跡 2	C・D－2	Ⅵ層 (40～50cm)	×2
ナガラ原第３貝塚	大型焼成遺構	D・E－2 区境	Ⅵ層	×3
ナガラ原第３貝塚	炉跡 1 内	H－2	－	×1
ナガラ原第３貝塚	炉跡 4 内	F－2	－	×4
ナガラ原第３貝塚	炉跡 15 内	E－2	Ⅵ層	×3
ナガラ原第３貝塚	炉跡 17 内	D・E－2	Ⅵ層	×1
				計 54 袋、387 ℓ

結果

サンプル土壌総量 378 ℓ 中採取された遺物は、LF 資料が 95.0g・HF 資料が 14,511.1g となっている。

HF 資料の採取遺物からは、貝類・微小貝・甲殻類・脊椎動物遺体・炭・石片・土器片・などが得られている。その中でも、№25・№30 からはイモガイ科を利用したと思われる貝製小珠、約 4㎜（図 21）と、用途不明だが装飾品として利用されたと思われる貝製品約 2㎝（図 23）などが採取された。

ＨＦ資料　人工遺物出土状況　（単位＝点）

No.	石　器	陶　器	貝　製　品				計
			貝珠（大）	貝珠（小）	装飾品？	不明	
7			1				1
25			1	8			9
27				2			2
28			1	10			11
30			1		1		2
42		1					1
44				1			1
47	1			1			2
50	1						1
54	1			1			2
計	3	1	3	23	1	0	31

ＨＦ出土遺物重量表　　● HF(単位＝ g)

No.	脊椎動物遺体	貝類	微小貝	炭	甲殻類	石片	鉄片	土器片	貝製品	炭化種子	種子	総量
1	1.1	0.2	3.0	0.1	0.2							4.6
2	2.9	1.4	2.8	0.1	0.1	34.9		4.9				47.1
3	1.3	2.0	1.0	0.1	0.1			2.2				6.7
4	1.1	126.1	1.7	0.2	1.0							130.1
5	1.2	124.4	0.2	0.1		0.1		1.3				127.3
6	1.1	0.3	0.1		0.1			3.2				4.8
7	1.1	1.8	0.6	0.0				3.0				6.5
8	2.3	10.5	0.1	0.1				1.1				14.1
9	0.7	11.0	0.3		0.1			0.1				12.2
10	0.8	95.0	2.4	0.0	0.1	14.1	0.1	0.8				113.3
11	0.1	258.6	0.3	0.4		9.5	0.1					269.0
12	1.2	14.0	0.2	0.3	0.1							15.8
13	0.3	13.0	0.1	0.5				0.9				14.8
14	0.5	31.7	0.2	0.2				1.1				33.7
15	0.1	15.6	0.4	0.4								16.5
16	1.1	42.2	0.3	0.3	0.1							44.0
17	0.1	201.5	0.3	3.8	0.1							205.8
18	0.1	196.7	0.2	2.8				10.8				210.6
19	3.3	20.0	0.2	3.1				11.6				38.2
20	3.9	11.1	0.2	3.1	0.1			0.5				18.9
21	0.1	23.3	0.2	0.8	0.1							24.5
22	0.8	169.1	0.3	2.8	0.1							173.1
23	0.3	18.6	0.4	3.9		0.6		9.9			0.2	33.9
24	43.2	0.2	0.3	1.7			0.2	2.1				47.7
25	0.1	0.8	0.6	7.6	0.1	0.2		2.2	3.2		0.4	15.2
26	0.2	0.5	0.2	2.2	0.1	0.4		3.4			0.2	7.2
27	1.1	0.7	0.1	0.0				3.2				5.1
28	1.1	0.4	0.1	0.0	0.2			1.9				3.7
29	6.6	0.3	0.1	0.4	0.1			3.4				10.9
30	2.6	0.3	0.1		0.1			3.3				6.4
31	2.5	260.6	0.3	0.1				0.6	4.0		0.3	268.4
32	2.4	10.3	0.6	0.3	0.6			2.4				16.6
33	36.1	162.2	1.1	4.5	0.8		0.5	69.9				275.1
34	70.1	56.2	0.2	4.7	0.1			37.5				168.8
35	32.6	16.9	0.2	2.2				49.5				101.4
36	61.6	9.7	0.4	7.8	0.4			79.6		1.5		161.0
37	21.9	221.9	1.0	0.5				38.3			0.2	283.8
38	43.2	121.9	2.9	5.1	0.8			95.9				269.8
39	24.4	202.6	0.6	1.9				53.5				283.0
40	28.5	249.6	0.3	0.8				37.4				316.6
41	45.5	150.1	0.6	3.6	0.9			11.1				211.8
42	41.1	97.9	0.1	6.7	0.3			36.3				182.4
43	20.0	101.2	1.5	0.1				0.2				123.0
44	10.3	8.7	1.2	0.1								20.3
45	11.0	6.1	2.1	0.2				1.2				20.6
46	15.0	6.3	2.2	0.4								23.9
47	43.3	6.6	2.4	1.4				0.1				53.8
48	11.1	5.3	2.4	0.9				0.3				20.0
49	0.7	4.0	0.7	0.6								6.0
50	0.8	10.8	0.6	0.1								12.3
51	0.1	11.0	1.1	0.0				0.4				12.6
52	0.6	21.0	3.1	0.0		9.9	1.1	0.1				35.8
53	0.8	33.0	1.9	0.1		9.5	0.1					45.4
54	0.4	39.1	3.7	0.1	0.1				3.6			47.0
総量	604.4	3204.3	48.2	77.2	6.9	79.2	2.1	585.2	10.8	1.5	1.3	4621.1

ＬＦ出土遺物重量表　　● LF(単位＝ g)

No.	脊椎動物遺体	貝類	微小貝	炭	甲殻類	石片	鉄片	土器	貝小珠	炭化種子	種子	一括計量
1		○	○	○								0.2
2			○	○								0.1
3			○	○								0.1
4			○	○								0.1
5			○	○								0.1
6			○									0.1
7				○								0.1
8			○									0.1
9			○	○								0.1
10			○	○								0.2
11			○	○								0.1
12			○	○								0.1
13			○	○							○	0.1
14			○									0.1
15				○								0.1
16			○									0.1
17			○	○								0.1
18		○	○	○								0.2
19			○	○								0.1
20			○	○								0.1
21			○	○								0.4
22			○									0.1
23		○		○								0.4
24			○									0.1
25			○	○							○	0.3
26		○	○	○								1.2
27			○	○								0.4
28			○	○								0.2
29			○	○								0.2
30			○									0.2
31				○								0.1
32			○									0.1
33			○	○								0.1
34		○	○	○								1.1
35			○	○								0.9
36		○	○	○								0.8
37			○	○								0.6
38			○	○								0.6
39			○	○								0.6
40			○									0.2
41				○								0.1
42			○									0.3
43			○	○								0.5
44		○	○	○								1.3
45			○	○								0.2
46		○	○	○								1.4
47			○	○								0.4
48		○	○	○								0.7
49			○	○								0.4
50		○	○	○								1.1
51		○	○	○								1.2
52		○	○	○								0.9
53			○	○								0.4
54		○	○	○								1.2
総量	0				0	0	0	0	0	0	0	21.0

また、別添えのHF出土遺物重量表内の鉄片・不明遺物についても触れておきたい。
鉄片、としているものは、選別作業時に使用している磁石に反応した、直径約1～2mm程度の茶色い粒状の物質である。鉄分を持った土壌中の成分が集まって、磁気を帯びたものと推測される。ほとんどのサンプルから一定量が得られることから、今後の分析資料として回収した。
不明遺物については、直径5～6mm程度の土のコロコロと丸い土の塊で、こちらもサンプルから一定量得られた。上述の鉄片と同様に、土壌中の物質が何らかの作用で変異したものと考えられるが、こちらも分析の対象として回収している。

まとめ

今回、川平第2地区埋蔵文化財発掘調査に伴うフローテーション資料からは、HF資料・LF資料ともにある程度の成果が得られた。HF資料からは、土器片、装飾品と見られる貝製品などの人工遺物、炭・脊椎動物遺体などの自然遺物が得られ、LF資料からも微小貝や炭等が検出された。
装飾品と見られる貝製品は、竪穴住居跡1から検出しており、その付近には、平成25年度の調査時に県内で類例の少ないゴホウラ製の貝輪を装着した埋葬人骨が出土している。位の高い人物であった可能性が考えられているが、この人物と1号竪穴遺構は何らか関係性を持っているのだろうか。とても興味深い。
カヤ原遺跡A地点からは、ピックアップ法や他の土壌サンプルからはほとんど出土しない多数の動物遺体の検出できたことが特徴としてあげられる。それらは貯蔵穴もしくは食料残滓の廃棄土坑であると推定できる。カヤ原遺跡A地点では、発掘調査時には動物遺体はあまり検出されておらず、今回、フローテーション法を行うことで、当時の状況を知るための手掛かりとなりうる補完資料を得ることができたと考える。

参考文献

・久保弘文・黒住耐二　1995年　生態／検索図鑑『沖縄の海の貝・陸の貝』 沖縄出版
・奥谷喬司　2000年 『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会
・知念勇・高宮廣衛　2004年　考古資料大観　第12巻『貝塚後期文化』 小学館
・土肥直美 他　2008年 『具志川グスク崖下地区の発掘調査』沖縄先史時代からグスク時代への移行期解明を目指して

引用

土肥直美 他　2008 『具志川グスク崖下地区の発掘調査』沖縄先史時代からグスク時代への移行期解明を目指して

図1 脊椎動物遺体(No.22)

図2 貝類依存体(No.22)

図3 甲殻類(No.22)

図4 種子(No.22)

図5 不明遺物(No.22)

図6 土器片(No.22)

図7 脊椎動物遺体(No.23)

図8 貝類依存体(No.23)

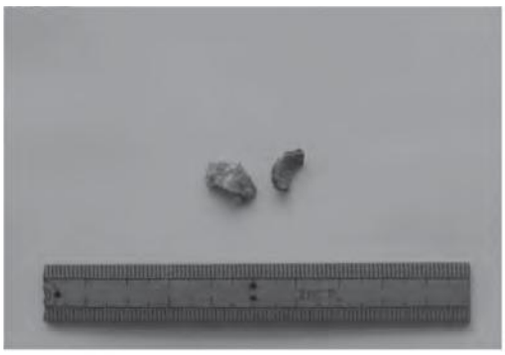


図9 ヒザラガイ(No.23)

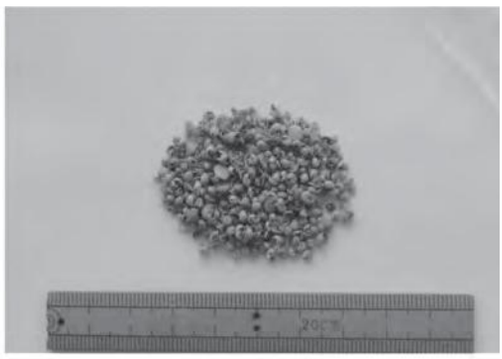


図10 微小貝(No.23)

図11 甲殻類(No.23)

図12 石片(No.23)

図13 炭(No.23)

図14 土器片(No.23)

図15 脊椎動物遺体(No.25)

図16 陸生貝類(No.25)

図17 貝類依存体(No.25)

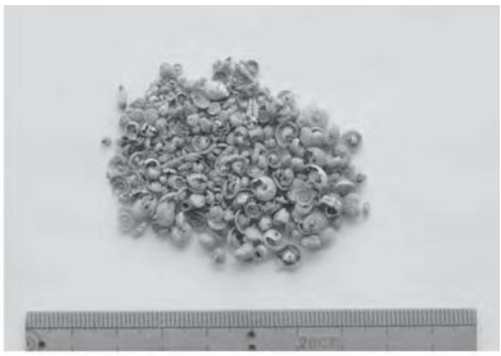


図18 微小貝(No.25)

図19 甲殻類(No.25)

図20 炭(No.25)

図21 貝小珠？(No.25)

図22 土器片(No.25)

図23 貝製品(No.31)

図24 貝製品(裏)(No.31)

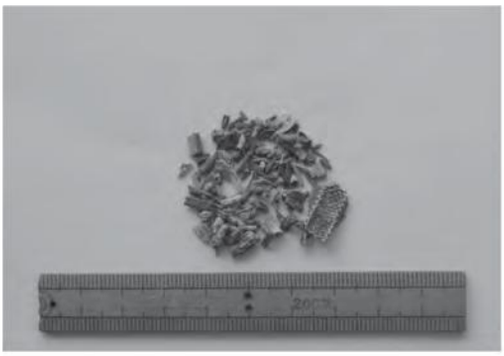


図25 脊椎動物遺体(No.7)

図26 貝類依存体(No.7)

図27 ヒレジャコ・チョウセンサザエなど(No.7)

図28 ヒザラガイ(No.7)

図29 微小貝(No.7)

図30 甲殻類(No.7)

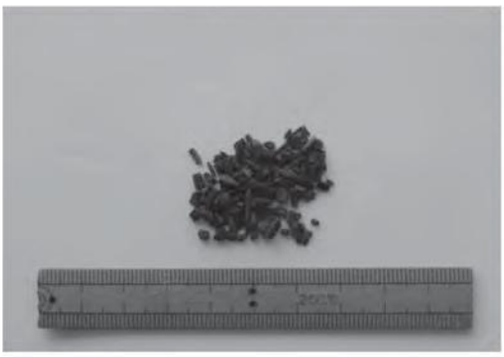


図31 炭(No.7)

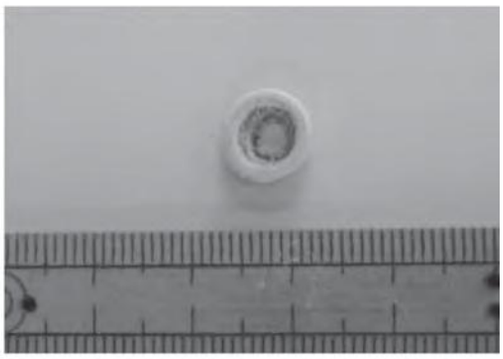


図32 貝小珠(No.7)

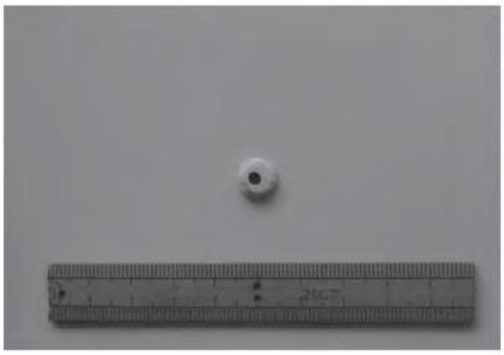


図33 貝小珠(裏)(No.7)

図34 土器片(No.7)

2. 出土人骨分析

株式会社文化財サービス

伊江村ナガラ原第三貝塚出土の人骨

１．はじめに

沖縄県伊江村ナガラ原第三貝塚出土の人骨について報告する。人骨は平成２６年度の調査において発見されたものである。遺跡からは縄文後期相当の竪穴遺構と炉跡が多数出土しており、当時の生活を示す画期的な成果が得られている。人骨は石棺内から１体、石棺の南側に隣接する土坑から２体、石棺東側石積み下の土坑から頭蓋骨１体分が検出された。以下に概要を報告する。

２．出土人骨と調査の方法

出土人骨は成人３体と考えられる。

石棺内：人骨の頭位は西、埋葬姿勢は仰臥伸展位である。左手首にゴホウラ貝製の腕輪を着装しており、集団内で特別の人物だった様子がうかがえる。人骨の保存状態は良好である。

石棺外：石棺外から２体の埋葬人骨が検出されている。人骨の頭位はどちらも東、埋葬姿勢は仰臥伸展位だったと考えられる。また、２体はほとんど接するように上下に重なった状態で検出された。骨の保存状態そのものは良好であるが、破損部分が多く全体としては２体の個体識別は困難である。ここでは、便宜的に上層のものをＡ人骨、下層のものをＢ人骨として記述する。

尚、石棺外東側に接する石積み下土坑から頭蓋骨１体分が検出されているが、成人の男性頭蓋であることから、石棺外人骨２体の内、どちらかに属する可能性を否定できない。したがって、本遺跡出土の人骨は全体として３体と考えるのが妥当であろう。

性別、年齢は Brothwell(1981) 1)、Knussman(1988) ２）を参考に推定した。また、計測は Knussman(1988) ２）に従った。

３．人骨の所見

１）石棺内人骨（女性、老年）

全身骨が比較的保存良好な状態で検出されている。人骨の年代は、人骨そのものから放射性炭素年代法によって 2570 ± 30calBP(較正年代) という値が得られている（年代分析結果の章参照）。

性別・年齢：性別は頭蓋骨、骨盤、四肢骨の特徴から女性であることは明らかである。年齢は上顎の全歯、下顎の全大臼歯が生前に脱落しており、歯槽骨の吸収も顕著であることから、老年（60 歳以上）と推定される。

形質：頭蓋骨と四肢骨の主要計測値を表１～表３、写真を図版１に示している。

（1）頭蓋骨

上から見たかたちを示す頭蓋長幅示数は 84.4 で、短頭型（80.0 ～ 84.9）に属している。顔面の特徴は、横幅に対して相対的に上下径が小さい低顔、低眼窩の特徴を示した（表 1，図版 1 参照）。短頭、低顔、低眼窩はいずれも沖縄貝塚時代人の特徴であり、本人骨も典型的な沖縄貝塚時代人の特徴をもっていると言って良さそうである。

（2）四肢骨

筋付着部の発達が良好で、全体的に頑丈である。

上腕骨の計測値に左右差が認められ，明らかに右が頑丈である。おそらく右利きだったのだろう。手指を動かす筋肉の付着する前腕骨も骨間縁の発達が良好で（横径が大）、筋肉が発達していたことを示している。

下肢骨も頑丈である。大腿骨の断面示数（右：113.0、左：108.7）は、縄文人ほどではないが、やや柱状傾向を示している。脛骨には縄文人のような扁平性は認められなかった。

また、珊瑚礁の海に適応した沖縄貝塚時代人は相対的に下半身よりも上半身が発達すると言われている（土肥他 (2000) 3)）。本人骨も上肢の発達が顕著であり（図 1）、食料資源の豊富な礁池での生業活動を主体とする生活を送っていたと考えられる。図 1 にはほぼ同時期のうるま市仲原遺跡出土 1 号人骨の 2 例も示している。四肢長骨最大長から推定された身長は 141 ～ 144cm 程度で低身長である。

（3）特記事項

本人骨には顕著な変形性脊椎症が認められた。図版 1 中段の写真は変形し、上下の椎体 2 個に癒着が認められた腰椎である。

2）石棺外人骨 A（男性、成年）

石棺外から重なって出土した 2 体のうちの上層人骨である。下顎骨、右肩甲骨、右鎖骨、右上腕骨、椎骨片、肋骨片、寛骨片、大腿骨、右脛骨片、左右腓骨片、足部骨が原位置（解剖学的位置）に近い状態で確認された。残存部位を図 2 に示している。尚、下顎骨周辺から遊離上顎歯が検出されているが、咬耗度などから本人骨に属すると考えられる（図版 1）。

性別・年齢：性別は寛骨、四肢骨の特徴から男性、年齢は下顎歯の咬耗度などから成年（20 代前半）と推定した。

形質：四肢骨の筋付着部の発達は良好で頑丈である。残存部位の情報が少なく、詳細な特徴などは不明である。

人骨の年代は上層人骨と下層人骨の識別が困難であるが、2580 ± 20calBP(較正年代)、2590 ± 30calBP(較正年代) という値が得られている（年代分析結果の章参照）。

3）石棺外人骨 B（男性、成年）

石棺外下層から検出された人骨である。右上腕骨片、右尺骨片、左尺骨片、左橈骨片、右脛骨片などが原位置に近い状態で A 人骨直下で検出された。残存部位を図 2 に示している。

性別・年齢：四肢骨の特徴から性別は男性、年齢は成人（20 歳以上）には達していた

と考えられる。

形質：情報が少なく詳細は不明であるが、全体として頑丈だったと思われる。年代については上層人骨の項を参照。

4）土坑内頭蓋骨（男性、成人）

頭蓋骨の保存状態は良好であるが、頭頂部の破損が著しい（図版1）。

性別・年齢：眉弓の発達が良好であることから、性別は男性と推定した。年齢は遊離残存歯に上層人骨よりも咬耗の進んだものが見られたことから、上層人骨よりは年上の成人と考えられるが、詳細は不明である。

形質：破損部がかなり広範なため計測出来る項目が限られたが、顔面部は低顔、低眼窩、彫りの深い顔立ちの典型的沖縄貝塚時代人の特徴をもつようである。頭長幅示数は正確な計測が出来なかったが、推定値では明らかに過短頭（85.0以上）に属するようである。

尚、本頭蓋骨の所属については、保存状態、年齢（明らかに上層人骨の方が若い）等から下層人骨の可能性が高いように思われる。

4．まとめ

平成26年度伊江村教育委員会によるナガラ原第三貝塚の発掘調査によって、約2600年前（較正年代）の人骨3体が出土した。人骨の所見の概要は以下の通りである。

1）石棺内人骨（女性・老年）：仰臥伸展位の埋葬人骨。頭位は西。短頭、低顔、低眼窩の特徴をもつ。推定身長は141～144cm程度と推定された。上半身の発達した沖縄貝塚時代人の特徴をもつ。腰椎に変形性関節症が認められた。

2）石棺外人骨2体（男性・成年、男性・成人）：いずれも頭位が東の仰臥伸展位埋葬人骨と推定される。保存部位が少ないため形質の詳細は不明であるが、筋付着部の発達などから、いずれも頑丈な男性だったと考えられる。

3）土坑内頭蓋骨（男性・成人）：頭蓋骨のみ改葬されたと考えられる。低顔、低眼窩の典型的沖縄貝塚時代人の特徴をもつ。所属は石棺外の下層人骨の可能性が高い。

3 参考文献

1）Brothwell DR(1981) Digging up Bones. Cornell University Press.

2）Knussman R.(1988) Martin/Knussman Anthropologie.Band 1,Stuttgart,Gustav Fischer Verlag.

3）土肥直美，泉水奏，瑞慶覧朝盛，譜久嶺忠彦 (2000) 骨からみた沖縄先史時代人の生活．高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会編，琉球・東アジアの人と文化（下巻），高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会，pp.431-448.

表 1　頭蓋主要計測値

		石棺内人骨　女性	石棺外頭骨　男性
1	頭蓋最大長	173	
5	頭蓋基底長	94	
8	頭蓋最大幅	146	144
9	最小前頭幅	98	97
11	両耳幅	131	131
12	最大後頭幅	116	114
17	ﾊﾞｼﾞｵﾝ・ﾌﾞﾚｸﾞﾏ高	124	
43	上顔幅	106	105
44	両眼幅	96	98
45	頬骨弓幅	133	132
46	中顔幅	99	104
48	上顔高（alv)		63
51r	眼窩幅 (r)	40	41
51l	眼窩幅 (l)	40	40
52r	眼窩高 (r)	30	30
52l	眼窩高 (l)	31	30
54	鼻幅	27	26
55	鼻高	44	47
8/1	頭蓋長幅示数	84.4	
17/1	頭蓋長高示数	71.7	
17/8	頭蓋幅高示数	84.9	
48/45	上顔示数 K(alv)		47.7
48/46	上顔示数 V(alv)		60.6
52/51	眼窩示数 (r)	75.0	73.2
	眼窩示数 (l)	77.5	75.0
54/55	鼻示数	61.4	55.3
71/70	下顎枝示数 (r)	64.2	
	下顎枝示数 (l)	63.0	
顔面平坦度			
	前頭骨弦	95.9	95.1
	垂線高	20.0	16.1
	平坦度示数	20.8	16.9
	鼻骨弦	13.9	13.6
	垂線高	5.1	4.8
	平坦度示数	36.4	35.0
	頬上顎弦	95.6	
	垂線高	24.9	
	平坦度示数	26.1	

(mm)

表２　上肢骨計測値

		石棺内人骨 女性		石棺外人骨 A		石棺外人骨 B
		右	左	右	左	右
上腕骨						
1	最大長		(240)			
4	下端幅	52	51			
5	中央最大幅	24	21			26
6	中央最小幅	17	16			19
7	最小周	61	56	64		65
7a	中央周	69	64			74
6/5	体断面示数	70.8	76.2			73.1
7/1	長厚示数		23.3			
尺骨						
1	最大長	216				
2	生理長	190				
3	最小周	42			42	
11	体矢状径	12				
12	体横径	17				
3/2	長厚示数	22.1				
11/12	体断面示数	70.6				
橈骨						
3	最小周	36	37		44	
4	体横径	15	15		17	
4a	中央横径					
5	体矢状径	10	11		12	
5(6)	下端幅	28				
5/4	体断面示数	66.7	73.3		70.6	

(mm)

表３　下肢骨計測表

		石棺内人骨 女性		石棺外 A
		右	左	右
大腿骨				
1	最大長		(350)	
6	体中央矢状径	26	25	
7	体中央横径	23	23	
8	体中央周径	77	77	
9	体上横径	28	29	
10	体上矢状径	23	22	
6/7	体中央断面示数	113.0	108.7	
10/9	体上断面示数	82.1	75.9	
脛骨				
1a	最大長	295		
8	中央最大径	25	25	
8a	栄養孔位最大径	29	28	
9	中央横径	20	19	

9a	栄養孔位横径	22	21	
10	骨体周	71	72	
10a	栄養孔位周	80	80	
10b	最小周	65	63	70
9/8	中央断面示数	80.0	76.0	
9a/8a	栄養孔位断面示数	75.9	75.0	
腓骨				
1	最大長		290	
2	中央最大径	13	13	
3	中央最小径	10	9	
3/2	中央断面示数	76.9	69.2	

(mm)

表 4　下肢骨計測表

		石棺内人骨 女性		石棺外 A
		右	左	右
大腿骨				
1	最大長		(350)	
6	体中央矢状径	26	25	
7	体中央横径	23	23	
8	体中央周径	77	77	
9	体上横径	28	29	
10	体上矢状径	23	22	
6/7	体中央断面示数	113.0	108.7	
10/9	体上断面示数	82.1	75.9	
脛骨				
1a	最大長	295		
8	中央最大径	25	25	
8a	栄養孔位最大径	29	28	
9	中央横径	20	19	
9a	栄養孔位横径	22	21	
10	骨体周	71	72	
10a	栄養孔位周	80	80	
10b	最小周	65	63	70
9/8	中央断面示数	80.0	76.0	
9a/8a	栄養孔位断面示数	75.9	75.0	
腓骨				
1	最大長		290	
2	中央最大径	13	13	
3	中央最小径	10	9	
3/2	中央断面示数	76.9	69.2	

(mm)

図１　上腕骨最小周／大腿骨中央周（上肢と下肢の発達程度を示す示数）

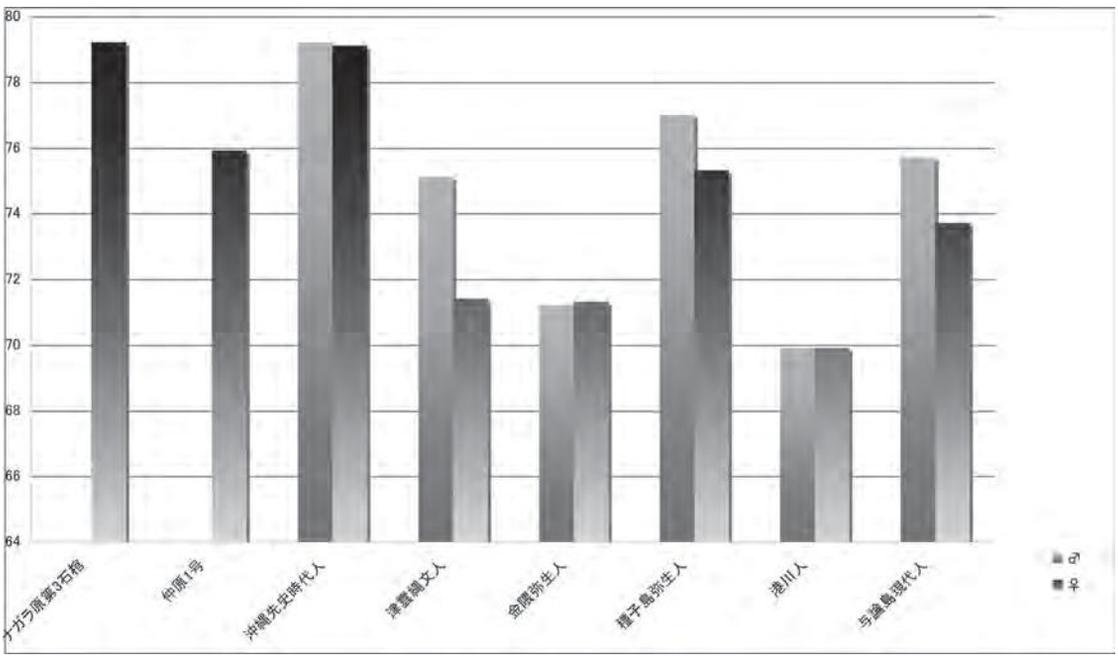
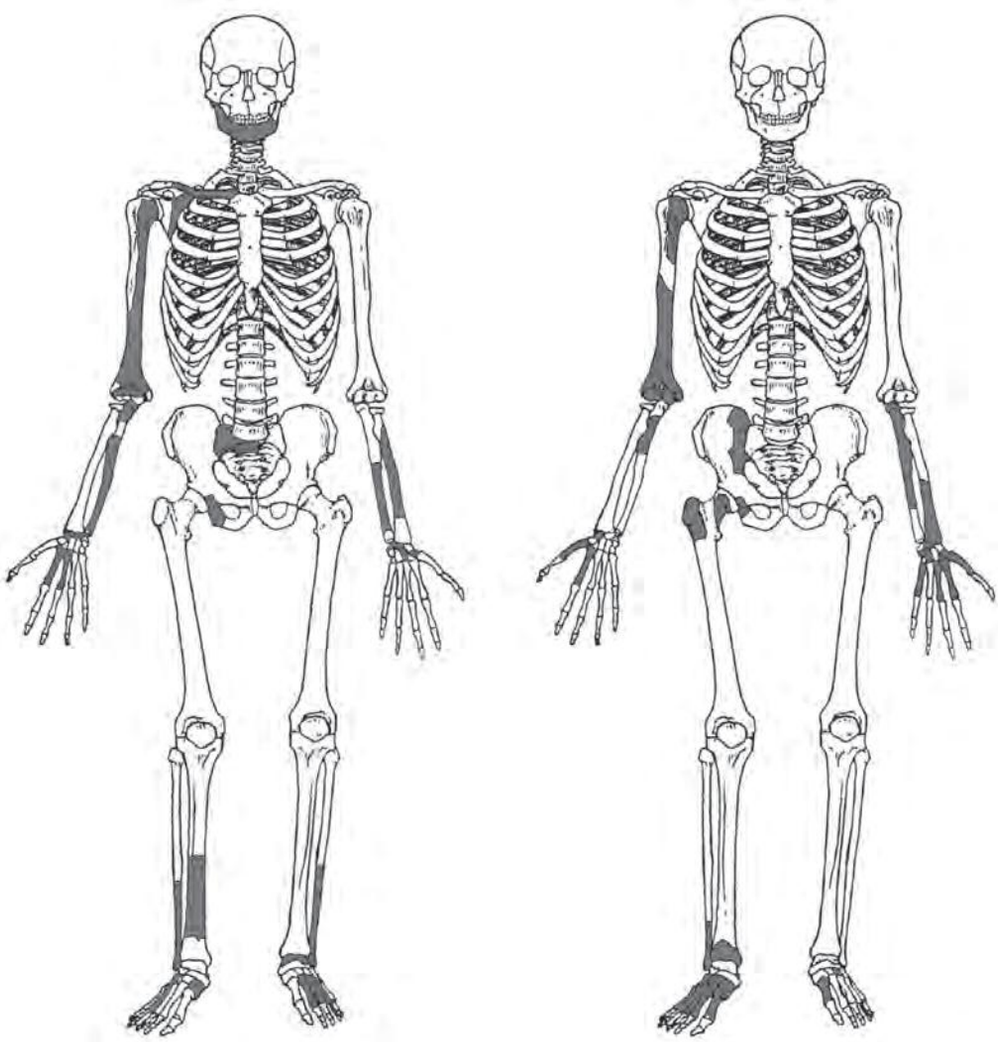
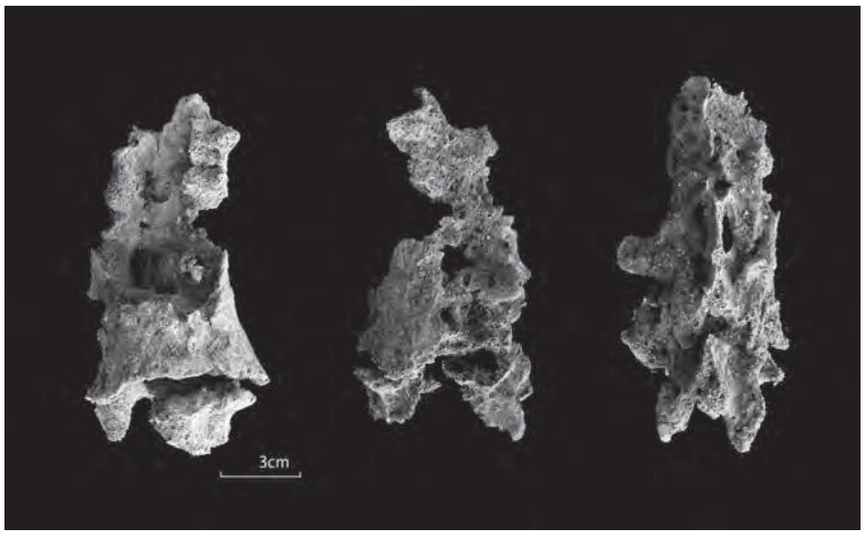


図２　石棺外人骨の主な残存部位（左：A（上層）人骨、右：B（下層）人骨）





図版 1
上：石棺内人骨（女性・老年）
中：石棺内人骨の変形腰椎（左から前面、左側面、後面）
下左：石棺外土坑内頭骨（男性・成人）
下右：石棺外人骨 A（男性・成年）の下顎骨と上顎遊離歯

3. ナガラ原第三貝塚出土の人骨年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

ナガラ原第三貝塚は伊江村川平に所在する。本遺跡からはゴホウラの貝輪を装着した人骨、住居址、炉跡などが出土している。本報告は人骨の年代観に関する情報を得ことを目的として放射性炭素年代測定を実施する。

Ⅰ. 人骨年代測定

1. 試料

試料は、人骨№5（左内側楔状骨）、人骨№6（左内側楔状骨）、石棺墓№13（上位左肋骨）の人骨３点である。

2. 分析方法

骨試料はコラーゲン抽出 (Collagen Extraction) を行う。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土壌等の付着物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

0.2M の水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで１時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉砕用セルに入れ、粉砕する。リン酸塩除去のため試料を透析膜に入れて 1M の塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

抽出した試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO2) を発生させ、液体窒素とエタノール＋ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC　Pelletron　9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-Ⅱ) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いてδ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1(Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 6.0 のマニュアルにしたがい、１年単位まで表

された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

3. 結果および考察

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に、暦年較正結果を表2に示す。測定年代（補正年代）は人骨№5が2,590 ± 30BP、人骨№6が2,580 ± 20BP、石棺墓№13が2,570 ± 30BPの値を示す。較正した暦年代は、測定誤差をσとして計算させた結果、人骨№5はcalBC803-785、人骨№6はcalBC799-780、石棺墓№13はcalBC797-774であった。

年代測定結果をみると、3点の年代は2,570BP ～ 2,590BPで、20年の間に収まる、ほぼ同時期の値を示している。なお、本遺跡からは完成されたゴホウラの貝輪を装着した人骨が石棺墓に埋葬された状態で出土し、調査所見によると縄文時代後期から弥生時代中期を想定している。今回の測定結果と調和する結果である。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
人骨№5	左内側楔状骨	2,590±30	-17.90±0.28	2,470±30	IAAA-142587
人骨№6	左内側楔状骨	2,580±20	-13.13±0.26	2,390±20	IAAA-142588
石棺墓№13	上位左肋骨	2,570±30	-16.75±0.26	2,440±20	IAAA-142589

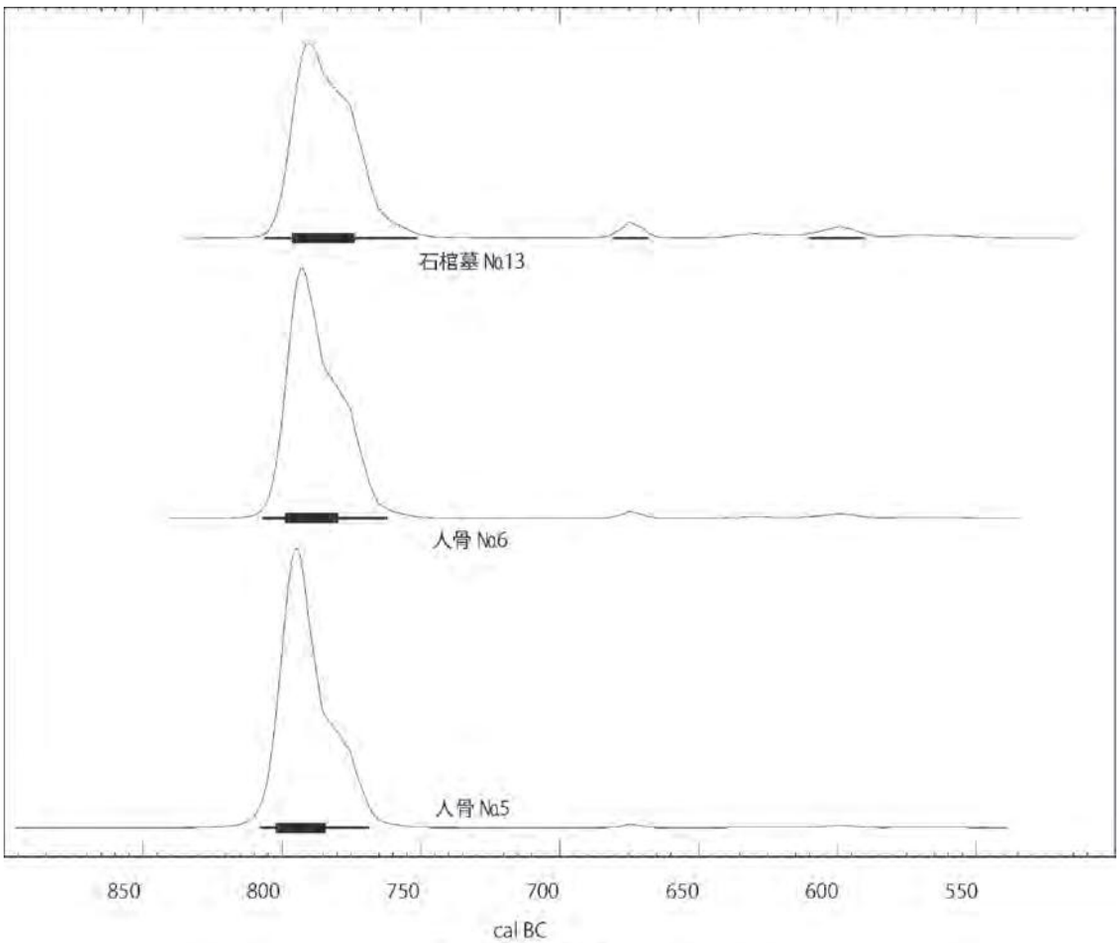
1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
人骨№5	2,591±25	σ	cal BC 803 - cal BC 785	cal BP 2,752 - 2,734	1.000	IAAA-142587
		2σ	cal BC 809 - cal BC 769	cal BP 2,758 - 2,718	1.000	
人骨№6	2,581±24	σ	cal BC 799 - cal BC 780	cal BP 2,748 - 2,729	1.000	IAAA-142588
		2σ	cal BC 807 - cal BC 763	cal BP 2,756 - 2,712	1.000	
石棺墓№13	2,571±25	σ	cal BC 797 - cal BC 774	cal BP 2,746 - 2,723	1.000	IAAA-142589
		2σ	cal BC 807 - cal BC 752	cal BP 2,756 - 2,701	0.943	
			cal BC 682 - cal BC 669	cal BP 2,631 - 2,618	0.025	
			cal BC 612 - cal BC 592	cal BP 2,561 - 2,541	0.031	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1
(Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

図 1　暦年較正結果



4. カヤ原遺跡 A 地点、ナガラ原第三貝塚の自然科学分析

㈱パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

伊江村の川平第 2 地区に所在するカヤ原遺跡 A 地点とナガラ原第三貝塚から出土した試料について自然科学分析を実施する。カヤ原遺跡 A 地点からは弥生～古墳時代相当期の小貝塚が検出され、土器、貝製品などが出土している。また、ナガラ原第三貝塚では、弥生時代相当期と縄文時代後期の 2 つの時期の遺構や遺物が確認されている。

本報告では、カヤ原遺跡 A 地点とナガラ原第三貝塚から出土した炭化材と貝類の年代確認のための放射性炭素年代測定を実施する。また、ナガラ原第三貝塚から出土した青銅製品の成分分析を実施する。

Ⅰ. 放射性炭素年代測定

1. 試料

放射性炭素年代測定試料は、カヤ原遺跡 A 地点から出土した炭化材 5 点とナガラ原第三貝塚から出土した炭化材 17 点、貝類（チョウセンサザエ）2 点の 25 点である。詳細は表 1 に示す。

2. 分析方法

前処理は、炭化材、貝とで異なる。炭化材は、土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後、塩酸 (HC 1) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（AAA 処理；酸・アルカリ・酸処理）。試料を燃焼させ、二酸化炭素を発生させる。貝は付着物を取り除いた後、超純水に浸し、超音波洗浄を行う。試料の表面を 1mo1/ℓ（1M）の塩酸を用いて約 30% 溶かし、汚染された可能性のある部分を除去する (Edg)。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。試料中の炭酸カルシウム（CaCO3）を分解し、二酸化炭素（CO2）を発生させる。

各試料で発生させた二酸化炭素を真空ラインで精製した後、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトを生成させる。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC　Pelletron　9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸 (HOX- Ⅱ) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、

暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

海棲の貝や魚骨の場合は、δ 13C の値からみて海洋由来の炭素によって構成されていると考えられることから、海洋炭素に由来する較正曲線を用いた暦年較正を行う。リザーバー効果による補正に関しては、地域的な補正を行うための情報に乏しいため、海洋での一般的な値 (暦年較正プログラムの default 値である約 400 年) を用い、地域による補正は考慮していない。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表 2 に示す。カヤ原遺跡 A 地点についてみると、測定年代（補正年代）は 1,280 ± 30BP ～ 1,630 ± 30BP のまとまった範囲に収まる。

ナガラ原第三貝塚についてみると、測定年代（補正年代）が 1,650 ± 20BP ～ 1,960 ± 30BP と 3,060 ±± 30BP ～ 3,430 ± 30BP の 2 つのグループに分かれる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正は、CALIB 7.0.1 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差σ、2 σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2 σは真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2 σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。暦年較正結果を表 3 に示す。

4. 考察

カヤ原遺跡 A 地点からは弥生～古墳時代相当期の遺構や遺物が出土したとされる。今回の測定年代（補正年代）の結果は 1,280 ± 30BP ～ 1,630 ± 30BP で、調査所見と調和する。

ナガラ原第三貝塚は弥生時代相当期と縄文時代後期の 2 つに時期が確認されている。Ⅳ層は弥生時代、Ⅵ層は縄文時代後期の層とされる。前述したように、測定年代（補正年代）の結果 1,650 ± 20BP ～ 1,960 ± 30BP と 3,060 ±± 30BP ～ 3,430 ± 30BP の 2 つのグループに分かれる。

前者の試料はⅣ層出土の貝類（チョウセンサザエ）1 点と炭化材 2 点で、調査所見と調和する弥生時代の年代を示した。後者の試料はⅥ層および遺構から出土した、

表 1.　放射性炭素年代測定結果

遺跡名・区・グリット	遺構名・層位など	種類	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 BP	Code No.
カヤ原遺跡 A 地点 F2	Ⅲ下（5-10）№ 21	炭化材	1,280 ± 30	-26.14 ± 0.58	1,300 ± 20	IAAA-151647
カヤ原遺跡 A 地点 F1	Ⅲ下（5-10）№ 19	炭化材	1,630 ± 30	-25.95 ± 0.56	1,640 ± 20	IAAA-151648
カヤ原遺跡 A 地点 E-1	小貝塚⑦ Ⅲ下	炭化材	1,370 ± 20	-23.99 ± 0.58	1,350 ± 20	IAAA-151649
カヤ原遺跡 A 地点 C2 区	大貝塚① Ⅲ層下部 № 3（LF）	炭化材	1,610 ± 20	-24.18 ± 0.56	1,600 ± 20	IAAA-151650
カヤ原遺跡 A 地点 C3 区	大貝塚② Ⅲ層下部 № 9（LF）	炭化材	1,550 ± 30	-26.52 ± 0.62	1,570 ± 20	IAAA-151651
ナガラ原第三貝塚 H4 区	Ⅳ層上	貝	1,650 ± 20	3.18 ± 0.57	1,190 ± 20	IAAA-151652
ナガラ原第三貝塚 G4 区	貝塚② Ⅳ層下部 № 21（LF）	炭化材	1,900 ± 30	-25.56 ± 0.62	1,910 ± 20	IAAA-151653
ナガラ原第三貝塚 I3 区	貝塚① Ⅳ層下部 № 22（LF）	炭化材	1,960 ± 30	-26.14 ± 0.41	1,970 ± 20	IAAA-151654
ナガラ原第三貝塚 H2 区	Ⅵ層上	貝	3,350 ± 30	2.75 ± 0.49	2,900 ± 30	IAAA-151655
ナガラ原第三貝塚 H3 区	1 号竪穴遺構西隅 Pit 内 Ⅲ層下部 № 31（LF）	炭化材	3,280 ± 30	-23.78 ± 0.69	3,260 ± 30	IAAA-151656
ナガラ原第三貝塚 D2 区	2 号竪穴遺構内 Ⅲ層	炭化材	3,240 ± 30	-23.76 ± 0.40	3,220 ± 30	IAAA-151657
ナガラ原第三貝塚 H3 区	1 号竪穴遺構 (20-30) Ⅵ層	炭化材	3,330 ± 30	-24.90 ± 0.25	3,330 ± 30	IAAA-151658
ナガラ原第三貝塚 G2 区	Ⅵ層 (0-10)	炭化材	3,230 ± 30	-25.97 ± 0.46	3,240 ± 30	IAAA-151659
ナガラ原第三貝塚 D3 区	炉跡⑭号 Ⅵ層 (20-30)	炭化材	3,130 ± 30	-25.54 ± 0.48	3,130 ± 20	IAAA-151660
ナガラ原第三貝塚 G2 区	Ⅵ層 (30-40)	炭化材	3,210 ± 30	-26.02 ± 0.50	3,220 ± 30	IAAA-151661
ナガラ原第三貝塚 G2 区	Ⅵ層 (40-50)	炭化材	3,280 ± 30	-27.48 ± 0.42	3,320 ± 30	IAAA-151662
ナガラ原第三貝塚 D-E2 区	17 号炉跡内 (60㎝) Ⅵ層	炭化材	3,380 ± 30	-26.31 ± 0.68	3,400 ± 30	IAAA-151663
ナガラ原第三貝塚 D-E2 区境	1 号土壙内 Ⅵ層	炭化材	3,430 ± 30	-23.89 ± 0.55	3,410 ± 20	IAAA-151664
ナガラ原第三貝塚 E2 区	15 号炉跡内 (40㎝) 床着 Ⅵ層 № 38（LF）	炭化材	3,120 ± 30	-24.47 ± 0.62	3,110 ± 30	IAAA-151665
ナガラ原第三貝塚 C2 区	2 号竪穴内 Pit № 1 ～ 5 Ⅵ層 (50㎝) № 35 Pit № 4	炭化材	3,060 ± 30	-26.39 ± 0.55	3,080 ± 20	IAAA-151666
ナガラ原第三貝塚 C2 区	2 号竪穴内 Pit № 1 ～ 5　Ⅵ層 (50㎝) № 35 Pit № 5	炭化材	3,060 ± 30	-28.37 ± 0.57	3,120 ± 30	IAAA-151667
ナガラ原第三貝塚 F2 区	4 号炉跡内 № 25（LF）	炭化材	3,230 ± 30	-27.02 ± 0.51	3,260 ± 30	IAAA-151668
ナガラ原第三貝塚 H2 区	1 号炉跡 掘り下げ時 № 46（LF）	炭化材	3,110 ± 30	-27.00 ± 0.56	3,140 ± 20	IAAA-151669
ナガラ原第三貝塚 F2 区	炉跡⑧内	炭化材	3,060 ± 30	-24.62 ± 0.45	3,060 ± 20	IAAA-151670

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

貝類（チョウセンサザエ）1 点と炭化材 11 点で、調査所見と調和する縄文時代後期の年代を示した。

Ⅱ．青銅製品の成分分析

1. 試料

表面全体が緑青で覆われた薄板状の破片（42.9 × 28.3 × 3.4㎜）である。また一部茶褐色の錆化物も付着するが、着磁性はみられない。全体が僅かに湾曲しており、側面は全面破面で気孔が若干確認される。破面端部から試料を少量採取し、以下の調査を実施した。

2. 分析方法

（1）マクロ組織

本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡組織よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

（2）顕微鏡組織

金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の３μｍと１μｍで鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的･代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

（3）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

日本電子㈱製 JXA-8800RL（波長分散型５チャンネル）にて含有元素の定性・定量分析を実施した。試料電流は 2.0 × 10-8 アンペア、ビーム径３μｍ、補正法は ZAF に従った。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。また各元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性Ｘ線像の撮影も適宜行った。

（4）化学分析

ICP（誘導結合プラズマ発光分光分析法）により、銅（Cu）、錫（Sn）、亜鉛（Zn）、鉛（Pb）、鉄（Fe）、砒素（As）、アンチモン（Sb）、銀（Ag）を定量した。試料は１回あたり約 0.02g 秤量し２回分析した。報告は２回の平均値である。

3. 結果

（1）マクロ組織

図版１①に示す。観察面は酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食している。全体に淡橙色の樹枝状初晶（α相）が確認される。鋳造ままの凝固組織である。

（2）顕微鏡組織

図版 .1 ②③に示す。金属組織の拡大である。樹枝状初晶（α相）とその周囲には、偏析により色調差が生じている。また粒界には、灰色網目状の共析組織（α＋δ相）、灰色針状の鉄（Fe）、銅（Cu）、砒素（As）相、暗灰色不定形の鉛（Pb）相（錆化）が確認される。各相の組成については EPMA 調査の項で詳述する。

（3）EPMA 調査

図版 .1 ④に金属組織（図版 .1 ③右下部分）の反射電子像（COMP）を示す。樹枝状初晶（α相）部分は特性 X 線像では、銅（Cu）に強く、亜鉛（Zn）に弱い反応がある。定量分析値は 81.3%Cu-9.1%Zn-2.3%Sn（分析点 1）、82.0%Cu-11.1%Zn-1.4%Sn（分析点 2）であった。銅（Cu）および亜鉛（Zn）が主成分で、錫（Sn）を少量固溶する。網目状灰色部（α＋δ相）は特性 X 線像では錫（Sn）に強い反応がある。定量分析値は 65.1%Cu-20.4%Sn-3.1%Zn（分析点 3）であった。樹枝状初晶とは逆に銅（Cu）および錫（Sn）が主成分で、亜鉛（Zn）を少量固溶する。また淡灰色の針状相は特性 X 像では鉄（Fe）、砒素（As）に強い反応がある。定量分析値は 28.5%Fe-25.3%Cu-39.4%As（分析点 4）、23.1%Fe-28.6%Cu-38.9%As（分析点 5）であった。鉄（Fe）および銅（Cu）が主成分の砒化物である。また不定形明白色（反射顕微鏡下では暗灰色）部は、特性 X 線像では鉛（Pb）に強い反応がある。定量分析値は 84.1%Pb-4.4%O（分析点 6）であった。鉛の腐食（錆化）相と推定される。

（4）化学分析組成

表 4 に示す。銅（Cu）は 76.2% であった。錫（Sn）は 9.12%、亜鉛（Zn）が 8.93% とほぼ同じ割合含まれている。鉛（Pb）は 2.78%、鉄（Fe）0.45%、砒素（As）1.93%、さらにアンチモン（Sb）は 0.62%、銀（Ag）0.05% であった。

表 2. 化学分析組成

銅 (Cu)	錫 (Sn)	亜鉛 (Zn)	鉛 (Pb)	鉄 (Fe)	砒素 (As)	アンチモン (Sb)	銀 (Ag)
76.2	9.12	8.93	2.78	0.45	1.93	0.62	0.05

4. 考察

上述した調査の結果から、当試料（NAG－1）は、銅（Cu）主体で、錫（Sn）と亜鉛（Zn）をともに 9% 前後含む合金であった。断面は鋳造ままの凝固組織を呈しており、鋳造製品の小破片と判断される。

沖縄県下では中世後半以降、浦添ようどれ（大澤 ,2007）、首里城跡（大澤 ,1998）、渡地村跡（大澤・鈴木 ,2007）など多数の金属器生産遺跡で、銅（Cu）または青銅（Cu－Sn 合金）、黄銅（Cu－Zn 合金）製品や、微細な銅（青銅・黄銅）が溶着した坩堝が確認されており、銅関連鋳物の製作が行われたことが明らかになっている。ただしこれまでの分析調査報告には錫（Sn）、鉛（Pb）を、同程度含む製品の事例はみられない。廃製品を改鋳する際に、青銅と黄銅破片が混在していた可能性が考えられるが、今後も銅生産関連遺物や製品の組成に関して蓄積し、検討していく必要がある。

また、鉄（Fe）、砒素（As）の影響も確認された。これも現在までの沖縄県下の銅関連遺物ではあまり見られない特徴である。日本の古代～近世の銅（または青銅）製品にはしばしば鉄（Fe）、砒素（As）を高い割合で含まれることは知られるが、こうした製品は総じて錫（Sn）の含有率は低い（鈴木 ,2016）。銅または青銅原料（廃製品）の調達先もさまざまであった可能性も考えられる。

引用文献

・大澤正己 ,1998, 首里城跡出土青銅製品の科学分析調査 - 平成 8 年度事業 -　首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）. 沖縄県文化財調査報告書第 132 集 . 沖縄県教育委員会 ,368p

・大澤正己 ,2007, 浦添ようどれ金属工房跡出土銅・鉄関連遺物の金属学的調査　浦添ようどれ Ⅲ　金属工房跡編 . 浦添市教育委員会 ,90-203

・大澤正己・鈴木瑞穂 ,2007, 渡地村跡出土鍛冶・銅（合金）製品生産関連遺物の金属学的調査　渡地村跡 .　沖縄県立埋蔵文化財センター ,224-268

・鈴木瑞穂 ,2016, 古代の鋳造原料（銅素材）の材質と流通に関する研究－鋳造遺跡出土銅関連遺物の組成調査を中心に－ .FUSUS　8 号 ,88p.

第４章　総括

本発掘調査は県営農地保全整備事業に係る浸透池設置に伴う緊急発掘調査で、平成 25 年 5 月 9 日～ 11 月 7 日の間に行った。3 遺跡の発掘調査を行い、各々の遺跡において多様な状況を窺い知ることができた。

カヤ原遺跡 A 地点

カヤ原遺跡 A 地点は今回の調査の結果、沖縄編年後期（貝塚時代後期）の遺構、遺物が確認された。遺構としては、貝塚が 2 基、貝溜りが大小含め 18 基確認され、遺物としては土器、石器、貝製品、自然貝、獣魚骨などが出土した。

本遺跡の出土土器は、くびれ平底土器を主体としており、尖底土器は少数であった。口縁文様に関しては押捺刻文、刻目文、曲線文などが見られた。石器は石斧、凹石、磨石、軽石製品、クガニイシなどが、貝製品では貝錘、貝匙、貝符などが得られた。貝符に関しては、広田上層式に比定される。くびれ平底土器と尖底土器は層序関係が見られ、くびれ平底土器は上層、尖底土器は遺物包含層の比較的下層から見られた。

自然遺物は貝類、獣魚骨類、甲殻類などが見られた。貝類はマガキガイ、サラサバティなどが主体的に出土し、獣魚骨類の出土量は少なかったが、イノシシなどが得られた。海産貝は 142 種、陸産貝は 5 種となっている。海産貝の優占種に関しては、シラナミ（23.83%）、マガキガイ（14.87%）、サラサバティ（10.05%）となっている。獣魚骨に関しては、ピックアップ資料として出土しているものの数は少ない。

年代測定値に関して、カヤ原遺跡 A 地点では 5 点の炭化物試料で測定を行った。その結果、補正年代で 1,280 ± 30BP ～ 1,630 ± 30BP という結果が得られ、出土遺物の年代観とおおよそ合致する結果となった。

ナガラ原東貝塚

ナガラ原東貝塚は熊本大学が調査を行った地点より南西約 40 mの箇所で調査を行った。しかし、遺物包含層を確認することはできず、著しい攪乱を受けていた。そのため、出土遺物も他の調査地点と比べると著しく少ない。今後はナガラ原東貝塚の範囲確認調査などにより、遺跡の範囲、内容について更なる把握が必要であると考える。

ナガラ原第三貝塚

ナガラ原第三貝塚は今回調査を行った 3 遺跡の中で西側に位置している。遺物包含層は 3 枚あり、Ⅲ層、Ⅳ層（弥生並行期層）、Ⅵ層（前Ⅳ期）となっている。ただし、Ⅴ層とⅥ層の間に前Ⅴ期の遺物包含層が存在した可能性がある。

Ⅲ層、Ⅳ層においては、２基の貝溜り、イモガイ集積遺構が 1 基確認された。遺物は土器、石器、貝製品、金属片、貝類、獣魚骨類等が出土している。土器は甕形、浅鉢形が出土している。土器型式としては隣接するナガラ原西貝塚出土資料に類似しており、関連性が考えられる。石器は石斧、凹石、敲石、磨石、石皿などが出土している。貝製品は貝錘、ホラガイ製有孔製品、貝皿、螺貝製敲打器、貝輪などが確認された。出土金属片に関しては組成分析を行った結果、

銅を主体に錫、亜鉛、鉄、砒素などを含む合金で、断面から鋳造製品であると判断された。県内における金属製品の組成分析に関しては、グスク時代以降の遺跡での分析事例は見られるが、先史時代遺跡での分析事例は管見の限り見られない。今後の出土事例・分析事例の増加が待たれる。また、本遺跡での分析事例と県外での分析事例との比較検討を行う必要がある。

Ⅵ層直上においては埋葬遺構が３基確認され､3 体分の人骨が出土した。埋葬遺構３（石棺墓）からは腕輪着装人骨が検出されており、沖縄諸島における埋葬人骨の腕輪着装事例は具志川島遺跡群（前Ⅳ期）、武芸洞遺跡（前Ⅴ期）に続いて３例目、同時代（縄文時代晩期）の事例としては２例目となる。本遺跡においては、左手首にゴホウラ製貝輪１点が着装されていた。人骨の分析の結果、埋葬遺構３の人骨のみが女性、埋葬遺構 1、２の人骨が男性で、埋葬遺構３出土人骨の形質特徴から沖縄貝塚時代人の特徴が見られた。人骨の年代測定の結果、出土人骨はいずれも約 2,600 年前のものという測定結果が得られている。なお、国立科学博物館の篠田謙一氏のグループが埋葬遺構 1、埋葬遺構３出土人骨のミトコンドリア DNA の分析を行った結果、同じハプログループ M7a で、埋葬遺構１の２体の男性人骨は DNA 配列が一致し、埋葬遺構３の女性人骨に関しては異なる DNA 配列であったという結果が得られている（篠田　2015）。埋葬遺構それぞれの関連性であるが、埋葬遺構１の二体の人骨では頭骨が見られず、埋葬遺構２において人骨１点が納められていた。人骨分析の所見によると埋葬遺構１の２体の人骨、埋葬遺構２の頭骨はいずれも 20 代の男性の可能性が示唆されており、埋葬遺構１から頭骨を埋葬遺構２へ改葬（再葬？）した可能性も考えられる。土肥直美氏は埋葬遺構３に葬られた女性が「集団の中で特別の役割を果たしたリーダー的な人物だった」（土肥　2016）可能性を示唆している。

Ⅵ層からは２基の竪穴住居跡、17 基の炉跡、１基の大型焼成遺構、土器、石器、貝製品、骨牙製品、自然貝、獣魚骨類、炭化物などの遺物が発見された。２基の竪穴住居址はそれぞれ様相が異なっており、竪穴住居跡１は竪穴に隣接してピットを有するもの、竪穴住居跡２はピットを有さず、竪穴内にスロープ状の遺構を有するものとなっている。但し、竪穴住居跡２に関しては二つの住居跡が重複している可能性があり、今後検討を要する。村内においては、西崎遺跡、渡り地原遺跡での試掘調査において竪穴住居跡が検出されている。

炉跡群においては、17 基のうち２基の遺構直上から土器が一括した状態で確認され、土器の下部の土からは魚骨などが見られ、これらの炉跡は煮炊きなどに用いた可能性が考えられる。但し、礫敷炉、石組炉などといったように本遺跡から検出した炉跡の形態は一定ではなく、形態の違いから全ての炉跡が同一の利用目的であったかは不明であり、今後の検討が必要である。

Ⅵ層出土土器は伊波式、荻堂式を主体に面縄前庭式、大山式、カヤウチバンタ式などが見られた。石器は磨製石斧、磨石、敲石、有溝石製品など、貝製品は貝錘、ホラガイ有孔製品など、骨牙製品は骨錐、カンザシ状製品、蝶形骨器の一部、自然遺物はブダイ類などの魚骨、シラナミ、マガキガイなどの貝類、イノシシ、クジラ等の獣骨が見られた。貝製品に関しては上記の通り、実用品、装飾品といった多様な器種が見られたが、特筆すべきはチョウセンサザエ製品であり、16,000 点以上が出土した。時期は異なるものの、奄美大島根差部集落遺跡（古墳並行期）において類似したチョウセンサザエ製品が出土しており、その資料との比較が必要となる。

出土海産貝の優占種に関しては、第Ⅳ層出土資料ではシラナミ（28.79%）、サラサバティ（17.71%）、マガキガイ（9.57%）となっており、第Ⅵ層出土資料ではマガキガイ（28.94%）、シ

ラナミ（18.17%）、チョウセンサザエ（蓋）（16.27%）などとなっている。

年代測定に関しては、Ⅳ層では炭化材、貝類の測定を行い、1,650 ± 20BP ～ 1,960 ± 30BP の補正年代値が得られた。Ⅵ層においては炭化材、貝類の測定を行い 3,060 ± 30BP ～ 3,430 ± 30BP の補正年代値が得られた。ナガラ原第三貝塚の遺物包含層の年代測定値に関しても、出土遺物との年代観と合致する結果となった。

以上、今回発掘調査を行った 3 地点の成果について概観した。伊江島の南海岸は遺跡が集中しており、特にナガラ原一帯ではこれまでの調査において弥生並行期の遺跡が確認されていたが、今回の調査によって、更にナガラ原一帯に縄文時代後期、晩期の遺跡の所在が確認された。今回調査を行った 3 地点のうち 2 地点では遺跡の時期、性格において様々な様相、変遷が見られた。ナガラ原第三貝塚Ⅵ層においては、縄文後期の住居址、炉跡などといった生活祉が見られ、Ⅵ層直上においては縄文晩期の埋葬遺構が検出された。Ⅳ層においては大当原式期の貝溜り、イモガイ集積遺構が検出され、カヤ原遺跡 A 地点ではアカジャンガー式期（古墳時代並行期）を主体とする貝塚及び貝溜り群が検出された。また、明確な遺物包含層からの出土ではないものの、少量ながらカヤ原遺跡 A 地点ではカムィヤキを確認することができた。熊本大学が行ったナガラ原東貝塚の調査においては、弥生～古墳並行期の遺構、遺物が見られたこと（木下編 2013）から、その調査結果と併せて伊江島南海岸における時期別の動態を垣間見ることができた。ただし、縄文時代晩期に関しては埋葬遺構、人骨を主体に発見されており、同時期の遺物包含層、生活祉を発見することは出来なかった。今後、近隣を調査する際には弥生並行期の文化層だけではなく、その下層に縄文晩期以降の層序の有無について確認する必要がある。

貝類に関しては海産貝の優先種組成について見てみると、沖縄編年Ⅳ期（縄文後期相当）のナガラ原第三貝塚第Ⅵ層がマガキガイ、シラナミ、チョウセンサザエ（蓋）となっており、弥生相当期の第Ⅳ層ではシラナミ、サラサバティ、マガキガイとなっている。カヤ原遺跡 A 地点ではシラナミ、サラサバティ、マガキガイとなっている。

今回の調査箇所と過去に村内で行われた遺跡（浜崎貝塚 I 区、具志原貝塚、ナガラ原東貝塚）における海産貝優占種と比較すると浜崎貝塚 I 区ではマガキガイ、シラナミ、サラサバティなどといった貝が優占種となっており、具志原貝塚ではマガキガイ、シラナミ、チョウセンサザエ（蓋）、サラサバティ、ナガラ原東貝塚ではマガキガイ、シラナミ、サラサバティ、ミドリアオイ、ナガラ原西貝塚ではヒメジャコ、サラサバティ、ヒレジャコ、ヒメジャコとなっている。各遺跡共通して見られた優占種としてサラサバティが挙げられ、マガキガイ、シラナミがナガラ原西貝塚を除いて優占種の一つとして見られた。サラサバティ、マガキガイ、シラナミ、サラサバティなどの貝種はいずれもサンゴ礁域で生息する貝種であり、積極的に利用していたことが考えられるが、前Ⅳ期と後期の出土量割合を比較すると前Ⅳ期ではマガキガイの割合が高く、後期では優先種ではあるものの割合が若干低くなる。

陸産貝、サンゴ礁域以外の水棲貝類としてマングローブ地帯や河口域に生息するシレナシジミがカヤ原遺跡 A 地点、ナガラ原第三貝塚のいずれの包含層からも出土している。伊江島には河川が無く、シレナシジミが生息可能な環境が確認されていない。先史時代の伊江島の地形を検討する必要があるが、シレナシジミは他地域から持ち込まれた可能性がある。

第 24 表　村内遺跡別出土貝類集計表

番号	貝種	カヤ原A	ナガラ原第3, Ⅳ	ナガラ原第3, Ⅵ	ナガラ原東	ナガラ原西	具志原貝塚	浜崎貝塚
1	ツタノハ	25		4			7	
2	オオツタノハ	0			2			
3	ヨメガカサ	0			7			
4	クルマガサ	0			4			
5	オオベッコウガサ	0			8			
6	イボアナゴ	0			2		3	
7	コシダカサザエ	10	2	7	5			
8	チョウセンサザエ	141	14	1,394	290	137	263	78
	同　フタ	813	57	3,879			1,209	
9	ヤコウガイ	5		24	14	105	2	
	同　フタ	20	1	68			11	
10	ニシキウズ	247	18	55	31		6	
11	ムラサキウズ	170		12	12		4	
12	ギンタカハマ	29	3	163	32		3	32
13	サラサバティラ	2,335	446	1,709	1,467	7,863	936	429
14	イシダタミアマオブネ				397		140	
15	キバアマガイ	20			3		3	
16	フトスジアマガイ				3			
17	アマオブネ	165	7	54	1		16	
18	ニシキアマオブネ				1			
19	カノコガイ	1		7				
20	オニノツノガイ	211	50	410	134		81	91
21	コオニノツノガイ				20		7	
22	ヒメクワノミカニモリ				1			
23	ハシナガツノブエ				3			
24	コンシボリツノブエ				2			
25	クリムシカニモリ							
26	ゴマフカニモリ				9			
27	ヒメトウガタカニモリ				1			
28	クワノミカニモリ	2			2		4	
29	リュウキュウウミニナ			1	1			
30	ホソスジウズラタマキビ				2			
31	イボタマキビ				11			
32	コンペイトウガイ				3			
33	ムカシタモトガイ	34					7	
34	ヤサガタムカシタモト				1			
35	ネジマガキ				3		2	
36	マガキガイ	3,453	241	6,902	1,949		3,000	1,289
37	イボソデ				1			
38	アツソデ	13	4		6			
39	ゴホウラ	0			5	181		20
40	ラクダガイ					3		5
41	クモガイ	105	17	254	38	86	36	55
42	スイジガイ	38	4	27	32	73	48	6
43	アツキクスズメ				2			
44	カワチドリ				1			
45	ヘビガイ類	4		7	0		2	
46	ミジンムカデ				2			
47	ウミウサギ				1			

番号	貝種	カヤ原A	ナガラ原第3,Ⅳ	ナガラ原第3,Ⅵ	ナガラ原東	ナガラ原西	具志原貝塚	浜崎貝塚
48	キイロダカラ	7	5	8	13		6	
49	ハナビラダカラ	143	12	13	173		81	
50	カノコダカラ	5			2			
51	ハナマルユキ	411	14	47	97		107	
52	ヤクシマダカラ	347	56	82	25		101	
53	ハチジョウダカラ	95	16	5	1		13	
54	ホシダカラ	76	32	30	40	413	28	26
55	ホシキヌタ				5		12	
56	ウズラガイ				4			
57	ミツカドボラ				23		16	
58	サツマボラ				1			
59	ジュセイラ	107	11	33	1			
60	シオボラ	74	16	12	1		5	
61	ホラガイ	4	4	19	4	102	10	8
62	オキニシ	269	34	200	74		32	
63	シロナルトボラ	6	2	1	2		5	18
64	ヒナヅル				3			
65	ガンセキボラ				38		3	
66	シラクモガイ	555	3	39	327		125	71
67	テツレイシ						16	
68	コイワニシ				2			
69	ツノレイシ	132	54	53	122			
70	ツノテツレイシ	243	4	9	36			
71	レイシダマシ	15		2	1			
72	アカイガレイシ	221	2	7	28			
73	オニコブシ	83	74	176			14	
74	コオニコブシ	576	41	204	448		279	59
75	フトコロガイ				4			
76	ホラダマシ				2		13	
77	ヒメヨウバイ				9			
78	ハイイロヨウバイ				5			
79	イトマキボラ	141	22	220	66	79	36	31
80	ナガイトマキボラ				7			
81	ツノマタモドキ				2			
82	キイロツノマタモドキ				1			
83	チトセボラ	12	3	15	2		7	26
84	マダライモ	17		28	3		21	
85	サヤガタイモ			1	16		55	
86	ジュズカケサヤガタ				15			
87	キヌカツギイモ				76		63	
88	イボシマイモ	3		2	13		32	8
89	ヤセイモ				1		5	
90	ヤナギシボリイモ			7	38		53	4
91	アラレイモ	147	4	39				
92	アジロイモ				1		8	
93	アンボイナ				2			
94	ナンヨウクロミナシ				6			
95	ゴマフイモ							
96	イモガイ類				2	98		
97	アンボンクロザメ	25	4	81	12		89	80

番号	貝種	カヤ原A	ナガラ原第3, Ⅳ	ナガラ原第3, Ⅵ	ナガラ原東	ナガラ原西	具志原貝塚	浜崎貝塚
98	クロフモドキ	48	14	61	1		61	
99	リュウキュウタケノコ		1	9			11	
101	ウスイロヘソカドガイ							
102	ナガケシガイ							
103	スナガイ							
104	ツヤギセル	0			3			
105	ソメワケダワラ							
106	ナハキビ							
112	エガイ	42	3	382	3		382	
113	ベニエガイ							
114	リュウキュウサルボウ	10		22	23		25	5
115	ソメワケグリ	10			3			
116	ウチワガイ				1			
117	リュウキュウヒバリ	219	28	121	627		121	
118	ミドリアオリ				1,134		25	
119	クロチョウガイ	5		5	6		5	1
120	メンガイ類	46	1	104	57		94	
121	クロフトマヤ	4		2	1			
122	リュウキュウザルガイ			4	2		1	
123	カワラガイ	2		4	1		1	
124	シラナミ	5,534	725	4,334	1,745		1,480	909
125	ヒレジャコ	78	51	530	105	2,254	35	50
126	ヒメジャコ	2		83	406	11,711	238	120
127	シャゴウ	191	84	121	169	1,777	127	234
128	チョウセンハマグリ	49	22	141				
129	イソハマグリ	2	48	70	5		9	
130	サメザラ			26	1			
131	リュウキュウマスオ	9	33	66	9		14	
132	アラヌノメ	5		32	1		4	
133	カノコアサリ				1			
134	ホソスジイナミ			629	2		1	
135	マルオミナエシ				1		1	
136	ヒサラガイ類							
137	シレナシジミ	27	28	196	47		28	
138	アラスジケマン	1	13				60	
100	オキナワヤマタニシ	418	383	3,961	256		3,961	
107	カツレンマイマイ		3	97	4		97	
108	シュリマイマイ	13	1	273	10		273	
109	ヤンバルマイマイ				4			
110	パンダナマイマイ	93	113	972	80		972	
111	オキナワウスカワマイマイ	11	29	46	72		46	
	その他の海産貝	5,386	190	594				
	その他の陸産貝	11	26	100				
計（海産貝）		23,225	2,518	23,846	10,614	24,882	9,749	3,655
計（陸産貝）		546	555	5,449	426	0	5,349	0
総計		23,771	3,073	29,295	11,043	24,882	15,098	

参考文献

・岸本義彦編 『伊江島の遺跡　遺跡詳細分布調査報告』伊江村文化財調査報告書第 13 集　伊江村教育委員会　1999 年

・新里貴之 「南西諸島における先史時代の墓制（Ⅱ）－トカラ列島・奄美諸島－」『地域政策科学研究』 鹿児島大学　2010 年

・新里貴之 「南西諸島のおける先史時代の墓制（Ⅲ）：沖縄諸島」『地域政策科学研究』 鹿児島大学　2011 年

・『ナガラ原東貝塚の研究　5 世紀から 7 世紀前半の沖縄伊江島』 熊本大学文学部木下研究室 2013 年

・篠田謙一 『DNA で語る日本人起源論』 岩波書店　2015 年

・土肥直美 「コラム①人骨からみえる女性の暮らし」『沖縄県史　各論編 8　女性史』 沖縄県教育委員会　2016 年

・『ナガラ原西貝塚』伊江村文化財調査報告書第 8 集　伊江村教育委員会　1979 年

・『具志原貝塚』 沖縄県教育委員会

・『浜崎貝塚』伊江村文化財調査報告書第 9 集　沖縄県伊江村教育委員会　1980 年

図版１　調査地遠景（城山より）

図版２　カヤ原遺跡Ａ地点近景

図版３　ナガラ原東貝塚近景

図版４　ナガラ原第三貝塚近景

図版５　カヤ原遺跡Ａ地点　壁面写真（東壁）

図版６　カヤ原遺跡Ａ地点　壁面写真（南壁）

図版７　カヤ原遺跡Ａ地点　貝溜り検出状況

図版８　カヤ原遺跡Ａ地点　貝溜り検出状況

図版９　カヤ原遺跡Ａ地点　貝札出土状況１

図版 10　カヤ原遺跡Ａ地点　貝札出土状況２

図版 11　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（有文）1

図版 12　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（有文）2

図版 13　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（有文）3

図版 14　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文）1

図版 15　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文）2

図版 16　カヤ原遺跡 A 地点出土土器（無文、底部）

図版 17　カヤ原遺跡 A 地点出土石器 1

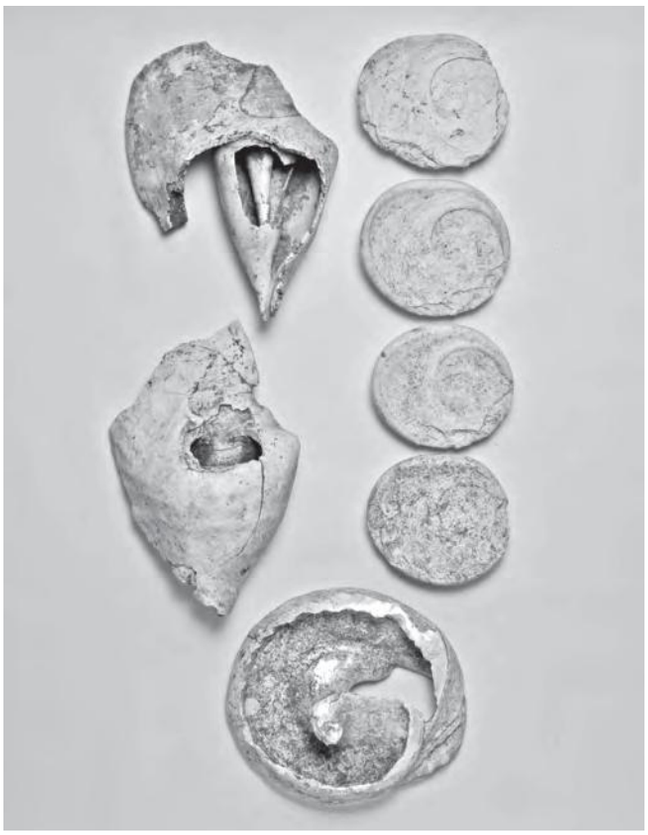
図版 18　カヤ原遺跡 A 地点出土石器 2

図版 19　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品 1

図版 20　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品 2

図版 21　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品 3

図版 22　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品 4



図版 23　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品 5

図版 24　カヤ原遺跡 A 地点出土貝製品 6

図版 25　ナガラ原東貝塚　壁面写真（東側試掘杭　東壁）

図版 26　ナガラ原東貝塚　壁面写真（西側試掘杭　東壁）

図版 27　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層壁面写真（北側）

図版 28　ナガラ原第三貝塚　Ⅳ層ベルト壁面写真

図版 29　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層壁面写真（南壁）

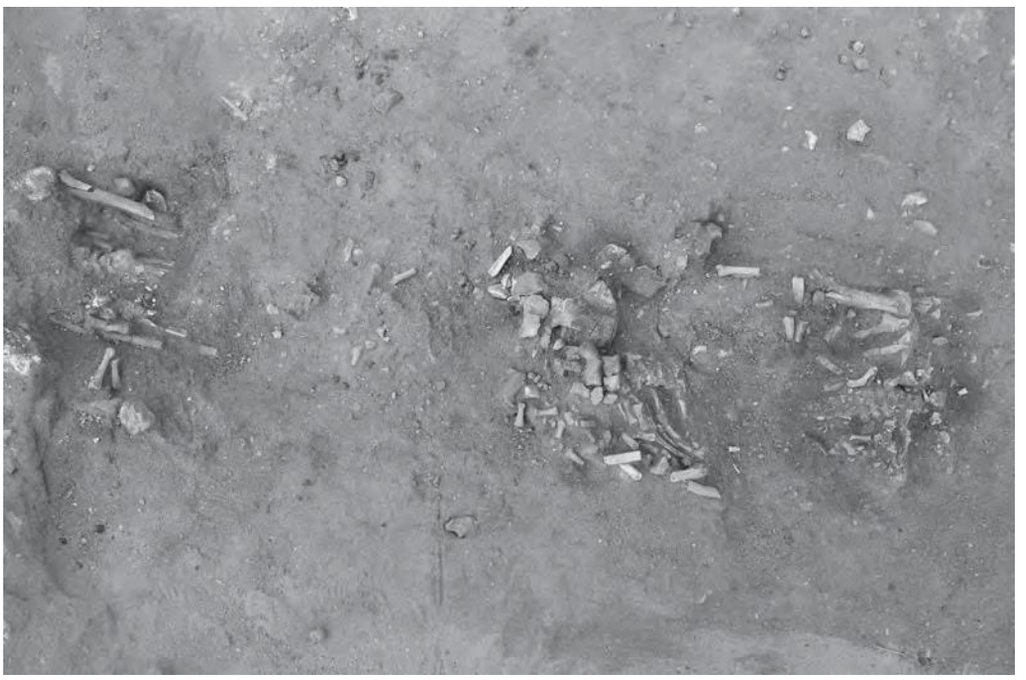
図版 30　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層壁面写真（西壁）

図版 31　ナガラ原第三貝塚　Ⅵ層壁面写真（北壁）

図版 32　ナガラ原第三貝塚　貝塚検出状況

図版 33　ナガラ原第三貝塚　イモガイ集積遺構

図版 34　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 1（上面）



図版 35　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 1（下面）

図版 36　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 2

図版 37　ナガラ原第三貝塚　埋葬遺構 3（石棺墓）

図版 38　埋葬遺構 3　貝輪着装状況

図版 39　ナガラ第三貝塚　竪穴住居跡 1

図版 40　ナガラ第三貝塚　竪穴住居跡 2

図版 41　ナガラ第三貝塚　炉跡 1

図版 42　ナガラ第三貝塚　炉跡 2

図版 43　ナガラ第三貝塚　炉跡 3

図版 44　ナガラ第三貝塚　炉跡 4

図版 45　ナガラ第三貝塚　炉跡 5

図版 46　ナガラ第三貝塚　炉跡 6

図版 47　ナガラ第三貝塚　炉跡 7

図版 48　ナガラ第三貝塚　炉跡 8

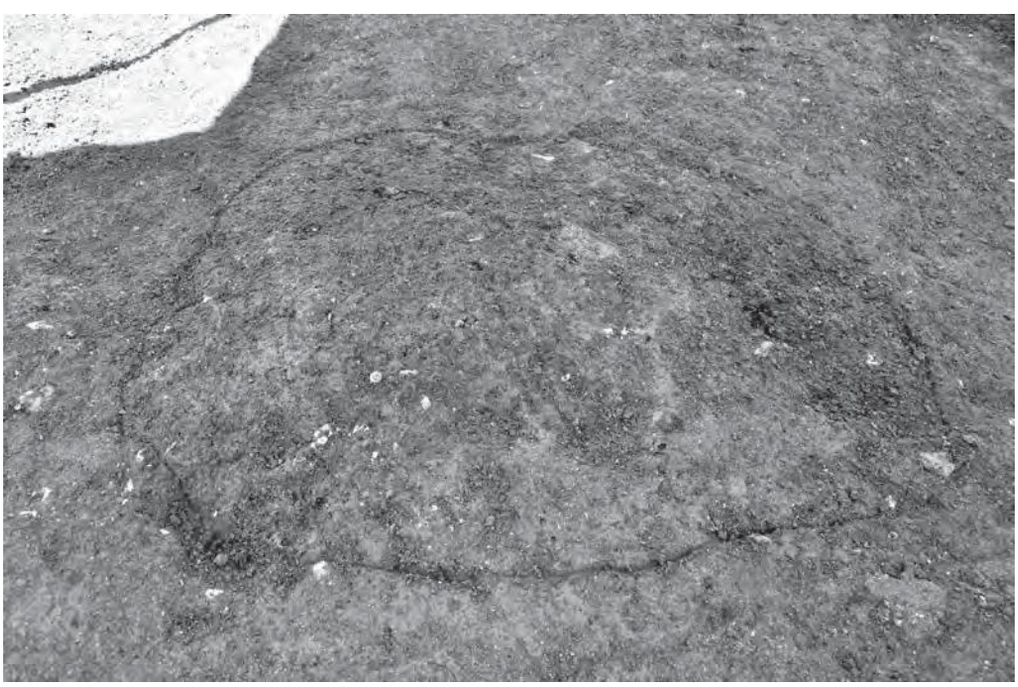
図版 49　ナガラ第三貝塚　炉跡 9

図版 50　ナガラ第三貝塚　炉跡 10

図版 51　ナガラ第三貝塚　炉跡 11

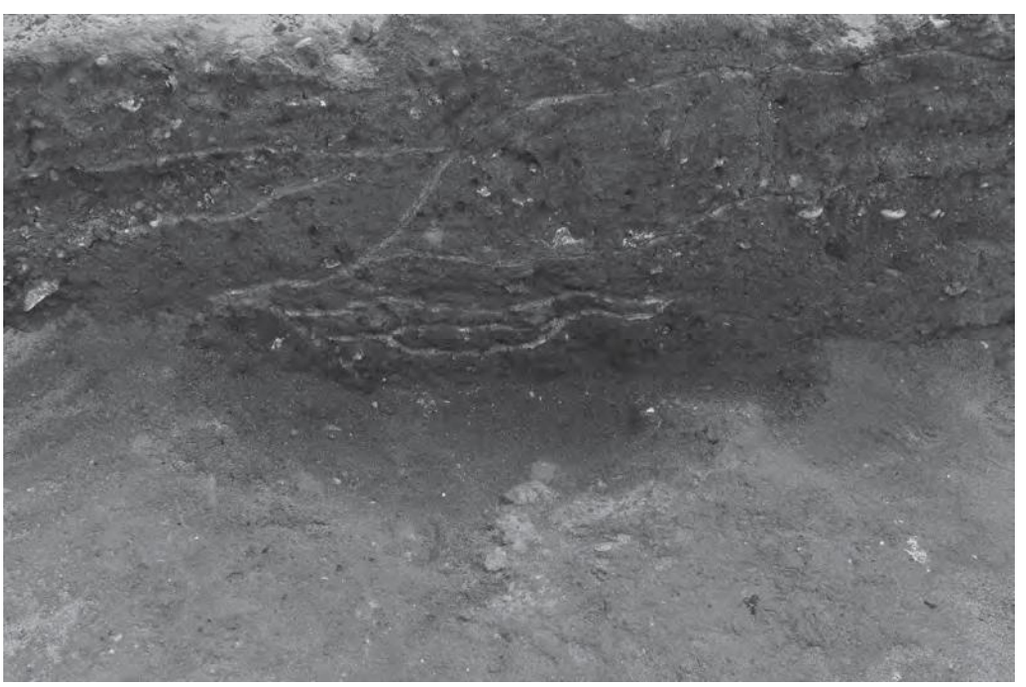
図版 52　ナガラ第三貝塚　炉跡 12

図版 53　ナガラ第三貝塚　炉跡 13



図版 54　ナガラ第三貝塚　炉跡 14

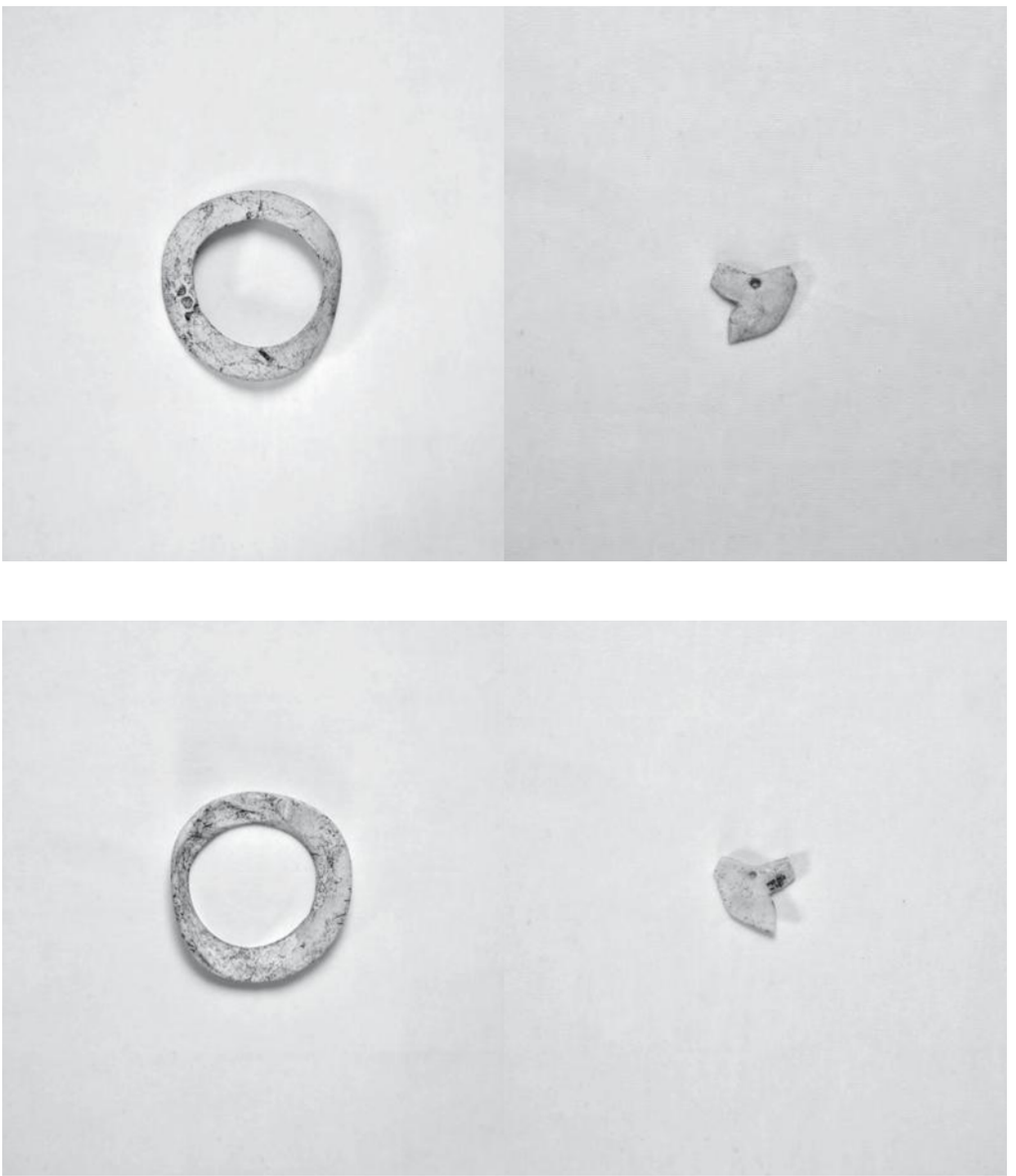
図版 55　ナガラ第三貝塚　炉跡 15



図版 56　ナガラ第三貝塚　炉跡 16

図版 57　ナガラ第三貝塚　炉跡 17

図版 58　ナガラ第三貝塚　大型焼成遺構



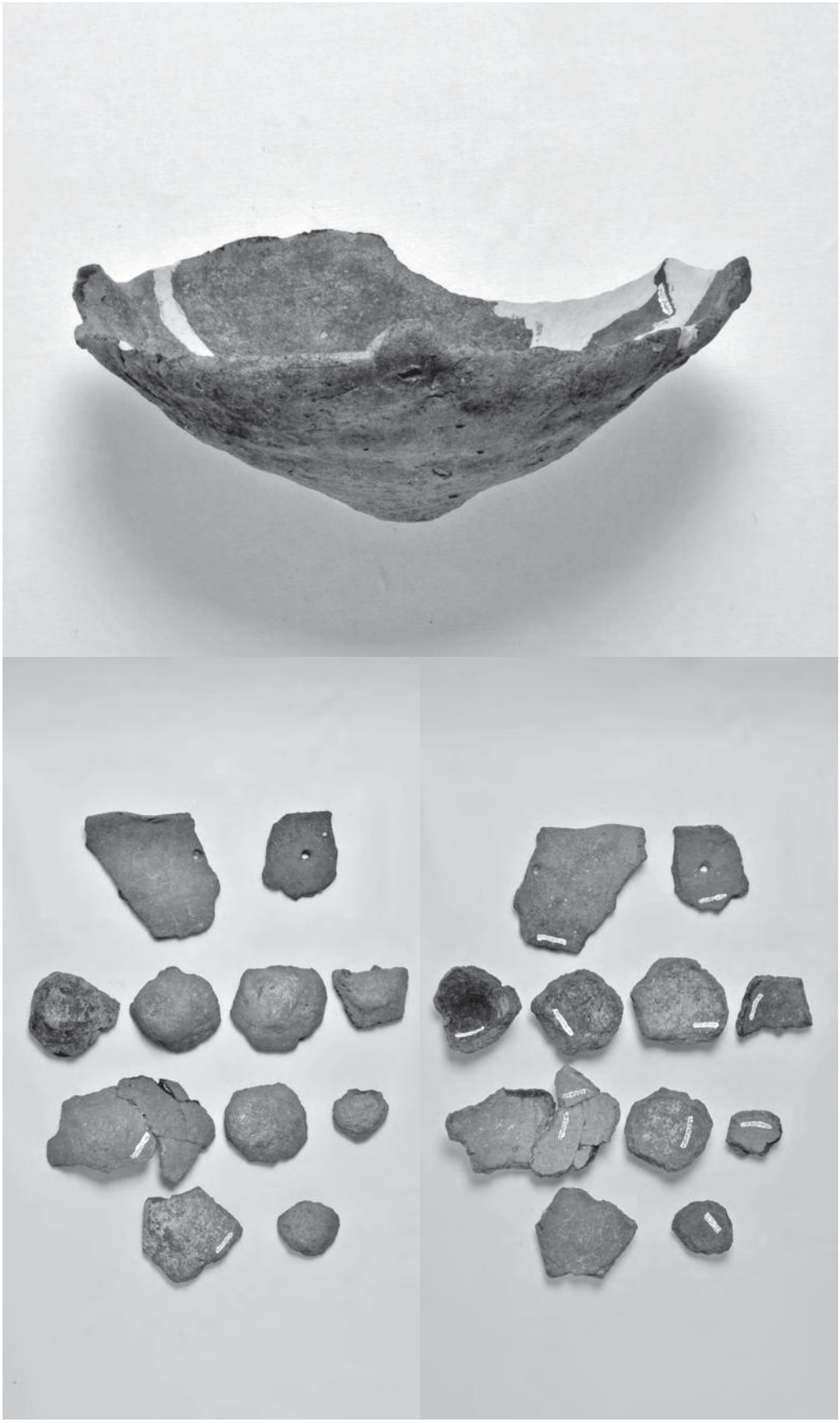
図版 59　埋葬遺構 2、3 内出土遺物

図版 60　竪穴住居跡 1、2 内出土遺物

図版 61　炉跡 4 出土土器

図版 62　炉跡 5、炉跡 17、大型焼成遺構内出土遺物

図版 63　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土土器 1

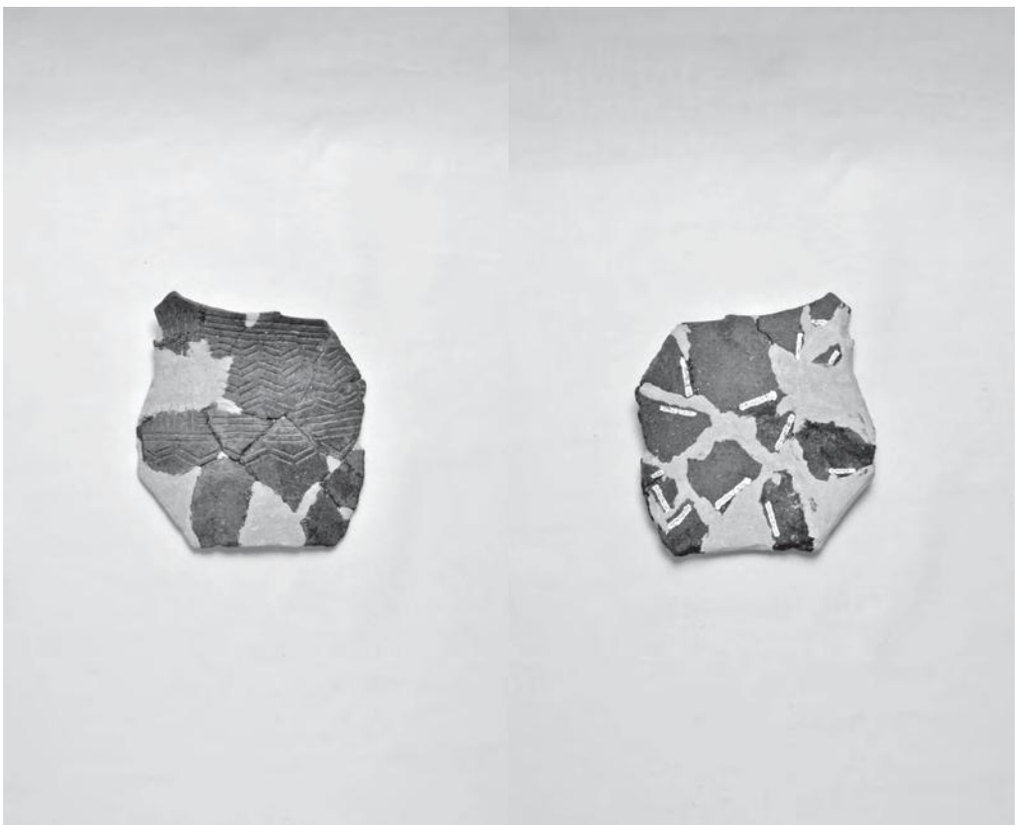


図版 64　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土土器 2

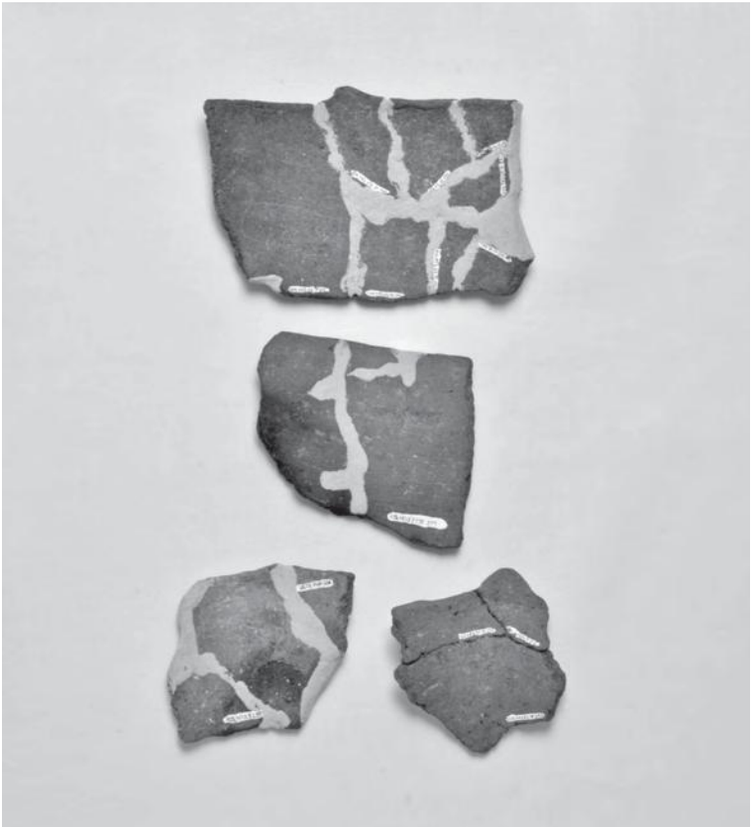
図版 65　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器（有文）1

図版 66　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器（有文）2

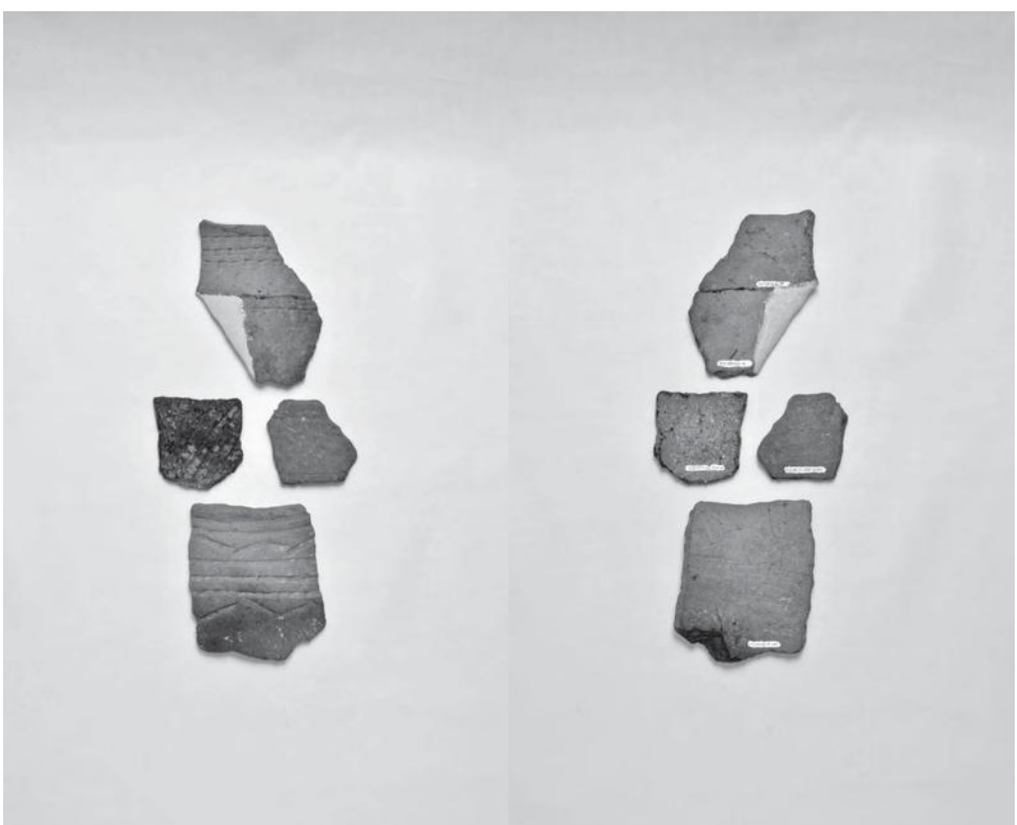
図版 67　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器（有文）3



図版 68　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器（有文）4

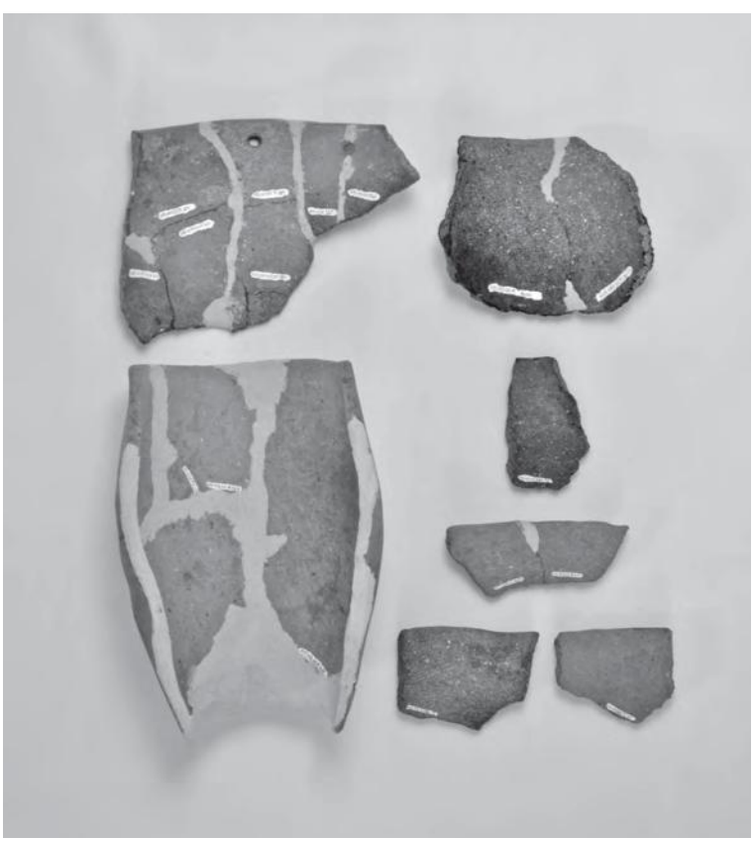


図版 69　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器（有文）5



図版 70　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器（有文）6

図版 71　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器（有文）7



図版 72　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器（無文）1

図版 73　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器（無文）2

図版 74　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土土器（無文 3、底部）

図版 75　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土石器・石製品 1

図版 76　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土石器・石製品 2

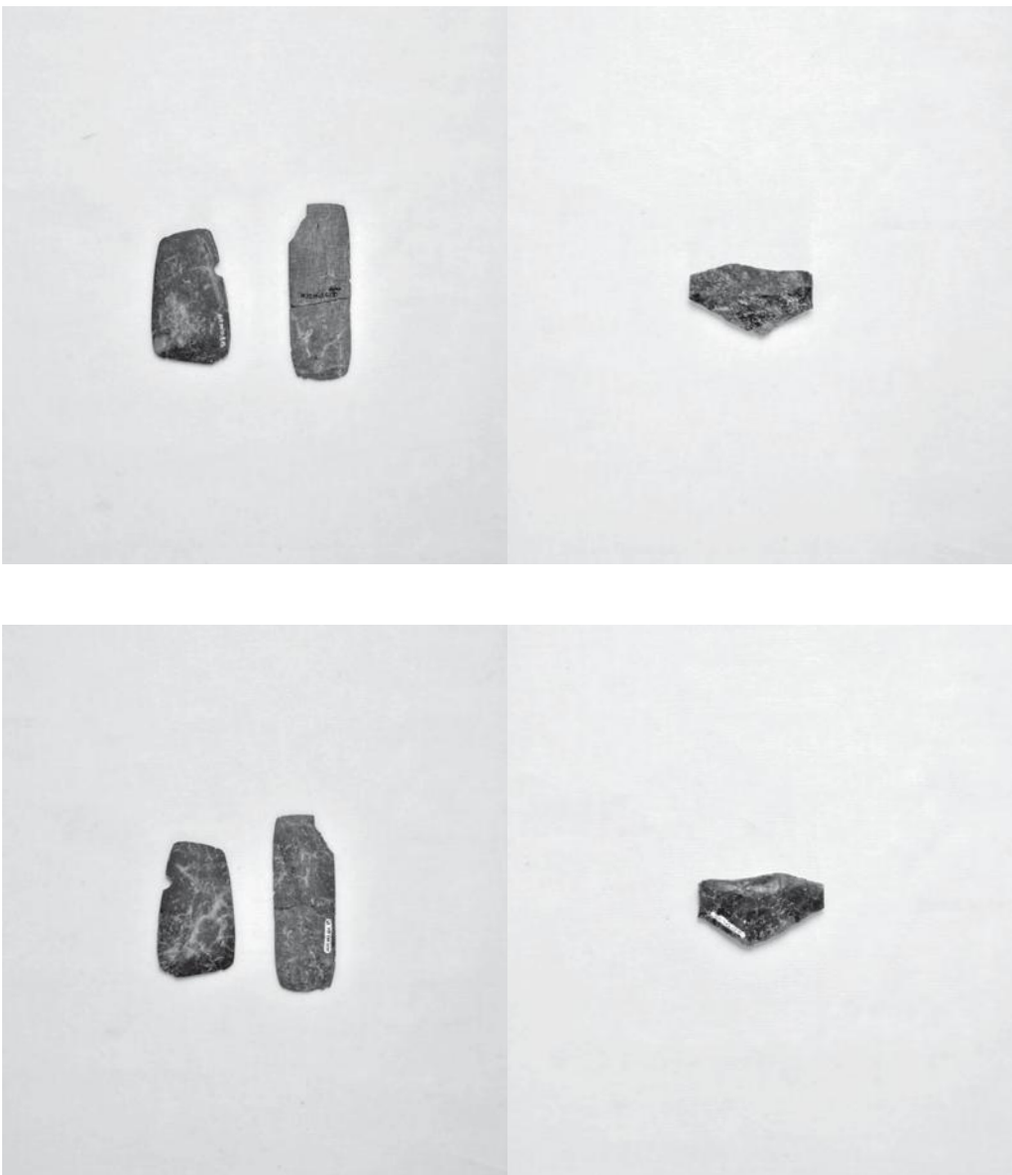
図版 77　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土石器・石製品 3

図版 78　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品 4

図版 79　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品 5

図版 80　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品 7

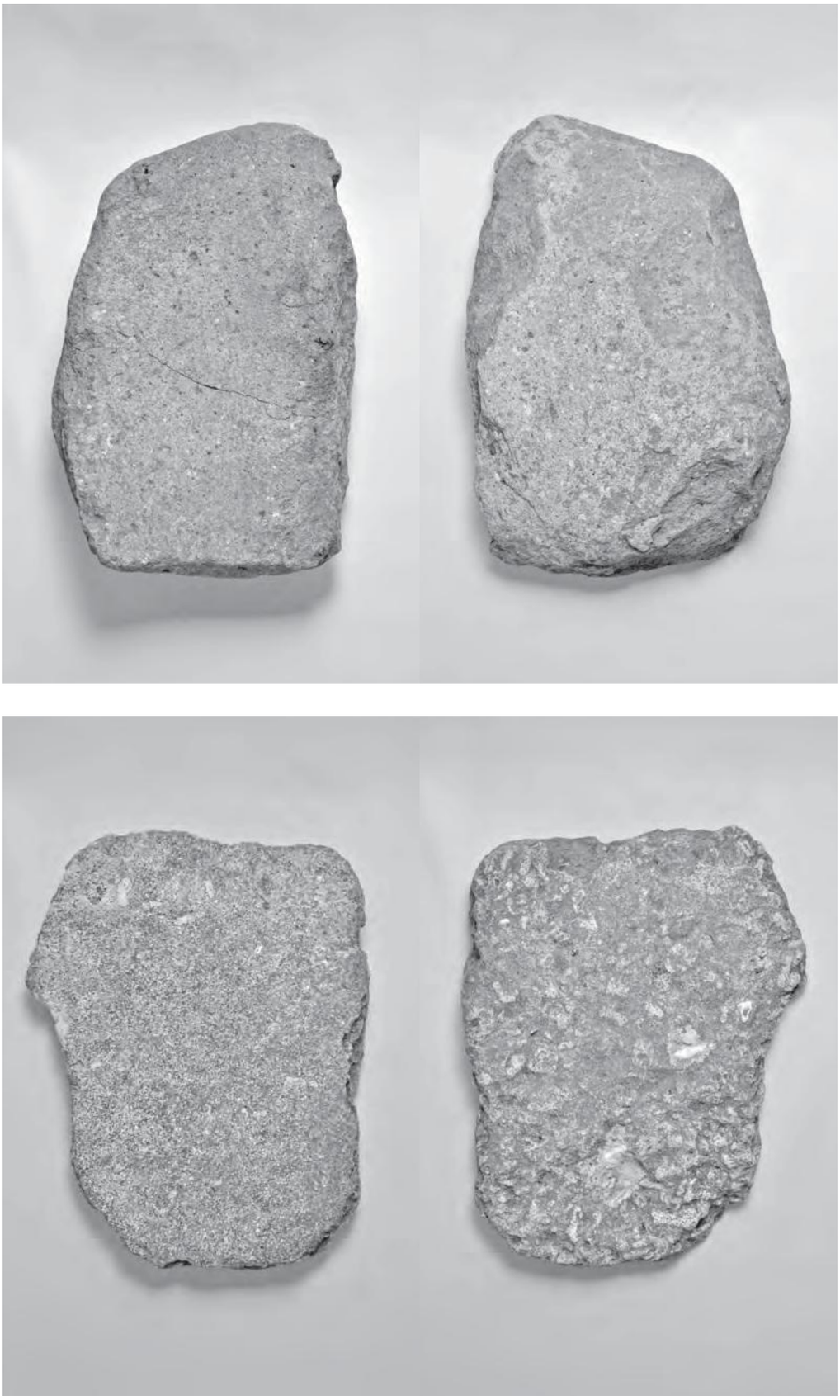
図版 81　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品 8



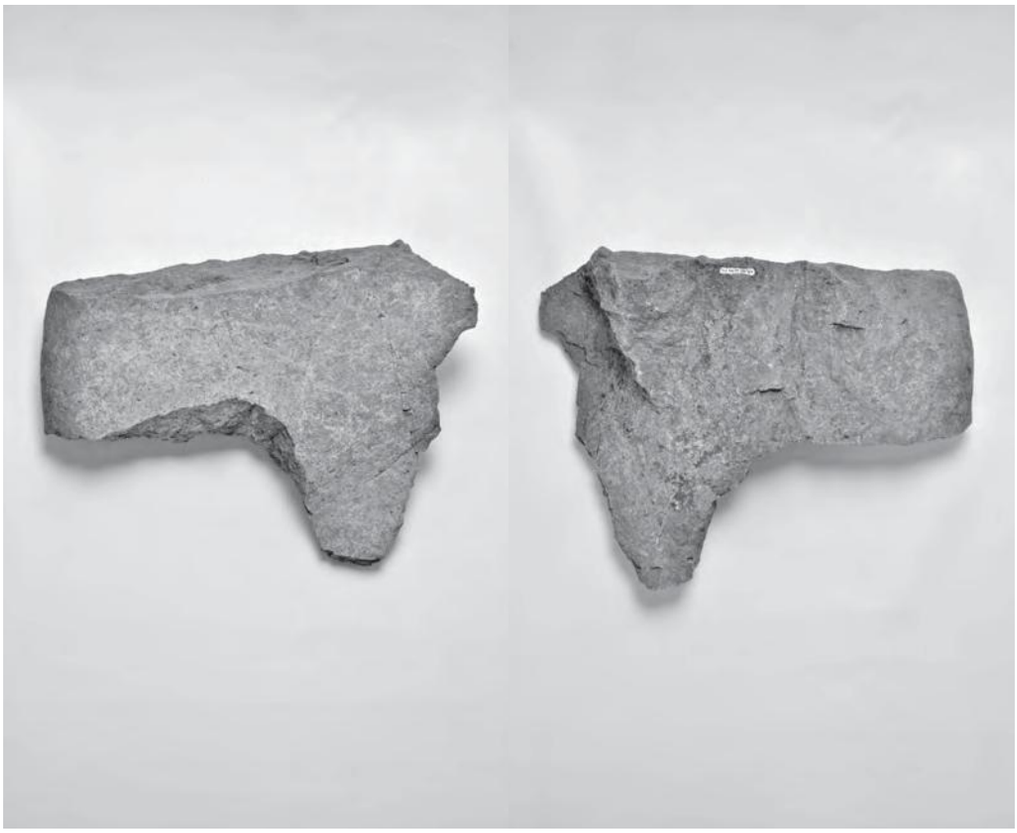
図版 82　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品 9

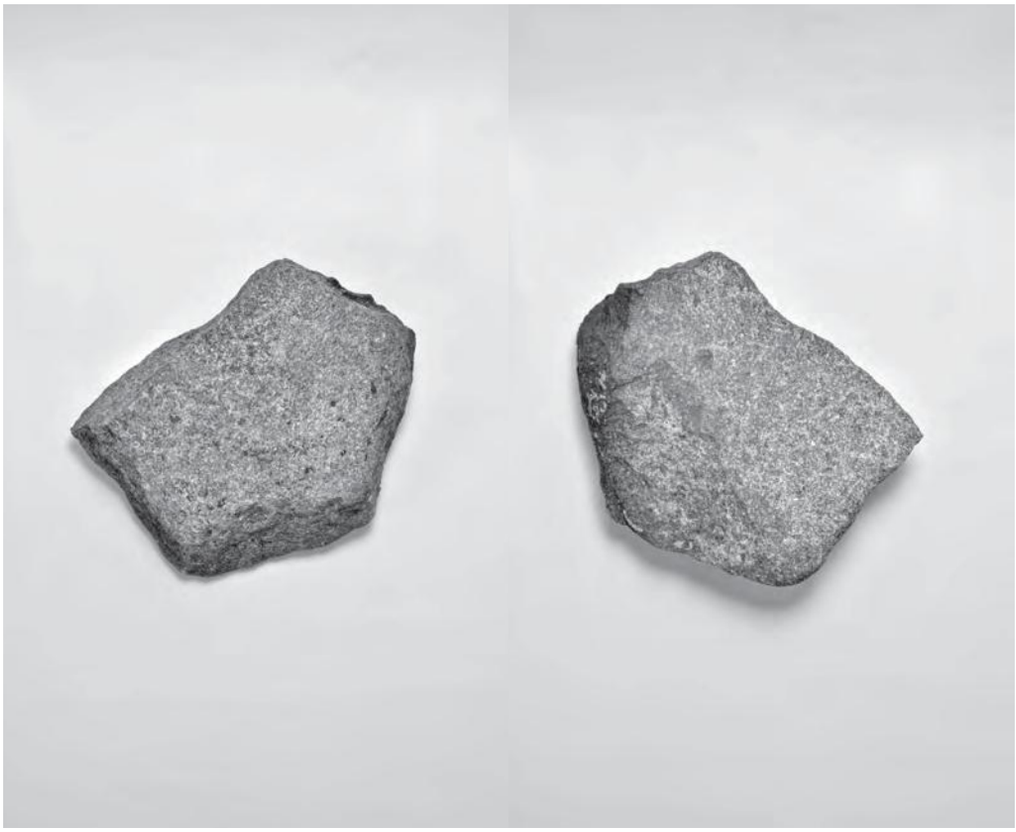
図版 83　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品 10

図版 84　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品 11



図版 85　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品 12





図版 86　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品 13

図版 87　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土石器・石製品 14

図版 89　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土貝製品 1

図版 90　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土貝製品 2

図版 91　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土貝製品 3

図版 92　ナガラ原第三貝塚Ⅳ層出土貝製品 4

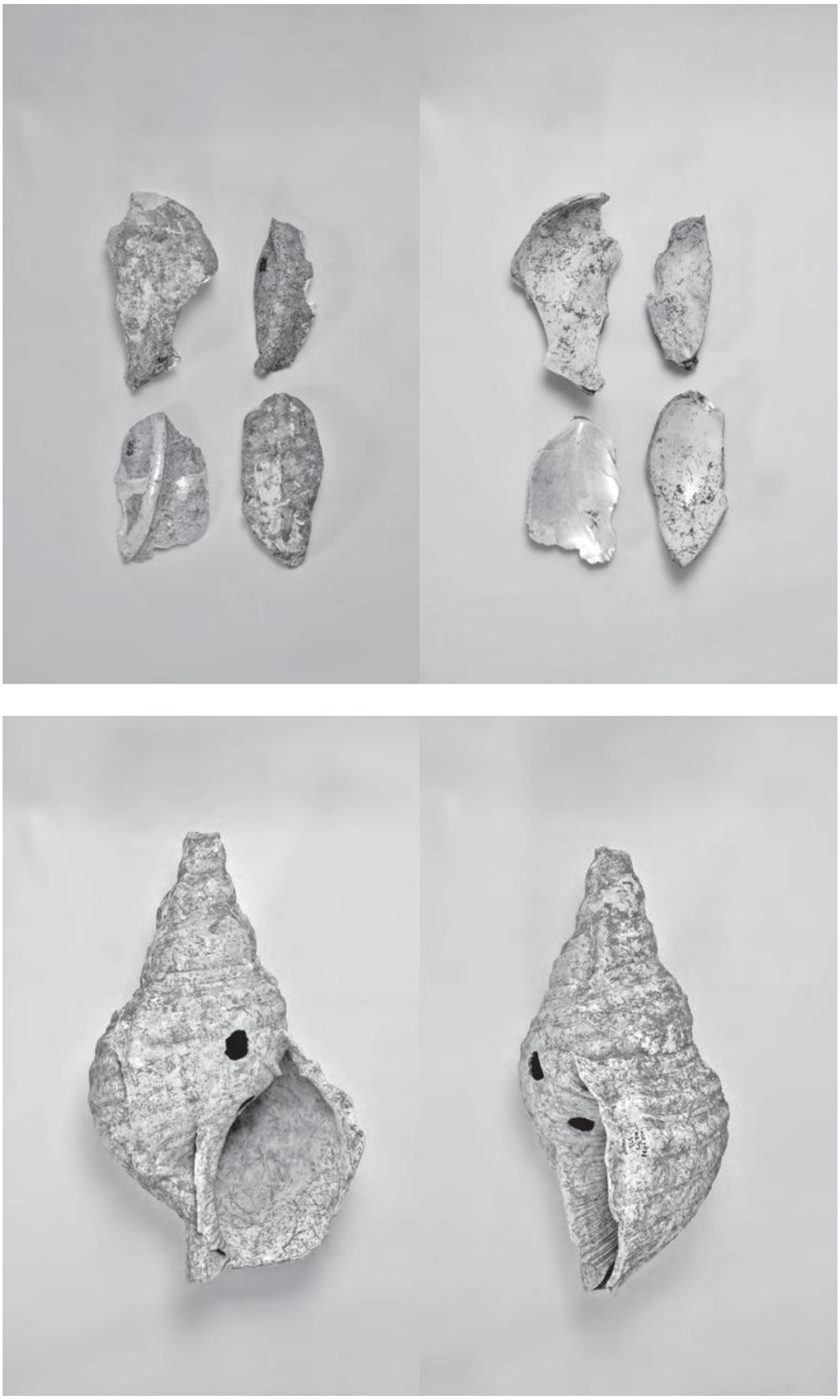
図版 93　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土貝製品 5

図版 94　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土貝製品 6

図版 95　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土貝製品 7

図版 96　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土貝製品 8

図版 97　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土貝製品 9



図版 98　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土貝製品 10

図版 99　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土貝製品 11

図版 100　ナガラ原第三貝塚Ⅵ層出土骨牙製品

報告書抄録

ふりがな	かやばるいせきえーちてん　ながらばるひがしかいづか　ながらばるだいさんかいづか							
書　名	カヤ原遺跡Ａ地点　ナガラ原東貝塚　ナガラ原第三貝塚							
副書名	県営農地保全整備事業（川平第２地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	伊江村文化財調査報告書第 14 集							
編著者名	玉榮飛道、牛ノ濱修、㈱イーエーシー、㈱文化財サービス、パリノ・サーヴェイ㈱							
編集機関	伊江村教育委員会			所在地	沖縄県国頭郡伊江村字東江上 75 番地			
発行年月	2016 年 3 月 24 日							
所収遺跡	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カヤ原遺跡Ａ地点	沖縄県伊江村川平	47315		26°42′37.33″	127°47′17.17″	201305～2013	981.21㎡	記録保存
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
貝　塚	弥生並行時代	貝塚		土器、石器、貝製品、貝類				
要　約	２基の貝塚、18 基の貝溜りが確認された。出土遺物は土器、石器、貝製品が出土。							
所収遺跡	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ナガラ原東貝塚	沖縄県伊江村川平	47315		26°42′37.64″	127°47′8.04″	201307	1005.99㎡	記録保存
種　別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
貝　塚	弥生並行時代			土器、貝類				
要　約	本調査区は攪乱を受け、遺物は地山直上にわずかに残存しているのみであった。							
所収遺跡	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ナガラ原第三貝塚	沖縄県伊江村川平	47315		26°42′32″	127°46′56.09″	201307～2013	566.66㎡	記録保存
種　別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
貝塚・墓・集落	縄文時代 弥生並行時代	貝塚、石棺墓、炉跡、竪穴住居		土器、石器、貝製品、骨牙製品、人骨、貝類、獣魚骨				
要　約	第Ⅳ層では２基の貝溜り、イモガイ集積遺構が確認された。第Ⅵ層直上からは墓跡、第Ⅵ層では竪穴住居址２基、炉跡 17 基、大型焼成遺構が確認された。調査区西側のイモガイ集積遺構、石棺墓、竪穴住居跡などは現地保存された。							

伊江村文化財調査報告書　第 14 集

カヤ原遺跡 A 地点
ナガラ原東貝塚
ナガラ原第三貝塚

― 県営農地保全整備事業（川平第 2 地区）に係る埋蔵文化財発掘調査 ―

発行日　平成 29 年 3 月 24 日
発　行　伊江村教育委員会
〒 905-0501
沖縄県国頭郡伊江村字東江上 75 番地
TEL（0980）49-2334
印　刷　有限会社サン・エス
〒 901-1113
沖縄県南風原町字喜屋武 380-1
TEL（098）889-7421